

魔法使いとチート八幡の日常

しろ@「 」

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡は小学生の頃から親には虐待を受け、クラスメイトにはいじめられていた。そんなある日の夜1人の男性に会い八幡は変わつていった・・・。

目 次

魔法使いとチート八幡の日常1	1
魔法使いとチート八幡の日常2	1
魔法使いとチート八幡の日常3	1
魔法使いとチート八幡の日常4	1
魔法使いとチート八幡の日常5	1
魔法使いとチート八幡の日常6	1
異世界編	
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——1	1
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——2	2
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——3	3
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——4	4
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——5	5
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——6	6
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——7	7
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——8	8
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——9	9
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——10	10
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——11	11
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——12	12
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——13	13
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——14	14
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——15	15
魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——16	16

中學編

魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	1
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	2
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	3
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	4
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	5
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	6
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	7
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	8
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	9
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	10
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	11
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	12
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	13
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	14
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	15
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	16
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	17
魔法使いとチート八幡の日常～中学編～	18

魔法使いとチート八幡の日常／中学編／	19
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／	20
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／	21
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／	22
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／	23
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／	24
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／友希那、雪乃と共に・	199
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／彩、結衣と共に・	202
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／薰、千聖と共に・	204
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／花陽、花音と共に・	207
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／イヴ、海未と共に・	210
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／リサ、ことりと共に・	213
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／遥、ひまりと共に・	217
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／蘭、希と共に・	221
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／歌歩、つぐみと共に・	225
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／日菜、にこと共に・	226

魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／あこ、紗夜と共に…

魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／穂乃果、モカと共に…

魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／25
魔法使いとチート八幡の日常／中学生編／26
魔法使いとチート八幡の日常／とりま設定的な？／

S A O 編

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／1
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／2
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／3
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／4
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／5
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／6
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／7
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／8
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／9
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／10
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／11
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／12
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／13
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／14
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／15
魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／16

魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 17
魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 18
魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 19
魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 20
魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 21
魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 22
魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 23
魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 24
魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 25
魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 26
魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 27
魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 27

魔法使いとチート八幡の日常1

何故、俺がいじめられなければならぬんだろう・・・
何故、俺は親に殴られなければならぬんだろう・・・
人間なんて、もう信用出来ない。

この見た目だからいじめられるのだろうか・・・
俺はもう信用出来る人間なんてごくわずかだ。

だから俺が信用出来る奴ら以外は信用しない。

「君、こんな時間にどうしたんだい？」

声をかけられた方を向くとそこには20代後半位の男性が立っていた。

「君の目は、この世界を嫌っているような目だな」

実際にそうだった。この世界は嘘と欺瞞で満ちている。そんな世界、吐気がする。

「君、お家はどこだい？おじさんが送つていつてあげよう。」

八幡「僕は、家に帰つても親に殴られたり蹴られたりするので帰りません。この公園で今日は過ごすつもりなので」

「なつ!?君はそんなに小さいのに親から虐待を受けているのかい!?!」

八幡「別に気にしませんよ。もうかれこれ2年くらい経つてますから。」

俺がそう答えるとその男性はまたもやびっくりした様な顔をした。
そして考える素振りを見せてこう言つた。

「君、うちに来ないか？」

八幡「はつ？いや、何ですか？」

俺は分からなかつた。何故そんなに優しくしてくれるのかが

「僕も昔は君のような人生を送つていたよ。家に帰ると親に殴られ、学校に行くといじめられていた。だが、僕は1人の男性に拾われてから変わつたんだ。そして今は愛する人までいる。だから僕も君に強

くなつてほしいんだ。愛する人や、大切な人が出来た時に守れるよう
に」

俺はその時、この人なら信用出来るかもしれないと思つた。

八幡「俺なんかがお邪魔して良いんですか？」

「もちろん」

八幡「じゃあ、お願ひします。」

「よし、じゃあ行こうか。僕の名前は暁 慶真。今は研究者だよ。よ
ろしく」

八幡「比企谷八幡です。よろしくお願ひします」

そう言つて俺は慶真さんの後について行つた。

でかい。着いてからの一言はそれだつた。慶真さんの家は昔は道
場だつたみたいだ。

「お帰りなさい」

慶真「ただいま」

「あら、この子は?」

慶真「この子は比企谷八幡君だ。帰つてくる途中の公園に1人でい
たから話かけたらどうも親から虐待を受けているみたいだつたから
連れてきたんだ。」

「虐待!こんな小さな子を!ありえない。」

慶真「それでなんだが。この子を家で引き取りたいと思うんだがど
うだろう?」

「ええ、私はいいわ。あつ、自己紹介がまだだつたね。私は暁 咲姫。
暁 慶真の妻よ。よろしくね」

八幡「あつ、えつと比企谷八幡です。よろしくお願ひします。」

咲姫「うん、これからよろしくね」

そうして俺は比企谷家から暁家に引き取られた。

魔法使いとチート八幡の日常2

俺が暁家に引き取られてからはや1年がたつた。

俺は強くなるために特訓をしていた。平日は朝5時に起きてランニング。

そして学校終わってからは咲姫さんが帰ってきてから咲姫さんと勉強。

祝日は朝5時に起きてランニング。その後朝食を食べて慶真さんに剣術や武術を教えて貰っている。

最初はきつかったが、もう慣れた。家事などは咲姫さんに教えてもらいながら練習している。

そんなある日。

俺は咲姫さんと買い物に来ていた。

咲姫「八幡、私は洗剤とか買ってくるから八幡は食材を買って。」

八幡「うす。」

そう言われたので俺は食材を買いに行つた。

「あ～れー、比企谷じやん。なんでこんなとこいんの～w何おつかい？wちょっと俺たちに付き合えよw」

俺もツイてない。何故かって？俺が会つたのはいつも俺を虐めているメンバーだつたからだ。

「なんだよシカトか？俺らをシカトするとかいいご身分じゃねえの？」

はあー、ダルなんとか言つてやり過ごそうかなー。

「おい！さつきからシカトしてんじやねえよ！」

ハア、やるかめんどいが

八幡「うるせえな、ちよつと黙つてくんね？マジで」

「ああ!?俺に口答えるとかいい度胸だな。いいぜ学校じやねえがちよつと痛ぶつてやるよ」

俺を痛ぶるとか言つたやつは確か空手やつてたな。めんどいなー、やりたくないなーまあいいか。

「おらつ！」

そんなことを考えているうちに殴ってきた。だが遅い

俺はその拳を簡単に避けて、カウンターで相手の顔面に俺の拳を当てた。

ゴスツ

あつ、やべ力入れすぎたかも。相手伸びちゃってるし。その取り巻きもビビってるし

八幡「おい、そいつ連れてとつとと失せろ」

「「ヒツ！ わ、わかりました！ スミマセンでしたー！」」

そう言つて取り巻きは一目散でにげてつた。

そんなに怖かつたのか？ 俺・・・・・・・つてかヤベエ俺めつちや目立つてんじやん！

まずい、まずい、まずい、まずい。これを咲姫さんに知られたら・・・

「八幡？」ゴゴゴゴゴ

八幡「ヒツ！」

や、やばい、俺死んだかも・・・

今現在、説教中ナウw

咲姫「全く、あれほど喧嘩するなつて言つてるのにまたして」

八幡「いや、あのですね咲姫さん。それは俺からじやなくてあつちから仕掛けてくるから正当防衛で攻撃してるだけですよ！だから俺は悪くない！」

咲姫「黙らっしやい！ 八幡は、道場で慶真に武術教えてもらつてるんだからあんまり力を使わないの。わかつた？」

八幡「はい、スミマセンでした」

慶真「まあまあ咲姫も、そこまでにしなよ。ご飯が冷めちゃうよ？」

咲姫「あなたもあなたですよ！ 八幡に甘すぎです。もつと厳しくしないと自立出来なくなっちゃうでしょ！」

慶真「いや、でも」

咲姫「でもじやない！ わかつた!?」

慶真「はい、わかりました」

やつぱり暁家の男達は弱かつた
・
・
・
・
・

魔法使いとチート八幡の日常3

「あの人、目が腐つてて気持ち悪いね」ヒソヒソ

「ホントだねー」ヒソヒソ

やめろ

「おい、あいつマジでキモくね？ つてかアイツって人間なの？ ゾンビ
じゃねえのww」

「それ言えるww」

やめてくれ

「なんでお前なんかが家に生まれてきたんだ！ お前なんかいらないん
だよ！」ドガツ

もうやめてくれ！

八幡「ハツ!?」

そこで俺は目が覚めた。

咲姫「ちょっと八幡大丈夫？ 涙い汗だけど」

八幡「いえ、大丈夫です。」

今日は日曜日、今は昼過ぎだ。今日はいつも通り慶真さんに剣術を
教えてもらつて昼飯を食べたあとに寝てしまつたらしい。

八幡「ちょっと散歩に行つてきます。」

咲姫「ええ、わかつたわ。なるべく早く帰つてくるのよ？ わかつた

？」

八幡「はい、わかりました」

そう言つて俺は家を出た。

俺は千葉のソウルドリンクのマツ缶を片手に公園のベンチに座つ
てあの夢のことを思い出した。

八幡（俺は学校に行きたくない。行けば苛められるから。昔みたい
に信用出来る奴らも、今はいない。そういうあいつらは元気かな）
そんなことを考えていると公園の大きな木の下から声が聞こえて

きた。

「ちよつと危ないですよ!? 穂乃果!?」

「そうだよ、危ないよ、穂乃果ちゃん」

「大丈夫、大丈夫、平気平氣」

そう言つて俺と同い年位の女の子が木を登つていた。

八幡（アイツ、危ないな）

「ほら！ 登れたよ！ ことりちゃん、海未ちゃん！」 ズルツ

「えつ？」

八幡（！ 危ない！）

「きやあああ！」

「穂乃果！」

「穂乃果ちゃん！」

俺は走り出した。

八幡（くそ！ 間に合え！）

「きやあああ！」

八幡（おおおおお！ 届け！） ガシツ！

「えつ？」

八幡「あつぶねー、ギリギリだつたか。おい、大丈夫か？」

俺は抱えている女の子に聞いた。

「うわあああー！ こわかつたよー！」

そう言つて泣きながら俺に抱きついてきた

八幡「ちょ！ おい！ 抱きつくな！」

「ありがとう！ ありがとおおお！」

ダメだこりや。そう思つたので泣き止むまで抱きつかせましたw

「ぐすつ、本当に助けてくれてありがとう！ 私は高坂穂乃果！ 小学4年生だよ？ あなたは？」

八幡「おれ？ 俺は比企谷八幡だ。小学4年だ。」

「本当に穂乃果を助けていただいてありがとうございます。私は園田海未です。同じく小学4年生です。」

「私は南ことり。小学4年生だよ。よろしくね八幡君♪」
なるほど、幼なじみつてやつか。つとそれよりも

八幡「えっと、高坂だつけ？お前なんで木に登つてたんだ？どう見ても危ねーだろ？」

穂乃果「え？あー、えーと、楽しそうだなーって思つたから。」

海未「だから言つたでしよう？危ないって、だいたい穂乃果は「まあ海未ちゃん、ここまでにして？」ことり・・・・・」

ことり「それよりも八幡君はどうしてここに来たの？」

八幡「ただの散歩だよ」

穂乃果「じゃあ、穂乃果達と一緒に遊ぼうよ！」

高坂はそう言つて俺に手を出してきた。

八幡「いや、別にいい。」

俺はもう誰も信用しない。あいつら以外は・・・

穂乃果「えー、何でー？いいじやん遊ぼうよー」

八幡「だるい、面倒い、帰りたい。」

穂乃果「むうー、なんでそんなに嫌なの？遊ぼうよー」

こいつ・・・・・めんどい・・・

海未「こうなつた穂乃果は止めるのが無理ですよ？」

八幡「いやいやいや、だつてお前らもこんな腐つた目の奴と遊んで楽しくないし一緒にいるのだつて嫌じやないのか？」

穂乃果「えつ？何で？楽しいよ？」

ことり「うんうん。」

海未「ええ、楽しいですよ？」

俺にとつてその言葉は衝撃的だつた。こんな、目が腐つてて性格が悪い奴と話しても、不愉快じやなかつたらしい。

八幡「本当にいいのか？こんな俺がお前らと遊んでも」

穂乃果「もちろんだよ！」ニコツ

海未「ええ」ニコツ

ことり「うん！」ニコツ

3人はほかの人から見ても魅力的な笑顔を見せた。

八幡「あつぶねー、今の笑顔は反則じやね？可愛すぎでしょ？危うく惚れて告白して振られるどこだつたぜ」

穂乃果「へつ？」ニコツ

海未「えつ？」 //

八幡 「んっ？ どうしたんだ？ そんなに顔を赤くして？」

穂乃果「ハチ君声に出てたよ?」

嘘だろ？ マジかよ・・・・・ ヤベエ旨めつちや怒つてるやん

八幡 「スミマセンでしたー!!」

穂乃果 「えつ？なんで謝るの？」

「いや、だつてめつちや怒つ

悔未「私達、別に怒つてませんよ?」

消え一和達男に怒ってさせへど

「うんうん」とうなづく

八幡「そうなのか、よかつた！」

「うう、お気を取り直して遊んで。」

そし、語りて御はは色々なことをして遊んだ

俺はまだこいつらが信用出来るかは分からぬ。だが、ほかの奴ら

魔法使いとチート八幡の日常 4

ことり 「比企谷君遅いね〜」

海未 「そうですね、そろそろ来るはずなのですが・・・・」

穂乃果 「あ！ 来たよ、比企谷君〜」

八幡 「スマン、遅れた」

俺は高坂達と会つてからは毎日のように遊んでいた。

そして今日も、一緒に遊ぶ約束をしていた。俺達はいつも通り公園で鬼ごっこやらかくれんぼやらをして遊んでいた。

こうして遊ぶのも何年ぶりだろうな1年ぶりくらいか？それにしてもこの公園で遊んでいると昔のことを思い出すな

海未 「昔のこと？ですか？」

穂乃果 「なになに？ 比企谷君のこと？ 聞きたーい！」

ことり 「私もー」

八幡 「ん？ ああ、声に出てたか？ んじゃあちよつと俺の昔の事でも話すか」

（回想中）

俺は今日もいじめられた。小学校に入つてからはずつとだ。

八幡 「はあー、なんで僕ばかりいじめられるんだろう。」

そしていつもの様に帰り道にある公園によつた。

俺はいつもの様にベンチに座つて今日学校でやつた勉強をしていった。

?? 「きやつ！」

?? 「ちよつと何よあんた達！」

「お前ら調子乗り過ぎなんだよ、ちよつと金持ちだからって」

?? 「調子になんて乗つてないわよ！」

「うるせえよ！ 僕らからすれば調子に乗つてんだよ！ 入学仕立ての新人生の癖に生意氣なんだよ！」 バシツ

?? 「きやあ！」

?? 「里香ちゃん！」

アソツ、今何やつた？女の子に手を出しただと？

許せねえ、しかも小学1年生つてことは俺と同い年、相手は年上か
？

「お前もだよ！」

そう言つて男はもう1人の女の子に手を出そうとしていた
それを見た俺はすぐに駆け出した。

バシツ

八幡「おい、もうやめろよ。なんで女の子に手をだしてんだよ」「はあ？誰だお前、邪魔だよどけろ」

八幡「俺がどけたらこの子達に手を出さないつて約束すんならどうけてやるよ」

「だつたら、お前を倒してからにしてやるよ！」

そう言つて男は殴りかかってきた・・・が俺には意味がない。親に殴られてるからその拳よりは遅い

俺はその拳を避けると急所に蹴りを入れた。

「ぎやああ！痛てええ！糞が覚えてろよ！」

そう言つて男は逃げていった。

？？「あ、あの、助けてくださいってありがとうございます！」

？？「私からもありがとうございます！」

八幡「いや、たまたま近くにいたから」

？？「あの、お名前教えてもらえますか？あつ、私は結城明日奈です。

小学1年生です。」

？？「私は篠崎里香です。小学1年生です。」

八幡「えっと、僕は比企谷八幡です。小学1年生です。よろしく」

明日奈「えつ？小学1年生！？あんなに強いのに？」

里香「凄いね、小学1年生なのに年上に立ち向かえるとか」

八幡「いや、女の子が虐められてたら誰だつて体が動くよ。じゃあ僕はこれで帰るね」

明日奈「あつ！待つて！比企谷君1人でしょ？じゃあ一緒に遊ばない？」

里香「あつ、いいねー、遊ぼうよ！」

八幡 「えつ？でも、いいの？俺なんかが一緒に遊んでも」

明日奈 うん!

里香 いいよ

それが俺と結城明日奈、篠崎里香が初めてあつた日だつた。

それが今は俺達は一緒に遊ぶ事になつた
夏休みや平日とかいふても一緒だつた。

明日奈「ねえハチ君ちよ

里香 「私もいいかな？」

明日奈 「私ね、親の都會」

里香 「私も、親の都合で東京に引っ越すの」

八幡 「えつ？ そつか、親の都合ならしようがないよ」

学校かハテハテでも友達だよ？」

「うん、わかってる

それからまた数日

明日奈 「ねえハチ君、私達、次の学校でクラスに馴染めるかな？」

里香「そうだよなー」
明日奈とは違う学校だからそこが問題なんだ

ふむ、俺は転校なんてした事ないからなり、どうなんだろう。だけ

「ど2人は可愛いからすぐ馴染めると思うけどな」

明日奈「へつ？」

八番
「は？」

明日奈「は、

明日奈「は、は、は、ハチ君？ 何言つてるの？」
里香「な、な、な、なに言つてんのハチ」 //

八幡 「えっ？俺なんか言つた？」

明日奈 「私達がか、可愛いって」 //

八幡 「！マジかよ声に出てたのか！」

里香 「無自覚で言うつて凄いね」

そんな事があつて遂に別れの日

明日奈「ハチ君、私達は離れててもずっと友達だからね?」グスツ

里香「また3人で遊ぼうね」

八幡「うん、じゃあまたね!」

里香「うん!」

明日奈「うん!」

そうして俺達は離ればなれになつた

（回想終了）

八幡「つてな感じだ」

穂乃果「へえ、比企谷君凄いね、年上に勝つちゃつたんだ」

ことり「その子達からしたら救世主だね♪」

海未「そうですね、凄いと思います」

八幡「いや、別に俺は凄くねえよ」

穂乃果「凄いよ、年上に勝つちゃうとか誰も出来ないよ♪」

八幡「そ、そうかサンキュ！」

な、なんか誉められるつて照れるな

ことり「あ、比企谷君照れてる♪」

海未「褒められなれてないんですね、ちょっと可愛いです。」

八幡「バツカ、そんな事ねえよ」

穂乃果「あははは、照れてる、照れてる♪」

はあ、うるさいなまったく。でも、こんな毎日も嫌いじゃないな

魔法使いとチート八幡の日常5

俺は先月遂に5年生になつた。だが、5年生になつてもあいかわらず学校ではぼつちライフ、休日などは高坂達と遊んだり、訓練をしたりしていた。

そんなある日、いつもの様に高坂達と遊んで家に帰つて来たんだが、両親がいなかつた。いつもは2人ともこの時間はいるのに。

八幡（今日、遅くなるつて言つてたかな？）

そうして俺は1人で夕食を食べた。

結局、その日は2人とも帰つてこなかつた。

次の日、俺はいつも通り起きてランニングをしていた。

八幡（昨日は2人とも帰つてこなかつたな。仕事長引いてんのか
？）

そんなことを思いつつ家に着くと、門の前にスーツを着た女人人が立つていた。

八幡「あ、あのー。家になんか用ですか？」

？？「えつ？あつ、えつと比企谷八幡君ですか？」

えつ？何で知つてんの？怖いんだけど・・・

八幡「え、えつと、そうですけど・・・」

？？「あつ、怪しいものではありません。私は暁 恒子。暁 慶真の妹です。今日は君に話と渡したい物があつて来ました。」

渡したい物？なんだろう。

恭子「まず一つ目ですがあなたの義理の両親の暁 慶真と暁 咲姫は先日の夕方居眠り運転のトラックと正面衝突で亡くなりました」

八幡「・・・・・・・・・・・・えつ？」

俺はいきなりの事で頭が追いつかなかつた。

八幡「いやいやいや、まつてください。亡くなつたつて慶真さんと

咲姫さんがですか？嘘でしょ？」

嘘だと思っていたかつた。

恭子「いえ、本当の事です。」

八幡「そんなはずない。だって、だって一昨日までは2人とも元気でいつも通りだつたんですよ？なのに亡くなるなんて有り得ない！」現実から逃げたしたかった。

恭子「私だつて！」

八幡ビクツ！

恭子「私だつて、兄さんが亡くなつたなんて思いたくなかった。でも、でも」

そう言つて恭子さんは泣いてしまつた。

あーあ、何してんだ俺は。そうだよな、本当の兄妹の恭子さんの方が俺よりもっと悲しいに決まつてるのに・・・

八幡「スミマセンでした。俺も慶真さんと咲姫さんにはお世話になつてたんで現実から逃げたしたかつたんです。本当にスミマセン」恭子「いえ、私だつて兄さんが死んだつて知らされてからそんな感じだつたのでしょうかないとおもいます。」

それにも、そつか2人ともいなくなつちやつたのか・・・俺、何も恩返し出来てねえじやん。

恭子「は、八幡君！」

八幡「?どうしたんですか？恭子さん」

恭子「何で泣いているんですか？」

八幡「えつ？あ、あれつ何でだろ。とまんねえや」
ギュツ

八幡「えつ・・・・・」

恭子「八幡君、泣きたいときは思いつきり泣いていいんですよ？」

八幡「う、うわああああ」

俺は恭子さんの腕の中で久しぶりに思いつきり泣いた。

八幡「ありがとうございます、恭子さん」

恭子「おさまりましたか？よかつた。」

はあ、それにしても女人の腕の中で大泣きとか、めっちゃ恥ずかしいな

恭子「そうだ！はい、これ兄さんからです。」

八幡 「慶真さんから……ですか？」

恭子「うん。兄さんにもし、俺達が死んだらこれを八幡君に渡して

「おお、東京に来たんだね！」

『抨啓、比企谷八幡君

これを八幡君が読んでるって事は僕達は死んだんだね。ごめんね
八幡君、君を1人にしないために引き取ったのにまた一人にしてしまつて。そこで、僕からなんだけど、僕達は異世界へと繋がるゲートを作つたんだ。そこでなんだけど、八幡君、君はそのゲートを使つて異世界の僕の知り合いと一緒に住んでほしい。もちろん、異世界でそして自立できるようになつてからこつちの世界に戻つてきて欲しい。
頼む・・・八幡君、君は優しい子だ。だから人助けをするのはかまわない。だけどね、自分を犠牲にすることはないんだよ? たまには人を頼つてみてくれ。きっと助けになつてくれるよ。八幡君、頑張つて!

君の義理の両親
慶真、咲姫より』

俺はこれを読み終わつてから恭子さんに聞いた。

異世界? どゆこと?

恭子「えっと、異世界に行けるゲートがあるのはホントだよ？だけ

八幡 「…………マジすか」

恭子「はい、マジです」

八幡「…………はあ、しょうがないですか

「いいですか？」

恭子「うん、了解したよ。じやあ中学校入る前に迎えに来るよ」

魔法使いとチート八幡の日常6

俺の義務教育もあと3年になろうとしていた。

なんで俺はこんなわかりづらい言い方をしたんだ？まあ簡単にいうと小学校卒業間近つてことだな。まあ案外早かつたな。でも、中学生になつたら穂乃果たちとは遊べないな。あつ、あいつらに中学生からの事いうの忘れてた。ハチマンウツカリしてたテヘペロ☆

・・・・・うん、キモイな。何してんだ俺は・・・・・

まあいい、いつ言うかなまあ今週の土曜日遊ぶしそん時でいつか

そして土曜日

穂乃果「あつ、ハチくーん！」

海未「遅いですよ、ハチ」

ことり「まあまあ海未ちゃん。私たちがはやく来ちやつただけなんだからしようがないよ」

八幡「悪い遅れた。」

さあて今日は何すんのかな？まだ決まってないんだつたら久しぶりにゲーセン行きてえな

穂乃果「今日はどうしよっか」

海未「そうですね。いつも通りかくれんぼとかですかね」

八幡「あつ、だつたら今日はゲーセン行かないか？久しぶりに行きたくてな」

ことり「あつ、私も行きたいな♪」

穂乃果「穂乃果も行きたい！」

海未「そうですね。たまにはいいですね、では、今日はゲーセンに行きましょう」

そうして俺らはゲーセンに行つた。

八幡「さあてクレーンゲームからやるかな」

そう言つて俺はよさそうな時計を見つけたので100円を入れた結果は500円で取れました。

この時計を500円で取るのは得したかな？」

穂乃果「あつ、ハチくーんこのゲームやらない？」

そう言つて穂乃果が指さしたのはダンスゲームだった。

八幡「いいぜ、やろうか」

そう言つて俺は穂乃果とバトルした。結果は俺の大勝利穂乃果もいい感じだつたがな

もう夕方が意外と速いな

俺が穂乃果と勝負した後もゲームを色々やつた。

穂乃果「楽しかったね！」

ことり「うん♪」

海未「はい」

八幡「だな、あつ、そうだ、一つお前らにいいたいことあんだけどいいか？」

穂乃果「? 何?」

八幡「俺な、中学校に入つたら親の都合で引っ越さなくちやいけなくなつたんだ。だからお前らと一緒に中学校に行けないんだ」

穂乃果「…………えつ？」

海未「本当なんですか？」

ことり「嘘……だよね？」

八幡「すまん……だけど高校生になつたらこつちに帰つてくる！絶対だ！」

海未「ハチはどこの高校を受けるんですか？」

八幡「総武高校にしようと思つている」

海未「総武ですか」

穂乃果「…………わかつた。じゃあ！穂乃果も総武高校に絶対

入学するから！」

ことり「私も！」

海未「私もです！」

八幡「俺も絶対帰つてくるから。待つてくれ」

穂乃果「わかつた！」

ことり「うん♪」

海末「はい！」

・・・・・

そして遂に卒業式・・・・・

八幡「遂に小学校ともおさらばか・・・」

穂乃果「ハチくーん！卒業おめでとう！」

海末「おめでとうござります！」

こどり「おめでとう♪」

八幡「ああ、お前らもおめでとう」

穂乃果「ハチくん、いつ引っ越すの？」

八幡「明後日だな」

穂乃果「そつか・・・・・じやあさ！明日最後だから遊ぼう！」

海末「いいですね、遊びましよう！」

八幡「わかつた、明日いつもの公園で遊ぼう」

そして翌日

八幡「・・・よう」

穂乃果「あつ、ハチくん」

こどり「今日は何して遊ぼつか」

海末「そうですね、鬼ごっこをしませんか？」

八幡「鬼ごっこか・・・・・俺らが初めて遊んだ時もやつたな」

こどり「そうだね・・・」

穂乃果「ねえハチくん・・・・・本当に引っ越しちゃうの？」

八幡「ああ」

穂乃果「その引っ越しつて取り消せないの？」

八幡「ああ」

穂乃果「そう・・・・・だよね・・・ごめんね？変な事聞いて」ポ

ロボロ

八幡「ほ、穂乃果？なんで泣いてんだよ!？」

穂乃果「だ、だつてあと3年間会えなくなっちゃうんだよ？そんな

のやだよ♪」ポロポロ

俺はそつと穂乃果を抱きしめた

ギュッ

穂乃果「えつ？」

八幡「大丈夫、3年間なんであー」という間にたから
来るから、待つてくれ」ナデナデ
俺は必ず戻して

穂乃果 「あううう・・・」

海未 「穂乃果…………するい」ボソツ

ことり「穂乃果ちゃんずるい」ボソツ

んつ？あつちの2人がなんか言つてたけどなんだろう。

海未 「はい、そうですね」

「ウルル」

穂乃果、海未、ことり「ハチくん（ハチ）これ私たちからプレゼント、引っ越しても私達のこと忘れないでね！（ください！）」

そう言つて3人は俺にプレゼントをくれた

洋元に黒縁の本を

穂乃果はなんか高そうな指輪をくれた

八幡「え？ これは？ 僕に…・・・か？」

海未 「はい！」

卷之二

八幡「あ、ありがとう！絶対大切にするから」

海未「どんなに離れていても友達です！」

「ことり」「私達もハチくんの」と忘れないからね！」

八幡一
ああ、俺もずっと友達だ！絶対帰ってくるから！待つてくれ

れ！」

3人の少女は総武中学校へ

1人の少年は異世界へ

こうして4人の小学校時代は幕を閉じた・・・

小学
校編

完

々

異世界編

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——1

恭子「では、準備はいいですか？八幡君」

八幡「はい、OKです」

恭子「私も途中まではついて行きますが、それも兄さんの知り合いの所まで案内するだけです。そこからは兄さんの知り合いと2人ですが大丈夫ですか？」

八幡「はい、大丈夫です」

恭子「では、行きましょう」

小学校を卒業した俺は慶真さんの妹である恭子さんと異世界へと行くことになっている。まあ恭子さんは途中までなんだが……

恭子「ゲートオープン」

恭子さんがそう言うと俺と恭子さんの目の前に大きな扉が現れた

八幡「うお!? でかいな」

恭子「ふふつ、兄さんが言うには何人通つても大丈夫なようにだそうですよ？」

何人も通らせる気なんですか・・・・・

恭子「では、改めて行きましょう」

そして、俺と恭子さんはゲートへと足を踏み入れた

目を開けるとそこにはあたり1面の草原が広がっていた

八幡「すげえ・・・・・・・・・」

恭子「ふふつ、どうでしよう？ 私も初めて来た時はびっくりしました。では、行きましょうか」

恭子さんはそう言うと歩き出した。俺もそれについて行つた

八幡「恭子さん、慶真さんの知り合いの家までどのくらいかかるんですか？」

恭子「そうですね・・・・・ 大体半日以上と考えておいてください

い」

八幡「マジですか・・・・・」

恭子「マジです」ニコツ

そう言つて恭子さんは笑つた可愛い」

恭子「ほえ!」

八幡「?どうしたんですか?」

恭子「い、いえ、何でもないですよ? (今の無意識何ですか?)」／＼

なんか恭子さんの顔が赤い気がするがまあいいか
そんなことより半日も歩かないと行けないのか・・・・・
それから3時間がたつた

恭子「ふう、そろそろ休憩にしますか」

恭子さんはそう言うと近くの丸太に腰を下ろした

恭子「?八幡君は座らないのですか?」

八幡「えつ?あつ、はい座らせてもらいます」

そう言つて俺も腰を下ろした

恭子「それにしても八幡君は凄いですね。3時間ずっと歩いている
のに息ひとつ切れていないなんて」

八幡「まあそれなりに鍛えているんで」

俺は毎朝20kmは走つていたので3時間ずっと歩くことなんて
容易である

ど・・・・

恭子「はい、私もまだ17歳なのでしつかりと走り込みだけはして
いますし大丈夫ですよ」

えつ?恭子さんつて17歳だったの?てつきり大学生かと思つて
た・・・

恭子「それに私も暁流の使い手、それなりに体力はあり・・・・・
八幡君、静かに」

恭子さんは話している途中でそう言つた

八幡「えつ?」

そして恭子さんは立ち上がりると

恭子「八幡君、行きましょう。おそらくですがここに第3級戦闘魔獸が近づいてきています」

八幡「第3級戦闘魔獸?」

恭子「はい、この世界では、魔獸は第6級～神話級までの魔獸に分けられています。

第6級・・・昆虫並で害はありません。

第5級・・・犬や猫の様な小動物系でこちらも害はありません。

第4級・・・羊や牛などの中型動物が多いです。

第3級・・・ここからは害のあるヤツと害のないヤツに分けられています。害のあるヤツは戦闘型と呼ばれています。

第2級・・・ライオンやゾウなどの大型動物が多いです。

第1級・・・ここからは危険種というものが出てきます。大きさは鯨くらいですかね。

極級・・・ここは恐竜系と思ってくれればいいです。

悪魔級・・・ここから上は特別危険指定種と呼ばれる魔獸です。さすがに私も1人では相手しきれません。

地獄級・・・悪魔級の上で鬼系が多いです。

十二宮星座級・・・ここは空想の奴らが多いですね。ペガサスとかでしょーか?

神話級・・・ここは世界を一つ破壊できるくらいの強大な力を持つた魔獸・・・いえ、人型の魔獸ですね

まあこんな感じです。

しかし、魔獸でも天使級と呼ばれる人型の魔獸は人と共存して暮らしています。

とまあこんな感じですね」

八幡「きよ、恭子さん。説明はあります。でももう目の前に魔獸います・・・」

恭子「・・・へつ？」

グルルルル

恭子「ふむ、こいつは第3級戦闘魔獸の【ダリア】ですね。ライオンっぽいのが特徴です。」

グオオオオオオ!

八幡「悠長に説明してる場合じゃないでしょー！はやく逃げましょ
う恭子さん！」

恭子「いえいえ、大丈夫ですよ八幡君。折角なんで見せて上げま
しょう。魔法というものを」

そう言つて恭子さんは構え、叫んだ

恭子「魔法式展開!!」

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——2

恭子「魔法式展開！」

敵を捕縛せよ水撃の矢 《アクア・ブレスタ》！」

恭子さんがそう言うと後ろに水の矢ができる魔獸に向かつて飛んでいった。その数約100本以上だと思う……多分

その矢は魔獸に当たるとそのまま魔獸を包み込み動きを止めた。

恭子「終わりです。すべてを飲みこみ柱となれ……《クライシス・コルム》」

恭子さんがそう言うと今度は周りに冷気が漂い始め下から大きな氷の柱が魔獸を飲みこみそして碎け散った。

八幡「す、すげえ……これが魔法……」

やべえめっちゃワクワクすんだけど。

恭子「ふう、どうでしたか？八幡君。魔法を見た感想は？」

八幡「すごいです。そう言えば詠唱って絶対あるんですか？」

恭子「そうですね、属性魔法には大体あります。初期魔法には無いですが……」

八幡「そうなんですか……あ、早く魔法が使いたい！」

恭子「ふふ、なら早く着かないといけませんね。

では行きましょうか」

八幡「はい！」

そうして俺と恭子さんは歩き始めた。

俺は歩いている途中も恭子さんに質問をした。

八幡「恭子さん、さつき水と氷の魔法を使ってましたけど俺にも使えるんですか？」

恭子「それは分かりません。適正属性が何なのかが分からないと何とも言えませんね」

八幡「そうですよね。恭子さんは水と氷の属性が適正なんですか？」

恭子「いいえ、私は水と風の魔法です。」

八幡「？でも、さつき氷を使ってましたよね？」

恭子「あれは精靈の力ですね。」

八幡「精靈？」

恭子「はい、今から行く街には魔獣を討伐する討伐軍『エレストリア』という軍隊があります。」

ちなみに私もそこの一員です。そこに入ると精靈の適合試験が行われ適合した精靈を受け取れます。」

八幡「へえ～」

恭子「その精靈は一つの時もあれば二つの時もあります。ちなみに兄さんは二つもちでした。」

八幡「慶真さんが・・・」

恭子「おっ、見えてきましたね。アレが八幡君の新しく住む街の『ウイルズ』という街です。」

八幡「アレが・・・」

やつと、やつと魔法が使えるのか

そう思うと震えてきた。

恭子「八幡君？大丈夫ですか？震えていますが」

八幡「はい、大丈夫です。なんかやつと魔法を使えると思うと震え

ちゃつて」

恭子「ふふ、では、行きましょう」

そう言つて外門まで歩き始めた。

俺もそれに続く。

恭子「ここも久しぶりですね」

八幡「すごっ・・・」

外門をくぐつた俺は感嘆の声を上げた

そこは石レンガ造りの家が多く並んでいた。

恭子「さあ八幡君兄さんの知り合いの家まであと少しです。頑張りましよう」

八幡「は「恭ちやーーん」い？」

恭子「へ？・・・・ぐはあ！」

???「久しぶり、恭ちゃん元気にしてた？」

え？誰だこの人恭子さんを吹っ飛ばしたけど大丈夫なのか？

恭子「ちょ、ちょっと離れてくださいアイリさん」

アイリ「はーい・・・・・ん？恭ちゃんこの子は？」

恭子「ああ、こちらは今日からアイリさんの家にお世話になる比企

谷八幡君です。」

アイリ「この子が慶真が言つてた比企谷八幡君か」

八幡「えっと、比企谷八幡です。よろしくお願ひします。」

アイリ「ここにちは八幡君。私はアイリ。アイリ＝ウォルデゲート。アイリって呼んでね」

八幡「よろしくお願ひします。アイリさん」

アイリ「うん！よろしくね」

こうして俺の異世界生活は始まった

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——3

八幡 「恭子さんは今日帰るんですか？」

俺は今異世界にいる。いや、引っ越したの方が正しいか。理由は簡単にいうと俺が自立するまで慶真さんの知り合いのアイリさんの家に居候させて貰うためだ。

恭子 「そうですね……今日はアイリさんの家に泊まらせてもらいます」

アイリ 「えつ？ 恭ちゃんこつちに泊まっていくの!? やつた～！」
「うわーアイリさん嬉しそうだなー」

あつ、 そう言えば

八幡 「あの、 魔法の練習とかって出来ますかね」

恭子 「え!? 疲れてないんですか？」

八幡 「？ はい、 大丈夫ですけど……」

恭子 「………… 分かりました。 では、 まずアイリさんの家に行きましょう。 魔法はそれからです。」

アイリ 「うん。 そうだね、 ジャあしゅっぱーーっ!!
よし、 やつと魔法が使える

約20分後……

アイリ 「着いたよ、 ここが私の家です！」

そこは日本では滅多に見られない豪邸だった……

八幡 「…………」

恭子 「はあ……またリフオームしましたねアイリさん……」

アイリ 「…………テヘツ☆」

恭子 「はああああああ……」

うん、 そななるよな……てカリフオームでこれだけ広い家建てるとかどんだけだよ……

アイリ 「ま、 まあそんなことより入つて入つて～」

恭子 「…………お邪魔します」

八幡「お邪魔します」

アイリ「？違うよ八幡君」

えつ？俺なんかしたか？まさか俺だけ入っちゃダメだつたとか
アイリ「八幡君は今日から家で暮らすんだから『お邪魔します』じゃ
なくて『ただいま』でしょ？」

ああ、そうか、もう俺のことをこの家の住人つて認めてくれたのか
・・・なんか・・・嬉しいな

八幡「スマセン、ただいまです。」

アイリ「ふふ、おかえりなさい」

恭子「では、今から魔法について教えますね」
さあ始まりました恭子さんの魔法講座・・・

恭子「では、まずは八幡君には魔力に慣れていただきたいと思いま
す。」

八幡「？魔力に慣れる？」

恭子「はい、魔法を使うにあたつて魔力をコントロールしないと行
けなくなります。なのでまずは魔力に慣れることで魔力をコント
ロールできるようになつてもらいます。」

なるほど、まあ魔力コントロール出来ないと魔法が変な方向に行つ
たりして危ないもんな

八幡「分かりました。どうすればいいんですか？」

恭子「そうですね・・・・・やはり魔力玉を作る方法が1番効率
が良さそうですね」

八幡「魔力玉？」

恭子「はい、まずは私がやつて見せます」

そうして恭子さんは手を前に出し手のひらにバランスボール位の
魔力玉を作り出した

八幡「おお、すげえ」

恭子「ふふ、ありがとうございます。八幡君も慣れればこの位出来
ますよ。まあ八幡君は最初はこんなに出来ないかも知れませんが慣
ればもつと大きな魔力玉を作れる様になります。練習あるのみで

す

八幡「分かりました。じゃあやつてみます」

そう言つて俺も恭子さんと同じように手を前に出し魔力玉を作つた。しかしどうやつても野球ボール位の魔力玉しか出来なかつた。

恭子「最初はその位が普通です。野球ボール位の魔力玉を作れれば上出来ですよ」

恭子さんはそう言つてるけどでもなー

八幡「これのコツとかありますか?」

恭子「コツですか・・・そうですね・・・自分で魔力を手のひらに集める感じですかね」

なるほど、難しいな

まあやつて見るか

八幡「えっと、自分で魔力を手のひらに集める感じで・・・」

そして俺は手を前に出しきつきのように魔力玉を作つた・・・

恭子「なつ！・・・」

アイリ「うそつ！」

八幡「マジかよ・・・」

何故俺らがこんなに驚いているか・・・それはな!

俺がアイリさんの家くらいの大きさの魔力玉を作つてしまつたらだよ!・・・はあ

恭子（あ、ありえない・・・さつきまでは野球ボール位の魔力玉だつた。だけどコツを教えただけでこんなに大きな魔力玉を作るなんて・・・それに、この魔力の量はなに?私よりも多い）

アイリ「ハチ君すごーい!」

八幡「は、ハチ君?」

アイリ「八幡君って呼びづらいからハチ君つて呼んでみたんだけど、ダメだつたかな?」

八幡「いえ、日本の俺の友達にもそう呼ばれてたんで懐かしいなど」

アイリ「そなんだよかつた」

それにもしても

八幡「恭子さん、これどうしましよう・・・」

恭子「まあ、これだけ出来ればいいと思います。後は魔力玉を分裂させたり1度に三つや四つの魔力玉を作つたりとかができるようになればコントロールは完璧だと思いますよ?」

八幡「なるほど、分かりましたやつてみます」

アイリ「ちよ、ちょっと待つて!」

八幡「?」

アイリ「あ、あのね。今日ハチ君が引っ越して來たから歓迎のつもりでちょっと豪華な食事を作つたの。だからご飯食べない?それに今日は遅いし寝て明日やろう?」

それもそうか

八幡「そうですね、今日は遅いですしあう終わりります。」

恭子「そうですね、ではご飯をいただきましょうか」

アイリ「うん!」

そして10分後

八幡「ごちそうさまでした」

恭子「ごちそうさまでした」

アイリ「お粗末様♪」

アイリさんの料理なやばいわめつちゃ美味かつたんだけど!

八幡「めっちゃおいしかったです。」

恭子「アイリさん、また腕を上げましたね」

アイリ「ふふふ、ありがとう」

八幡「さてと、じやあ俺は風呂入つて寝ますね」

恭子「はい、ではおやすみなさい八幡君」

アイリ「おやすみ♪ハチ君」

八幡「おやすみなさい」

こうして俺の異世界生活が始まったのだつた

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——4

八幡「んつ・・・ふああああ

目が覚めた・・・覚めてしまった

八幡「はあ、目、覚めちつたな・・・二度寝とかする気になれねえ
しな。ちょっと走つてくるかな」

そうして俺はまだ外は暗いのに走る準備をした

八幡「さて、行くか。」

と言つてもまだここに来たばつかだからな道とか覚えてないしこ
の辺近くが森だから迷わないようにならないとな

そう思いながら俺は走り出した

俺が走り出して10分後位か？俺の目の前には自販機があ
る・・・・・

この世界つて自販機あつたんだな・・・・・

八幡「それにしても知らぬのはばつかだな。まあそれもそうか。こ
こは地球と違うしな」

そして俺はまた走り出した。

八幡「それにしてもこの街進撃の巨人とかに出てきそうな家とかが
多いな。それに回りは壁に囲まれてるし」

もうまんま進撃の巨人じやね？とか思つてます。スミマセン・・
でも仕方ないでしょ、ほんとに進撃の巨人っぽいんだもん！

・・・・・キモイな、うん

さて、そろそろ家に戻るか・・・・・ん？あの森の奥の方、なん
か光つてんな家でもあんのか？

八幡「暗いし危ないから昼頃にでも来てみるか

『まつてください。』

いきなりそんな声が聞こえた。

八幡「なんだ!?今の声女の人の声か？この森の奥の方から聞こえた
ような・・・・・はあ、めんどいが行つてみるだけ行つてみるか」
そして俺は光つてている方へと歩き出した。

5分くらいいたつたか？

森の光はどんどん強くなっている。多分近づいてる証拠なんだろ
うな

その時

『はやく来てくれないかな?』

『もう少しだと思うよ?』

『そつか、やつと会えるね。』

『うん、3年間待つてたかいがありました』

えつ？怖いんだけど・・・何？俺ってなんかしたのかな？殺される
のか？ふう、た、多分大丈夫・・・だろ。うん、殺されはしない・・・

と、思う

そんなことを思いつつやつと光の原点へとたどり着いた。

八幡「えつ？」

そこには刀の柄が二種類あつた。右の柄は紐が紅いやつで左は深
い蒼だつた。

『あ、やつと來たね』

『やつと來ましたね』

八幡「お前らなのか？俺を呼んでいたのは・・・」

『そうだよ、まあとりあえず私たちの柄の部分をにぎつて！』

八幡「あ、ああ分かった」

あ、何了承しちゃつてんの？俺は
まあにぎる位ならいいか

そして俺は柄をにぎつた

フツ

八幡「うおつ！」

な、なんだ!?なにがおきた？俺はただ、柄をにぎつただけなんだ
がつてか何この空間は

??????『やつと会えた！』

??????『やつと会えました』

八幡「えつ？お前ら誰？つてかここ何？どこなんだ？」

???『あ、そうだった私の名前は『紅時雨』だよ！宜しくね！』

八幡「お、おう（なんか穂乃果を見るようだ……）」

???『私は《夜桜》です。よろしくお願ひします。比企谷八幡さん』

八幡「ああ、よろしく（こつちは清楚系の人だな……ん？）なあ、何で俺の名前を知つてんだ？」

紅時雨『それはね、私達は八幡君が日本にいる頃からあなたに目をつけたからだよ！』

夜桜『正確に言うと、八幡さんが日本にいる頃からあなたの魔力を感じていてあなたの事をここから観察していました』

八幡「マジかよ……」

夜桜『スミマセン……でも、私たちの力に合う力の持ち主が八幡さんしかいなかつたんです。』

八幡「まあ、分かつた。で？ここはどこだ？」

紅時雨『ここはね、八幡君の精神の中だよ！』

八幡「は？俺の精神の中？」

夜桜『はい、そうですよ？』

紅時雨『八幡君、なにがあつても私達は八幡君の味方だよ！』

八幡「はあ、俺の昔の記憶でも見たのか？」

夜桜『す、スミマセン。精神の中に入つた時にちよつとだけ……』

紅時雨『あ！そうだ、八幡君に一つだけ聞きたいことがあるんだつた』

八幡「聞きたいこと？」

紅時雨『うん、何であんなことされてたのに比企谷つて使つてるの？曉じやなくて』

ああ、それか

八幡「それか……まあ簡単にいうと妹との絆を捨てたくなかつたから……かな」

紅時雨『妹？』

八幡「ああ、俺は確かに親やクラスの奴らに虐めたりされてた。だが妹は違つた。俺に普通に接してくれた。唯一の癒しだつたんだ。だからその繋がりを切りたくなかつた。それだけだ」

夜桜『……いいと思いますよ。そういうの』

紅時雨『うん、八幡君はその妹さんの事が好きだったんだね』

八幡「まあ、俺の癒しだつたからな」

さてと、俺の話はここで終わらせるか。次の質問はこちらからだ

八幡「さて、次は俺から質問だ。单刀直入に聞く、お前らは何なんだ？」

紅時雨、夜桜『精靈だよ？（ですよ？）』

なるほど精靈か・・・・・つて精靈！？

八幡「お前ら精靈なの！？」

紅時雨『うん、それも八幡君専用と言つていい感じのね』

ま、マジかよ・・・

紅時雨『まあ、私達はまだ自分の力とか把握出来てないけどね』

八幡「そうなのか？』

夜桜『はい、私達はまだ使われたことさえありませんからね』

八幡「じゃあ、俺が初めてなのか？』

紅時雨、夜桜『うん（はい）』

八幡「なるほどな、俺はお前らに適合したつて事か』

夜桜『はい、そうなります。』

なるほど、まあこいつらはこいつらで自分たちを使える人がいなくて困つてたんだろうな

八幡「・・・・・分かった。お前らは俺の精靈にさせてもらうわ』

紅時雨『・・・やつたぐ！ありがとうございます！八幡君!!』

夜桜『ありがとうございます！八幡さん！』

八幡「ああ、これからよろしく。紅時雨、夜桜』

紅時雨『よろしく！八幡君！』

夜桜『よろしくお願ひします！八幡さん！』

こうして俺は何故か知らんが異世界生活2日目に精靈を2人手に入れてしまつた。

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——5

八幡「ただいま」コゴエ

現在時刻A・M 4:00俺は朝のランニングから帰ってきたところだ。

八幡「ふう、誰もまだ起きてな「さあーてハチ君?どこに言つてたのかな?」・・・・・・

ん?なんだろう、後ろからなんか聞こえたような・・・気のせいかな?「氣のせいじゃないですよ?」

八幡「スミマセンでしたー!」

アシリ「全くこんな遅くまでどこいってたの?」

八幡「いえ、えつとですね、早く目が覚めたんでちよつとそこら辺走つてこようかなと思いまして」

恭子「全く、昨日あれだけ歩いたんですからしつかり休まないとダメですよ?」

八幡「う、スミマセン」

恭子「はあ、それにしてもこれからどうしますか?もう二度寝する時間じやないと思いますが・・・」

アシリ「じゃあ、ハチ君の魔法の練習でもしょつか」

なんと!それはいい提案だ

八幡「マジすか!よっし」

恭子「まあ朝ごはんにするにしても早すぎますしね。では、やりましょうか」

八幡「じゃあお願ひします!」

恭子「じゃあ、今日は魔力玉を分裂させ「あ、それはできるようになりました」・・・・・そうですか。じゃあ量を増やしてみますか。まずは2つ、そして4つという感じで倍にしていくください」

八幡「分かりました」
さて、やつて見るか。

40分後・・・

くつそ、8個までならできるようになつたのに16個がキツイな

恭子「どうですか？」

そこに恭子さんが戻ってきた

八幡「ダメですね、8個までなら出来るんですけど」

恭子「いえ、8個も作れればまだいい方ですよ。それより休憩しま

しょう。朝ごはんも出来てます」

八幡

「えつ？でも、朝ごはんにしては早いんじゃ・・・」

恭子「5時過ぎに行くところがあるので早めに朝ごはんを食べちゃ
いたくて」

八幡「行くところ？」

恭子「はい、八幡君の適正属性を調べに行きます」

八幡「こんなに早くて大丈夫何ですか？」

恭子「いえ、この位が丁度いいんです。6時過ぎると1時間位待つ
可能性がありますので」

八幡「1時間!?そんなに人が来るんですか？」

恭子「はい、なので早く行かないとダメです」

八幡「分かりました」

俺は朝ごはんを食べる為に恭子さんと家の中に戻った

アイリ「あ、やつと来た、早く食べないと」

八幡「了解です。じやあいただきます」

アイリ「はい、召し上がり」

それにもしても今日の朝ごはんも豪華だな。

10分後

恭子「では、行きましょうか」

八幡「はい、分かりました」

アイリ「あ、私は討伐軍の方で召集かかつてるからそつちに行くね

？」

恭子「討伐軍で、ですか？」

アイリ「団長のアレスからね」

恭子「なるほど、分かりました。では、私達は先に行きますね」

アイリ「うん、行つてらっしゃい」

そして俺は恭子さんと適正属性を調べる為に街へと向かつた

恭子「着きましたよ、ここが適正属性を調べる為にある教会です」
へえ、この教会が

恭子「じゃあ、あそこの機械の前で魔力玉を作つてください。そうすれば属性が分かります」

八幡「分かりました。」

そして俺は機械の前行き魔力玉を作つた

魔力玉は少しするとふたつに別れた。

そして片方は紫、もう片方は青白い色へと変わつた

神父「ほう、あなたは闇属性と雷属性ですね」

どうやら俺は闇属性と雷属性らしい

八幡「ありがとうございました」

そして俺は恭子さんの元へと戻つた

恭子「どうでしたか？」

八幡「闇と雷だそうです」

恭子「なるほど、いい組み合わせですね」

八幡「そうなんですか？」

恭子「はい、属性としてはいい組み合わせだと思いますよ
へえそなのかよかつた」

恭子「それでは次に行きましょう。あつ、それとこの本をあげます」

八幡「?この本は?」

恭子「魔導書です。これを見て魔法を練習してください」
魔導書!?

八幡「ありがとうございます!」

恭子「はい。では、次は討伐軍に行きましょう」

八幡「はい。・・・・・はい?」

討伐軍つていきました!?

恭子「では、行きましょうか」

八幡「あ、あの!討伐軍で何するんですか?」

恭子「?何つて討伐軍で軍人登録をしに行くんですよ?八幡君の」

八幡「俺はまだ魔法をつかえませんよ!」

恭子「大丈夫、その魔導書は闇と雷のです。」

八幡「なにが大丈夫なんですか!?」

恭子ニコツ

八幡「ニコツ……じやなくて！」

恭子「着きましたよ」

八幡「oh…遅かつた」

アイリ「あ、恭ちゃんにハチ君やつと来たね」

そこにはアイリさんがいた……帰りたいけど帰れない。うん、逃げても無駄だわ

しゃあないか 押してダメなら諦めろ だからな

八幡「はあ、分かりました。登録しますよ」

恭子「では、入りますようか」

はあ、もう後には退けないか

受付「あ、恭子さんにアイリさん。どうしましたか？」

恭子「この子の登録書を作りたいんですけど」

受付「了解しました。では、こちらにご記入お願ひします」

八幡「あ、はい」

えつと、名前は比企谷八幡と、身長か163位か
・・・・・

八幡「えつと終わりました」

受付「はい、分かりました。では、次に精霊の適合試験を行います
えつ？」

受付「では、こちらにどうぞ」

八幡「あ、はい」

アイリ「ふふふ、ハチ君はどんな精霊かな？」

恭子「そうですね、楽しみです」

・・・・・スミマセン恭子さん、アイリさん……俺、精霊持つ

てます

受付「では、この機械に魔力を流してください」

八幡「あ、はい分かりました」

そして俺は魔力を流した。

俺が流した魔力は光となり精霊に向かつて伸びた
そして一つの石碑の前で止まつた

受付「では、あの石碑に触れて見てください」

八幡「わ、分かりました」

俺はその石碑に触れた

フツ

八幡「んっ、ここは……前と同じ場所か」

『あなたが私の新しいマスター?』

八幡「ん?」

俺は声のした方を向くとそこには黒が主体でところどころ星のマークが入った袴を着ている女性が立つていた

八幡「お前は誰だ?」

『私?私は星龍だよ。あなたは?』

八幡「俺は比企谷八幡だ。よろしくな星龍」

星龍『うん、これからよろしくね八幡』

いきなり呼び捨てなのな・・・

そこで俺の意識は途切れた

八幡「んっ」

「君・・・・・チ君・・・・・・・ハチ君!」

八幡「・・・おはようございます。アイリさん」

アイリ「おはようじやないよハチ君。精霊とはどうだつた?」

八幡「ああ、仲良くなりましたよ」

アイリ「そつか、じやあ精霊を解放してくれるかな」

八幡「・・・同やつてですか?」

アイリ「えつと、ハチ君の精霊はどれ?」

八幡「えつと・・・・・どれだ?」

恭子「そのブレスレットじやないですか?」

八幡「あ、これだ」

アイリ「じゃあ、それに魔力を込めてから精霊の名前を呼んでみて」

八幡「分かりました」

俺は言われた通り魔力を込めた。そして

八幡「出撃だ《星龍》!!」

そういうと俺の回りに8つのシールド？銃？まあそんなやつが浮かんでいた

アイリ、恭子「なっ!?星龍!？」

えっと、なんかしたかな俺は

アイリ「星龍ってあの遠距離最強の精霊だよね?」コゴエ

恭子「はい、そう聞いたことがあります」コゴエ

???「ハツハツハ、まさか星龍を宿す者が現れるとわ」

アイリ「アレス!？」

恭子「団長!?どうしてここに」

えつ？団長？何でここにいんだよ。仕事しろよ・・・

アレス「ハツハツハ、まあ仕事も終わってしまったのでねちょっと覗きに来てみたのさ」

あ、仕事終わったのね

アレス「それよりも」

団長はそう言うと俺の方を向いた。なんか嫌な予感

アレス「比企谷八幡君・・・だつたね。私と決闘しないか?」
ほらね?

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——6

前回のラブ「ちげえわ！」はいスミマセン、調子乗りました
前回のあらすじ

八幡、新たな精霊を手に入れたよ！その後団長がきて決闘する事になつたよ！

終わり

・・・何でこうなつた・・・

さて、今俺は軍の闘技場に来ている。何故か・・・団長と闘わないといけなくなつたからだよ!!

アレス「さて、八幡君ルールを決めようか。制限時間は30分、君は私に一撃でも攻撃をいれば勝ち。私の方からは攻撃はカウンター以外しないよ」

八幡「そのルール、ハンデがありすぎません？」

アレス「まあ私も一応団長だからね、これ位はハンデをあげないと。まあ精霊は私も使うから全力で攻撃をしてくれて構わないよ」

八幡「はあ、分かりました。」

アレス「それじゃあアリ、スタートの合図を」

アリ「う、うん。じやあ始めるよ？ デュエルスタート！」

八幡「星を貫く九つの龍よ顕現せよ！ 出撃だ『星龍』！」

そう言うと八幡の周りに八つのファンネル的な物が出てきた

アレス「それが星龍か・・・では、こちらもいこうか」

八幡「あの、まだ終わつてないんすけど・・・」

そう言うと腰につけていた2つの十字架のキーホルダーを両手に持つた

八幡「頼むぞお前ら。爆炎より生まれし紅の姫君よその力を解放せよ！ 焼き尽くせ！『紅時雨』！」

そして右手に持っていたキーホルダーが変わり刀に変わった

八幡「もう一つ、闇夜に舞う雷の姫君よ今ここに力を示せ！闇夜を駆ける！『夜桜』！」

そして左手のキー・ホルダーも刀に変わった。

アレス「なつ!? 精靈3つ持ちだと!? ありえない今までそんな人いなかつたのに。」

アイリ「ちょっと待って!? いつあの2つの精靈をゲットしたの!?」
恭子「精靈3つ持ち・・・兄さんを超えている!? ありえない・・・魔法も使えないのに」

うーん、俺も一気に3つを出せるとは思わなかつたな・・・

アレス「ふつ、面白い！ 先ほどのルールは変更する。私も本気でいこう！ ふう、行くぞ。すべてを焼き尽くす混沌の力よ今ここに生まれろ！ 燃やせ！ 『イフリート』！」

そう言うと団長の右手に剣がでて、体を炎が纏つた。

アレス「もう一つ、すべてを照らす輝きよすべてを飲み込み打ち砕け！ 輝け『シャイニングセイバー』！」

シャイニングセイバー・・・まさにアレスさんにお似合いだな

アレス「さて、やろうか改めてバトルスタートだ！」

アレス「行くぞ、イフリート！ 龍鎖炎縛！」

アレスさんは左手から炎の鎖を飛ばしてきた

八幡「二刀流はあんまりしたことねえけどやつて見るか。ふつ！」

キン！

夜桜（ハチマンさん私の能力をお使い下さい）

八幡（了解）

八幡「雷走」

バチン！

そう言うと俺の体を雷が纏つた

八幡「行きます！ はああああ！」

俺はそのまま一瞬で団長の後ろにまわつた

アレス「速つ！」

俺は紅時雨で斬りかかるが避けられた

アレス「危なかつたな、あの速さは厄介だな。 しようがないあれを

使おうか」

そう言うと団長は俺から離れていつた

アレス「さて、行くぞイフリート！」

アレス「焼け落とせ煉獄の炎すべてを灰へと変えろ」「あれはまずい！」

アレス「イグニス・レグリオン！」

トゴオオオオオオ！

アレス「やばい、やりすぎた！」

アイリ「八君！」

恭子「八幡君！」

アイリ「ちょっとアレス！やりすぎだよ！」

八幡がいた所は煙で隠れている。が、あの魔法を食らつて無事で入るはずがない

アレス「まざいな、治療班を」

八幡「はあ、危ねー死ぬかと思つたぜ」

アレス「えつ？なに!?」

そこにはあの爆発を直撃で食らつたにも関わらず無傷で立つている八幡の姿があつた。

八幡「はあ、この技すぐには見せたくなかつたんですけどね」

八幡の周りを飛んでいるファンネル的な物は六つが合体してシリードみたいになり、二つは八幡の両方の腕に合体していた。

アレス「それは・・・」

八幡「星龍のディフェンスモード、ディフェンシブルゲイザー。あらゆる攻撃を防御する絶対防御です」

アレス「なるほど、これはやられたな」

八幡「じやあ今度はこちらの番です！」
さて、反撃開始だ！

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——7

さてと、行くか

八幡「星龍、頼む！」

八幡がそう言うとファンネルみたいなのが2つアレスに向かつて飛んでいきファンネルに付いていたビームライフルみたいなので攻撃を仕掛けた

アレス「おつと、危ない危ない当たるとまずいねこれは」

八幡「いくぞ夜桜、紅時雨。はあああ！」

八幡はアレスに斬りかかつた

アレス「イフリート、ぶつ潰せ！イグニスブレイク！」

ドゴオオオン！

うおつ!? 危ねえー、なんつー威力だよ・・・あれ食らつたら死ぬんじゃね?

八幡「夜桜、雷纏！」

バチチチチチ！

アレス「ふむ、体に雷を纏うか・・・」

よし、行くぜ

八幡「はあ！」

ガキいいいん！

アレス「危ない危ない、それにしても速いな・・・だがまだ詰めが甘いね。・・・ふつ！」

ガキいいいん！

八幡「紅時雨！『龍天翼剛』！」

ゴオオオオオ！

八幡は紅時雨の方に炎を纏うと炎の竜巻をアレスに向けて撃つた

アレス「ふつ、僕には炎の攻撃は効かないよ！イフリート『イグナイトゲイザー』！」

アレスも八幡に向かつて炎の斬撃を飛ばした。

ギイイイイイン

ドゴオオオン!!

八幡「はああああ！」

アレス「おおおおおお！」

ガキいいいん!!

アレス「なかなかやるね。さすがだよ」

八幡「はは、まあ伊達に鍛えてないっすからねつ！」

八幡はそのまま夜桜で斬り掛かるがアレスによけられた。

八幡「くっそ！当たんねえ」

アレス「そう簡単には当てさせないよ。シャイニングセイバー！『ライトニンググリッド』！」

そう言うとアレスは光の斬撃を繰り出した

八幡「ちょ、エクスカリバーかよ！くっそ！星龍！頼む！」

ガキいいいん！

アレス「すきあり！」

ドゴオオオン！

八幡「ガツ!?くっそ。流石に強えなさすが団長か。ならあれは効くか？やつて見るか」

そう言うと八幡は紅時雨を前に構えた

アレス「次は何を見せてくれるんだい？」

八幡「いきます！紅時雨『龍幻徹火』！」

シーン

アリ「な、何も起きないね？」

恭子「そうですね・・・失敗でしょうか？」

2人にはそう見えてもおかしくなかつた。しかしアレスだけは違つた

アレス「ぐあああ!?な、何だこれはぐ、くそつ！消えない焰だと!?どういう事だ、それに八幡君も消えただと!?どこに行つたんだ!?」

アリ「なつ!?」

恭子「どういう事ですか!?なぜ団長はあんなに苦しんでいるんですか!?しかもあんなに近いのに八幡君に気づいてないみたいですね」

八幡「これで終わりですよ『解』

アレス「はつ!?な、何だつたんだいまのは」

チャキッ

そしてアレスの首元には八幡が刀を突きつけていた。

アレス「な?! いつの間に・・・」

八幡「俺の勝ちです。団長」

アレス「・・・・ふつ、ふふふ。はつはつはつはつ。まさかこれ程とは。ふむ、合格だな。ようこそ討伐軍へ八幡君。君を歓迎するよ」

八幡「ありがとうございました。」

アレス「いやあ、一杯喰わされたね。あの技はまさかとは思うが幻術の類かい?」

八幡「はい、そうですね。あの技は相手に焰の幻術を見せます。しかも消えない焰のね。そして俺の姿も見えなくなります。」

アレス「なるほど。それは凄いな。しかしさか幻術まで使えるとは思わなかつたよ。それにあれは幻術にしては現実感がありすぎて戸惑つたよ」

八幡「でも、勝てるとは思つてませんでした」

アレス「ハハハ、いやあ僕は幻術の類は苦手でね。解くまでに時間がかかるつてしまふんだ」

八幡「そうですか。なら、俺が幻術を使つたのは正解だつたわけですね」

アイリ「八くーん! さつきの精霊は何ですか!? それとさつきの攻撃もるの!?」

恭子「八幡君! さつきの精霊は何ですか!? それとさつきの攻撃も！」

うわあ出たー。めんどくさい人たちだ・・・

アレス「まあまあアイリも恭子も話の前にまずは八幡君に討伐軍の説明をさせてくれ」

アイリ「あ、うん分かった」

恭子「わかりました」

アレス「では、改めて。八幡君、君には第107魔獣討伐軍の『ヴィルダム』の隊長をしてもらいたい。」

へえ、隊長か・・・・・ん？隊長！？

アイリ「ちょ、ちょっと待つてアレス!?あの『ヴィルダム』の隊長をさせるの!?八くんに?」

アレス「ああ、そうだ」

恭子「ですが団長、八幡君はまだ魔法もつかえませんよ!?なのに隊長を指せるんですか!?」

八幡「そ、そうですよ。それに俺なんかに隊長が務まるはずがないと思いますが・・・」

アレス「大丈夫、『ヴィルダム』は人数が八幡君合わせて5人だけだ。それに八幡君には隊長が務まると思っているからな」

八幡「で、でもいまの隊長が黙つてないんじや・・・」

アレス「今、ヴィルダムには隊長はいないんだ。」

う、このままだと隊長にされてしまう・・・どうすれば・・・だめだ、もう諦めて隊長やるしかないか

八幡「・・・はあ、わかりました。隊長、引き受けます」

アレス「そうかそうか。ありがとう。では、今から隊室に案内しよう。ついてきてくれたまえ」

そう言つて歩き出した。その後に俺は続いた

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——8

アレス「さあ着いたよ。ここがヴィルダムの隊室だ」
団長との戦いの後直ぐに俺は隊室に連れてこられた。

八幡「ここですか・・・」

はあ、隊長か俺なんかが隊長とか言つたら元からいる人たちになんて言われつかな・・・

トントン

「はあーい、今出ます。」

団長がノックをすると中から女性の声が聞こえた。

ガチャヤ

「あつ、団長と・・・どちら様ですか?」

アレス「レイカ君、ちょっと入らせてもらつてもいいかい?」

レイカ「はい、どうぞ。」

そう言つてレイカと呼ばれる女の子は団長と俺を中に入れてくれた。

団長「さてと、今日ここに来たのは隊長の件だ。」

そう言つと椅子に座つていた。4人の体がビクツとはねた。

「だ、団長・・・そ、その件なんですが、まだやつてくれる人が見つかってなくて・・・」

アレス「ああ、その件なんだけど、もう探さなくてもいいよ。」

団長がそう言つと4人は絶望したような顔をした。
なんか事情があんのかな?」

「じゃ、じゃあこの隊は・・・」

アレス「大丈夫、ここにいる彼が新しい隊長になるから」

団長は相手の話を遮つてそういうふた。それを聞いた4人は一瞬ほ
うけたような顔をしたが一瞬で嬉しそうな顔になり

「――「ほ、本当ですか!」」

と言つてきた。全員で・・・

アレス「ああ、本当だ。」

「待つてください。その前にそいつは誰なんですか？私、初めて見る人ですけど……」

アレス「ああ、彼は今日から討伐軍に入った比企谷八幡君だ。」

「ちょっと待つてください！今日から入った奴が隊長になるんですか！？そんなの認めません！そんな奴にやらせるんだつたら私がやつた方がまだしつかり出来ると思います！」

まあ そうなるよな。今日から討伐軍に入つたのに隊長をやるなんて認められねえよな……でも、やるつて言つたからにはしつかり引き受けないと

アレス「いや、彼の実力はどこの隊長よりも強いと思うよ。何せ 100%では無いとはいえ精霊を2つ出したこの私に模擬戦で勝つたんだから」

団長がそう言うと4人はびっくりしたような顔になつた。この隊の奴らは面白いな。色んな顔になつて……

レイカ「団長に勝つたんですか？どうやって……でも、それが本当ならすごい戦力が来たことになる……」

「私たちでも前線に出れるかもしれないってことだよね……」

「……」

「……なら、私と勝負しなさい！私が勝つたらあんたは隊長の座を私に譲りなさい！」

俺に向かつて金髪の……ロング？いや、ショート？その間くらいか。その位の髪の長さの女子がそう言つてきた。

八幡「俺が勝つたら？」

「そうね……あんたが勝つたらアンタの言うことを1つ何でも聞いてあげる。それでいいでしょ？」

何でも……ね。

八幡「……分かった。いいぜやつてやるよ決闘」

さて、戻つてきました闘技場！！

・・・テンション上げすぎたかなあ……

まあいいや、さて今日はすぐ決闘が多い氣がするなあ・・・
アレス「じゃあ、ルールは精靈の使用は1つまでで一撃相手に当て
たら終わりというルールにするよ」

八幡「了解です。」

「初撃決闘ね了解」

アレス「じゃあ2人とも精靈を展開して」

「走る雷、荒れる暴風、巻き起こる竜巻よ今ここに 穿て！『ヴエリス
タル・ガーリア』！」

そう言うと大剣？太刀？違うなその間の剣が出てきた。あの子本
当に全部微妙なラインだな・・・
まあいいや、俺の番だな

八幡「闇夜に舞う雷の姫君よ今ここに力を示せ！闇夜を駆ける！
『夜桜』！」

アレス「よし、2人とも準備出来たみたいだね」

ふう、さて、さつさと終わらせるか

アレス「じゃあ行くよ？バトルスタート！」

八幡「夜桜、雷纏！」

バチチチチチチ!!

八幡「ふつ！」

ヒュツ チヤキツ

八幡「終わりだ」

俺は一瞬で相手の背後に回り込むと右手で相手の武器を持つてい
る方の手を掴み後ろへと回して刀を相手の首筋に当てた

「・・・えつ？」

レイカ「は、速い・・・」

「・・・」

アレス「そこまで！ これが彼の実力だよ」

「・・・わかりました。その実力は認めます。参りました」

八幡「あ、えつと・・・あ、ありがとう？」

アレス「はつはつはつ、じゃあ後は任せたよ八幡君。あー、あとア

イリと恭子君が先に家に帰つていると言つていたよ」

八幡 「了解です」

そう言つて團長は歩いて行つてしまつた
はあ、それにもまさかこの隊、女子しかいないなんて・・・こ
れからやつて行けるかなあ・・・

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——9

さて、決闘も終わつたしな隊室に戻るかなと。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！」

そう声をかけられた

八幡「ん？ なんだ？ まだ文句あんのか？」

「そ、そのだからあれよ。あ、あんたが勝つたら何でも言う事を聞く」

ゴニヨゴヨ

八幡「なんて言つたんだ？」

「だ、だから！ あんたが勝つたんだから何でも命令しなさいよ!! どうせ私にエツチな命令でするんでしょ!? だつたらさつさと言いなさいよ！」

勝つたら命令？ ああ、そんな約束あつたな。でも、こいつなんか勘違いしてるよな。エツチな命令つて……

八幡「……はあ、あのなお前から見て俺はどんな性格してんだよ」

「……鬼畜でエロい男」

八幡「うおい!?

ちよつとまつて!? 何でそんな偏見持たれてんだ俺。何かしたつけ

八幡「はあ、とにかく俺はエツチな事なんて頼まねえよ。そうだな……んじやあ街の案内でも頼もうかな」

俺、まだどこに何があるかすら分かんないしな。

「は、はあ？ 街の案内？ 何でそんな事しないといけないの?」

あ、そつかこいつらには言つてなかつたな

八幡「俺、この街に来たの昨日だしまだどこに何があるかすらわからんねえし」

「えつ？ キ、昨日この街に来たの？ そ、そうなんだ……」

レイカ「あ、あの一隊長、それよりも速く隊室に戻りませんか？ 寒いです……」

八幡「おつと、すまん。んじやあその話は隊室でするか」
そう言つて俺らは隊室へと戻つた。

八幡「さてと、そう言えば俺はこの隊室のどこに座るかすらもわからねえんだけど。どこに座ればいいんだ？」

まさか床とか言わねえよな。それだったら俺泣くぞ？

「えつとねー、ここだよ！」

隊室の資料がなんかがいっぱい置いてある所に連れてこられた。その資料の後ろに回るとそこには立派な椅子があつた。

八幡「スゲエなんかな隊長って感じの椅子だわ」

「あはは、何言つてるの？ 今日からあなたは隊長だよ？」

そうだつたそだつた。実感が無かつたから気づかなかつた。

と、その前に一つやらないといけない事があんだよなあ。はあ

八幡「えつと、一つやらないといけない事があるんだがいいか？」

「やらないといけない事？ 何よそれは。」

ふつふつふつ。それはこれだな。

八幡「自己紹介だ。」

「自己紹介？」

レイカ「そう言えれば・・・」

「やつてなかつたなあ自己紹介」

「・・・」

さてとんじやあ俺からやつとくかな。

八幡「んじやあまづは俺から。俺は比企谷八幡です。12歳ですよ。よろしく」

「はいはーい、次は私ね。私はリリーナ・ウエリアム。12歳だよ。よろしく！」リリーフって呼んでね？」

赤髪でポニーテールのリリーか。よし覚えた。

レイカ「次は私ですね。私はレイカ・アインクライン。12歳ですよ。よろしくお願ひします」

この黒髪ロングで清楚な感じがレイカか。よし覚えた。

「・・・・モカ・ヘリオス。12歳。よろしくお願ひします。」

この無口っぽい感じの銀髪ショートはモカか。覚えた。

「じゃあ私が。私はマナ・スプラウト。12歳よ。よろしく」

この金髪ショートみたいなロングみたいなのがマナか覚えた。

よし、自己紹介もおわったし。今日は終わりでいいよな。

八幡「んじやあ今日は終わつて。明日はマナに俺は街を案内してもらう。リリー達はどうする？」

俺らがいないと3人じやきつそうだし休みにするかな明日はリリー「うーん、じやあ明日はみんなで街に行こうよ。暇だし」みんなで・・・ね。まあいいか。

マナ「そうね。じやあみんなで行きましょうか」

レイカ「良いですね。楽しそう」

モカ グツ

モカもグツジョブしてるし。まあいいか。

八幡「んじやあ明日はここに集まつてから街に行くつてことで。今日はこれで解散！」

そうして俺の討伐軍での1日はおわった。

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——10

翌日

俺は考えていた。討伐軍つて何歳から入れんだよ……昨日はそんなに重要だと思つてなかつたけど今考えれば俺の隊、全員12歳だぞ？いいのかそれで……死ぬかもしんねえのに。

マナ 一八幡さん、ごめん遅れた。」

「おめでたす。」

モ力 「・・・・・ごめんね

そんなことを思つてると4人がきた。

۱۰۹

それにしてもこいつは陽服じゃなくて私服も似合うな

リリードヤー、そんなに直球

三

レイガーた
隊長!何言ってるんですか!」

ん？俺は回り道つひな、めば？回道

ん？俺は何も言つてないよな？何言つてんだか。それになんかみんな顔が赤くなつてるしどうしたんだろう。

書に出して似合つてゐるつて言つてましたよ!!

マジかよ・・・まさかアレを声に出してたとは・・・やばいめつちや

まあ本當の事だからいいんだが

八 撇
「マナは今日なんかあんのか?
——

マナ「今日はこの後訓練をしたくて。隊長も出来たから私達もそろ

「そろ魔獣と戦うことになるかもだから。」
なるほどな。

八幡「じゃあ、この後みんなで訓練しようぜ？連携とか必要かもだ
し。俺もみんなの精霊見ときたいし」

リリー「それいいね！じゃあそうしようよ！」

レイカ「連携ですか？良いですね。そうしよう。」

モカ グツ

よし。じゃあ全員の許可も取れたしまづは街を案内してもらうと
するか。

マナ「じゃあまづは八幡に街を案内しましょ？」
リリー「じゃあしゅっぱーつ!!」

そうして俺は色々な所を案内してもらつた。魔道具店や本屋、食べ
物屋やレストランなど。色々とまわつた。後は途中でアイリさんと
恭子さんにもあつたんだがアイリさんと恭子さんからは

アイリ「あれー？ハチ君デートかな？もう彼女を作つたのかな？」

ニヤニヤ

恭子「八幡君？しつかりと女の子は1人を選んであげないと日本で
は犯罪ですよ？」

とか言われた。あ、後アイリさんには追加で

アイリ「恭ちゃんはあんな」と言つてゐけどこつちの街では一夫多
妻制はOKだからね？」

つて言われた・・・

これで終わつたかと思ひきや今度はマナたちに

マナ「ちよつと八幡!?アイリさんとはどういう関係なの!?」

リリー「それに恭子さんとも知り合いなんでしょ!？」

レイカ「八幡さんつて意外とすごい人?」

モカ コクコク

とかそんな感じで質問攻めにあつた。大変だつたなー。一応俺が
どこから来て恭子さんやアイリさんとはどんな関係なのかもしつか
りと伝えたから大丈夫だろう。・・・多分

そんなこともあつたが無事に街を案内してもらい。今は闘技場を
借りて訓練をするところだ。

八幡「んじやあやるか。まずはみんなの精霊見たいから見せても

らつていいか?」

マナ「私も?」

八幡「一応頼む。」

マナ「了解。走る雷、荒れる暴風、巻き起ころる竜巻よ今ここに穿て

!『ヴエリスタル・ガーリア』」

そしてマナは精霊を展開した。

リリー「じゃあ私達も。地の炎、天の雷、二つが一つになりし時そ
の力開放されたし。燃やせ魂^{ブレイズ}『デュアル・ソウル』!」

そしてリリーは双剣を出した。

八幡「双剣か・・・」

レイカ「次は私ですね。闇を照らす高貴な光。光を潰す漆黒の闇。

天より高く、海より深し。『パラクティア』!」

そう言うとレイカは薙刀を出した。
八幡「薙刀・・・種類が多いな精霊の武器は・・・で、最後はモ力
だな。」

モ力は頷くと構えた。

モ力「冷酷の蒼き光、全てを飲み込め冰雪。『グライシア・レイ
サー』」

モ力がそうつぶやくと銃が出てきた。

八幡「なるほど、モ力は銃か。さてと全員精霊を出し終えた事だし、
早速始めるとするか。」

さて、訓練を始めようか。

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——11

八幡「じゃあ始めるか。まずはお前らはいつもやつてるみたいに連携して俺に攻撃してきてくれ。」

レイカ「えつ？ 4人一斉にかかるつてもいいんですか！？」

八幡「まあ何とか何じやね？」

うん、多分何とかなるはず。一応これでも特訓はしてきてるしな。何とかなるはず・・・多分

マナ「まあ、八幡がそう言うなら遠慮せずに行きましょ？」

リリー「じゃあ行こうかいつのフォーメーションで」

そうして4人は構えるとモ力以外は一斉に走り出した。そして俺から見て真ん中からレイカ、右がリリー、左からマナが走ってきた。

八幡「なるほど、3人で一斉攻撃か。だがスピードが遅いな。」

レイカ「ふふふ、行きますよ？ 風魔法『ウインド・スピード』』

レイカがそう言うと3人のスピードが上がった。

八幡「何？ スピードがあがつた？ ・・・はっ！なるほど、下に氷を張つてスピードをあげたのか。やるな。だが、俺が動けるんだ。そんなの簡単に・・・あれ？」

そう言つて下を見ると俺の足が凍つっていた。いや、違う俺の靴が凍つっていた。

八幡「なるほど、靴を凍らせることで凍つてることを気づかせなかつたという事か。うん、今ちよつとやばいな。使いたくは無かつたけど使うか」

もう、3人も攻撃態勢に入つてしやるしかないか。

そう思い俺は体全体に魔力を巡らせその魔力を一気に炎に変えて全身から放出した。

マナ「きやああ！」

レイカ「熱つ!?」

リリー「きやつ!?」

八幡「惜しいな。でも、俺の使える属性も考えるんだつたな。んじや、こつちからも反撃な『ファイアショート』

俺は炎の球を1人に5個ずつ放った。

マナ「ちょ、ちょっとまつて!? 何でこんなに正確に飛んでくるのよ!?

リリー「私より正確に飛んできるし!」—

モカ「くっ・・・・・ 銃でも狙いが定まらない。」

その時だった

レイカ『ブラックボックス』

レイカは俺の出した炎の球を黒い箱みたいなのにすべて密封し相殺した。

八幡「なんだありやあ、全員分の火の球を全部相殺しやがった…」

それにあんな魔法初めて見たし…

リリー「よそ見してる暇はないよー?」

俺があの魔法について考えていると後ろからそんな声が聞こえてきた。

八幡「えつ? うお!? あぶねえ、 いつの間に後ろに…」

気づかなかつた。

リリー「ふふ、 八幡君だけの雷じやないんだよ?」

バチチチチチ

八幡「なるほど、 お前も雷をつかえんのか。 これは厄介だな。」

八幡「つと、 その前にそろそろ終わんね? もう日が暮れてんだけ

ど…」

レイカ「えつ?」

マナ「嘘!?

リリー「ホントだ」

モカ「…・・・・・」

マナ「や、 やばい! ママに怒られる〜! 私、 先に帰るね! じやあね

!」

八幡「おう、 じやあな」

レイカ「では、 私達も帰りましょうか」

そして俺らは各自家へと帰った。

明日はこれから連携の取り方とか色々とやらなきやな

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——12

皆に街を案内してもらった日の翌日。今日はフォーメーションを決めるためにまた闘技場に来ていた。

八幡「んじゃあ今日はフォーメーションを決めたいんだがいいか？」

そう言うと全員頷く。

八幡「よし、じゃあまずは遠距離にモ力、中距離にレイカ、前衛に俺とリリー、マナの3人だ。」

と、そこでレイカが質問をしてきた。まあ大体質問の内容は分かるけど。

レイカ「えっと、中距離って何をすればいいんですか？ 私、ずっと前衛でやつて来たからよく分からなくて。」

やつぱりそれか。

八幡「まあ、魔法攻撃って所かな。でも中距離とか遠距離とか前衛とかのフォーメーションはあくまでも最初だけだからな？ その場その場で変わっていくと思うから。」

レイカ「魔法攻撃……ですか。」

八幡「ああ、出来るよな？」

そう聞くとレイカは顔をふくらませながら

レイカ「私にだつてそのくらい出来ますよ。バカにしないで下さい。」

つて言つてきた。可愛い……つてそんなこと思つてる場合じやないな。

八幡「まあ、実践あるのみだな。」

そう言つて俺は闇魔法で魔物に似せた人形を作つた。

リリー「これつて人形？」

八幡「ああ、俺の魔法で作つた人形だ。これを使つて練習しようと思う。」

それから俺らはひたすらに練習をした。モ力やリリー、マナは前と同じ役割だからしつかりと出来ていた。しかしレイカは初めてやる

中距離だからか連携があまり上手く出来ていなかつた。まあ最初だ
しな。

八幡「ふう、んじやあ今日はここまでにするか。また明日だな。」

マナ「そうだね。じやあまた明日だね。」

リリー「じゃあ、明日もここに集合でいいの？」

八幡「ああ、じやあまた明日だな。お疲れ」

そう言つて俺らは解散した。それにしてもレイカのヤツなんか悩
んでるような顔をしてたけど大丈夫かな？あいつの性格だと居残り
練習とかしてそุดだな・・・魔法のコントロールは難しいからな、練
習しないといけないし。一応闘技場見てこようかな。

そう思つて闘技場に行くとやはりレイカが練習をしていた。

八幡「レイカ、休まないと疲労で倒れるぞ？」

俺はそう声を掛けた。

レイカ「あ、八幡さん。すみません、でも今日失敗ばかりだつたら
ら練習しないとと思つて・・・」

八幡「まあ、初めての中距離なんだ。いつもは前衛だつたから魔法
はあんま使わないだろうからコントロールがうまく行かなくても
しううがない。明日からも練習して覚えていけばいいさ。」

レイカ「でも、それだと本当の実践に出るのはまだまだ後になつて
しまいます。皆に迷惑はかけられません。」

なるほど、はやく実践に出たいのか・・・まあ討伐軍に入つてるん
だから功績は残したいよな。

八幡「分かつた。じやあ、訓練が終わつたら1時間だけ俺も居残り
練習に付き合うよ。」

俺は隊長だしな。

レイカ「ですが、それでは八幡さんに迷惑が・・・」

八幡「全然迷惑なんて思わねえよ。逆に俺は一応隊長なんだから
もつと頼つてくれ。」

レイカ「八幡さん・・・分かりました。じゃあおねがいします。」

そう言つてレイカは頭を下げてきた。

八幡「おう、頑張ろうぜ」

それから俺達の居残り訓練がはじまつた・・・のだが、途中で皆に見つかってしまい全員で練習するハメになりましたw

俺達が訓練を始めて3週間がすぎた。俺達の連携も良くなつていてもう実践に出てもいいくらいには成長した。

そして、今日は俺は隊室に溜まつていた資料と格闘していた。いや、正確には

八幡「はあ、隊長になるとこんなのはしないといけないのか・・・だるい」

リリー「あはは、まあ隊長だしね。頑張ろう！私も副隊長として手

伝うよ！」

俺とリリーの2人だな。

バタン！

俺達が仕事を始めようとした時いきなりドアが開いた。

「緊急事態です！隊長さんはいますか!?」

八幡「はい、俺がこの隊長の比企谷八幡です。緊急事態つてどうしたんですか？」

この慌て様なんかやばそっうだな

「この街に“第1級危険種指定戦闘魔獣”が近づいてきているんです！」

第1級？

八幡「他の隊の人はいないんですか？」

「それが、他の隊は全て討伐依頼などで出ていていないです。」

八幡「団長は？」

「団長も討伐依頼で出ていて残っているのがこここの『ヴァイルダム』しかなくて。」

マジか大ピンチ。つてか詰んだんじやね？

「30分耐えれば多分団長のスピードなら帰つてこれると思うんですけどが出来ますか？」

30分・・・行けるか？俺らの5人で・・・いや、でもやるしか無いよな

八幡「……分かりました。すぐに準備をして外門に行きました。」

リリー「えっ!? 八幡君!？」

「分かりました。お願ひします。」

そう言つて出ていった。

リリー「八幡君!? 第1級だよ!? 出来ないよ!?」

八幡「リリー、全員呼んできてくれ。」

リリー「わ、わかつたよ」

そう言つてリリーは全員を呼びにいった。

八幡「これで全員だな。初の実践だ。すぐに戦闘準備をして外門まで行くぞ。この街が危ない」

マナ「外門?」

レイカ「何かが来てる……ということですね」

モ力「……さつきから討伐軍のみんなが騒がしいのはそのため?」

リリー「う、うん。」

よし、準備出来た。みんなも出来るか。

八幡「よし、急ぐぞ」

そう言つて俺らは外門まではしつた。

八幡『ヴィルダム』到着しました。』

外門には討伐軍の事務員の人々が外門の見張りの人たちと話していた。

「あ、八幡さん。来ていただきありがとうございます」

「います。今回は恐らく『バリジアンレイガーダー』だと思われます」
バリジアンレイガーダー外見はゴリラだが炎を手に纏い全てを破壊し尽くす危険種。

あいつか。やるしか無いよな。

八幡「了解しました。30分、何としても守ります。」

「お願ひします」

そう言つて事務員さんは去つていった。

八幡「よし、お前ら今回は『バリジアンレイガーダー』が相手だ。初の実践で危険種はちょっときついと思う。だがこの街の命運がかかって

てる。だから30分、俺に力を貸してくれ。頼む」

そう言つて俺は頭を下げた。

マナ「バリジアンレイガー」・・・ほんとに耐えれるの? 30分も」

八幡「やるしか無いんだ。俺はこの街を無くしたくない。お前らがやらなくとも俺がやる」

レイカ「ふふ、八幡さん。いえ、隊長。私はあなたに付いていきますよ? だつてあなたは私の隊長だから。」

モカ「私も」

リリー「最初は無謀だと思つたけど、この街を守るためだもんね。私もやるよ!」

マナ「私もやるわよ」

八幡「皆・・・サンキューな。んじやあ今回は危険種が相手だがやることは訓練の時と一緒だ。30分耐えきれば、団長とか他の隊も来てくれると思う。だからまずは30分耐えきるぞ!」

皆「「「「おお!」」」

そして俺達は外門を抜け『バリジアンレイガー』が来ると思われる方向へと向かつた。

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——13

バリジアンレイガー・・・ゴリラの様な外見だが手に炎を纏い全てを破壊する。大きさはモンスターハンターのアルバトリオൺくらい。

八幡「いた、あいつか。流石に第1級だとでけえな・・・」

マナ「どうするのハチ、アイツと真正面からやり合つたら確実に負けるよ?」

だよなあ・・・どうすつかな固まらずにバラけて攻撃をしていくか、固まつて同じ場所に攻撃を繰り返していくかだよな・・・やつぱり八幡「まずは街からもつと遠ざけたいからな全員でバラけて攻撃をしていく形で行こう。」

レイカ「分かりました。じやあ最初は私が引き付けます」

リリー「じゃあその次は私が引きつけるよ」

八幡「分かつた危なくなつたらすぐに逃げろよ?」

レイカ、リリー「了解!!」

そう言つて2人とも走つて行つた。

マナ「大丈夫かなあ2人とも・・・」

こいつも結構心配性だよな・・・全く

八幡「だい」「大丈夫、あの2人なら・・・」えつ?」

モ力「あの2人は強いから大丈夫。」

モ力・・・こいつは結構みんなを見てるな。いや、みんなを信頼してるつて言つた方がいいのか?

八幡「そうだなモ力の言う通りだ。あの2人なら大丈夫。俺らもあいつらを信じて先回りしてあいつを引きつけるぞ」

マナ「そうだね。行こう!」

そう言つて俺ら3人も先回りすべく走り出した。

八幡「来たか!」

2、3分後、リリーとレイカがバリジアンレイガーを引き付けながら走つてきた。うまく攻撃を避けながら引き付けているな・・・

八幡「よし、マナ。今使える最強の魔法をアイツにぶつぱなせ!」

マナ「わ、わかつた。『荒れ狂う暴雨、天を切り裂く雷鳴。今一つになりて全てを打ち碎かん!!』

《ラグナロク・ブレキリアス》!!

ズガアン！

耳をつんざく様な雷鳴。周りに落ちる雨。吹き荒れる暴風。マナが打つた魔法は森の一部を焼け野原へと変えた。

八幡「わあーお・・・」

マナ「ちょっと強すぎたかも・・・」

モカ「あの2人は大丈夫かな・・・」

うん、そうだよな。まずはあの2人に当たつてないことを願ったい・・・当たつてたら一大事だな・・・

た。

リリー「ちょっと殺す気!?」

レイカ「死ぬかと思いました・・・」

マナ「ご、ごめん・・・」

まあ、そりや怒るよな。まあでもマナも強くなつたしバリジアンレイガーも多分怯ませることくらいには・・・まずいッ!?

八幡「マナ！危ねえ！」

そう言つて俺はマナの前に出て魔法障壁を開いた。

ガキン!!

八幡「くつ・・・そつ！」

俺はバリジアンレイガーノ拳を止めたが反動で後ろへと飛ばされ背中を木に打ち付けてしまつた。

マナ「ハチ!? 大丈夫、ハチ」

レイカ「八幡さん大丈夫ですか!?」

リリー「ハチ君大丈夫!?」

モカ「八幡大丈夫!?」

八幡「ああ、何とか・・・」

今はそんなことよりもやばい事があるんだよな・・・バリジアンレイガーが怒り状態に入つちまつた・・・これはほんとにやばいな。逃

げてもスピードで負けるから追いつかれるしかと言つて戦つても勝てる可能性が低い。・・・詰んだな

八幡「やばいなこの状態は。」

どうする。やつぱりこの方法が1番被害が少なくて済むか・・・

八幡「全員聞いてくれ。お前らは街の方に戻れ。」

マナ「どういうこと!? それって街を破壊されに行くのとほとんど一緒じゃん!」

八幡「いや、お前らだけだ。俺がこいつを足止めする。」

リリー「何言つてんの! 1人で勝てるはずがないじゃん!」

レイカ「八幡さん。もしかして私たちを死なせないためですか?」

やつぱりレイカには見破られたか・・・

八幡「ああ、お前らを死なせずに帰す。それが隊長である俺の役目だからな」

マナ「・・・私も残る。」

八幡「だめだ。それだとお前も死んじまうだろ。俺が1人でやれば1人の犠牲だけですむ。犠牲が少ない方がいいだろ?」

パチンツ!

えつ・・・?

マナ「・・・バカ! あんたがあたしたちに死んで欲しくないって思つてるように、あたし達もアンタに死んで欲しくないっておもつての! だから私も残る」

レイカ「私も同じです。」

リリー「私もだよ。ハチ君には死んで欲しくないから」

モカ「私も」

そう言つて全員が俺の前に出る。

マナ「さあーてやるよ隊長! 指示を頂戴!」

レイカ「本気で潰しに行きます!」

リリー「あの街を守つて、私達も皆生きて帰るよ!」

モカ「全部撃ち抜く!」

そう言つて皆構えた。

はあ、つたく俺は何ていい隊員を持つんだろう。自己犠牲なんて

逆にみんなを悲しませるだけだったんだな・・・よしつ！俺も気合入れて行くか！

八幡 「ふう、よつしゃー行くぞ皆ーここでこいつを潰すぞ！」

皆 「 「 「 「おお!!」」

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——14

八幡「マナ、リリー、あんまり近接戦闘はしないようにしろ。なるべく遠距離で攻撃。モカは集中攻撃を。レイカは全員の援護を優先してくれ。」

今、バリジアンレイガーは怒り状態に入ってるから迂闊に近づくのはあぶない。かと言つてモカに遠距離で攻撃させてたらモカが狙われるからな。

マナ「ハチ、私達は遠距離攻撃をすればいいの？」

八幡「ああ、近距離は危ないから遠距離だ。」

今は戦闘開始から25分か。速くても後5分で団長も戻ってくるか。よし！

八幡「レイカ！お前も攻撃に参加してくれ！援護は俺がやる！」

レイカ「分かりました！」

そう言つてレイカも魔法で足を狙つて攻撃していった。

それについてもモカはやつぱり遠距離が強いな。あの精靈は遠距離重視の精靈だからモカも遠距離が得意なのだろうか。まあそこは後で聞いてみるか。

八幡「あまり固まんなよ！バラバラに散らばつて攻撃するんだ！」と、バリジアンレイガーの動きが止まりモカの方に向き直つた。何する気だ？・・・まさか！遠距離を先に潰すつてことか！第1級になるとある程度賢いやつもいるからな。それだつたら不味いな…：そんなことを思つていると読み通りバリジアンレイガーはモカの方に走り出した。

八幡「モカ！」

モカ「・・・・・凍つて。『アイスグランド』

モカはバリジアンレイガーの方にグラライシア・レイサーを向けレー
ザーを放つた。

そのレーザーは凄いスピードでバリジアンレイガーに飛んでいき当たると足元を凍らせ始めた。

八幡「なるほど、あれは俺と模擬戦をした時に使つたやつか。」

モ力「うん、相手の動きを止める技。」

モ力の魔法は動きを止める系が多いな。

バキバキバリーン！

俺はその音がした方を向いた。そこにはさつきの氷を割つて自由になつたバリジアンレイガーがいた。

モ力「嘘!?あの氷を解いたの!?有り得ない……」

モ力がそんなことを言つている間にバリジアンレイガーは突進する準備をして、モ力に突進を仕掛けた。

八幡「モ力！」

マナ「くつ！初級魔法だけど・・・ウォーターボール！」

そう言つてマナはウォーター・ボールを10個作り放つた。

レイカ「ギガグラビティ！」

レイカもバリジアンレイガーを止めようと魔法を使用している。

リリー「フレイムベール！」

リリーも2人と同じように魔法を放つ。が、それを食らつてもバリアンレイガーは突進を止めなかつた。

八幡 side out

モ力 side

♪回想♪

私はこの街でも有名な王家の血筋だつた。私は生まれた頃から勉強や、スポーツなど色々と習わされてきた。しかしそれは無意味だつた。なぜなら私は今まで習つてきたものを全て1週間で覚えて來たからだつた。

私の親は過保護な親だつた。危険なことはあまりさせず、家の中でやるようなものを私に勧めてきた。私はやりたくないが親には世話になつてているから断れるはずもなくずっと親の言う通りにやつて來た。

それはいきなりだつた。私の親は謎の死を遂げた。なぜ死んだかは未だに分かつてない。ただ分かるのは病氣で死んだのではなく、殺された。それだけだつた。

それからずつと私は1人だつた。学校もやめ、ずっと家で1人ぼつ

ちで過ごしてきた。

そんなある日、久しぶりに外に出た。私は街の中を散歩していた。と、そこに人だかりが出来ていた。なんだろうと思つて見てみると1人の女の子が男の人と戦っていた。その子は赤い髪の色をしていて長さはショートロングみたいな感じだった。

その女の子の戦いは華麗だった。身長差があるにもかかわらず、動き回つて男の人を翻弄し男の人の隙をみて攻撃を仕掛ける。そうやって倒していた。周りからは汚い手だと思われているかもしない。しかし私にしてみれば華麗だと思った。

その戦いが終わると私はその女の子に声をかけていた。それが私とマナの最初の出会いだった。

それから私はマナに話を聞いた。マナは討伐軍に入っているという。私はそこで決意した。私はいつかマナを超えて見せると。

「回想終了」

・・・走馬灯？って言うのかな。昔のことを思い出してた。マナを超える。その夢、叶えたかったな・・・ポロポロ

・・・死にたくないよ。こんな所で死にたくない。
絶対に生きてやる！

そう思つて私は顔を上げた。しかしバリジアンレイガーハはもうすぐそこまで迫つていた。

ああ、やっぱりだめだ。私はここで死んじやうんだ・・・やっぱり私は・・・臆病で弱かつたんだ・・・

そう思つて私は目を閉じた。

ガシツ！

いきなり私の体が浮いた。バリジアンレイガーに突進された？違う、全然痛くなかった。そう思つて私は目を開けた。そこには私を抱えて飛んでいる八幡がいた。

モカ side out

八幡 side

八幡 「モカ！」

クソツ！このままだとモカがやられちまう。どうする・・・ええい

！一か八かやつて見るしかねえ！

八幡「雷足！」

やるしかない！ここからモカのところまで結構距離がある。バリ
ジアンレイガードはもうすぐモカに当たる。しかし、雷足なら行けるは
ずだ！

そう思つて俺は思いつきり走つた。

あと少し！もうやめよいた！間に合え！

そして俺はバリジアンレイガーベモ力にあたる寸前でモ力をお姫様抱っこして飛び上がつた。

八幡 「大丈夫かモ力？ 危なかつたぜ間一髪だつた。」

そう言うとモカは俺に抱きついてきた。

八幡「モ、モカ!?」

モ力「私、死ぬかと思った。絶対に助からないつて。でも、死ななかつた。八幡のお陰で。ありがとう。八幡、本当にありがとう！」ボロボロ

助けに行けば。

に」ナデナデ

モカ「は、八幡。子供扱いしないで?」

八幡「ご、ごめん！ いきなり撫でて。キモかつたよな？」

「アーヴィングは、アーヴィングではない」とやる。

おお、モ力が怒鳴るの初めて見たかもしない・・・

レイカ「さて、もうちょっとで団長も来ます。頑張りましょー！」

「その必要はないよ。」

と、そこに聞きなれた声が聞こえてきた。
アレス「もう付いているからね。」

八幡「団長！」

アレス「八幡君、ありがとう。君たちの隊のお陰で街の被害も無く済んだ。ここからは僕達に任せてくれ。」

そう言つて俺達の前に7人くらいの人が立つた。

アレス「さあーて、やるよ！皆！」

アレスさんがそう言うと全員、バリジアンレイガーリーの方へ向かつて言つた。

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——15

アレスさんたちが来てから10分程が立つた。バリジアンレイガーハボコボコにやられてもう瀕死寸前だつた。

八幡「・・・すげえな。」

マナ「ほんとね。どうやつたらあんなに強くなれるんだろ。」

リリー「やつぱり実践を積んでないとダメなのかなあ・・・」

レイカ「私達はどうしましようか・・・」

モカ「周りの雑魚を処理してる?」

八幡「そうだなー、うん、雑魚処理してるか。」

そう言つて俺達はアレスさん達の周りにいるザコ敵を駆除して行つた。

それから5分後遂にバリジアンレイガーハ倒れた。

その頃には俺達も殆どの敵を倒していた。

アレス「ふう、よしつ! 終わつたね。じゃあ帰ろうか。八幡君達も行くよ」

八幡「うす。了解しました。おーい皆、帰るぞー」

そう声をかけるとみんなが戻つてきた。それから俺達は街へと戻つた。

それから1年が立つた。今は日本でいえば俺は中学2年の二学期が始まるくらいだと思う。俺達はこの1年間実践を積みまくり何とか前線に出ることができるようになつた。

あ、あとモカが結構喋るようになつた。前よりは・・・

トントン

つとお客様ですか。

八幡「はいはーい、今開けますよー」

ガチャヤ

俺がドアを開けるとそこには見慣れた人物が立つていた。

八幡「あれ? 恵子さん? お久しぶりです。どうしたんですか?」

恭子「お久しぶりです八幡君。今日は八幡君にお話があつて来ました。」

話? なんだろう。

そう思いながらも恭子さんを俺達の隊室に入れた。

マナ
あ!? 恭子さん!? きよ、今日はどうしてここに!?」

うわお凄いバニケてる、あんなマナを見たのは初めてかもな w
恭子「えーとですね。今日は八幡君にお話があつて来ました。単刀

直入に言います。八幡君。君は来月に日本に戻つてもらいます。」

い 今なんて言った? 日本に戻る? 僕が戻るのは高校生になつてからだつたはずなのに?

八幅　　と　　どういふ事ですか？」

モ力一八幅が日本は……帰る?」

恭子「はい 実は今私の実家の畠家の道場を不動産屋が買取に来て
いまして。住んでいるのがいないのに置いておくのはおかしいって
ことになります。急遽八幡君に帰ってきて欲しいと言うことで
す。」

な!? 暁家が!?

マナ「ちよ、ちよつと待つて下さい！ハチは今、討伐軍の最高戦力です。ハチが抜けるのは私たちの隊にとつても軍にとつてもダメリットしかありません。」

リリー「ハチ君、行かないよね？」

と、リリーが不安な顔をしながら俺の顔を見てきた。どうする・・・俺は今、こつちの生活が楽しい。でも、俺にはあいつらとの約束もあるから帰らないと行けない。どうする・・・

恭子「八幡君……」

俺はそう言うとその場を後にした。

あれから考えて見たが帰るか残るか全然決まらない。

六

アイリ「ハチ君？」

と、後ろから声をかけられた。

八幡「アイリさん。」

アイリ「悩んでるの？帰るか残るか」

八幡「……はい。俺はどうすれば良いのか分からなくて。俺にどうして日本も大事ですけど、今の生活も大事なんです。だから……」
アイリ「ハチ君はどちらも大切だから決められないんだよね？」
たら思い出してみて？どつちの思い出を守りたいか。今はどつちを優先すべきかをそうすれば自然と答えは見つかると思うよ？」

俺が優先すべきなのは、あの4人との今の生活か、それとも……

チユンチユン

八幡「ん……朝か」

昨日、考えすぎて寝落ちしてたか……でも、答えは決まった。
そして俺は起き上がるといつものように走りにでかけた。

八幡「……あいつらには悪いことをするな……」

でも俺は決めたんだ。俺が今優先すべきなのはどつちかを考え
て……

魔法使いとチート八幡の日常——異世界編——16

さて、恭子さんやみんなに伝えないとどうするかを。

そう思い俺は翌日の朝、隊室に行つた。やはり早く出たからか一番最初だつた。

八幡「はあ、ここに来るのも後1ヶ月で終わりか……色々とあつたな……」

最初は一年前の春だつたな。その時俺は討伐軍に入る前から精霊を所持していたから驚かれたな。それからこの隊の隊長を務めて来て、一番最初の任務はバリジアンレイガードつたつけ。あの時は危なかつたなあ、それから1年間ずっと任務、任務、任務、任務で遊んだりしてなかつたな。あいつらからしたらもつと遊びたかつただろうに。あ、あとモカも変わつたよな。あの、最初の任務の時から結構お喋りになつた。

ガチャヤ

と、そこで誰かが入つてきた。

リリー「あれ? ハチ君? 今日は早いね。どうしたの?」

八幡「ああ、ちょっととな」

リリー「……決まつたんだね。そつか、ハチ君がいなくなつちやうのか?。寂しいなあ……」

う、淒い罪悪感が……

けど、決めたことだから簡単には変えられないからな。

マナ「あれ? 2人とも早いわね? 私も結構早く出たつもりだつたけど」

レイカ「おはようございます皆。」

モカ「おはよ。」

そこに皆が入つてきた。

八幡「おう、おはよう。」

リリー「皆おはよー!」

これがいつもの俺らの日常。1年間ずっと続いてきた日常だ。けど……

恭子「おはようございます。皆。八幡君、答えは決まりましたか？」

八幡「はい、俺は・・・・・俺は、日本に帰ります。」

俺は恭子さんにそう答えた。

八幡「ここでの日常はいつもいつも楽しいものばかりでした。だから俺は本当はもっとこっちにいたいです。ですが、俺からしたら1人だつた俺のことを拾つて育ててくれた慶真さん達との思い出の場所を失うのはもつとつらい。それに、俺にはあいつらとの約束もありますから。」

恭子「・・・そうですか。ありがとうございます。八幡君」

マナ「まあ、そうでしょうね。ハチがそう言うならしようがないわね。ハチにとつてはとっても重要何でしょ？だつたらその約束つてやつもしつかりと守らないとね。」

レイカ「八幡さん。私達はまたこちらに戻つてきてくれるのをまつています。それまでにはもつと強くなつてますよ？」

リリー「ハチ君がいなくなつてもこの隊の隊長は私が代理としてやつておくから大丈夫だよ？だから心配しないで？」

モカ「ハチにとつての大事な約束と、大事な場所。しつかり守つてきてね？」

それぞれ思つていることを俺に向かつて言つてきた。

八幡「お前ら・・・・・ありがとう。しつかりと大事な場所と、約束を守つて、こつちに戻つてくるから。約束する。」

恭子「・・・では、出発は来月の初めに」

そう言つて、恭子さんは出ていった。

マナ「・・・・・よし！だつたらあと2週間遊び尽くそう！」
と、突然マナが言い出した。

レイカ「ふふ、良いですね。どこかに出かけましょか」
リリー「ピクニックとかいいんじやない？」

モカ「ピクニック・・・楽しそう。」

と、皆やりたいことをどんどん言つていく。そしてピクニックに決まつたらしい。友達との初めてのピクニックか。楽しそうだな。

それから1週間後、俺の荷物も殆どまとめ終わつた頃、俺らは前か

ら予定していたピクニックに出かけた。

俺らは見晴らしのいい草原に来ると大きなシートを引いてそこで昼ごはんを食べたり、草原で色々とやつて、体を動かしたりした。楽しい時間はあつという間に過ぎるものでもう夕方になつてしまつた。俺らは片付けをして帰路へとついた。

それから1週間後。遂に俺が日本へと帰る日。俺は前日に迎えに来てくれた恭子さんと、朝早くにアイリさんに見送られながらゲートがある方向へと歩いた。

その途中、みんながいた。多分アイリさんが教えていたんだろう。マナ「全く、何も言わずに行こう何て考えてたのね」

マナにはそう呆れ顔でいわれ、

リリー「もお、ハチ君、しつかりと別れの挨拶は必要だよ？」

リリーには膨れつ顔でそう言われ

レイカ「八幡さんは相変わらずですねふふつ」

レイカには笑われ

モカ「全くハチつたら」

モカには呆れと怒りが見える顔で言われた。

八幡「悪い悪い、お別れつてのに慣れてなくてな。」

マナ「はあ全く、早く帰つてきなさいよ？」

八幡「分かつてるよ。なるべく早く帰れるように頑張るわ」

そう言つて俺は恭子さんと、歩き始めた

リリー「ハチ君、バイバーイ！また今度ね～！」

レイカ「必ず帰つてきてくださいね！」

モカ「待つてる！」

それに対しても俺は手を上げて返した。

こちらの世界に来てから1年と半年、俺、比企谷八幡は日本へと帰還した。

中学編

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——1

1月7日・・・

俺がこつちに帰ってきてからちょうど1週間が立つ。今、俺は中学校の準備をしていた。俺は一応三学期から総武中学校の2年として転入する。

まあ一応恭子さんに勉強は教えてもらつたし不安要素と言えば自己紹介だけなんだが・・・大丈夫かな?一応恭子さんに頼んで練習していた方がいいかな?と、まあこんな感じで慌ただしい毎日を送っていた。

あ、そうそう、1つ忘れてた。今俺は恭子さんと2人で暁家で住んでいる。毎朝20キロのランニング、それから恭子さんと組手を毎日やつて勉強も教えてもらう。そんな毎日を過ごしていた。

そんなこんなで3日後・・・

1月10日

今日は中学校は三学期の始業式で俺からしたら中学校の入学式だ。緊張する・・・

恭子「八幡君、忘れ物は無いですか?ハンカチとちり紙は?筆箱持ちましたか?自己紹介しつかりと出来ますか?」

八幡「きよ、恭子さん。俺もそんなに子供じゃないんで大丈夫ですよ?・・・多分」

そう、自己紹介だ。自己紹介だけなんだ。大丈夫かなあ・・・

恭子「大丈夫ですよ。自己紹介は毎日練習してきたんだからきっと出来ますよ。」

恭子さんはそう言つてくれてるけど俺からしたら初の中学校。初の登校だから超緊張するわ・・・

まあ何とかなるか。

・・・・・とか思つてた時期もありました。やばい、迷つた。しつかりと総武中学校方向に歩いてきた気がしたんだがな・・・

ま、何とかなるだろ。

それから10分後

ちよつとやばいかも・・・時間が残り20分・・・行けるかな?確かにさつきの地図ではこの道を真っ直ぐって書いてあつたはずなんだが・・・

が・・・

それから10分後

まじでやばいな。本当にこつちで合つてるのか?この道を真っ直ぐ來てるんだが学校らしき物が見当たらぬんだが・・・まあもうちよい行つてみるか。

それから5分後

あ!あれか!?アレっぽいな。でもここから歩いてじやあ間に合わないな。走るか。

そうして俺は走り、学校の前に着いた。

『総武高校』

・・・・・

八幡「嘘やん・・・」

10分後

八幡「はあはあはあ、やつと着いた・・・」

『総武中学校』

八幡「まさか、総武高校に行つちまうなんてドジつたな・・・まあ無事付いたことだし職員室にでも行くか。つてあれ?職員室つてどこだ?」

と、そこに金髪の女性が歩いてきたので俺はその人に聞くことにした。

八幡「あ、あのーちょっとお聞きしたいんですけど・・・」

「はい?・・・・・ハラショーン」//

あ、あれ?なんか金髪の人人が止まつちやつたけど・・・「えりちどうしたん?・・・・・ははーんなるほどなこれはこうなるのもしようがないか。君、どうしたん?」

八幡「あ、えつと今日からここに転校してきたんですけど職員室がわからんなくつて」

「職員室は、そこを曲がればあるよー」

八幡「分かりました。ありがとうございます。」

そう言つて俺はそこを立ち去つた。それにしてもあの人大丈夫かなあ

コンコン

八幡「失礼します。今日から総武中学校に転入しました。比企谷八幡です。」

「ああ、こつちだ」

そう言つて1人の女性の教師が手を挙げた。

「君が比企谷八幡君か。私は君がこれから入る2年F組の担任の平塚静だ。よろしく頼む。早速だがそろそろ朝のH Rが始まるからそこで自己紹介をしてもらうと思う。その時はよろしく頼むよ。」

八幡「はい、わかりました。」

俺がそう言うと平塚先生は満足したかのように頷き

静「よし、ではついてきたまえ」

そう言われたので俺はその後について行つた。
教室にて・・・

静「では、転入生を紹介する。入ってきたまえ」
ガラツ

そして俺はそのまま教卓の横に移動した。

静「では、自己紹介を頼む」

八幡「うす、えー比企谷八幡です。「ハチ君（ハチ）!?」うおつ!?つ

てなんだ穂乃果と海未ことりか。脅かすなよ・・・」
それが俺たち4人の2年ぶりの再開だつた。

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——2

穂乃果「ハチ君、いつの間にこつちに帰ってきてたの!?」

俺の自己紹介が終わり、朝のH.Rも終わって今は質問タイムだ。とは言つても主に3人なんだが・・・

あ、ちなみに俺の席は運が良いのか悪いのか、こいつ高坂穂乃果の隣だった。

海未「そ、そうですよ。私たちに連絡くらいしてくれても・・・」
八幡「あく、すまん、こつちに帰ってきたのが大体1週間前でちょっとバタバタして連絡出来なかつたんだよ」

まあ本当は連絡するのを忘れてただけなんだが・・・

海未「そ、そうですかならまあ・・・つて穂乃果!?時間!」

穂乃果「へつ?あつ!やばつ!じやあちよつと行つてくるねつ!」
そう言つて穂乃果は走つていった。

八幡「穂乃果のやつなんかやらかしたのか?」

ことり「ううん、大丈夫だよ。別に怒られるわけではないから」

海未「ハチはちょっと驚くかもしれませね」

驚く?何でだろう・・・

ことり「あ、そう言えばそのメガネ・・・まだ使つてくれてたんだね。嬉しいな♪」

海未「ハチの役に立つていたのなら私達もプレゼントしたかいがりますね」

八幡「まあな、人生初の女の子からのプレゼントだしな。」

そうして俺らは昔の話をしながら始業式が行われる体育館へと向かつた。

始業式とは退屈なもので・・・はい、眠くなつてしまつたんですよ。
ちよつと寝ようかな

海未「ハチ、寝てはダメですよ?」

はい、無理ですね隣にこいつがいるから・・・

始業式は身長順に並ぶらしく俺はなぜか海未の隣で海未の前には
ことりがいた。

放送部「5、生徒会長挨拶。」

お、生徒会長挨拶もあんのか、こここの学校の生徒会長はどんな奴なんだろう。

放送部「それでは生徒会長お願ひします。」

穂乃果「はい！」

ん？今何か聞き覚えのある声が聞こえたような……そして壇上に上がつたのは俺の幼馴染みの高坂穂乃果だつた。

穂乃果「えー、皆さんこんにちは、生徒会長の高坂穂乃果です。」

・・・・・は？

八幡「はああむぐつ!?」

海未&ことり「「ハチ（君）驚くのは分かりますが（分かるけど）落ち着いてください（落ち着いて）？」

そう言つて叫びかけた俺の口を海未とことりが手でおさえた。後で説明してもらわないとな。あいつが生徒会長をやつている理由を・・・

始業式後

始業式が終わりクラスに戻つてくると俺は早速海未とことりに話を聞きに行つた。

八幡「おい、海未、ことり、何で穂乃果が生徒会長をやつてんだ!?」
ことり「ハチ君落ち着いて？ 穂乃果ちゃんが帰つてきたら・・・」
「ふー、疲れたー」噂をすればなんとやらだね♪

ちようどいいタイミングで穂乃果が帰つてきた。

八幡「さて穂乃果聞かせてもらうぞ、なぜお前が生徒会長をやつているんだ？」

穂乃果「えっとね、絵里ちゃんに推薦されたから！ あつ、絵里ちゃんは元生徒会長ね？」

なるほど推薦・・・推薦・・・・・推薦！？

八幡「お前つてそんなに頭良かつたつけ？」

海未「穂乃果の頭が悪いことはハチもよく知つていてるでしょう？」

穂乃果「ひどい！」

なるほど、学力が上がつたとかそういうのでは無いのか・・・まあ

元生徒会長の推薦なら大丈夫だろう。でも・・・

八幡「お前、仕事しつかりやつてる？」

穂乃果「へつ？仕事？・・・・・あ、あゝ、仕事だね、も、もちろんやつてるよ～？」

うわあ、嘘くせー

八幡「ほう、それなら今日見学に行つても大丈夫だよな？」

穂乃果「い、いや～、生徒会室は生徒会の関係者以外立ち入り禁「海未、いいよな？」「はい、副会長として私が見学を許可します。」ちよつと海未ちゃん！」

八幡「さてとじやあ放課後に生徒会室に行かせてもらうぜ？」
さてと、どれだけしつかりやつてるかね・・・

帰りのH R

静「よし、今日はこれまで。気をつけて帰れよ。」

さてと放課後か。じゃあ穂乃果たちは・・・もう行つたみたいだな・・・んじやあ俺も行くかね

さてとやつて来ました生徒会室～、いえーい！・・・なんだこのテンション逆に虚しくなつてくるな・・・まあいいや入るかコンコン

八幡「失礼します。本日見学することになりました比企谷八幡です。よろしくお願ひします。」

一応丁寧な感じにしたが大丈夫だよな？

ことり「ハチ君、そんなにかしこまらなくとも大丈夫だよ♪」

八幡「まあ親しき仲にも礼儀ありつてな」

穂乃果「うー、うー」

八幡「んで？何であいつはずつと唸つてんの？」

俺が生徒会室に来た時からこいつはずつと机に向かつて唸つていた。まるで不審者を見つけた時の犬の威嚇のように・・・

海未「多分、仕事が分からないのでしよう。または漢字」

ことり「あ、アハハハハ、幾ら何でも漢字くらいは読めるんじやないかな？」

ことり・・・フォローになつてないぞ

と、その時ドアが開いて金髪ボニー・テールの女性と、紫っぽい髪の女性が入ってきた。

絵里「穂乃果く、しつかりやつてる？……つて、*きんきんきんきんきん*君！」

希「あ、朝の転校生くん」

あ、この人たちは朝、俺に職員室の場所を教えてくれた人だ

八幡「朝はありがとうございます。おかげで遅刻せずに済みました」

希「いえいえ、どういたしまして」

つてあれ？」

八幡「俺、転校生って言いましたつけ？」

希「この時期になつても職員室の場所が分からない1年生何でもういないでしょ」

あく、まあそれもそうか

希「うちの名前は東條希。君は？」

八幡「比企谷八幡です」

希「八幡君か、いい名前やね。」

いい名前……か初めて言われたな。

希「そう言えば八幡君は何でここに？」

いきなり名前呼びか……まあいいけど。

八幡「えっと、見学？ですかね」

希「なぜ疑問形……」

つとそれよりもこつちの金髪の人はいいのかな？

絵里「はっ!? 私は何を……」

あ、起きた

希「やつと起きたねえりち。ほら自己紹介」

絵里「え、ええ。私は絢瀬絵里よ。宜しくね八幡君」

八幡「そう言えば東條先輩と絢瀬先輩は何故ここに？」

海未「絵里と希は元生徒会長と副会長何ですよ。」

なるほど、モデルみたいに美人だつたからなんか仕事のことで生徒会に話でもしに来たのかと思つてたわ」

会に話でもしに来たのかと思つてたわ」

希「へつ？」／＼＼＼＼

絵里「ふえ？」／＼＼＼＼

ん？あれ？なんか絢瀬先輩と東條先輩の顔が赤くなってるよう
な・・・

ゴゴゴゴゴ

八幡「ヒツ!?」

後ろから殺気が・・・俺はそつと後ろを振り向いた。そこには鬼の
様な顔をした海未がいた。

海未「ハチく？何当たり前のように口説いてるんですか？」

口説く？もしかして・・・

八幡「声に出てました？」

そう聞くと2人は顔を赤らめながら領いた。
やばいなここはすぐさま話題を変えないと

八幡「そ、そう言えば絢瀬先輩は何で穂乃果を推薦したんですか？」
絵里「え？ そうね、やっぱり何事にも全力で取り組んでいるし、接
しやすいからじゃないかしら」

八幡「じゃあ穂乃果達とはいつ知り合ったんですか？」

絵里「私たちが二年生の時、ちょっとした事件でね・・・」

海未「あの事件は本当にうちの穂乃果が迷惑かけてすみませんでし
た。」

希「いいつていいつて、えりちゃんもう怒つてないだろうし、それに
あの事件が無かつたらうちらは出会つてなかつただろうし」

絵里「まあでもあの時の穂乃果はほんとにめんどくさかつたわ
ね・・・」

穂乃果「ひどい！」

穂乃果お前、何やつたんだよ・・・ブラツクリストに載つてんじや
ねえか。

希「まあいいんやない？みんなと仲良くなれだし。」

絵里「ええ、そうね」

なるほどな、その事件が穂乃果が生徒会長になるきっかけとなつた
と言つてもおかしくは無いのか

にこ「皆、すつごい昔の話をしてるみたいだけどそろそろ下校時間よ？」

と、そこにツインテールの小柄な女子が入ってきた。

希「にこつち!? いつからそこに」

絵里「つてほんと。もう下校時間になつちやうわね」

うーんと・・・誰?

にこ「あれ? あんたは・・・」

八幡「??」

にこ「な、何でもないわ。あんた名前は?」

八幡「比企谷八幡だ。」

にこ「そう、八幡ね。じゃあ私も、コホン。につこにつこにーあなたのがートににこにこにー笑顔届ける矢澤にこにこーよろしくにこー」

うわあ痛てえ!」

にこ「ちよつと! 痛い言うな!」

でも・・・なんか懐かしい様な・・・そんな訳ないか
穂乃果「そんなことより皆手伝つてよー!」

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——3

3学期になると学校に行く日も少なく行事も無いため暇だ……毎日毎日同じような事を繰り返していると1日が早く思えてくる。そんな毎日を過ごしているとあつという間に3月になり今日はもう3年生の卒業式だった。

八幡「はあ、疲れたー」

海未「あなたは何もしていないじゃないですか……」

穂乃果「疲れたのは私の方だよ……」

ことり「穂乃果ちゃん在校生送辞の時以外寝てたような……と、その時絢瀬先輩と東條先輩、矢澤先輩が出てきた。

絵里「今日でこの学校ともおさらばね」

希「とは言つてもすぐ近くの高校に行くだけなんやけどね」
にこ「そうね、会いに来ようと思えば行ける距離ね」

そう、絢瀬先輩に東條先輩、矢澤先輩は近くの総武高校に進学した。矢澤先輩は頭が悪いらしく東條先輩と絢瀬先輩は苦労したと聞いたな……まあ3人とも進学できて良かつた良かつた。

穂乃果「絵里ちゃん、希ちゃん、にこちゃん！卒業おめでとう！」

海未「絵里、希、にこ、おめでとうございます」

ことり「絵里ちゃん、希ちゃん、にこちゃん、おめでとう♪」

絵里「ええ、ありがとうございます。穂乃果、これからはこの学校の生徒会長として頑張ってね？海未とことりは穂乃果のサポートお願いね？八幡君も穂乃果の事をお願いね？あ、あと穂乃果はしつかり勉強して総武高校合格頑張ってね。」

希「うちが心配なのは穂乃果ちゃんの受験やな」

にこ「私でも入れたんだから穂乃果も頑張りなさいよ？」

ああ、そう言えばこの6人とあと3人の後輩は高校に入つたらスクールアイドルとして活動するらしい。そして何故かそのマネージャーとして俺も活動することになつてしまつた。

と、噂をすればだな

凜「絵里ちゃん、希ちゃん、にこちゃん、卒業おめでとう

にや。」

花陽「絵里ちゃん、希ちゃん、にこちゃん、卒業おめでとう(ざい)ます！」

真姫「絵里、希、にこちゃん、卒業おめでとう」

希「凛ちゃん、花陽ちゃん、真姫ちゃん、ありがとうございます」

絵里「3人もしつかり総武高校に合格するのよ？特に凛？」

そう言えば星空も頭悪かつたな・・・

凛「わ、わかつてゐにや。凛も頑張つて勉強するにや。だから八幡先輩、凛に勉強教えて？」

そう言つて俺に上目遣いで頼んできた

八幡「わ、わかつた、わかつたから近い近い」

危なかつた危うく理性が飛ぶところだつたぜ・・・

穂乃果「むー穂乃果も！ハチ君勉強教えて！」

八幡「あく、わかつた、わかつたからお前も離れろ」

こいつらは人にものを頼む時相手に近づかないと頼めないのか・・・

絵里「ふふ、八幡君、穂乃果と凛を宜しくね？」

八幡「まあ、出来るだけ頑張りますよ。」

絵里「ふふ、じゃあ私達はもう行くわ。皆、また今度ね」

そう言つて3人は校門に向かつて歩いていった。

あ、そう言えれば言つてないの俺だけじやん。ふむ・・・

八幡「絵里先輩！希先輩！にこ先輩！」卒業おめでとう(ざい)ざいます！」

！」

俺は初めて3人のことを名前で呼んでみた。

俺がそう叫ぶと3人ともピタッと止まり回れ右をして戻ってきた

にこ「あんた、今にこ達のこと名前で呼んだわよね？」

絵里「八幡君、もう一回、もう一回呼んでくれないかしら」

希「うちの事も呼んでや」

そんな感じで詰め寄られた

八幡「やですよ。一度きりのオマケみたいなもんです。」

真姫「素直じやないわね」

八幡「お前には言われたくないわ」

真姫 「何ですって!? どういう意味よそれ!」

そりやあね西木野だけには言われたくなーよな
にこ 「ちょっと八幡! もう一回呼びなさいよー!」

八幡 「嫌ですよ!」ダツ!

そして俺は逃げた

絵里 「あ! 逃げた追うわよ!」

そんな感じで今日の卒業式も無事終わり俺らは新3年生となるの

だつた

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——4

日本に戻ってきてから早くも4ヶ月が過ぎようとしていた。

さて、俺は今職員室へと向かっている。何故か？平塚教諭に呼び出しを食らつたからだよ・・・まあ大体予想は付いているけどな。

トントン ガラツ

八幡「失礼します。3年F組の比企谷八幡です。平塚教諭に用があつてきました。」

そう言つて入ると奥の方で平塚教諭が手招きをしていた。

静「さて、比企谷、なぜお前が呼び出されたか分かるか？」

ここは知らばつくれてみよう。

八幡「さあ、俺には何も見当が付きませんね」

そう言うと平塚教諭は机の引き出しから1枚のプリントを取り出しどに置いた。

静「さて、このプリントが何だか分かるよな？」

八幡「課題の作文ですよね」

静「うむ、それで私は何について書いてこいと言つたかも覚えているよな？」

・・・何だつたつけ？えーと確かに・・・・・そうだ！中学校生活を振り返つてとか何とかだつた気がする。

八幡「中学校生活を振り返つて。ですか」

静「ああ、それで？なぜ君はこんな作文を書いてきたんだ？」

そう言つて俺の方にプリントを見せてきた。

中学校生活を振り返つて

2年F組 比企谷八幡

中学校生活の中で振り返ることはありませんでした。

・・・・・あれ？こんなこと書いたんだつけ。・・・あ、そう言えば眠いからさつさと書こうと思つて適当に書いたんだつた。その時恭子さんに「それで出すんですか！」って言われた記憶がある。

八幡「あく、えつとですね。俺はこの学校に来てから日が浅いから

まだ行事とかやつてないから振り返ることがありませんでした。」

静「ならば前の学校の事を書けば良かつたじやないか」

うん、だよな。 そう言つてくると思った。 でも俺は中学校に通うのはここが初めてなんだよな・・・

八幡「ああ、なるほど。ならそう言つてくれれば良かつたじやないですか。 という訳で俺じやなくて伝達を怠つた平塚教諭が悪い。」

静「屁理屈を言うな小僧」

八幡「まあ確かに先生の年で考えると俺は小僧かも」

ビュツ！ ガシツ！

そう言いかけると途中で平塚教諭の拳が飛んできた。

八幡「暴力は流石にやばいんじゃないですか？」

静「女性に年齢の話をするなど親に教わらなかつたのか？」

八幡「生憎習わなかつたですね」

静「そうか・・・、比企谷お前は部活に入つて無かつたよな？」

部活？ ダルイから入つてないな

俺は頷いて答えた

静「彼女もいないな」

八幡「いや、そんな事言つたら先生も・・・」 ガシツ！

八幡「危ないじゃないですか。俺じやなかつたらふきどんでもましたよ」

静「比企谷、君は私の心を2度も傷つけた。よつて奉仕活動を命じる」

・・・ はい？ ちよつ、嘘だろ？ 今のつて俺は悪くなくね？

静「ついてきたまえ」

俺が反応する前に平塚教諭はさつさと行つてしまつた。 はあ

・・・

ガラツ

静「邪魔するぞ雪ノ下」

雪乃「平塚先生、入る時はノックをしてください」

静「ノックをしてもお前は返事をしないだろう？」

雪乃「それは私が返事をする前に先生が入ってくるからです」

そう言つて雪ノ下と呼ばれた女子はため息をついた。

雪乃「それで？その後ろにいるぬボーツとしている人は誰ですか？」

「おい、なんだぬボーツて

静「ああ、入部希望者だ」

「・・・ん？」

八幡「ちょっと待つてください平塚教諭。俺は入部何て聞いてませんが・・・」

雪乃「お断りします、その男といふと自分があぶない気がするので」
八幡「俺もお断りします。こんな女と一緒に部活とかめんどいだけだと思うので」

静「どうか、あの雪ノ下雪乃でも怖がるものがあるか」

あれ？俺のことは無視なの？

雪乃「・・・分かりました、それで私は何をすればいいんですか？」
あれ？受けちやつたよつてかそんな安い挑発にのるなよ・・・

静「この男の性格を社会に出してもいいレベルまで直してもらいたい」

雪乃「なるほど性格をですか」

静「うむ、では頼んだぞ」

そう言つて平塚教諭は出ていった。

八幡「・・・はあ」

なんかめんどくさい事になつたな

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——5

八幡 「んで？ ここはいつたい何部なんだ？」

雪乃 「あなた何も聞いてないの？」

八幡 「ああ、なんも。」

雪乃 「はあ、あの教師は……分かりましたではゲームをしましょう。ここが何部か当ててみて？」

ふむ、この時点でもう2つに絞られた。まず1つは複雑な機械や道具が見当たらないことから無難に文芸部。もう1つはさつき平塚教諭が言っていた奉仕活動をするということで捻りは何もないが奉仕部。さて、どっちだろうか……まあ文芸部で行つてみるか。

八幡 「文芸部か？」

雪乃 「へえ、その心は？」

八幡 「まず、複雑な機械や道具が無いこと。そしてお前はずつと本を読んでいる。その事から考えると文芸部が妥当だな」

雪乃 「へえ、いい線言つてるわね。でも残念。ハズレよ」
文芸部じやないのか。だつたら奉仕部か

八幡 「んじやあ奉仕部か」

俺はすぐにそう答えた。

雪乃 「……驚いたわ。あなたさつき考えている時に2つの仮説を立てていたわね？ そして1つちがければもう1つを言う。あなた結構頭が回るのね」

お、当たったのか。ラツキー

八幡 「お前も結構頭の回転が速いな」

雪乃 「……そのお前つていうの辞めてもらえる？ 私には雪ノ下雪乃つていう名前があるのそつちで呼んでもらえるかしら」

八幡 「いや、俺おまえの名前聞いたの今日ははじめてなんだが」
そう言うと雪ノ下は驚いたような顔をした。

雪乃 「まさかこの学校に私のことを知らない人がいたなんて……いや、お前どれだけ有名なんだよ……」

八幡 「まあ俺は中学2年の時に転校してきたからな、知つてなくて

もおかしくはないだろ」

雪乃「あら、あなた転校生なのね知らなかつたわ」

えつ？何こいつまるで転校生だから知らなかつたつてことは転校生じやなれば覚えたのかよ・・・もしかしてこいつ全校生徒の名前覚えてんのか？」

と、その時放送から最終下校時間が迫つていいという放送がきた。

雪乃「では今日は終わりましよう」

八幡「了解、んじやあ先帰るわ。じやあな」

そう言つて俺は生徒会室へと向かつた。

穂乃果「あれ？ハチ君？どうしたの？帰つたんじや無かつたつけ？」

八幡「ああ、部活に入つたんだよ。だからこれからも一緒に帰れると思う」

そう言つうと皆驚いたような顔をして

穂乃果&海未&ことり「――「ええ!?ハチ（君）が部活（ですつて）!」」

こいつら・・・俺のことをなんだと思つてるんだか・・・

八幡「はあ、もういいや、帰ろうぜ？さつさと」

穂乃果「ああ、待つてよハチ君。もうちょいで終わるから」

そう言つて穂乃果は机に向かいさつさと仕事を始めた

八幡「ふつ、さてと俺も明日から忙しくなるかもな・・・」

最初は嫌だと思っていたが案外部活に入つて部活の生徒とおしゃべりつてのも悪くは無いな。そう思つた今日このごろ。

明日から俺の波乱の毎日が始まりそうだ。

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——6

キーンコーンカーンコーン

よし学校終わつたゞ、帰るか。

そう思いドアを開くと・・・そこには待つてましたと言わんばかりに腕を組み仁王立ちしている平塚教諭がいた。

静「比企谷、部活の時間だ」

・・・忘れてた

八幡「分かつてますよ。今から行こうと思つてたところです」

静「そうか。では、部室へと行きました。今日は多分依頼人が来るぞ？」

ほう、どんな依頼が来るのかちょっと楽しみでもある

さて場所は変わり部室にて。えつ？変わるのが速いって？そこは気にするな

今は俺と雪ノ下は本を読んでいる。

トントン

と、そこへドアをノックする音が鳴った。

すると雪ノ下は本を閉じてドアの方へと体を向け

雪乃「どうぞ」

と、言つた。

「し、失礼しまーす」

そこには茶髪でお団子の髪型の女子がいた。

「えーと、ここが奉仕部でいいんだよね？平塚先生に奉仕部に行けば願いを叶えてくれるって聞いたんだけど・・・って、ヒツキー!?なんだでここにいんの!？」

ヒツキー？誰だそれは。あ、俺か。マジか・・・まさか引きこもりみたいにヒツキーと呼ばれるようになつたか

八幡「・・・お前は誰だ？それとヒツキーってなんだよ。そんなあだ名初めてつけられたぞ」

雪乃「あなた同じクラスなのに知らないの？」

えつ？同じクラス？・・・あゝ、なんかこんな奴いた気がする

「ヒツキー私の名前知らないの!? 有り得ない！ まじキモイ！」

八幡 「おい、うるせえぞヒツチ。さつきと依頼内容話せ。」

こいつは雪ノ下とは違った意味でウザイな・・・

「ビツチじゃないし！ あたしは由比ヶ浜結衣っていう名前があるし」

八幡 「だつたら俺はヒツキーじゃねえよな。比企谷八幡っていう名前があるんだから」

そんな感じで由比ヶ浜と言い争っていた。

雪乃 「いい加減にしなさい。先に進まないから由比ヶ浜さん、依頼内容を説明してもらえるかしら」

結衣 「う、うん。えっとクッキーの作り方が知りたくて・・・」

雪乃 「なるほど、クッキー作りね。分かつたわ。じゃあまずは家庭科室に移動していくもらえるかしら。家庭科室を借りてくるから。」

そう言つて雪ノ下はでていった。

八幡 「んじやあ行くか」

そう言つて俺と由比ヶ浜は家庭科室へと向かったわ。

雪ノ下 「さて、ではまずはそれを作つてみましようか。由比ヶ浜さんはこのレシピを見ながら作ってくれるかしら」

結衣 「う、うん。わかった。やつて見る」

そうして2人とも作業に取り掛かつた。

えつ？ 僕？ 僕はあれだよ。あのー、あれ。味見だよ

10分後

俺の目の前には2つのクッキーが置かれている。1つはこんがりきつね色に焼けているクッキー。もう1つは真っ黒で暗黒物質を思ひ浮かばせるようなクッキーだ。

八幡 「なあ、由比ヶ浜。これ、どうやつたら作れんだよ。レシピ通り作つたのか？」

結衣 「い、いやー。隠し味について思つてコーヒーの粉を入れたら多くなつちゃつて」

由比ヶ浜はあははと笑つてゐる。

雪乃 「では、味見をお願いできるかしら」

八幡 「・・・・まじで？」

雪乃「マジよ」

この黒いクッキー食えんのか？そう思つたのでちよつと2人に見つからぬよう初級魔法『サーチャー』を使つた。

『サーチャー』とはその名の通りその物体を構成する物質を調べたりする初級魔法である。

八幡「『サーチャー』ボソツ

・・・・・

結果・・・C

Cって・・・炭素！嘘だろ？クッキーの材料使って炭素生成しやがつたぞこいつ。鍊金術師か！？

雪乃「比企谷君？何をしているの？さつさと食べなさい」

八幡「いや待て雪ノ下。この量は俺一人じゃあ無理だ。だからお前ら2人も食べろ。つて言うかこの真っ黒なクッキーの毒味は流石にちよつと・・・

結衣「毒味言うなし！・・・・・やつぱり毒かなあ」

雪乃「・・・はあ、わかつたわでは皆で食べましよう」

そう言つて雪ノ下は由比ヶ浜が作ったクッキーを取つた。
そして3人が持つと雪ノ下が

雪乃「せーの」

と言つて一斉に食べた。

・・・・・3秒後全員その場に倒れ込みました。

八幡「ぐふつ！な、なんだこれ想像以上に硬いし不味い！」

雪乃「え、ええこれは流石に想像以上よ」

結衣「うう、何でこんなに硬くなっちゃつたんだろ」

俺らは飲み物で何とかクッキーを流し込んだ。

雪乃「さて、ではどうしたら由比ヶ浜さんのクッキーを改善できるか考えましょう」

八幡「由比ヶ浜が料理をしない。または由比ヶ浜がレシピにアレンジを考えましょ」

結衣「ひど！」

雪乃「比企谷君、それは最終手段よ」

結衣「それで解決しちゃうんだ!?」

はあ、だつてねえ。これは流石に・・・

結衣「やつぱり無理なのかな。周りもこんなのがやってないし」

こいつ・・・

八幡「おい、その「あなたの周りに合わせようとすると」との辞めて
もらえるかしら?虫睡が走るわ」・・・」

はい、セリフ取られましたー

結衣「で、でも周りは皆やつてないし。それに私には全然向いてない
といつていうか」

雪乃「あら、一回やつただけで向き不向きが分かるなんて結構凄い
わね。あなたは何の努力もしないのに?ふふ、笑えるわ。努力もし
ないで向いていないなんて決めつけられるものなのね」

うわあ、こいつは誰が相手でも罵倒するんだな。

これじやあ由比ヶ浜も

結衣「か・・・」

ほらな、やつぱり帰るよな

結衣「カツコイイ・・・」

雪乃&八幡「――は?」

結衣「そうだよね、私。努力もなしで向き不向きを決めつけるなん
て。そんなの努力してる人に迷惑になっちゃうよね。うん、雪ノ下さ
ん私もう一回頑張ってみるから教えてください」

おお、こいつは俺が思っていたよりも結構団太いらしい・・・

・・・数10分後

結衣「出来ない・・・」

雪乃「何でこんなにミスをするのかしら」

雪ノ下ですら苦戦している模様・・・はあしようがないか

八幡「お前ら何で美味しいクッキー作ろうとしてんの?」

俺がそう言うと2人とも俺の方にはあ?何言つてんだこいつ?み
たいな顔を向けてきた。

八幡「はあ、雪ノ下、お前はこのこの依頼の本質が分かつていなか
まず、今回の依頼は『クッキーあげたい人がいるからクッキーの作

り方を教えて欲しい』だろ？まず注目すべき点はクツキーをあげたい人つてところだ。多分由比ヶ浜がクツキーをあげたいのは男だろ？だったら簡単だ。男つてのは単純なんだよ。男つてのは女の子からの手作りつてだけで嬉しくなるもんなんだよ。だから頑張つたっていうところが分かれば良いんだよ』

結衣『じゃ、じゃあヒツキーも嬉しい？』

八幡『まあ嬉しいっちゃ嬉しいな』

貰つたことないんだけどな！

なんか悲しくななつてきた・・・やめよう。

八幡『まあそういう事だ。だから今回の依頼は成功と言えるだろうな。』

結衣『そつか。じゃあ私は後は1人で頑張つてみるよ！ありがとう雪ノ下さん。ついでにヒツキーも』

ついでなのか

そう言つて由比ヶ浜は出ていった。

雪乃『本当にアレでよかつたのかしら』

八幡『まあ依頼の本質はクツキーを渡すことだからな。大丈夫だろ』

そうして俺らの初依頼は終わつたのであつた。

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——7

さて、暗黒物ゲフンゲフン。クツキー作りの翌日今日も何事も……あつたな。穂乃果が授業中にパン食つてたな。アイツあんなにもぞもぞしてたのに先生に気づかれないとか最強だろ。

まあそんなこともあつたが今は授業が終わり部活だ。

ということで部室へとLet's go!!

・・・何でこんなにテンション高えんだろう・・・気持ち悪いからやめとくか。

ガラツ

八幡「うーす」

雪乃「あら、あなた今日もしつかり来るなんてやはり私のストーカーかしら?」

はい!いきなり罵倒をいたきました!うわあ全然嬉しくねえなあ!」

雪乃「罵倒をされて嬉しい人なんていないと思うのだけれど……ん?今声に出てたか?

と、その時

結衣「やつはろー。」

雪乃「あら?由比ヶ浜さん。何の用かしら?」

結衣「あ、あれ?もしかして歓迎されてなかつたりいや、まあ部員じやないのに来てたらそうなるよな。」

結衣「あ、そうだつた忘れてたゆきのんこれ」

そう言つて由比ヶ浜はカバンを漁つて雪ノ下に1つの袋を渡した。

雪乃「これは?」

結衣「昨日のお礼。昨日帰つてから作つたの。」

あれ?俺には無かつたり?まあ俺はなんも手伝つてないからまあいいや

雪乃「……昨日よりは良くなつていてるわね」

そう、びつくりしたのは昨日よりは黒くないことだ。

結衣「そ、それとヒツキ。これ……あの、遅くなつてごめんなさい

さい。あの時路地裏で不良に絡まれてた所を助けてくれてありがとう。その時のお礼」

ん？不良から助ける？…………あ、あの時か。そつかあん時の女の子が由比ヶ浜か。

八幡「いや、体が勝手に動いただけだ。」

結衣「それでも助けてもらつたからお礼」

そう言つてクツキーの袋を渡してきた。

ふむ、ここは素直に受け取つとくか。

八幡「わかつた、ありがとよ。」

結衣「あ！ そうだつた。明日、依頼がある人が来るから」
ん？今更つとすごいこと言つたぞ？

雪乃「由比ヶ浜さん・・・あなた」

結衣「あ、気にしないでゆきのん。私は奉仕部として当たり前のことをしただけだから」

雪乃「あなた奉仕部部員じやないわよ？ それとそのゆきのんというのは？」

結衣「違うんだ!? あ、ゆきのんつていうのは雪ノ下雪乃だからゆきのんだよ？ だ、ダメだつたかな？」上目遣い

雪乃「う、い、いえ別に悪くは無いわ。そ、それよりも。私はあなたの入部届けを貰つてないから」

結衣「入部届けくらいいくらでも書くよ！」

そう言つて由比ヶ浜は紙に入部届けを書いた。おい、入部届けくらい漢字で書けよ・・・

雪乃「では後は平塚先生にこれを見せれば正式に奉仕部部員となるわ」

結衣「よかつたー、じゃあゆきのん！ 明日依頼人の人を連れてくるね？ じやあ今日はこれで帰るね？ バイバイ！」

そう言つて走つていった。

あいつは嵐かなんかなのか？

まあ依頼人を連れてくるらしいから良しとしよう

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——8

さて、今日は嵐じやなくて由比ヶ浜が依頼人を連れてくるらしいが誰だろう・・・

そんなことを思いながら部室へと来ていた。

ガラツ

八幡「うーす」

あ、やべつ。こうやつて入ると・・・

雪乃「あら、あなた今日もしつかり来るなんてやはり私のストーカーかしら?」

はいやつぱりフラグでしたね。今度からもつと違う入り方でもしようかな・・・

八幡「由比ヶ浜は・・・まだか」

雪乃「ええ、そう見たいね・・・というかあなた同じクラスなのだからそれ位分かるでしよう?」

あ、そう言えば同じクラスだつたな。八幡うつかりテヘペロ☆
気持ち悪いな・・・

結衣「やつはろー! 依頼人を連れてきたよーさき、入つて入つて」
そう言われて入つてきたのは美少女だつた

彩加「あれ? 比企谷君? どうしてここに」

八幡「いや、どうしてつて俺もこここの部員だから?」

・・・あれ? 何で俺の名前知つてんの?」

彩加「えっと僕達同じクラスだよ?」

八幡「え? まじで?」

結衣「ヒツキー、彩ちゃんのこと知らないとかマジありえない」
いや、だつて女子なんか俺知らないし・・・穂乃果と海未とことり

以外

雪乃「えっと戸塚彩加君ねそれで? 依頼というの?」

ん? 今さらつと変な事言わなかつたか? 今君つて言わなかつた?

彩加「あ、えつと僕はテニス部なんだけど去年は強かつたのに今年から弱くなつちやつて部員も来ない人が多くなつちやつたんだ。そ

れで僕が強くなつて部員が部活に来るようになつたいな何て」

雪乃「なるほど、あなたは自分が強くなりたいのね？」

なるほどよく分かつたぞ。戸塚は男らしい。こんなに可愛い男子

なんているんだな・・・

雪乃「ふむ、分かりましたその依頼受けましょう。では明日の昼休みにテニスコートに集合よ」

なん、だと・・・俺の昼休みが取られるだと

彩加「うん、わかつた。よろしくお願ひします」

そう言つて戸塚は出ていった。

八幡「・・・戸塚つて男?」

雪乃「あなたそんなのも知らないの?あなた、クラスに興味が無すぎないかしら・・・」

こいつには言われたくなかった・・・

ということで翌日の昼休みだゼイ!!

毎回思うがテンション高いとキモイな・・・

俺達はテニスコートで戸塚のテニス練習をしているが雪ノ下が鬼だわw

死ぬまで素振り、死ぬまでランニング、死ぬまで筋トレとか鬼つて言葉以外当てはまらんだろう。それに由比ヶ浜までやつてるし・・・

彩加「はあはあはあ、でやあ!」パコーン

雪乃「しつかりボールを返す!」

彩加「はあはあうわっ!」ドサツ

そこで戸塚が転んでしまった。

八幡「戸塚大丈夫か?」

結衣「彩ちゃん大丈夫?」

彩加「う、うんちょっと擦りむいただけだから」

雪乃「・・・ちよつと休憩にしましよう」

そう言つて雪ノ下はどこかへ行つた。まあ多分保健室だろうな

彩加「僕、雪ノ下さんに見限られちゃつたかな?」

八幡「いや、大丈夫だろ。多分保健室だ」

と、その時

「あ、テニスやつてんじやん。隼人あーしらもやろ?」

と、金髪の女王様的なやつと金髪イケメンリア充との取り巻きが数人入ってきた。

「戸塚、あーしらも混ぜてよ」

彩加「いや、三浦さん。僕達は遊んでる訳じゃなくて練習をしているから」

優美子「え? 聞こえないんだけど」

なんだこいつ・・・ちょっと潰すか

八幡「この距離で聞こえないとか耳おかしいんじやねえのか? さつさと帰つて耳鼻科に行つたほうがいいぞ?」

優美子「は? あんた誰?」

八幡「何? お前同じクラスのヤツを知らないとか雑魚すぎだろ」俺も人のこと言えないけど・・・

優美子「つて言うか戸塚以外にも使つてるやついるじやん。何? こいつらも練習してんの?」

彩加「いや、比企谷君達は奉仕部で手伝つてくれるだけだけ・・・」

優美子「んじゃあこいつらも部外者じやん」

こいつ日本語理解出来ないのか?」

八幡「いやいやいや、部活で来てるつて言つただろ? 聞こえなかつたのか?」

と、そこへ金髪イケメンリア充が割り込んできた

隼人「まあまあ優美子もヒキタニ君もそこまで喧嘩腰にならないで、だつたら俺とテニス勝負して勝つた方が戸塚の練習に付き合つてことでどうかな? ほら、その方が戸塚も強くなるだろ?」

勝負ね。

八幡「いいぜ? その代わり負けたらさつさと出でいけよ」

優美子「何ならダブルスにしない? あ、ヒキタニ君のパートナーがないかww」

・・・よーし、ちよつと僕ちゃん本気出しちゃうぞ? ガチな方で潰す!

結衣「あ、あのヒツキー。ダブルスなら私が・・・」

八幡「いや、大丈夫だ。ちょっと電話する」

pr r r r r r r r ガチャ

穂乃果『もしもし？ハチ君どうしたの？』

八幡「あ、穂乃果か？ちょっとテニスコートに来てくれるか？2分以内で頼んだ」ガチャ

よし、これで大丈夫だ

八幡「後3分くらいまで。」

隼人「ああ、分かったよ」

3分後

穂乃果「はあはあ疲れたー。で？ハチ君。どうしたの？」
お？しつかり来たか。でもなー、何で海未とことりも付いてきちゃつたかなー

八幡「穂乃果、テニスウェア来て俺のダブルスのペアになつてくれ」
穂乃果「ダブルス？うん、わかつた。ちょっと待つてて」

うん、やつぱり理解が早くて助かるぜ

海未「ハチ、どうして私じやないんですか！？穂乃果よりも私の方が上手なのに・・・」

ことり「ハチ君！私の方が穂乃果ちゃんよりも上手だよ！？」

八幡「いや、穂乃果は個人だと下手だけどダブルスになると神だから」

そう、穂乃果はシングルスだと俺らよりも弱いがダブルスになると強くなるのだその理由は多分仲間にしつかりと合わせられるし、何か知らんけどアイツはボールが来るところを予測できるらしい。なら何でシングルスが弱いんだろうって思ったけど・・・

あ、後サーブで相手が返す方向が分かるらしい。何でアイツ頭は悪いのにそんなへんてこな能力持つてんだか・・・

と、そんなことを思つてると穂乃果が出てきた。

穂乃果「よーし、久しぶりにやるぞー！」

結衣「ほ、穂乃果ちゃん！？ヒツキーのパートナーって穂乃果ちゃんなの!?」

八幡「ああ、大丈夫だ。さてと穂乃果、行くぞ」

穂乃果「うん、ハチ君。勝つよ！」

あ、穂乃果に火がついたぞ

隼人「ヒキタニ君のパートナーは高坂さんか。」

三浦「言つとくけどあーし、中学の時テニスで全国行つてゐるから。手加減出来ないよ？」

全國ねえ、俺にかかるれば余裕だな。

穂乃果「じゃあ最初私がサーブやるね？」

そう言つてボールを持つていつた。

八幡「んじやあ始めつぞ。戸塚、審判頼んだ」

そうして八幡＆穂乃果ＶＳ隼人＆優美子のテニスバトルが始まつた。

穂乃果「よーし行つくよー。ふう」スウ

あれ？ 穂乃果の雰囲気が変わつたぞ？

そして穂乃果はボールを高く上げるとそのままジャンピングサーブを打つた。

隼人「な!? 速い!!」

そのボールは葉山の結構前にバウンドした。それを打ち返すために葉山は前に出るがそのボールはバウンドした瞬間一気に伸びて葉山のラケットの上を通過した。

八幡「・・・・・マジか。まさかドライブサーブを覚えてるなんて・・・」

穂乃果「えへへ、昔ハチ君とやつた時にハチ君が教えてくれたから練習してたんだよ？」

それにもこんなにキレのあるサーブを打つなんてな。相手も唖然としてるよ・・・

まあそんなことより俺のサーブか

八幡「はあだつたら俺もちょっと本気でサーブ打どうかな」

さてと俺のサーブの種類は3つある。まあ全部慶真さんに教えてもらつたんだけど・・・

1つは穂乃果と同じドライブ。

2つ目はど真ん中ストレート。

3つ目はカーブ。まあカーブと言つても外側から大きくカーブして逆の角へと決めるから誰も取れないんだが・・・さてどれにしようか。うん、やっぱり実力の差を見せつけるためにカーブだな。

八幡「さて、行くぞー？」

そして俺も穂乃果と同じくジャンピングサーブを打つた。が思いつきり外側に外れた

優美子「あはははは！カツコつけてジャンピングサーブ打つたのにめっちゃ外れてんじやん」

だがそのサーブは外側からグググツと、曲がりコートの角にバウンドした。

八幡「おい、全国行つたんだろ？だつたらもつと楽しませろよ？つまんねえよ」

穂乃果「いつ見てもあのサーブは規格外だよね・・・」

それってバケモノって言つてるよね？

さてと次は相手のサーブかまあさつきのサーブでどちらも結構上手いって見せつけることが出来たから良しとするか。

相手のサーブは葉山からだつた。

周りの野次馬「HAYATO！HAYATO！」

葉山はサーブで穂乃果の方を狙つてきた。アホだなあ・・・

穂乃果はそれを葉山の内側の方へと返した。その時穂乃果の手を見ると穂乃果の進行方向の逆を指さしていた。嘘だろ？そつちは三浦の方なんだが・・・

そう思いながらも穂乃果とポジションチェンジをすると案の定こつちに来たため俺は葉山と三浦の間に打ち返した。マジかよ・・・やっぱり昔からその能力は衰えてないらしい。

次は三浦のサーブだつたが俺の方に来たから普通に角に返した。さてと次でラストか。と、その時葉山が来た。

隼人「な、なあヒキタニ君、ここは両チームとも頑張つたし引き分けということにしないか？」

ん？何を言つているんだこいつは。

八幡「いや、何でだよ・・・お前らから吹っかけた勝負だろ? それに・・・テニスに引き分けなんて存在しないよな?」

そう言つて俺はサーブの位置へと入つた。

はあつまんねえな。よし、最後は本氣で行くか。

八幡「魔法式展開。《身体強化》」ボソツ

そう言つて俺はボールを上へと投げた。そしてさつきのようにジャンピングサーブをした。

ガシャーン!!

俺が打つたボールはものすごいスピードで三浦と葉山の間でバウンドして後ろのフエンスへと当たつた。そしてフエンスがへこんだ・・・

八幡「あ、やべやりすぎた」

穂乃果「ちよつとハチ君!?!」

海未「ハチ! やりすぎですよ!」

ことり「ハチ君! あのフエンスどうするの!?」

凜「八幡せんぱーい! かつこよかつたにや! でもあのフエンスは・・・」

おい、星空お前も見てたのか・・・

真姫「はあ八幡、あなたも馬鹿なの? フエンスまでへこませてどうするの?」

花陽「でも凄かつたよね?」

真姫「え、ええまあ・・・カツコヨカツタケド・・・」

はあどうすつかなあ・・・

結衣「ひ、ヒツキーの周りに女の子がいっぱい・・・」

雪乃「由比ヶ浜さん、これは1体なんの騒ぎ? それに比企谷君に群がつてる女性は?」

結衣「あ、えつとね優美子達がヒツキーにテニス勝負を挑んでぼっこにされたから優美子達が帰つてつたの」

雪乃「比企谷君が勝つたの!」

結衣「う、うん。」

なんかあつちで言つてるけどまあいつか。

八幡 「雪ノ下、俺疲れたから教室戻るわ」

そう言つて俺は教室へと戻つた。

はあ楽しかつた

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——9

戸塚のテニス練習事件から早3ヶ月が経とうとしていた。もう夏と言つてもいいほど暑く夏休みも間近だ。だがその前にある俺にとつては難関ではないが穂乃果にとつての難関が待ち受けている。その名も『期末テスト』！

八幡「そう言えば穂乃果は期末の勉強してんの？」

俺がそう聞くと穂乃果は俺から目をそらした。

穂乃果「き、期末？あ、あくそんなのもあつたね。うん、まあ頑張つてるかなー」

・・・・・こいつやつてねえだろ。

八幡「はあ、穂乃果今週の土日は勉強な？海未とことり、凛に花陽に真姫を入れてみつちりと。」

穂乃果「ええ!?そんなーハチ君一人なら良いけど海未ちゃんはダメだよー。穂乃果死んじやうよ?」

勉強なのに死ぬつてどういう事だよ・・・

八幡「大丈夫大丈夫、流石に死なねえだろ。」

穂乃果「ハチ君は海未ちゃんがどれだけ鬼か分かんないからそんなこと言えるんだよ！」

海未はそんなに鬼・・・・・穂乃果土日の前にここで死ぬな。

穂乃果「大体海未ちゃんは『穂乃果あく・・・』・・・」

穂乃果は機械かと思わせるくらいゆつくりと振り返った。

穂乃果「あ、あれ？海未ちゃん？さつき先生に呼ばれたんじや・・・うわあ・・・海未の顔が般若みたいな顔してるわ。つてかことはニコニコしてないで止めてやれよ。

海未「ふふ、穂乃果？土日は私が付きつきりで指導しますね？」

穂乃果「海未ちゃんそれだけは！」

海未「問答無用！」

うん、ご愁傷まだわ。まじで。

穂乃果「ハチくーん」上目遣いウルウル

うぐつ、そんな顔するなよ・・・

八幡「……はあ、穂乃果今回のテストで全教科70点以上取ったらなんか1つお願ひを聞いてやるよ。」

穂乃果ならこれに乗つてくるはず。

穂乃果「ほんと!?」

やつぱりか。これで穂乃果はテスト勉強はするはず。

そして遂にやつてきた土日。

この日は俺の家なら恭子さんしかいなかから大丈夫かときかれて俺はすぐに恭子さんに許可をとつて片付けをした。

恭子「八幡君。私は今日は夜までいないので夕食を作つてもらつてもいいですか？」

八幡「はい、了解しました。」

そうして恭子さんは出でいつた。

さてと午後までに掃除に洗濯とかを終わらせないとな、

そして午後

穂乃果「こんにちは～！」

来たか。

八幡「おう、全員來たな。さてと始めるか」

凜「凜は八幡先輩に教えてもらいたいにや。英語とか国語とかふむ、凜は文系の方が苦手か穂乃果の真逆だな。」

八幡「わかつた、んじやあ凜は俺が教えるわ。真姫と花陽はどうする？」

真姫「私は大丈夫よ」

花陽「私は分からぬところがあつたら聞きに行きます」

八幡「OK、了解」

さてと始めるかね

穂乃果「ちよつと待つて！凜ちゃん、ずるい！私もハチ君に「穂乃果、あなたはこつちですよ…」ひい!? わ、分かったよ海未ちゃん、ちゃんとやるから」

うわあ・・・怖つ！もう口元は笑つてたのに目が笑つてなかつたしそれよりもことりは・・・

ことり「ふんふふーん」カリカリカリ
スゲエ・・・めっちゃ速い
ま、まあいいかさてと気を取り直して始めるか

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——10

穂乃果「うがア～～～!! もう疲れた～～～!!! ちょっと休憩にしようよ～！」

海未「穂乃果、さつき休憩にしたばかりでしよう？集中力が足りませんよ。ほら、ここまでやつたら休憩にしますから頑張つてください！」

うわああつちは荒れてるなあ
・・・

八幡「ん？ああ、そこはここ の文法を使ってみな。そうすれば楽に

解けるたゞ?

凛一哉！ホントだ！ありかどにや八幡先輩

うん
凛は飲み込みが良くて教えかいかあるな
二七号「」、八番三重。

花阴 あめの ハナケイ
ださい! ださい!

お、今度は花陽か。えつと、数学の証明か。

お今度は花陽か　おーと　数学の説明が

ハントンとジョンが合同になれたる、それは何故かを考へると、こここの辺が等しいからなんだよ、そうなるとこここの辺も等しいだろ？そあすれば解けるだろ？

花陽 「あ、本当だ。八幡先輩、ありがとうございます。」

うん、花陽も理解が速いな。

真姫 「ねえ、八幡。こことの問題がわかんないんだけど」

真姫が質問とは珍しいな……つてこれは高校の物理じゃ

八幡「この問題は $E_p = m v$ の運動エネルギーを求める公式を

使つて当てはめるんだよ。と言うか高校の勉強してるとかお前す
げえな」

真姫「それを答えちゃうあなたも大概だけね」
まあそれもそうか。

そんな感じで勉強会は進んでいた。

穂乃果「うう、分かんないよ〜！」

うん、穂乃果はやっぱそうだな・・・はあ、しようがないか

八幡「海未、ちょっと変われ。俺が穂乃果を教えるわ」

海未「ですが・・・」

八幡「大丈夫だつてこいつがやばいのは俺でも分かつてるから」

海未「そうですか・・・分かりました。では穂乃果をよろしくお願
いします」

そう言つて凛たちの方へいった。

八幡「さてと？どこがわからんねえんだ？」

穂乃果「ここことことここ」

どちらどら、これは数学か、えつと相似？

国語は古文か。後は社会の歴史か。まあ行けるか。

それから3時間俺らは勉強をして休憩してを繰り返した。

八幡「ふう、んじやあそろそろ終わるか。時間も時間だし」

海未「そうですね、結構勉強しましたし終わりましょうか。」

そう言つて片付けを始めた。

八幡「それにしても来週からテストか・・・」

つ！ そうだ！ ここでこいつらのやる気をアップさせてやるか

八幡「俺に1教科でもテストの点でかてたらなら何か一つだけ言う

事聞いてやるよ」

皆「「「「「本当!?!」「」」」

うお!? こんなに食いつくとは思わなかつたぜ・・・
1週間後・・・テストが終わつて全教科が帰つてきた。

八幡「さてと、俺からテスト見せてもいいんだよな? ほれ

そう言つて俺はテストの解答用紙を机の上に出した。

国語・・・100点

数学・・・95点

英語・・・98点

理科	·	·	97点
社会	·	·	99点
そして次は穂乃果			
国語	·	·	73点
数学	·	·	82点
英語	·	·	72点
理科	·	·	92点
社会	·	·	99点
· · · どうしたこいつ!?			

穂乃果「ハチ君、私頑張ったよ！」

八幡「どう頑張った!? 理科と社会どうした!?」

海未「まさか穂乃果に社会負けるなんて · · ·

次は海未だ

国語 · · 98点

数学 · · 94点

英語 · · 97点

理科 · · 100点

社会 · · 93点

まあ普通だな

次はことりか

国語 · · 94点

数学 · · 93点

英語 · · 100点

うん、まあ英語は凄いな · ·

次は真姫か

国語 · · 99点

数学 · · 93点

英語 · · 100点

理科 · · 92点

社会・・・97点

英語皆高いな・・・

次は花陽か

国語・・・100点

数学・・・92点

英語・・・93点

理科・・・95点

社会・・・96点

うん、高いな

最後は凜だな

国語・・・97点

数学・・・94点

英語・・・100点

理科・・・95点

社会・・・98点

何でこんなに英語が高いの？ありえないだろ・・・

海未「さて、ハチ。皆・・・では無いですが一つずつあなたのテストの点数に勝ちましたよ？」

穂乃果「穂乃果のお願いは、じゃあ！休日に私とデートして！」

八幡「待て、穂乃果お前は勝つてないだろ？」

穂乃果「でも全教科70点以上取つたよ？そしたらお願ひ聞いてくれるつて言つたよね？」

・・・・・あ、言つてたわ・・・

八幡「やられた・・・」

凜「じゃあ凜も同じにや！」

花陽「わ、私も同じで・・・」

真姫「まあそれが1番妥当よね」

海未「私もそれでお願いします」

ことり「ことりもそれがいいな♪」

という訳で俺は1日違いで全員と1日デートをするようにお願いされましたとさ。まあいつか。

あ、ちなみに学年順位はもちろん1位だつたぜ？

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——凜とデート

さて、今日は夏休みに入つてからすぐの土曜日だ。んで俺は今どこにいると思う？・・・正解は千葉駅でした！。はい残念。

やばいな俺。遂に壊れたか？

と、そこに走つてくる女の子が1人

凜「はあはあはあはあ八幡先輩遅くなつたにや」

と、凜は息を切らしながらやつて來た。

八幡「いや、俺も今來たところだ。それよりも今日はスカートなんだな。似合つてるぞ？」

そう、凜は今日はスカートだつた。いつもはジャージとか短パンとかが多いからびっくりしたぜ

凜「あ、ありがとうにや・・・」／＼＼＼＼

ん？ 凜の顔が赤いが暑さにでもやられたかな？

凜「そ、それよりも！ 今日はどこ行くにや？」

あ、やべつ。決めてなかつた。

八幡「あく、凜はどこがいい？」

凜「凜？えーと、じゃあラーメン食べに行きたいにや！」

ラーメンか。そう言えば最近行つてなかつたから俺もきてえな。

八幡「んじやあラーメン食べに行くか。」

凜「うん！ ジヤあ凜のオススメのお店に行こ！」

そう言つて凜は俺の手を引いて走り出した

八幡「うお!? ちよ！ 凜！ 速い速い速い！ そんなに急がなくともラーメンは逃げないだろ!?」

・・・・・うん、聞こえてないな。ここは諦めるしかないか。

10分後ラーメン屋到着！

八幡「ここが凜のオススメか？」

凜「うん！ ここはね、豚骨チャーシュー麺がすっごく美味しいの！」

ほうほう、豚骨チャーシューか美味そうだな

八幡「よし！ ジヤあ中に入るか！」

そして俺らは中に入った。

・・・・・

八幡「ふうー、美味しかったー。」

凛「満足にや～！」

20分後、俺らはラーメンを食べ終わりラーメン屋を後にした。
あつ、ちなみに俺は豚骨チャーシュー麺で凛は塩チャーシュー麺を
食べてたな。美味しかったぜ！

八幡「さてと、帰るにははやいしこの後どうする？」

凛「うーん、じゃあゲーセン行こー！」

ゲーセンか。よし

八幡「行くか。ふふふ、凛よ！俺に勝てるかな？」

凛「それはこっちのセリフにや！負けないにや！」
バチバチバチバチバチ

俺と凛の間に火花が散つた。

ゲーセンにて

八幡「んじやあ最初はこれだああああああああ！！！」

そう言つて俺はホッケーを指さした。

凛「ふふ、負けないにや！」

READY FIGHT!!

八幡「ふつ！」カーンっ！

凛「にや！」カーンっ！

八幡「オラア！」カコーン！

凛「にやあああああ」カコーン！

こんなやり取りがずっと続き、もう時間が無くなってきたその時
だつた。

八幡「おらつ！」カーン!!

凛「あつ！打ち間違えた！」

凛が打つたパックが左右にジグザグしながら俺の方へと来た。それ
にタイミングを合わせて真ん中で打つとそのままパックが凛の方
のゴールに入つた。

そして試合終了。俺の勝ちだつた。

それから俺らはいろんなゲームで対戦した。レースや太鼓。シューイングなど色々だ。

凛「今日は楽しかったにや。八幡先輩、ありがとうございました。」

八幡「まあこれが約束だしな。」

凛「また一緒に行こうね！八幡先輩！」

八幡「おう。」

凛「じゃあ、またね！」

そう言つて凛は走つていつた。

ふう、疲れたけど楽しかつたな。

こうして凛とのデートが終了した。

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——花陽とデート

花陽「あ、八幡先輩。おはようございます。」

凛とのデートから翌日。今日は花陽とデートだ。

今は午前10時。ここは秋葉。さて、これが意味することは……人が多い!!なんだここ!有り得ないだろ!幾ら何でも多すぎる!……はまあしようがないか

八幡「さてと、花陽はどこに行きたいんだ?」

花陽「スクールアイドルショップです!!」

うお!?びつくりした……めっちゃ目がキラキラしてるし。そんなに行きたかったのか。

八幡「そう言えば高校になつたら始めるんだつけ?スクールアイドル」

花陽「はい!だからそれの下見とか……ふむ、なるほど。それなら俺もスクールアイドルに興味があるからなどんなのか見るために行つてみるか。」

八幡「よし、んじやあ行くか。スクールアイドルショップ行つたらその後本屋に寄つてもいいか?」

花陽「あ、はい。分かりました。」

そう言つて俺たちは歩き出した。

・・・・・

さて、着きましたスクールアイドルショップ!

なんか凄い派手だな。俺が入つても通報されないよな?大丈夫なことを願うしかないな。

花陽「うわあ~!」

うん、花陽がめっちゃ嬉しそうだわ。まあそれなら良かつた良かつた。

つと、それよりも俺も色々と探してみるか。

そう思い色々と物色……おつ?この3人組とか良さそうだな。えつ

と？・・・A—R I S E? グルーブ名か？

へえ、今が高校1年つてことは絵里先輩とかと同学年か、高校1年で今だけ人気とかすげえな。

花陽「あつ、八幡先輩。それ買うんですか？」

俺がA—R I S EのCDを見ていると花陽がそう聞いてきた。

八幡「ああ、ちょっとスクールアイドルについて調べようと思つてな。だけど今迷つてるんだよな。どれを買うか。」

花陽「じや、じやあこれも上げます。これも一応スクールアイドルの歌なので聞いてみてください。」

そう言つて渡してきたCDには『μ, s・僕らのL I V E 君とのL I F E・僕らは今のなかで』と、書いてあつた。

八幡「μ, s?・・・9人の歌の女神か。いい名前だな」

花陽「じやあ八幡先輩、私はこの位でもういいので本屋さんにいきましよう。」

それからは俺と花陽は昼飯を食べに行つた。花陽は白米を食べてたな・・・

で、その後俺が欲しいラノベや、小説を探した。

えつと・・・あつた。これこれ。そう言つて俺はラノベの新刊と前から気になつてた小説を俺は買った。

花陽「八幡先輩はなんの本を買ったんですか？」

八幡「えつとラノベの新刊ともう一つは中島敦の『山月記』だよ?」
山月とはまあ簡単に言うと人が虎へとかわつてしまふお話だな。めつちや略すと・・・

そうして俺と花陽はそのへんをブラブラして4時くらいまでブラブラしていた。

花陽「八幡先輩、今日は楽しかつたです。ありがとうございました。
また行つてくれた嬉しいです」

八幡「おう、時間があつたらまたいくか」

こうして花陽とのデートも無事に終了した。

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——真姫とデート

さてと、本日はツンデレもとい真姫とデート何ですね。さてと今日はどこに行くんでしょうかね。

そんなことを思いながら歩いていると集合場所に到着！ん？あれは…・真姫か？あいつナンパされてるやん…しかも面倒くさそな奴ね？あつそろそろやばいかも…あいつら手を出してくるからなあはあ、こんなことしたくないんだが一応ビデオ取つとか。

そして俺は携帯のカメラのビデオカメラを起動して胸ポケットから丁度撮れるようにセットした。

真姫「ちよつと、何よあなた達。私は連れを待ってるって言ってるでしょ!?」

不良A「まあまあ良いじやん、その友達も一緒に楽しいところに行こうよ。ねつ？」

真姫「嫌よ。何であなた達何かと一緒に行かないと行けないのよ」

不良B「…・ちよつと今のは聞き捨てならないかな、俺らみたいなのつて何よ。はあこれはやりたくなかったけどちよつと強引に連れてくか。」

真姫「ちよ、やめてよ！痛い痛い！」

八幡「おいおい、女の子を拉致ですか？そういうのを誘拐って言うんですよ？わかりますか？あつ、おバカさんだからわからないかごめんな？」

と、俺は不良が真姫に手を出した瞬間に近寄つて言つた。

不良A「あ？なんだお前」

八幡「いやいやいや、見てわかんないの？人ですよ？なんだお前つて俺が人に見えないの？だつたら眼科をお勧めしますよ？あつ、ちなみにこいつの連れつて俺な

不良C「兄貴、こいつぶつ飛ばしていいつか？なんかウザいんすけど」

不良D「しかもなんかこの子の連れとか言つてるしwwお前みたいなのがこんな可愛い子と知り合いとか有り得ねえしww」

八幡「・・・なあ真姫。こいつらの頭の中つてどうなつてんの?やばくね?」

真姫「八幡、そんなに挑発すると「ドガツ!!」八幡!」

八幡「痛いなあ・・・まあでもおたくらの沸点が低くて良かつたよ。これで俺の正当防衛が成立するから・・・」

そう言つて俺は胸ポケットの携帯を見せた。

不良D「なっ!?お前まさか今を取つてやがったのか!」

八幡「ご名答。さてと、んじやあ本気でやらせてもらいますかね」そう言つて俺は構えた。

不良A「ちつ!お前らやつちまえ!」

なんか相手の親玉みたいなやつが2人に指示を出した。でも遅いな

八幡「はあ、死ぬなよ?『虚空』

八幡がそう言うと八幡はいつの間にか走つてきた不良2人との間合いを詰めていた。まるで八幡以外の時間が止まつたように・・・そのまま八幡は不良2人の腹に掌底を食らわせると不良2人は飛んでいき絶した。

八幡「あれ?まさかの1発かよ・・・」

不良B「まだだよ!」

八幡「いや。バレバレだからな?」

そう言つて後ろから迫つてきた不良に八幡は回し蹴りを食らわせた。

不良A「くつ、クツソガア!」

そう言つて親玉はナイフを持って俺に突進してきた。

真姫「八幡!」

八幡「・・・はあ」

俺は溜息をつきながら不良のナイフを蹴りで弾くとそのまま後ろ回し蹴りで吹き飛ばした。

八幡「いや、雑魚すぎだもつと頑張れよ」

そう言つて真姫のほうに近づいた。

真姫「驚いたわ、八幡つてあんなに強かつたのね。」

八幡「まあ鍛えてるからな。んで?どこ行くんだ?」

その後俺らはららぽーとでショッピングをしました。

えつ?何を買つたか?真姫の服?あつ、そう言えば真姫にネックレスを買つてあげたら顔を赤くしながらありがとうつて言つてくれたぜ!めっちゃ可愛かつたな・・・

真姫「八幡?なんか失礼な事考えてない?」

八幡「いや、何も?」

真姫「今日は本当は水族館に行きたかったんだけど、あんな事があつたから行けなくなつてごめんなさい。」

八幡「いや、大丈夫だ。結構楽しかったしな。」

真姫「そ、そう。あつ、それと今日は助けてくれてありがとう。その、かつこよかつたわよ」//

そう言つて俺の頬にキスをして小走りで帰つていった。

・・・やばいなにあの子可愛すぎでしょ。てか俺の頬にキスしてるけどいいのか?つとその前に俺が爆発するかも知れない・・・と、そんな事がありつつ真姫とのデートは終わつた。

魔法使いとチート八幡の日常——中学編——海未とデー ト

今日は海未の家に行く。いわゆるお家デートってやつだ。今は午前10:00だからあと2時間後くらいだな。さて、午前中は何してようか……よし撮りだめしてたアニメでも見るか。そして俺は進○の巨人 season 2を見始めた。

・
・
・
・
・
・
さてと今は何時だ?

1:00

・
・
・
・
・
やばい!? 1時間 over してるよ! やばいやばい全力で行くしかない! そしてスライディング土下座だな
そして俺は自転車に乗り海未の家へと向かった。

海未 「遅い! 何をしてたんですか」

八幡 「いや、ちょっと道に迷いまして・
・
・

海未 「ハチ、言い訳は見苦しいですよ」

八幡 「はい、すみませんでしたただ家でぐーたらしてたら遅れました。」

海未 「はあ、それじゃあ昼食も食べてないでしよう? だつたら私が今から作つてあげますからちょっと待つて下さい。」

お? 海未の手作りか。なんだろう

・
・
・
・
・
・

海未 「出来ましたよ。簡単なものがお蕎麦です。」
ほう、お蕎麦か。俺は結構好きだからいいけどな

八幡 「んじやあ、頂きます」

海未 「どうぞ、召し上がり」

ズズズズズズズズ

海未 「ど、どうですか?」

八幡 「うん、上手いな。」

いや、ほんとに手打ちかつてくらい美味しいんだけど・
・
・

海未「そ、そうですか。良かった。お蕎麦打つといて良かった」
ん?今なんて言つた?

八幡「なあ、海未。この蕎麦手打ちなのか?」

海未「はい、そうですよ?」

八幡「マジか・・・すげえな。」

いや、ほんとに手打ち蕎麦を家でやる人なんて・・・家でもやつて
る人いたわ慶真さんは手打ちが好きだからって咲姫さんがやつてた
わ1回手伝つたけど結構辛いんだよなあれ・・・

そんなことをもいながら食べているともう食べ終わつてしまつた。

八幡「ごちそうさん」

海未「お粗末様です。ちょっと量が少なかつたですかね?もう
ちょっと作ればよかつたかも・・・」

八幡「いや、別にこれ位でOKだ。サンキューな海未」ポンポン

海未「へ?ふわつ!?え、えへへ」////////

そしてその後は弓道をやつた。

海未「ハチ久しぶりにアレをやりますか?」

アレ?・・・ああ、あれか。

八幡「いいだろう、やつてやろう。」

そうして俺らは久しぶりに弓道勝負をすることにした。

勝負の内容は簡単。どちらが多く真ん中に当たられるか。矢の量
は1人7本。負けた方はここから結構遠くのコンビニでお菓子を
買って20分以内で帰つてくる。

そう言う勝負だ。

先行は海未。

海未「ふう、はつ!」タンツ

見事真ん中に命中。

まあ弓道部だしな・・・さて、次は俺か。

八幡「・・・・・はつ!」タンツ

俺も見事真ん中に命中。

それから6本目まではどちらも真ん中にあてていた。

そして7本目。

タンツ

海未は真ん中に命中。

そして最後は俺。

八幡「ふう・・・・・・はつ！」

よし、上手くいった。

だがそこに

ヒュウウウウウウウ

八幡「えつ？」

ちよつ！風？

やばい！

タンツ

と、真ん中からちよつと外れてしまった。

八幡「うがアアアア負けたあああ！」

海未「よし！では20分で行つてらつしゃい！」

くつそー！

そして俺はダツシユでコンビニまで買いに行つた。

・・・・・

海未「今日はありがとうございます。楽しかつたですよ？」

八幡「俺もだよ。んじやあまたな」

そして海未とのデートが終了した。

魔法使いとチート八幡の日常（中学編）ことりと デート

ふう、今日はことりとデートなのだが・・・やっぱり疲れた。一日交代で一人一人デートするのはやっぱり無茶だつたかもしれない。だがしかし！残りは二人だ。頑張るしかないでしょ。

という訳で待ち合わせ場所のららぽーとに到着。なんか服を作る材料とかを買いたいから付き合つてと言われたな。

不良A 「いいじやん、ちょっと遊ぼうぜ？」

不良B 「絶対楽しいから・・・ね？」

ことり 「えっと、私これから行くところがあるので
あれ？なんか前にもこんなことあつたような・・・まあいいか。とにかくことりを助けないとな。

八幡 「おーいことり。悪い遅れたわ」

と、不良達のことなど気にせずことりの所に駆け寄つた。

不良A 「おい、なんだお前はつてヒイ!?あ、あなたは！」

ん？どこかであつたかな？・・・・ああ、真姫とデートした時の不良か。

不良B 「す、すみません。まさかあなたのお連れ様だつたとは」
八幡「いや、大丈夫だ。危害は加わつてないから。まあもうこんなこと辞めろよ。」

不良A 「はい、すみませんでした。おいお前ら！行くぞ！」

不良D 「ちよつと待つてくださいよ！あんな弱そうなやつ一人相手なのに何で俺らが逃げないといけないんすか！皆さんがやらないうら俺がやりますよ！」

と、一人がナイフを構えて突進してきた。

不良A 「な、バカ！やめる！」

不良D 「邪魔だア！」

・・・はあ、

八幡 「邪魔なのはお前だよ。」 ドガツ！

と、言いながら俺は不良の顔に蹴りをかました。

不良D「ガハツ！」ドサツ

不良A「つたくこのバカ！俺らが束になつて襲つても勝てなかつたんだ。お前一人で勝てるはずねえだろ。」

不良B「すみません、うちのが。では失礼します。」

八幡「…………まあいいか。ことり、大丈夫か？」

ことり「ハチ君すごーい！不良さんを一瞬で倒しちやつた。」

まあ鍛えてるしな。つとそれよりも

八幡「そろそろ買い物に行つたほうがいいんじやないか？」「

ことり「えつ？あつ、ホントだ。時間が無くなつちやうもんね。じやあ行こつハチ君♪」

そう言つて俺の手を引きながら歩き出した。

ことり「最初はここだよ。」

ことりが最初に来たのは生地を売つている店だ。

八幡「こんなに色んなものがあるんだな。」

ことり「うん、でももう決まつてるから時間はかからないよ。」

そう言つてさつさと買う物を持つてレジへと向かつて行つた。

それからは裁縫の道具を売つてゐるところへ行つたり、ボタンなどが売つてゐるところへ行つたりした。のだがことりは買う物を決めていたらしくスマーズに終わつた。

八幡「時間余つたな……」

ことり「じやあゲームセンターハ行かない？」

ゲーセンか。最近だと凜と行つたくらいかな？まあ時間も余つてるし行くか

そして俺らはゲーセンへと行つた。

八幡「何やるんだ？」

ことり「えつとね……これ！」

そう言つて指さしたのはダンスゲームだつた。

八幡「これが、いいぜ。じやあ負けた方はジュース1本奢りでどうだ？」

ことり「ことり負けないよ！」

八幡「俺だつて！」

はい、負けました～。クソッ！するいよ。だつてことりとかよく考
えたらスクールアイドルやるんだからダンスも練習してんじやん。
くつ！ことりの奴謀つたな！

それから色々と対戦ゲームなどをやりあつという間に時間が過ぎ
ていつた。

ことり「はあ、楽しかつた♪」

八幡「それは良かつたよ。」

ことり「ハチ君、今日はありがとう。また遊ぼうね♪」

八幡「おう、今度はみんなで来るか。」

ことり「うん！」

ことり「あつ、私はここで大丈夫だよ。ありがとね送つてくれて♪
じゃあバイバイ。」

そう言つてことりは走つていつた。

今日も楽しかつた・・・・・が、疲れた。帰つてさつさと寝よ。

魔法使いとチート八幡の日常／中学編／穂乃果とデート

さてと、今日はラスト、穂乃果とデートなんだが……何でディスティニーランドなんだか。

穂乃果「ハチ君早く早く！」

八幡「はいよ、ちょっと待つてろ。」

俺は今、穂乃果とディステイニーランドに来ている。うんやつぱり夏休みだから混んでるな。最悪だ、人混みは嫌いなのに!!はあまあいつか今日は久々に楽しんでみるか

穂乃果「ハチ君！最初はあれに乗ろう！」

そう言つて指さしたのは・・・ジェットコースター
o.h：最初からきついのを選びますね貴女・・・

まあ乗るけど

穂乃果「きやアアアアアあ！」

八幡「うおおおおおお!!」

・・・

八幡「ハアハア死ぬかと思つた。」

そう言えば俺・・・ジェットコースター乗つたこと無かつたw

あれは最悪のマシーンだ・・・いや、割とガチで。

穂乃果「だ、大丈夫ハチ君？」

八幡「あ、ああ何とか大丈夫だ。次はもつと優しめのにしてくれ」

穂乃果「うん。えつとじやああれは？」

そう言つて指さしたのはコーヒーカップだった。

まああれなら・・・

穂乃果「あはははははははははは楽しいー！」

八幡「うおおおおおおおお！穂乃果！回しそぎだア！」

はい、安全じやありませんでした。めっちゃキツかつた

八幡「ハアハア疲れた。」

穂乃果「あ、あはは。ごめんねハチくん久しぶりだから楽しく

て。」

八幡「いや、だ、大丈夫だ。」ハアハア

穂乃果「つ、次は大丈夫だから。あれは!?」

そう言つて指さしたのはメリーゴーランド。

八幡「まああれならどうやつてもあんなに回つたりしねえから大丈夫だと思う。」

穂乃果「よし！じやあ行こつ！」

そう言つて穂乃果は俺の手を引きメリーゴーランドへ走り出した

八幡「お、おい！穂乃果！？」

穂乃果「はやく行くよハチ君！」

八幡「わかつた、わかつたから手を引っ張るな！」

全くいつつもこいつは元気だな。まあこの元気なところに救われることもあるんだけどな

それから俺たちは夜まで遊びまくつた。けど、やつぱりジエットコースターは無理。なれることすら出来なかつた・・・

あつ、でも穂乃果はお化け屋敷でめつちや俺に抱きついてきたな。

お陰で俺はドキドキしつばなしだつたけどな。

そして俺らは今からパレードを見る予定だ。

バーン

パレードが始まつた。

穂乃果「・・・綺麗」

うわあおヤバイヤバイヤバイヤバイ穂乃果がめつちや絵になつとる。なんて言うのかな。うん、とにかくやばいめつちや惚れそุดわ。

穂乃果「ハチ君」

八幡「ひや、ひやい！」

穂乃果「ありがとね？私たち6人のお願ひを聞いてくれて」

八幡「いや、お願ひつていうより勝負だつたんだから気にすんな」

穂乃果「でも私はちがかつたよね？」

八幡「でも、俺が約束しちまつたからなしようがないだろ」

穂乃果「ふふ、ハチ君は楽しかつた？穂乃果はすづく楽しかつた

よ？」

俺か・・・まあ楽しかったなあ。久しぶりに楽しんだ気がするし。こいつらには感謝だな。

八幡「ああ、楽しかったよ。ありがとな穂乃果。」

穂乃果「うん！また来ようね？今度はみんなで！」

八幡「だな」

そうして全員とのデートが終了した。

魔法使いとチート八幡の日常（中学編）11

さてと、夏休みに入つてからもう2週間とちよつと位が経つた。俺は夏休みに入つてからすぐに宿題を終わらせたので今は暇だ。と、その時電話がかかってきた。

八幡「はい、比企谷ですけど。」

静『もしもし、比企谷か？ 私だ平塚だ。明日から三泊四日で千葉村に奉仕部の活動として小学生の林間学校の手伝いに行くんだが来れるよな？ あ、ちなみに異論反論その他もろもろはなしだ。』

その他もろもろつて何！ まあいいや、明日からか。まあ暇だからいいけど。

静『ちなみに呼びたい人がいるなら呼んでもいいぞ。これをやつておけば内申点が上がるからな。』

ほう、なるほど内申点が上がるならあの6人でも連れていくかね。

八幡「だつたら6人ほどいるんですけどがいいですかね。」

静『6人か？ ちなみに誰だ？』

八幡「高坂穂乃果と南ことり、園田海未と星空凜、小泉花陽に西木野真姫の6人です。」

静『ふむ、君はその6人と知り合いなのが驚きだがまあその話はまた今度としてその6人は行けるのか？』

八幡「はい。」

多分・・・

静『そうか。ならば電話の後に君の携帯にメールで持ち物の連絡をするからそれを見てその6人にも教えてやつてくれ。ではまた明日。』

そう言つて平塚先生は電話を切つた。

小学生の手伝いか。まあいつか。

俺はその後6人にメールを送つた。6人ともOKだつたので持ち物をメールで送つといたわ。

恭子「あれ？ 八幡君。どこかにお出かけですか？」

八幡「あ、恭子さん。はい、明日から部活で三泊四日で千葉村で小

学生の林間学校の手伝いに行つてきます。」

恭子「では明日から4日間八幡君と会えないんですか!?ううう、そんな。ふう、でも部活ならしようがないですね。分かりました。行つてらっしゃい。あ、そうだ最近あつちの世界の魔獣がこつちの世界に現れているという情報が入つてきています。気をつけてくださいね。」

マジか、あつちの魔獣が・・・こつちではあんまり魔法は使えないんだがな。

恭子「それでこれ、八幡君です。」

そう言つて恭子さんが渡してきたのは一つのクリスタルだつた。

八幡「えつと、これは?」

恭子「これは魔力をこつちの世界でも作れる石です。これを持つていれば自動的に魔力があつちの世界と同じくらいまで貯まります。あまり派手な魔法はダメですが相手が相手ならしようがないとおもいます。その時は私たちがどうにかするので周りのことは気にせず。あ、でも友人とかには見つかるかもですけど・・・」

やつぱりか、あんまり派手な魔法は撃ちたくないんだよな。あいつらに見つかるのだけは避けたいから。

まあでも今は考えても意味無いか。その時に考えるか。

八幡「じゃあ俺、明日早いんでもう寝ますね。おやすみなさい」

恭子「はい、おやすみなさい。」

さてと明日からは千葉村か。まあ頑張るか。

魔法使いとチート八幡の日常（中学編）12

俺は今車の中にいる。なぜか？千葉村に行くためだよ！

いやあ、今結構テンション上がってるんだよ。最近ずっとゴロゴロしてたからなそろそろ飽きてきたところでちょうど平塚先生から電話が来たからな。ボランティアってのはちょっとダルいけどまいりだろ。さあ行くぜー。

・・・とか思つてた時期もありました。千葉村に着いた。着いたんだがなんか変な奴らがいるんだよ。えつ？名前？えーと金髪のテニスで俺らがボコボコにした2人との取り巻き。

・・・・・・・・・

穂乃果「それにしても自然がいっぱいだねえここは。」

凜「空気が気持ちいいにやー」

八幡「はあー、なんか昼寝したくなつてきたな」
海未「こらハチ、それに穂乃果も凜もだらけないでしつかりボランティアに参加してください」

八幡「いや、だつて初日つてほとんどオリエンテーリング？で終わるじやん。そんなのあの金髪に任せれば終わるだろ。」

実際、あの金髪にしか集まつてこねえしな。

海未「はあ、まあハチは百歩譲つていいとして問題は穂乃果！あなたです！あなたは勉強の成績も悪いんですけど内申点を挙げないと高校に入れませんよ！」

まあ、そうだわな。

穂乃果「え、ええええ！じや、じやあしつかりやる！私もみんなと高校行きたいもん！」

海未「それならばしつかり勉強からしてください！」グリグリ

穂乃果「う、海未ちゃん痛い、痛いよ！」

ことり「う、海未ちゃんその変にしてあげないと・・・」

海未「ことりは甘いんです！だから穂乃果もこんなにふ抜けてしまふんですよ！」

穂乃果「ううう、だつて！勉強嫌いなんだもん！つてあれ？あの

子・・・

と、穂乃果がなにかに気づいた。

あれは・・・

八幡「いじめか？」

凛「うん、いじめだにや。」

はあ、やつぱりどこにでもいじめつてあるんだなあと、そこで穂乃果が動いた。

だが、俺は近づこうとする穂乃果の手を掴んだ。

穂乃果「ハチくん？なんで止めるの？」

八幡「いじめを止めようと思うなよ？いじめつてのはそんな簡単に止まるものじゃないんだ。いじめを止めてもその一瞬だけ辞めれば後からまたいじめが再開されるんだよ。」

穂乃果はなにか言いたそうだったが何も言わずに歩き始めた。

八幡「まあ、辞めさせることはできない訳では無いんだが・・・「どうやるの!?」まだ出来ないな。条件が揃わないと。」

海未「いじめを止める気なんですか？」

八幡「まあな、出来ればみんなの力も借りたい。いいか？」

そう聞くと6人はもちろん！と答えてくれた。はあ俺はいい仲間を見つけたなあ・・・

つとそれどころじゃないな。多分あの金髪は今日の夜話しかけに行くだろうからその後に提案するか。

真姫「ちよつと、八幡、悪い顔になつてるわよ」

あれ？まじでか。

花陽「八幡先輩、ちよつと怖いです。」

凛「凛は八幡先輩がどうやつて止めさせるか楽しみにや〜！」

海未「はあ、無茶はしないでくださいね」

ことり「ハチ君、明日はことりも手伝うね！」

穂乃果「穂乃果も手伝うからね！」

はあ全く。・・・・俺の仲間は最高だな。

さてと俺の勝負は今日の夜だ！

魔法使いとチート八幡の日常（中学編）13

さて、今はオリエンテーリング？が終わり夕食のカレーを作つていいのだが昼間のいじめられている女子はやはりカレー作りには参加せず、近くの木にもたれかかってカレー作りを眺めていた。と、そこに例の金髪が近づいていった。

「あ、ほんとにバカだろ・・・」

数分すると金髪が離れていつたので俺はその女子に近づいた。
「あなたは私にあそこへ混ざって言わないの？」

と、声をかけられた。

八幡「やりたくないんだつたら別にやらなくていいだろ。別にやりたい奴だけがやればいい。」

「・・・あなたは他の人とは違つて私と同じような感じがする。」

雪乃「そんなことは無いわ。そこのヒキガエルとなんて一緒にやないわ」

「こいつ・・・ほんと自然と罵倒してくるな。」

「・・・名前。」

とその女子は呟いた。

名前・・・俺の名前か？

八幡「比企谷八幡だ。」

「私は鶴見留美。よろしく」

雪乃「雪乃下雪乃よ。よろしく留美さん。」

結衣「はいはーい！私は由比ヶ浜結衣！宜しくね留美ちゃん！」

穂乃果「私は高坂穂乃果だよ！よろしく留美ちゃん！」

ことり「南ことりです♪よろしくね留美ちゃん♪」

海未「園田海未です、よろしくお願ひします」

真姫「西木野真姫よ。よろしく」

凜「星空凜にや。よろしくにや」

花陽「えっと、こ、小泉花陽です。よろしくね留美ちゃん」

：：：いつの間にか前らきやがつた。お陰で長い自己紹介タイムだつたぜ。

それにもこいつが鶴見留美か。なるほどね。

つと、そろそろ本題に

聞いたところ最初から留美がターゲットじゃなかつたらしいから結構楽だな。

八幡「なあ留美。お前はこの状態を解消したいか?」

留美「えつ?・・・出来るならしたい。けどここで出来ても後からまたやられるから・・・」

ま、普通はそうだわな。だが

八幡「違うぞ、いじめを止めるんじやなくて解消するんだよ。それならこれから先ずつといじめは無くなるが。どうする?」

雪乃「そんなこと出来るはずがないわ」

八幡「お前じや無理だろうな。俺なら出来る。」

留美「・・・・・出来るならやつて欲しい。いつまでもこの状況はヤダ。」

よし、本人の希望も聞けたし。今日の夜にあの金髪が話した瞬間にこの提案を出すか。

八幡「わかつた。じゃあ明日の肝試し楽しみにしてな。」

そう言つて俺らは留美をカレーの所に連れていった。

そして夜。俺らは残つたカレーを食べていた。

静「よし、1日目終了だ。みんなご苦労だった。明日に備えて早く寝るんだぞ」

そう言つて平塚先生は離れていった。

さて、そろそろあいつなら言つてくるはず

葉山「みんな、聞いて欲しいんだけど小学生の中に1人のいじめにあつてる子がいるんだ。その子を助けたいんだけど何か案はないかな」

海老名「なにか新しい趣味を見つけたらどうかな。」

おお、えつと、え、え、海老名?さんいいくこと言うじやないか。

海老名「私もB.Lで新しい友人が出来ました!」

三浦「はいはい、海老名はあーしとあつちに行こうか。」

前言撤回、やばい人だつた・・・

葉山「俺的には話し合いで終わらせたいんだけど」「はいきた。この発言を待つてたぜ。」

八幡「無理だな。話し合いで止めさせてもまたこの林間学校から帰つたらいじめが続くぞ」

葉山「……だが、「だがあもしもねえよ。止められねえって言つてんだ。いじめつてのはそんなに簡単に終わるもんじゃねえんだよ」……じゃあ、見捨てろつて言うのか！」

はあ、こいつはほんとに疲れるな

八幡「んな事誰も言つてねえだろ。俺に考えがある。だがその話は明日でいいか？今日はもう寝たい。」

葉山「……ああ、わかつた。じゃあ今日は解散にしよう。」

そう言つて俺らは全員別れた。

魔法使いとチート八幡の日常（中学編）14

さてと遂に来たなこの日が。

俺らは今、川にいる。

なんか午前中は自由時間だから遊んでいいって平塚先生に言わ
れたんだよ。で、俺は水着を着て穂乃果達を待つてる。

穂乃果「ハチくん！お待たせ！」

八幡「おお！びっくりした・・・」

穂乃果「えへへ、ごめんごめん。」

海未「全く、穂乃果は」

ことり「まあまあ、海未ちゃん。それよりもハチ君この水着どう・
かな？」

そう言われ俺の前にことりと海未と穂乃果が立つた。

穂乃果の水着はビキニでトップスが右胸がオレンジ、左が黄色で白
の斑点が付いていてボトムスはオレンジ主体の端に黄色がありトッ
プスと同じく白の斑点がありなんか穂乃果つて感じがしている。
はつきり言つてめちゃくちゃ可愛い

海未はビキニでトップスもボトムスも王道の白。清楚な感じがし
て海未とベストマッチしている。こちらもめちゃくちゃ可愛い
ことりはビキニでトップスが緑に白い斑点。ボトムスがフリルの
ついた緑色。これもことりらしさが出ている。こちらもめちゃく
ちゃ可愛いと思う。

結論、全員めちゃくちゃ可愛いです。」

穂乃果「やつた！」//

海未「は、ハチ。褒めすぎです」//

ことり「ありがと、ハチ君」//

あれ？さつきの声に出てたのか？ヤベえめっちゃ恥ずい・・・
と、そこに2年生組が来た。

真姫「お待たせ。」

凜「遅れてごめんにや」

花陽「す、すみません。」

真姫はトップスはパーカーを羽織つてわからないがボトムスが水着の短パンで真姫っぽい？的な感じだがめちゃくちや似合つて可愛い。

凛はビキニでトップスが黄色と白のしましま模様でボトムスが黄色1色。凛にめちゃくちや似合つていいと思う。

花陽はビキニでトップスは白。ボトムスはちょっと深緑的な感じのフリル付きでめちゃくちや可愛いと思う。

結論2年生組もめちゃくちや可愛い。」

真姫「ちよ、ちよっと八幡！ いきなり何言ってるのよ」 //

凛「そ、そうだにや。いきなりは反則にや」 //

花陽「はうううう」 //

あれ？ こっちも声に出てたのか？ やばいなこの思つてることを口に出しちまうのを治さないと・・・

それから俺は川で水に浸かつてた。ずっと寝そべりながら・・・

ハチクンアブナイヨー

ドン！

八幡「グホッ！」

寝ながら水に浮かんでいると俺の腹に結構重い打撃が飛んできた。

穂乃果「う、ごめんね？ ハチ君。」

・・・・・ よし、俺もやろうかな」

穂乃果「えっ！」

その後穂乃果達全員とバレーをやつた。結構楽しかった。

そんな楽しい時間は終わりこれから始まる肝試しの手伝いをするために全員で集まつていた。

葉山「さあ、ヒキタニ君。話してもらおうかな、君の考えを」

八幡「ああ、分かった。喧嘩は話し合いで解決なんてできない。だったらどうするか、そんなの簡単だ。俺が提案する喧嘩の解消方法は

は

あのグループの残りの4人をバラバラにしてグループ 자체を破壊すればいいんだよ」

魔法使いとチート八幡の日常／中学編／15

さてと、遂にやつてきたか肝試し。今回の作戦はまず留美たちのグループを最後にしてから本来のコースとは違うコースへと誘導する。そして俺達が悪役をやつてグループを崩壊させる。

そしてそれぞれの役割はグループを最後に誘導するのは凜と花陽。コースを変えるのは真姫とことり。そして悪役を葉山と戸部、三浦がやることになった。葉山が自分から悪役を勝手でたのは驚いたがこれはこれで都合がいい。さつきからずつと森の奥から魔力反応があるから一応警戒しておきたかつたからそつちに専念出来る。

それにしても千葉村に来てからずつと近くで微弱の魔力反応があるんだよなあしかも2つ何かいんのかな？

つと、肝試しが始まつたらしいんじやあ俺もやりますかね。
と、その時

穂乃果「ハチ君！」

と穂乃果が近づいてきた。穂乃果は魔女のコスプレをしている。正直怖いと言うよりめちゃくちゃ可愛い。

八幡「どした？」

穂乃果「暇だつたからきちゃつた」

八幡「いやいや、今始まつたばつかだろ。しつかり仕事しなさい。」

穂乃果「えー、そんな事言つたらハチ君だつて……」

と、そこで言葉を止めキヨロキヨロとあたりを見回し始めた。そして俺の服をちよこつとつまんできた。

八幡「ほ、穂乃果？どうした？」

穂乃果「なんか嫌な予感がするの。なんか変なのが出そう。動物とかじやないもつと変な何か。」

と、震えながら言つてきた。

昔から穂乃果の予感は結構当たる。それも90%くらい。例えば天気予報で雨と言つていて外も雨が降るような天気ではないのに雨が降るような予感がすると言つて傘を持つていくと午後からみごとに土砂降りになつたこともあった。これはもはや予言の域に入つて

いぬと言つてもいいくらいだ。

八幡「…分かつた一応警戒しつくから。任せろ。」

それから10分くらい立つた。今はまだ何も起きてない。穂乃果の予感がはずれたのか?そう思いながら最後の組、留美たちのグループが違うコースへと入っていくのを見届ける。

さてとここからが大事だ。アイツにはしつかりと決めてもらわないとな。

葉山たちは予定通りなんのコスプレもせずに立っていた。いやあ
それにしても三浦が怖い。それに戸部もなかなかやるでは無いか、さ
てとろとろ最後だな葉山と打ち合わせ通りのセリフが来るのを俺
は待つたそして

この声まさか！そう思つてると夜の空から1四の悪魔が降りてきた。そう悪魔級魔獣のがーごガーゴイルだった。

八幡「喰たそ！ テツ！ 葉山！ 全員連れで逃げるぞ！ 逃くしな！」

「さやつ！」 バナツ
ガーゴイルは俺たちを追いかけてきた。その時

と、1人の小学生が転んでしまつた。

留美は昔からその子の名前を昔から呼びなれていたかのように自然に呼んで近寄った

けてから帰る!』

穂乃果「ハチ君危険だよ！」

八幡 「大丈夫だ。絶対生きて帰るから。だから待つてくれ！」

そう言つて俺は2人の元へと走つた。その途中で俺は恭子さんから貰つていた拳銃にアイリさんが作つてくれた銃弾を込めてガーゴ

イルに向けた

八幡 「喰らえ！重力弾！」 バンツ！

ガーゴイル「GAAAAA!!!!」

よし、まずはこつちに意識を向けることが出来た。後は

ハ幅一冰結弾！」ハンツ！ハンツ！ハンツ！

ガーゴイルは叫ながら凍つていつた。

八幡「今のうちだこつちに！あの氷はそんなに持たないから早く逃げるぞ！」

れなかつた。

八幡一なつ!」

「う！」

まま木に叩きつけた

八幡 カツ! カノコ! ホコ! はあはあ

奈々海 「お兄さん！」

そう言つて留美達が近づいてきた。

奈々海「う、うん！」

留美 & 奈々海 —— 魔力解放』

トアラスン!!

・・・マジかよ何この超展開。まさか微弱な魔力反応2つってこいつら一人だつたのかよ・・・

留美&奈々海「魔法式展開」

留美「アイスボーグ！」ヒュンツ！

奈々海 「ライジングボール！」ヒュンツ！

2人はガーゴイルに初級魔法を撃つたがそれは簡単によけられる。そしてガーゴイルはそのまま一気に2人に近づいて言行つた。2人はビビって動けないのか多分魔獣とのバトルが初めてだからだろう。つとまざい！あの2人には指一本触れさせねえぞ！

八幡「魔力解放!!頼む2人も久しぶりだけど俺に力を貸してくれ！」

そう言つて俺は腰につけている十字架のキーホルダー2つを取った。

『ふふつ！久しぶりだね！八幡君！』

『お久しぶりです八幡さん！』

八幡「ああ！頼む久しぶりで申し訳ないがお前らの力を借りるぞ！」

そう言つて俺は2つの十字架を構えて

八幡「爆焰より生まれし紅の姫君よ！その力を解放せよ！焼き尽くせ！『紅時雨』!!」ゴオオオオオ！

八幡「闇夜に舞う雷の姫君よ！今ここに力を示せ！闇夜を駆けろ！」

『夜桜』!! バチチチチチチチ！

よし！行くぜ！

八幡「夜桜！『雷足』！」ヒュンッ！

ガキンン!!

そして俺は2人に振り下ろされたガーゴイルの手を受け止めた。

八幡「この2人には指一本触れさせねえぞ。ガーゴイル！」

魔法使いとチート八幡の日常（中学編）16

八幡「こいつらには指一本触れさせねえぞ。」

危ねえー、間に合つてよかつたぜ。あと少し遅かつたら間に合わなかつたわ

留美「八幡、ありがとう。」

奈々海「えつと、ありがとうございます。八幡さん？」

八幡「おう、大丈夫だったか？あんまり無茶はすんなよ？」
とりあえず怪我はないからよかつたよかつた。さてとさつさとキメないとあいつらが戻つてきそうだからキメますか。

紅時雨「あれやるの？」

八幡『おう、まだ出来るよな？』

夜桜『それは八幡さん次第ですけど私達なら準備おつけーです！』
まあ、俺もしつかりと感覚は覚えてるから大丈夫だろ。

八幡「よつしややるか」

そして俺は両方の刀をさやに閉まつて腰につけると居合の構えをした。

八幡「キメるぜ『雷足』」

そして俺は一気にガーゴイルとの間合いを詰めると2本の刀を一瞬で引き抜き十字に切りつけそのままガーゴイルの後ろへと抜けた。
それまでにかかる時間は0.1秒。

八幡「十字の極刑」
レイジングクロス
終焉

そして俺が刀をしまうのと同時にガーゴイルの体が十字に斬れそこから焰が噴き出した。そして直ぐにガーゴイルの体は灰となつて消えた。

留美「す、すごい……」

奈々海「悪魔級を一撃で……」

八幡「さてと、そろそろ戻るぞ。さすがに心配してるだろうから」

留美「う、うん。」

奈々海「分かりました。」

そして俺らは森を歩き始めた。

八幡「そう言えばお前らって仲いいのか？」

森を歩いてる途中で俺は気になつていてことを聞いてみた。

留美「うん。私達は幼馴染。あっちの世界でいつも一緒に遊んでた。」

奈々海「でも、こつちに来てからいじめが流行つて私はいじめられるのが怖くて留美ちゃんとお話することが少なくなつて……」

なるほどね、よくあるパターンだな。

ま、でも

八幡「もう、仲直りしたんだろ？ だつてあんなに息ピッタリで戦つてたし」

留美「…………」

奈々海「…………る、留美ちゃん。ごめんなさい！ 私、いじめられるのが怖くて留美ちゃんを虐めちゃつた。ほんとにごめんね。けど、もし許してくれるなら。もう一度お友達に……親友になつてくれませんか？」

それを聞くと留美は泣き始めた。

留美「……遅いよ、バカ」 ポロポロ

奈々海「ごめんね留美ちゃん。ほんとにごめんね」 ポロポロ

これが青春つて奴か俺には全然経験ないがいいもんなのかねえ。ま、一件落着したようだからよかつたよかつた

奈々海「八幡さんもありがとうございました。」

留美「八幡、ありがとう。」

八幡「は？ いや、俺は何もしてないだろ。」

留美「私たちを助けてくれたりとか色々としてくれたから」

奈々海「八幡さんが居なかつたら私達は仲直りできなかつたと思います。だからありがとうございました」

・・・まついつか。

ポンポン

俺は無意識的に2人の頭を撫でていた。

奈々海「ひや、ひやちまんさん!?」 // //

留美「な、何してるの八幡!」 // //

あつ、やべつ！無意識だつたわ

八幡「わ、悪い」

そんなことをしていると合宿していた宿舎に戻つてきていった。

それからは留美たちはちゃんと仲直りしたらしい。よかつたよ
かつた一件落着「ハチ君！」・・・じやないな。

穂乃果「・・・そこに正座！」

八幡「えつ、いや何で 海未「ハチ！速く！」はい！すみません！」

ササツ

それから1時間くらい6人に説教されましたはい。」

静「みんな3日間ご苦労だつた。それではこれで解散とする。
それから俺らは何事もなくボランティアを終え帰つてきた。

八幡「さてと、帰りましょうかね。」

穂乃果「帰ろ帰ろー」

海未「そうですね帰りましょうか」

真姫「今日は帰つてお風呂に入つてすぐに寝ちやいそうだわ。」

凜「凜もにゃー」

花陽「で、でも楽しかつたから私は良かつたかな？」

ことり「ことりも♪」

まあ、全員楽しめたようでよかつたよかつた。そして俺らはさつ
さと帰つた。

八幡「ただいまー」

恭子「あ、おかえりなさい八幡君。」

あ、そだあのこと言つておかないと

八幡「恭子さん。今回千葉村で悪魔級のガーゴイルと交戦。負傷者
は出ませんでしたし、俺が一人で倒せたのでよかつたんですが一応警
戒をお願いします。」

恭子「ガーゴイルですか？…まさか悪魔級まで出てくるとは。分かりました上の人に言つておきます。」

よし、それじゃあ俺は寝るか！

恭子「八幡君、寝るんですか？まあ疲れた見たいですししようがな

いか。じゃあおやすみなさい八幡君」

そう言われ俺は返事をしながら自分の部屋に入りベッドに直行した。

魔法使いとチート八幡の日常（中学編）17

八幡「ふあああ」

今日は早く起きすぎたかもな。まあ、昨日帰つてからスグに寝たから・・・。風呂でも入るかな

と思つて道場の前を通り過ぎようとする。中から素振りの音が聞こえてきたので中を覗いてみると、そこには袴を着て木刀を振つている恭子さんがいた。

八幡「おはようございます恭子さん。早いですね？」

恭子「あつ、八幡くん。おはようございます。ちょっと久しぶりに鍛錬でもしようかなと思いまして。」

なるほど、そう言えば俺と会つてから仕事や大学やらで木刀を振つているところを見たところがなかつたな。多分袴姿も初めてかもしれないな。ちょっと戦つてみたいな。

八幡「恭子さん、俺と一戦してもらえませんか？」

恭子「ふふ、そういうと思つてました。では相手に1回だけ当てたら勝ちというルールでどうですか？そして負けた方が朝ごはんを作る。」

八幡「それでオッケーです。」

そう言つて俺らは構えた。

八幡「じやあ行きます！はあ！」

俺は一気に距離を詰め恭子さんの胴を狙つて斬りかかった。しかし恭子さんは上手く受け流した。それからはずつとその繰り返しだつた。俺が攻撃を仕掛けると恭子さんが受け流す。

八幡「はあ、はあ、はあ、うおおおお！」

そして俺は一気に恭子さんとの距離を詰めた。その時、恭子さんがいきなりしゃがみこみ、木刀を俺の足首に当て掬い上げるようにして持ち上げた。俺は空中で一回転してそのまま背中から落ちてそこで木刀を当てられた。

八幡「くつそー、負けたー。つてか最後のつて暁流の掛け車つて技ですよね？まさかあそこで使つてくるとは・・・しかも全部攻撃を受

け流れだし

恭子「今のは暁流の『静』の型と掛け車のコンボ技ですよ」

八幡「静の型?」

俺は聞いたことのない言葉に首をかしげた。

恭子「あれ? 兄さんに習つてないんですか? 暁流の型」

八幡「そんなんあるんですか?」

恭子さんは溜息をついた。

恭子「全く兄さんは・・・では私が教えます。えっと、暁流の型って言うのは3つあって、パワー型の『豪』、スピード型の『速』、カウンター型の『静』があります。そして私が使つていたのは『静』の型です。ちなみに八幡くんは『速』の型ですよ? まあ型と言つても戦い方が偏るだけですのであまり気にせずに。しかし、一つの型しかないと辛い時もあります。なので最低二つはできるようにした方がいいと思います。私は一応『豪』の型も使えます。」

な、なるほど・・・よく分からぬけど多分俺にあつてるのは『静』の型だと思うからそつちを習おうかな

八幡「じゃあ『静』の型を教えてもらえませんか?」

恭子「私もそう言おうと思つてました。多分八幡くんは『静』の型の方が『豪』の型よりもあつてるのでそつちを教えようと思ひます。まあ気長にやつて行きましょうか。では八幡くん。あの約束通り朝ごはん、よろしくお願ひしますね」

あ、そうだつた・・・はあやるか

俺と恭子さんは朝飯を終えると居間でテレビを見ながらくつろいでいた。

八幡「はあ、久しぶりの休暇ですか?」

恭子「はい、久しぶりの休暇です。」

八幡「そうなんですか。はあそれにしても暇ですねー。久しぶりにあつちにでも行こうかなー」

恭子「それもいいですねー。」

と、その時ピンポーンとチャイムがなつた。

八幡&恭子「「恭子さん（八幡くん）お願ひします。」「

かぶつた・・・

八幡「いや、恭子さん暇なんだつたら出てくださいよ。俺は今宿題のやり残しを思い出したのでやろうと思つてるので」

恭子「いや、でも今はいるじゃないですか。それに私も仕事を思い出したのでちよつとここでやろうと思つてるんですから。」

八幡「・・・だつたらいつものやつで行きましょうか」

恭子「そうですね。じゃあ行きます」

八幡&恭子「「最初はグー!!じゃんけんポン!!」

八幡パ一

恭子グ一

八幡「よし！俺の勝ちですね！」

恭子「くつ！負けた・・・はあ分かりました。では行つてきますね。」
そう言つて玄関へと向かつた。

よし、じやあ俺は撮り溜めておいたアニメでも見ようか「八幡くん
んお客様ですよー」なん・・・だと・・・はあ誰だよこんな時に。まあ多
分穂乃果らへんだろうけど・・・

そんなことを思いながら玄関へ行くとそこには、Sの9人がい
た。・・・まだ、Sじゃないか。

八幡「・・・今日はお揃いでどうしました？」

穂乃果「ハチくん！花火大会行こー！」

八幡「花火大会？」

絵里「今日、花火大会が有るらしくて」

希「一緒に行かへんかなーと思つて」

花火大会か・・・まあいつか。

八幡「OK、んじやあ何時にどこに集合？」
そう言うとみんながポカーンとしていた。

海未「い、いいんですか？」

八幡「いや、お前らが誘つたんだろ？」

ことり「ハチくんだから断ると思つた・・・」

八幡「おい、そんな事言つてつと行かねーぞ」
ことり「わー！ごめんなさーい！」

八幡「はあ、んで？何時？」

真姫「5時に駅前でどお？」

八幡「了解・・・ってか今更だがメールでよくね？」

穂乃果「いやあ、あははは。実は本当は穂乃果一人で誘おうと思つて来たんだけどハチくんの家の前でみんなとばつたり会つちゃつて。」

・・・なるほどね。まあいいや

八幡「で？5時に集合つてのはわかつたんだが・・・何でまだいんの？用事まだあんの？」

にこ「いいじやない別に・・・つてか中には入れてくれないの？」

凛「八幡先輩の家に入つてみたいにやー！」

家の中はいいのかねえ

八幡「いいですか？恭子さん」

恭子「ええ、大丈夫ですよ」

八幡「だつてよ、んじやあ入れ」

9人『お邪魔しマース！』

それからみんなで人生ゲームやトランプなどをして遊んだ。

海未「そうだ。ハチ、道場を見せてもらえませんか？」

トランプなどで遊んだ後休憩でみんなとテレビを見ていると不意に海未がそんなことを聞いてきた。

八幡「道場？別にいいが・・・」

道場行くんだつたら昔やつてたアレでもやるのかな？

そして俺らは道場へと向かつた。

八幡「ここだ。」

9人『おおー！』

穂乃果「広ーい！」

絵里「ハラショーー！」

八幡「海未、ほれ。」

俺は置いてあつた弓を海未に渡した。

海未 「まさか、アレをやるんですか？久しぶりに」

八幡 「ああ、小学5年の時以来だろ？久しぶりにやろうぜ異種混合

戦」

海未 「・・・分かりました、私もハチ相手にどこまで出来るかやって見たかったので。」

海未達には昔自分の身を守るためという理由で俺の知っている護身術などを色々教えた。だが海未は武術も教えて欲しいと言うことで俺が色々と教えていたのだ。

海未 「ではやりましょう。行きますよ」

そう言つて海未は弓を構えて撃つた

ヒュン！

その矢は俺めがけて一直線にとんでくる。しかも結構な速さだ。

穂乃果 「海未ちゃん！・・・ハチくん危ない！」

海未 「いえ、あのくらいじゃハチは・・・」

八幡 「あらよつと」

俺は木刀を両手に持つとその矢を右の木刀で叩き切つたしかも縦に。

絵里 「は、ハラシヨー・・・」

にこ 「・・・矢つて縦に切れるのね。」

真姫 「いや、無理でしょ!?そんなの出来るなんてもう化け物じやない！」

なんか外野がうるさいが

八幡 「行くぜ」

そう言つて俺は海未に向かつて走り出した。

その俺に向かつて海未は矢を放つが俺はそれを木刀ではじきながら進む。

海未 「くつ！だつたら3本いつぺんにはどうですか！」

そう言つて3本いつぺんに放つてきた。

八幡 「嘘やんけ・・・やつて見るか『投影・開始』構成材質解明。構成材質補強。おら！」スパン！

恭子 「なつ！あれは投影魔術!?魔法より先に生まれ、今は秘術と

なつたとアイリさんから聞いてはいましたがあの投影・魔術を何故八

幡くんが!』

八幡「ちょ!? 恭子さん!』

俺が叫ぶとあつ!と顔を上げやつてしまつたという顔をした。そ
う、恭子さんと一人きりなら良かつたが今はちゃんと9人いるんで
すよねー・・・はあ

穂乃果「ハチくん。魔法つてあの魔法?』

海未「どういう事か説明していただきましょうか。』
はあ、こうなるからやだつたのに・・・

魔法使いとチート八幡の日常（中学編）18

恭子「あつ！えっと、その……違うんです。魔法っていうのは……」
八幡「もう良いですよ恭子さん。隠してた俺が悪いんです。今ちやんとここで話しますよ。」

恭子「八幡くん……すみません。」
八幡「俺つて中学に入学する前に転校しただろ？その転校先つてのが異世界つてところなんだ。そこで俺は魔法を覚えて魔法使いになつた。証拠はこれだ。」

そう言つて俺は手から雷をチヨツトだけ出した。

海未「異世界……」

穂乃果「うわあ、ハチ君すごーい！」

凜「凛もやつてみたいにやう!!」

希「八幡君、異世界つてうちらも行けるの？」

八幡「まあ行けないこともないが、今はまだダメだ」

そう言うとみんなガツクリと肩を落とした

八幡「まあそう落ち込むなつて」

にこ「そようよ、八幡はまだつて言つたのよ？まだつてことはいつかは行けるつてことでしょ？」

八幡「まあな、そう言う事だ」

そう言うとみんな元気を取り戻した。

にこ「ならいいわ。異世界つてやつに興味あるから行く時は私のことを誇りなさいよ？」

にこがそう言うとみんなも同じようなことを言つてきた。俺的に海未も行くと言うとは思わなかつたから驚きだな。
それからは質問三昧だつた。

異世界での生活や魔法についてなど色々と聞かれた。

八幡「なあ、盛り上がりつてるところ悪いんだが時間は大丈夫か？花火大会何だろ？」

そう言うとみんなが、もうこんな時間!?と言つて立ち上がり5時半に駅前に集合とだけ言つて帰つて行つた。

八幡「…恭子さん、花火見れるところありますかね。今から行つて」

恭子「そこは私が何とかするので気にせずに楽しんでください。」
そう言つてお小遣いをくれた。

17：30

俺はここに5分前に来ていたがまだ誰も来ていなかつた。
それから5分経過したがまだ誰も来ない。

八幡「…遅いな、まあ着替えとかしてんのか。」

穂乃果「ハチ君！ごめんね遅れちゃつて」ハアハア

と、穂乃果が到着した。後ろには雪穂もいた。二人ともオレンジ色

が主体の浴衣を来ていてどちらも似合つていて可愛いと俺は思う。

八幡「大丈夫だ、そこまで待つてないから。それよりも雪穂、久し

ぶりだな。」

雪穂「うん、八兄久しぶり。たまにはうちに遊びに来てつてお母さんが言つてたよ？」

そう言われると最近行つてないな。

八幡「了解した。今度久しぶりに遊びに行くわ。」

と、そこに海未とことりと真姫が到着した。海未は紺色の浴衣。こ

どりは緑っぽい綺麗な色の浴衣だ。真姫は赤色の浴衣だつた。

うん、それぞれ似合つて可愛いと思う。

海未「遅れてすみません。」

八幡「いや、そんなに待つてないし時間も過ぎてないから大丈夫だ」

真姫「ほら、言つたじやない。そんなに急がなくても八幡なら許してくれるつて

ことり「海未ちゃんはしつかり者だからそういうところしつかりしたいんだよ」

真姫「それは分かるけど、あんなに急がなくてもいいじやない。途中ではぐれそうになつたわよ」

海未「うう、すみません」

まあ、海未は真面目だから仕方ないよな。と、そこに花陽と凜も到

着した。花陽はことりの緑よりも少し薄めのライトグリーン、凛は黄色の浴衣だった。うん、似合つてる。

凛「ハアハア、遅れたにやう。」

花陽「ハアハア、す、すみません。」

めちゃくちや疲れてる・・・

八幡「だ、大丈夫か？ そんなに急いでこなくてよかつたのに・・・時間もぴつたりだし」

それにまだ先輩達が来てないしな。

と、凛たちが息を整えていると先輩方3人も走ってきた。

絵里「ごめんなさい、遅れてしまつたわ。」

希「準備に手間取つちやつて」

にこ「ほんとにごめん」

と、頭を下げた。

八幡「いや、そんな頭をさげなくとも・・・。それにまだ花火まで時間ありますから。」

そう言うと頭をあげてくれた。良かつた・・・

八幡「じゃあ全員揃いましたし、行きましょうか」

そして俺たちは花火大会の会場へと向かつて花火を見た。

それから俺はみんなを家まで送り自分の家へ帰つた。

えつ？ 花火大会の会場でなにかなかつたのかつて？ ふつ、黒歴史しか残んなかつたさ。いやね？ だつて久しぶりに花火を見たから

ちよつとはしゃいじやつたんだよしようがないでしょ・・・。

それからは何事もなく夏休みが終わつた。

魔法使いとチート八幡の日常（中学編）19

夏休みも終わり遂に地獄の学校が始まった。だが学校では夏休みが終わったのにもかかわらず騒がしい。なぜならもうすぐまあ1ヶ月くらい先だが文化祭が始まるからだ。まだ1ヶ月くらい先なのにさわがしいってドンだけだよつて思つてるやつ……俺もだよ。

俺も文化祭は楽しみだがまだこんなに騒げねえ……それに今日は只でさえ気持ちが落ちてるのに……えつ？なんでかつて？勝手に文化祭実行委員にされたからだよ！いやね？ちよこつとだけ寝てただけなんだよ？なのに黒板みたら俺の名前があつたんだよ！隣に文化祭実行委員つて書いてあつたんだよ！あともう一人いたけど誰だから知らねえから紹介はなしだが。あつ、でも穂乃果たちも生徒会だから文実に行くつて言つてたな。良かつたぜ。

「ハ……くん！」

「……チくん！」

穂乃果「ハチくん！」

八幡「うお!?びっくりした。どうした穂乃果？」

穂乃果「どうしたじやないよ！さつきから呼んでも返事しないんだもん。」

八幡「すまん、ちょっと文実をやるのが嫌すぎて現実逃避みたいなことをしてたわ。」

穂乃果「もう、ハチくんつたら。穂乃果達も文実に行くんだからいいじやん！」

八幡「そうだな。俺もそう思つて現実逃避をやめたわ」

八幡「それで？なんか用があつたんじゃないのか？」

俺はそう穂乃果に聞いた。

穂乃果「あー、うん、えつとね？クラスの出し物なんだけどね？喫茶店つて言うかメイド喫茶？みたいなのにしようつて言うことになつたんだけどね？このクラスでケーキ作れる人誰かいるつて聞かれたから咄嗟にハチくんのことを推薦しちゃつた……テヘッ♪」

・・・

八幡「テヘツ♪・・・じゃねえよ!俺、文実!ドウーユーアンダースタンド!文実はめちゃくちゃ忙しい!OK!」

穂乃果「だつて!ハチくんのケーキ食べたかつたんだもん!」
ん? そう言えば俺、ケーキ作つたことあつたつけ?いや、恭子さん
に頼まれて作つたことはあるけど他の奴らには作つてねえよな?
じやあなんて知つてんだ?

八幡「穂乃果、俺がケーキ作れるつて話どこで聞いた?」

穂乃果「恭子さんに教えて貰つたよ?クリスマスとか誕生日とかは
ハチくんがケーキを作つてるつて」

うおおおい、恭子さん。勝手に俺の情報を流さないで! はあ今回
は恨みますよ恭子さん・・・

八幡「はあ、もういいや俺は何も言わないわ。もう勝手にしてく
れ。」

穂乃果「うん、ごめんねハチくん。」

八幡「いや、別に大丈夫だ。」

そうして俺は明日の放課後にケーキを作ることとなつた。

さてと放課後だ。

放課後はいつもはまあ不本意ながら部活に行くのだが今日は文実
があるから休みだ。まあ文実とかやりたくないがな。

そんなことを考えながらも会議室に到着。穂乃果たちはもう来て
いる。なんか生徒会だから準備があるつて言つてさつさと行つてた
な。

ドアを開けると中には結構人がいた。あれ?俺座れるところない
んじやね?

そう思いながら適当に歩いていると

「あ、比企谷先輩! こんなにちは!」

と、挨拶された。もう一度言おう。『俺が』挨拶された。

八幡「はあ、うるさいぞ戸山。それと山吹も文実か。戸山のお守り
ご苦労さんですね。」

戸山「先輩!?お守りってなんですか!?

山吹「ありがとうございます。あ、こここの席どうぞ。」

八幡「おう、サンキュー。」

と俺は進められた席に座った。

戸山「スルー!?

八幡「うるさいぞ戸山。全くお前も文実か。ま、お前が立候補して
こいつのお守りとして山吹が推薦で選ばれたって感じか」
俺は簡単に推理をして言つた。

山吹「正解です。」

戸山「違うでしょ!?沙綾も先輩も私の事どう思つてるんですか!?

俺&山吹「うるさくて手のかかる子供」

戸山「酷い!?

とまあ、冗談はこの辺にしておきますか。
そろそろ始まりそうだし。

穂乃果「皆さん、こんにちは。これより文化祭実行委員会を始めた
いと思います。まず、始めるにあたつて実行委員長と副委員長を決め
たいんですけど誰かやりたい人はいませんか?」

穂乃果の合図で始まる実行委員会。最初は委員長を決めるらしい。
まあこれが1番時間かかりそうだな。みんな実行委員長とか言う面
倒な仕事したくないだろうし。はあ、誰も手を挙げなさそう「はい!
やりたいです!」あつ、そう言えばいたわ。手を挙げそうなやつが
若干1名俺の隣に…

穂乃果「わあ、ありがとうございます!えっと、お名前を聞いてもいいかな?」

戸山「はい!2年B組の戸山香澄です!」

穂乃果「香澄ちやんだね。よろしく!じゃあ他にやりたい人はいま
せんか?・・・いないみたいだね。じゃあ香澄ちゃん、これからよろ
しくね!」

香澄「はい!よろしくお願ひします!」

穂乃果「じゃあ副委員長は…」

山吹「私がります。」

そう言つて隣の山吹が手を挙げた。まあ戸山のお守りをする役目

があるから当然?なのか

穂乃果「おお、決まるのが早い…えっと名前を聞いてもいいかな?
?」

山吹「はい、2年B組の山吹沙綾です。よろしくお願ひします」
穂乃果「山吹沙綾ちやんだね。よろしく!えっと他に手を挙げてる
人はいないからじやあ副委員長は沙綾ちゃんに決定!!」

そんなこんなで委員長と副委員長が決まった。

穂乃果「じゃあここからの進行は委員長と副委員長に任せるね。」
香澄「はい!わかりました!えっとじやあまずは皆さん役割分担
をしたいと思います!」

そうしてそれぞれ役割を決めていった。さてと、じゃあ俺は記録・
雑務でもやり「あつ、比企谷先輩。先輩は私の手伝いをお願いしま
す。」

八幡「なんで俺が山吹を手伝わなきやいけないんだ?」

沙綾「だつて先輩つて記録・雑務なんかに入つたら私の見えないと
ころでサボりそうじゃないですか。」

うつ、有り得るから言い返せねえ…

八幡「はあ、わーつたよ。副委員長補佐つてこといいのか?」

沙綾「はい、よろしくお願ひします。」

そうして俺は強制的に副委員長補佐の役割についた。

魔法使いとチート八幡の日常／中学編／20

文実があつた日の翌日。俺は穂乃果とほかの女子二人と家庭科室に来ていた。何故かつて？そりやあここにいる穂乃果が俺をクラスの出し物の料理担当に推薦したから実力を見せろって言われましてね？

八幡「んで？ 穂乃果、その後ろの2人は誰？」

???「ちよつとー、比企谷くん。同じクラスなのにそれは無いでしょー。」

???「そうですよ。名前くらい覚えておいてくださいよ。」

八幡「いや、まず同じクラスだつたの？」

2人「そこから！？」

まあ俺はクラスのヤツらの名前も顔も全然覚えてないからなあ：穂乃果「アハハヽ：： ゴメンね2人とも。ハチ君はクラスのみんなのこと全然覚えてないから。全く、ハチ君。こういう事になるからしつかりみんなのことは覚えておいてよつて言つたのに」

穂乃果に注意された：： 一生の屈辱だ」

穂乃果「それどういうこと!? 穂乃果だつて注意くらいするよ！」

???「さてと、痴話喧嘩も終わつたみたいだし自己紹介しようかな。私は赤崎 楓。クラスの書記だよ。よろしくね。」

赤崎ね。覚えた

???「では次は私が。私は早坂 みやびです。一応クラスの委員長です。よろしくお願ひしますね。」

早坂だな。覚えた。

八幡「OK、赤崎に早坂な。よろしく。それで？俺はなんのケーキを作ればいい？」

自己紹介が終わつたので俺は今回の目的のケーキの話に話を変えた。

赤崎「：： 痴話喧嘩の部分はスルーでいいんだ：：。んんツ！ そうだなあ、自分の自信作かな。一応この冷蔵庫の中のものは全部使つていいらしいから。」

そう言つて赤崎は冷蔵庫を開けた。

ふむ。なかなか材料は揃つてるな。

八幡「了解、じゃあ1時間後にここに戻つてくれ。それまでには完成させる。」

早坂「1時間後…ですか。この部屋にいても大丈夫ですか？」

八幡「ああ、別にいいが邪魔はしないでくれよ？」

早坂「分かつてます。」

穂乃果「穂乃果は一旦文実に顔を出してくるよ。」

赤崎「私もクラスの方を見てこようかな。」

八幡「了解。んじやあ俺は始めるわ」

そして俺はケーキ作りを開始した。

それから一時間後…えつ？ケーキ作りの描写をかけつて？いや、俺の作るケーキのレシピは企業秘密だから…

赤崎「あつ、ほんとにケーキできるー。1時間で終わるものなんだねえ。」

そこに赤崎が帰つてきた。

早坂「凄かつたですよ。ほんとに。スポンジの作り方ももう手慣れているかのようにさつさと終わらしていたし、その後の生クリームを作つたりするのにも時間をかけずさつさと終わらせていて気がついたらもう盛り付けだけになつていました。」

赤崎「そ、そんなに？」

と、驚いた顔で俺を見る。まあ早坂も結構話を持つたような気がするが…いや、俺の中では普通でもほかの人から見たら早い方なのかな？

と、そこに穂乃果と海未とことりもやつて來た。

穂乃果「あつ、ケーキ出来てる！」

ことり「うわあ、美味しそー♪早く食べたいな♪

海未「ほんとですね。美味しそうです。」

八幡「海未とことりは違うぞ？」

そう言うと海未とことりはがつかりしたような顔で

海未 「私は食べちゃいけないんですか？…」

ことり 「私も？…」

と言つてきたので俺は首を振つた。

八幡 「そういう事じやなくてお前らの分はこつち。」

そう言つて俺は海未に抹茶のチョコレートケーキを。ことりに特製チーズケーキを冷蔵庫から取り出して渡した。

海未 「こ、これは？」

ことり 「私たちに？」

八幡 「ことりはチーズケーキ好きだろ？海未はあんまり甘いのが好きじゃないはずだからちよつと甘さ控えめのケーキを作つてみたんだよ」

穂乃果 「えー！…するい！わたしには！？」

八幡 「穂乃果はいちごが好きだろ？だからそのケーキいちご多めに作つてあんだよ。」

そう言つて俺は作つたケーキを切つて皿にのせて穂乃果と赤崎、早坂に手渡した。

八幡 「さてと、では召し上がつてくれ。」

5人 「いただきます！」

5人 「お、お、おおお美味しそう！」

赤崎 「なにこれ！スポンジが口の中で溶けて無くなつたよ！？」

早坂 「でも、無くなつてもスポンジの味がしつかりと口の中に広がつていきます！」

穂乃果 「このクリームも美味しい！色々な果物の味がするよ！」

海未 「この抹茶チョコレートケーキは甘すぎず苦すぎない。ちょうどその中間くらいの甘さでスポンジの味としつかりとマッチしています。」

ことり 「このチーズケーキ、中にクリームが入つていて普通のチーズケーキよりも甘くなつてているのにしつかりとスポンジの味と合つてる！」

とみんな絶賛してくれた。

八幡 「口にあつたようで何よりだ。」

赤崎「うん、これならもう比企谷くんに頼んでもいいよね。つてか、こっちからお願ひするよ」

早坂「私も、お願ひします」

そう言つて俺に頼んでくる2人。

八幡「いや、俺は元からやるつもりだからお願ひされなくともやるけどまあわかつたわ」

そうして俺はクラスの出し物のお菓子作り担当にもなつてしまつた。はあ仕事が増えることは俺は望まねえんだけどな…

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）21

さてと、今日も文実がある。めんどい。なぜめんどいかと言うと……副委員長補佐つていう役割についたからだ。（強制）はあ、仕事をしたくねえ……

沙綾「あつ、比企谷先輩。こんにちは」

香澄「比企谷先輩こんにちわー」

八幡「おう」

今日の俺の仕事は書類をまとめて山吹に渡す。それだけだ。いやあラツキーだな、前よりも仕事少ないし？それにそこまで書類もないから楽！

とか思つてた時期もありました……なんで一気に書類を持つてくるの!?ねえ……まさか、これが気分を良くさせてから一気に気分を地に落とすと言うあの技か!……言つててよくわかんねえなうん。つてかあの技つてどの技だよ。変な事言つてないでさつさと仕事するか。

つてかなんか今日の文実少なくね？いや、今日だけじゃないか。俺がケーキ作りをした次の日当たりから徐々に減つてきてたな。多分俺のいない時になんかあつたか。一応、山吹に聞いとくか

八幡「なあ山吹、今日の文実やけに少ないけどなんだだ？」

沙綾「ああ、そう言えば比企谷先輩はある時いなかつたですね。えつとなんか3年の相模先輩がクラスの出し物も手伝つた方が良くなきかつていう提案をして香澄は否定しようとしたんですがほかの人もその意見に乗つちゃつて……その次の日から徐々に減つてきてた感じです。」

……相模か。確か俺のクラスのやつだつたな。これは文実の妨害つて考えた方がいいのか？うーむ……一応調べてみるか

それからというもの徐々に徐々に人が減つていく一方だつた。最終的にはほぼ人がいない状況。

八幡「なあ流石にこれはやばくないか？」

と、隣で大量の書類を確認している山吹に尋ねる。

沙綾「ですよね… これは流石に…」

その隣の戸山も書類が多くて大変そうだ。

俺は2人のところに山積みにされている書類を半分とする

沙綾「えつ？ 比企谷先輩？」

香澄「先輩？ なんで…」

八幡「お前らに体調を崩されたら困るからな手伝うわ。」

香澄「で、でも…」

八幡「でもじやない。手伝うって言つてんだ。素直に人の好意は受け取つとけ。」

そう言い俺は書類に目を通し始める。

香澄「比企谷先輩… ありがとうございます！」

沙綾「ありがとうございます。」

八幡「おう。」

そうして俺たち3人は作業を進めた。

が、流石にこの量は多いな。人数がへつていてる分、最初から書類に目を通さなければいけないため時間が全然足りない。やつぱり文実の人を戻さないとな… 一旦穂乃果たちにも相談してみるか

その日の帰り道

八幡「なあ、今日の文実流石にやばくないか？」

海未「はい、あれは流石にまずいですね…」

ことり「相模さんのこと私たちが止めておけばよかつたかも…」

穂乃果「あれはしようがないよ… あれだけ賛成の人がいたら反対するのも難しいし…」

八幡「どうやつたら人を戻せるか… やつぱり呼びかけるしかないか。いや、待てよ。今度の集まりで… よしつ！ やつてみるか」

俺が1人で意気込んでいると3人が詰め寄つて何するの？ つて聞いてくるため俺はお楽しみにとだけ答えた。

それから2日後、今日は文実でスローガンを決めるため全員集まつ

ている。

香澄「じゃあ始めたいと思います。今日は文化祭のスローガンを決めたいと思います！考へてきた人は挙手でお願いします！」戸山がそう言うとチラホラと手が上がる。

『面白い！面白いすぎる！』潮風の音が聞こえます。総武中学文化祭

』

おい、どこのCMだよ
『ONE FOR ALL』

はい出ました…

『八紘一宇』

…

とまあ決まらないわけですよ。さてとそろそろ俺も…と、その時相模が手を挙げた

相模「絆く共に助け合う文化祭くとかはどうですか？」

相模がそう言うと俺は思わず

八幡「うわあ」

と言つてしまつた。

沙綾「ちょ、比企谷先輩」

と山吹は小声で言つてくる。まあ大丈夫だ見てると俺は心の中で山吹に言う。

相模「何かな？なんか変だつた？」

八幡「いや、別に…」

相模「何か言いたいことあるんじやないの？」

八幡「いや、まあ別に…」

相模「ふーん、そう。嫌ならあんたも何か案出せば？」

この言葉を待つていた。

八幡「じゃあ俺からもう一つ『人くよく見たら片方樂してる文化祭く』とか？」

俺がそう言うと会議室が静寂で満たされた。

「ふつ」

と言う笑いが聞こえたので見ると穂乃果達3人が笑つてた…

平塚「…ひ、比企谷。どういう意味か説明を」

八幡「いや、人という字は人と人が支え合つてとか言つてますけど、片方寄りかかってんじやないっすか。誰か犠牲になることを容認してるのが人つて概念だと思うんですね。だから、この文化祭に…文実にふさわしいんじやないかと」

平塚「犠牲とは具体的に何を指す。」

八幡「いや、俺とか他にもクラスに顔だして文実に来ないヤツらの分の仕事までやつてたヤツらとかめつちや犠牲じやないっすか。まあこれがアイツが言う助け合いつてやつなら俺は何も言えないとすけどね。まず俺助け合つたこととかないし…」

そう言つて俺は座る。さてとこれで何とか文実に来るやつも増えるかねえ…

香澄「比企谷先輩…」

ん？戸山に呼ばれたか？

そう思い戸山の方を見ると笑顔で

香澄「却下です」

と、言われた。

香澄「今日はここまでにしましよう！なんかいい案も浮かんでこなさそうですし！それに作業の遅れだつて皆さんがこれから毎日来てくれれば何とかなりそうなので！というわけでこれで今日の文実は終わります！皆さん！明日からまたよろしくお願ひします！」

そういう感じで文実は終わつた。

帰り道

穂乃果「人々よく見たら片方樂してる文化祭…」

ことり「ほ、穂乃果ちゃん。もうやめて…」プルプル

海未「そ、そうですよ。や、やめてください」プルプル
こいつら…：

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）22

あの俺の黒歴史の日から1週間が経ちついに文化祭となつた。いやあ、1週間全員で仕事すれば遅れてた仕事もすぐに終わるんだなあ…俺たちの苦労はいかに…

という訳で今日は2日目だ。昨日は色々と見てまわつてたわ。んで今日は、一応副会長補佐ということもあり学校内の見回り中だ。八幡「見回りとは言つたものの暇だな…」

穂乃果「ハチくーん。お疲れ様♪」

そこに穂乃果たち3人がやつて來た。

海未「仕事は午後からは無いんですね？」

八幡「ああ、一応午後はオフになつてるぞ？」

ことり「じゃあ私たちと文化祭まわろ？」

まあまわる友達もいないしいいか

八幡「OKだ。じゃあ午後になつたらクラスに戻るから待つててくれ。」

3人「「わかつた（わかりました）」」

そう言つて3人はまた店をまわりに行つた。つてかアイツら生徒会なのになんもしねえのな…

はあ、やつと午後か。やつと自由だ…：

そして俺はクラスに戻り3人と合流した。

穂乃果「どこから行く？」

八幡「腹減つたから飯食いたい。」

海未「私も同じ意見です。」

ことり「意義なーし♪」

穂乃果「じやあ真姫ちゃん達のクラスの喫茶店に行こう!!」

そしてやつて来ました1-C。ここは花陽と凜、真姫のクラスだつたな。

さてと早速入るか。俺たちはドアを開けた。

真姫「お、お帰りなさいませ、ご、ご主人様つてヴエエエエ!?」

ドアを開けたら…メイド服の真姫がいました。

真姫 「…こちらへどうぞ」

八幡 「真姫、似合つてるから気になんなつて」

穂乃果 「そうだよ！真姫ちゃんすぐ似合つてるよー！」

ことり 「うんうん♪可愛い♪」

海未 「そうですね、真姫、似合つてますよ。」

そう言うと真姫の顔が赤くなつた。

真姫「う、うるさいわね！は、恥ずかしいのよ！うう、寄りにもよつて八幡に見られるなんて…」

あれ？俺が見たからこうなつてんの？

八幡 「な、なんかゴメンな？」

真姫 「もういいわよ！…んで？ご注文は？」

穂乃果 「サンドイッチとアイスティー！」

海未 「では、私も同じでお願いします。」

ことり 「私はパンケーキとミルクティー」

八幡 「サンドイッチとマツ缶で」

真姫 「わかつた。ちょっと待つてて。」

そう言つて厨房に戻つて行つた。

真姫にはなんか悪いことしたな…今度なんか奢つてあげよう。
それから真姫が注文した品を持ってきたためそれを食べて真姫達のクラスを後にした。いやあ美味しかつた。

そして俺らは次はどこに行くか話し合つていると

「あ、八幡君」

「ほんとだ。八幡くーん。」

と後ろから声をかけられた。

八幡 「おお、三上と綾辻か。お前ら風紀委員はいいのか？」

綾辻 「うん、委員長の氷川さんにはしつかりと休憩貰つたし

八幡 「そうか。」

三上 「それよりも後ろにいるのは高坂さん達だよね？」

綾辻 「八幡くんは知り合いだつたんだ」

そう言つて俺の後ろにいる穂乃果たちをみた。

八幡「ああ、穂乃果たちは幼馴染なんだよ。」

綾辻「へー、幼馴染かー。いーなー。」

何がいいのかわからんが…」

穂乃果「ハチ君は綾辻さんと三上さんとはどこで知り合ったの？」

綾辻「八幡くんは、私たちを助けてくれたの。」

海未「助けた？」

三上「私たち2人で夏祭りに行つてる途中でナンパにあつて、その時に八幡くんがナンパしてきた男の人たちから私たちを助けてくれたんだ。」

綾辻「それからよく話をするようになつたの。」

ことり「夏祭りって…私達と行つた？」

八幡「ああ、お前らと集合する前に見かけてな、無理やり連れていくとしてたから止めに入つたんだよ。」

あの時はほんとにびっくりしたわ。目の前で美少女2人が男に連れていかれそうになつてんのに誰も止めねえんだもん…」

穂乃果「ハチ君はやっぱりハチ君だね！」

八幡「どういう事だ？」

海未「お人好しつてことですよ。」

俺はそこまでお人好しではないと思うんだが…」

綾辻「八幡くんはいつもこんなことをしてるの？」

ことり「うん、困っている人がいたら助けちゃうような人だから…」

いや、そんな事は…あるかもしねない

三上「優しいんだね、八幡くんは。」

穂乃果「優しすぎるけどね」

それから俺らは綾辻と三上も一緒にまわるということでお6人で行動していた。

穂乃果「それにしても、最近ハチ君のまわりに女の子多くない？」

海未「私も同じ意見です。」

ことり「ハチ君、知らないところで女の子と仲良くなつてるんだも

ん。」

えつ？そんな事は……あるな。うん、なんか最近知り合いが女子
ばかりの気がするのは俺も思ってた……

綾辻「そんなにいるの？」

穂乃果「うん、えっと大体……13人くらい？」

三上「そんなんに！」

：　言えない、それは穂乃果があつたことがある人だけだつて。まだ穂乃果と会つたことない人で女子の知り合いがいるなんて言えな
い。

穂乃果「ハチ君はハーレムでも作るの？」

八幡「……はつ？いやいやいやいや、俺がハーレムなんて無理だろ
？だつて俺だもん……」

俺がそう言うと全員がため息をついた。
えつ？なんで？

綾辻「あはは、八幡くんつて鈍感なんだね……」

八幡「いやいや、俺は敏感な方だと思うけど……」

そう言うとまた全員がため息をついた。

なんでだろう……

穂乃果「まあいいや、それよりも！そろそろ私たちは生徒会として
文化祭最後のエンディングセレモニーがあるから体育館に先に行く
ね？」

八幡「おう」

綾辻「頑張つて！」

三上「行つてらつしやい！」

そして3人は体育館へ向かつた。

八幡「俺も一応実行委員だから体育館に向かうわ。」

綾辻「うん、わかった。」

三上「じゃあ、また後で」

八幡「おう……おう？」

綾辻「じゃあね」

三上「じゃあね」

八幡「いや、ちょっと待つて!? つてもういねえし…… また後でつて
なんでだ?」

そこが疑問で仕方がなかつた八幡だつた。

八幡「うーす」

俺はそう言つて体育館の舞台裏に入る。

「あつ! 副委員長補佐!」

そう言つてなんか慌てた感じで実行委員が駆け寄つてきた。

八幡「ん? なんかあつたのか?」

「そ、それが…」

八幡「はあ!? 委員長の戸山と副委員長の山吹が見当たらぬ!? どう
いう事だ!」

内容は戸山と山吹がどこを探してもいなといふことだった。

いや、まあ戸山がいないだけならまだ分かる。だが山吹までいな
となると話は別だ。これはちょっとまずいな…：

と、そこに

穂乃果「ハチ君? どうしたの?」

と、生徒会の仕事をおわらせたらしい穂乃果が立つていた。

八幡「穂乃果! ちょうど良かつた。戸山と山吹が見当たらぬいらし
い。もしかしたら…」

穂乃果「!?: 相模さん達かも」

八幡「やつぱりか実行委員の時あいつ戸山のことめちゃくちゃ睨ん
でたからな」

穂乃果「うん、相模さんともう1人の相川さんは去年の文化祭実行
委員の委員長と副委員長だつたの。ただ、今年みたいにクラス優先で
仕事していくら全然文化祭の仕事が捲つてなくて文化祭は中止、相模
さん達は学校中の嫌われ者になつたの。もしかしたら相模さん達は、
自分たちは失敗したのに香澄ちゃん達が成功したのが気に入らなく
て…」

なるほどな、大体わかつたぜ。相模達の逆恨みというわけか。ほん
とにクソ野郎だな…：

八幡「穂乃果、スマンがここに2年B組の牛込と花園、2年C組の市ヶ谷、それと雪ノ下と風紀委員長の冰川を呼んでもらえるか？」

穂乃果「えつ？うん、わかつた。」

そして5分が経過した。

冰川「比企谷さん、こんなにちは。それで？私たちを呼んだ理由をお教え願います。」

八幡「冰川、今ここにR o s e l i a のみんなはいるか？」

冰川「？体育館にはいると思いますがなぜですか？」

それを聞いた俺はすぐに頭を下げて

八幡「頼む！今、これから演奏を願いたい！」

といつた。
冰川「!?頭をあげてください比企谷さん。理由を話してもらえますか？」

俺は冰川に事情を話す。

冰川「…分かりました。そういうことなら引き受けましょう。今から湊さん達を呼んできます。」

そう言つて出ていった。

市ヶ谷「あのー、私たちは…」

八幡「市ヶ谷達にも演奏をお願いしたい。今の話を聞けばわかると思うが戸山と山吹を探しているあいだだけでいい。即席で悪いが雪ノ下にこの3人のボーカルを頼みたい。」

雪ノ下「…」はあ、わかつたわ。その代わり15分よ。2つのチー

ムが演奏してもそれくらいしか時間は稼げないわ。」

八幡「わかつた。ありがとう。市ヶ谷達も頼む。」

市ヶ谷「わかりました。よろしくお願ひします雪ノ下先輩。それと

比企谷先輩、香澄と沙綾をお願いします。」

そう言つて市ヶ谷達も準備を始めた。

よし、俺も行くか。多分アイツらは屋上。体育館裏は文化祭で結構盛り上がりつて人通りがあるはずだから今人が来ないとこころと言つたらそこしかない。

俺はダッシュで屋上へと向かった。

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）23

クソつ！屋上まではあとちょっと、アイツら何もされてなければいいが…：

俺はダッシュで屋上へと向かっていた。何故かつて？前回の話を読め！… メタいな…。しようがない走りながら説明するか。まあ簡単に言うと、文実の委員長と副委員長が相模とか言うやつに多分だが逆恨みされて屋上に呼び出されてなにかさせてる可能性がある。だから俺は屋上へ向かっている。

そんな説明をしている間に屋上へと続く階段に近づいてきた。と、その時話し声が聞こえた。

「ちょっと南にゆつこも。なんでこんなことしてんの!? それって立派な犯罪でしょ!？」

相模「うるさいなあ、私とゆつこはこの子達が気に入らないの！私たちが出来なかつた文化祭実行委員の仕事を私よりもバカみたいな委員長がこなしていくのを見ていると憎らしいのよ！しかも私がせつかく文化祭をさせないようにクラスの方を手伝うようみんなに仕向けたのに副委員長補佐とかいう奴のせいで皆文実に戻つてくるし。それもこの子達があんな奴を副委員長補佐にしたから起きたこと。あいつがいなければ私たちの計画通り文化祭は開催できなかつたのに！」

ゆつこ「ホントだよ！私たちが作れなかつた文化祭をこうも簡単に作られると余計に腹立つし」

相模「だからこの子達には痛い目を見てもらおうと思つてね。そういうわけだからお兄さん達、その2人好きにしていいよ。」

遥「ちょっと待つてよ！それつてただの逆恨みつて言うか、去年の文化祭が出来なかつたのは自業自得じやん！それをこの子達が簡単に出来たからつてだけでこの子達に危害を加えようとしてるの!? アホみたい！もう付き合つてらんない。私、先生読んでくるから。」

男1「おつと、ちょっと待とうか。」

遥「ちょっと！なんですか!?」

男2 「いやあ、俺達もこの子達を好きにしていい代わりに2人を守るっていう契約をしているんだわ。だから君は大人しくしててね?」

遙「… 南、ゆつこ。あんた達見損なつたよ。まさかこんなことするなんて」

相模「うるさい! 遥にはわかんないでしょ! だつて委員長でも副委員長でもなかつたんだから!」

ゆつこ「もういいよ南、お兄さん達その子も一緒に好きにしていいよ?」

遙「なつ! … もうあんた達なんか知らない! 絶交よ!」

相模「私たちは遙と絶交したところでやることは変わらないから。という訳でお兄さん達やつちやつていいよ。」

その言葉が聞こえた時俺の中で何かが切れた。

ドガアアアアアン!!

俺は屋上の扉を蹴破つた。

八幡「おいてめえら… 香澄と沙綾に手え出してんじやねえ!」

相模「なつ! あんた… ヒキタニ。1人で何しに来たの wまさか正義のヒーロー気取り? うけるんだけど w」

八幡「… お前らはには話があるが、後だ。まずはその3人から手を離してもらおうか?」

ゆつこ「何こいつ、こつちは男6人いるのに勝てる事でも思つてんの? お兄さん達、先にそいつやつちやつてよ。」

と相模の仲間のゆつこ? が言う。

男1 「おう兄ちゃん、何しに來たんだ? まさか、この子達を助けに來たとか言わねえよなあ? 1人で wwww」

そう言つて男1が近づいてくる。

八幡「うるせえよ。」

俺は短く呟くと男1の鳩尾に拳を食らわした。

男1「グホア!」

そして男1はうずくまる。

男2「なつ! こいつ! やるぞお前ら!」

そう言つて男2と男3が出てくる。男2は小柄だがボクシングの

構えを、男 3は空手の構えをする。

だがそんなの関係ない。俺は一気に間合いを詰め、男2の鳩尾に膝蹴りを食らわせ、そのまま回し蹴りで男3の顔面を蹴った。

八幡「さてと、残りは3人だ。どうする？」

男4「ヒツ?ば、化け物！」

そう言つて男4は突っ込んでくるが俺はそれを避け首に手刀を入れ氣絶させた。

八幡「はあ、もう疲れるからさつさと終わらせるわ。」

そう言つて俺は男5と男6の間に一気に移動し両手で2人の首に手刀を入れた。

八幡「全く、こいつらそこまで強くねえのにいきがりやがつて…まあいい、2人…とお前、大丈夫だったか？」

と、俺は3人に声をかける。

香澄「う、うう…比企谷先輩…!!」 ポロポロ

戸山は泣きながら俺に抱きついてくる。

八幡「おつと、もう大丈夫だぞ。」 ナデナデ

香澄「はうう。」 //

沙綾「比企谷先輩、ありがとうございました！」 ポロポロ

山吹も泣いていた。まああんな男共に囮まれてたら…な。しようがないか。俺は山吹の頭も撫でてあげる。

沙綾「…もう少しこのままでいてください。」 //

遥「あ、あの。ヒキタニくん。助けてくれてありがとう。」

俺が2人を撫でていると相模の連れの…いや、相模達と絶交した奴がお礼を言つてきた。

八幡「いや、俺は助けようと思つて助けたわけじゃない。あと俺は比企谷だ。」

遥「えつ!」、ごめん。南：相模達がヒキタニって呼んでたから…

八幡「いや、大丈夫だ。」

遥「比企谷くん、あらためてありがとうございます。なにかお礼がしたいから何かあつたら言つてね？」

八幡「いや、だから…いや、んじやあ先生達を呼んできくんねえか？あと山吹は警察を呼んできてくれ。」

遥「えつ？でも「なんかあつたら言つていいんだろ？」…うん、わかつたよ。じゃあ呼んでくる！」

沙綾「私も携帯今持つてないんで1階教室行つてから警察に連絡しちゃいます。」

そう言つて2人とも出でいく。

さてと、

八幡「戸山、お前は早く体育館に戻れ。みんなが待つてる。俺はこいつら2人と話があるから」

香澄「はい、分かりました！じゃあしつかりとエンディングセレモニーやつてきます！」

そう言つて戸山が出口に走つていくのを見送る。

よし、これで文化祭も「させねえ！」ツ？

俺は声のした方を見ると男1と男2がナイフを持つて戸山に襲いかかっていた。戸山は突然の事で固まっている。

クソッ!!間に合え！

八幡「魔法式展開『マグノグレファス』!!『ブースト』！」

俺はそう叫び走る。

クソッ！間に合わねえ！せめて盾になるだけでも！

そう思い全力で走り戸山と男2人の間に立つ

グサツ!!

八幡「グツ！：オラア!!」

俺は力を振り絞り拳で2人の顔面を殴り飛ばした。2人は吹っ飛び屋上のフェンスへと衝突し、2人とも伸びた。

香澄「比企谷先輩!!比企谷先輩！大丈夫ですか!?

俺はナイフを2つとも抜く。片方は右胸に、片方は左の脇腹へと刺さつていた。

八幡「大丈夫だから！戸山は早くエンディングセレモニーに行け！」

香澄「で、でも…」

八幡「お前が頑張つて作つた文化祭なんだ！しつかりとお前が笑顔で終わらせてこい！俺は大丈夫だから早く行くんだ！」

俺は戸山へそう言い、エンディングセレモニーへと向かわせようとする。

香澄「…はい、わかりました！エンディングセレモニーが終わつたら戻つてきます！！」

相模「そうはさせない！」

ゆつこ「私たちがあんたを止めてあげる！」

そう言つて2人が戸山に襲いかかる。俺は先程の痛みで動けない

八幡「クソが!!」

穂乃果「ほいっ!!」

相模「えつ？キヤツ！」

海未「はいっ！」

ゆつこ「キヤツ！」

戸山を襲つた2人は戸山を掴む前に倒される。

穂乃果「させないよ！」

海未「香澄、行つてください！」

ことり「ここは私たちに任せて！」

2人を止めたのは穂乃果達3人だつた。

香澄「先輩方…ありがとうございます！行つてきます！！」

そう言つて戸山は駆け出した。

よし、これで文化祭も終わるか。

そして俺は穂乃果達3人が俺を呼んでいるのがわかつたがそれに応えることなく意識を手放した。

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）24

????? 「貴様もそろそろ自分の無力さを実感したか。」

「八幡よ、お前がその無力さを本当の意味で実感し、力を欲するならば私たちはまた八幡の中へと現れよう。」

八幡（待ってくれ、あんた達は一体…）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

チュンチュン
んつ…

目が覚めた。白い天井、俺の知らない天井だ。

八幡「ここは…」

スウスウ

そんな寝息が聞こえたため横を見ると戸山がベットの縁で、両手を枕替わりにして寝ていた。

ここは病院らしい…

香澄「んん…あれ？あつ！八幡先輩目が覚めたんですね！」
と、俺が起きたと同時に戸山も起きた…ん？八幡先輩？

八幡「戸山、お前つて俺の事名前で呼んでたつけ？」

香澄「いえ、みんなと話し合つてそろそろ名前呼びでもいいんじやないかなあつて思いまして。つてそれよりも！怪我は大丈夫ですか！？痛みは！？血は出でませんか！？」

と、めちゃくちゃ心配してくれている。

八幡「あ、ああ大丈夫だから近い近い近い！」

香澄「わつと、すみません！じやあ私は皆に先輩が目が覚めたつて連絡してきます！」

そう言つて戸山が出ていくと入れ替わりで看護婦さんが入つてきた。

看護婦「目が覚めたのね。良かつたわ。あ、そうだ。あのさつきの彼女にお礼を言つておきなさい。彼女、昨日あなたが運び込まれてからずつとそばであなたを見ててくれたんだから」

えつ…昨日からずつと俺の近くで？てことは帰つてないって

ことか!?

香澄「先輩! 皆これから来るって言つてました!」

八幡「お、おう。なあ戸山、お前昨日からずっと俺のそばに付きつきりだつたのか?」

香澄「… はい、私のせいで先輩には迷惑かけちやつたし… 私がもつとしつかりしてれば先輩は怪我しなかつたはずなのに…」 ポロ

戸山は泣きながらそう話してくれた。

八幡「… お前のせいじやねえよ。あれは俺がもつと早くに気がついていれば止められたんだ。俺が弱かつたから… この傷は自業自得だ。だからお前がきに病むことはねえんだよ。」 ナデナデ

そう言つて俺は戸山の頭を撫でていた。

香澄「うう、でも…」

八幡「でもじやない。それに、お前はしつかりと最後まで文化祭をやり遂げたんだろ? だつたら俺はそれでいい。助けたかいがあつたつてもんだ。」

香澄「先輩…」

こんなこと言う柄じゃないのは分かつて。だがこれだけは伝えたかった。こいつに心配をかけちまつたんだ、こんぐらいの黒歴史はしようがないな。

穂乃果「ハチ君!! 大丈夫!?」

八幡「のわあ!?

びつくりした… いきなり入つてくるんじやありません、ここは病室だぞ。

海未「穂乃果、全く病院なんですから静かに。」

ことり「まあまあ海未ちゃん、穂乃果ちゃんもハチ君が心配だつたんだよ。」

海未「しかし…」

八幡「はあ、心配かけたな。俺は大丈夫だ、だから安心して帰つていいぞ」

穂乃果「まだ来たばかりだよ!?

八幡「うるさい」

穂乃果「うう、海未ちゃんハチ君のあたりが冷たいよ～」

海未「自業自得です！ハチ、元気なようで何よりです。」

ことり「怪我は大丈夫なの？」

八幡「ああ、大丈夫だ。」

ことりはよかつたーと胸をなでおろす。

香澄「えーとー私はおじやまかなー」

穂乃果「あ、香澄ちゃん！ハチ君を見ててくれてありがとう！あとおじやまじやないからまだいてよ。お話もしたいし。」

海未「そうですね、昨日の件私たちはまだわかつてませんし。」

そう言つて椅子に座る3人。

八幡「話をする前に1つ聞きたいんだが、戸山、みんなつて誰を呼んだんだ？」

嫌な予感しかしない⋮⋮

香澄「えーと、ポピパの皆とAfter Growの皆とパスパレの皆、Rosellaの皆さんとハロハピの皆と先輩方3人ですけど⋮⋮」

やつぱりかあ～!!

八幡「まじかよ⋮⋮」

穂乃果「あ、絵里ちゃん達も来るよー」

おい⋮⋮ まじかよ。

海未「あと、綾辻さんと三上さん、雪ノ下さん達にも声をかけときました。」

嘘だろおい、何人くんだよ。入りきらねえよ⋮⋮

絵里「失礼するわ。八幡くん、大丈夫？」

噂をすればなんとやらだな。

絵里先輩、希先輩、にこ先輩に真姫、凜、花陽の6人が入ってくる。

八幡「大丈夫ですよ。」

にこ「全く、心配かけんじやないわよ。」

八幡「すんません⋮⋮」

希「まあええやん、無事だつたんだし」

真姫「全く、昨日パパから八幡が運ばれたって聞いてびっくりしたわ。」

凜「ほんとだにやー」

花陽「昨日は心配でご飯が喉を通りませんでした…」

そこまでか!?とツツコミを入れたいところだが心配してもらつたんだから何も言えねえな…：

八幡「ほんとに申し訳ない。心配をおかけして」

「全くだわ、紗夜から聞いた時はびっくりしたわ。」

???「友希那つてば八幡が運ばれたって聞いて飛び出して行つたもんね！」

?????「それはリサ姉も一緒だと思うけど…」

?????「お二人共すごい勢いで出ていきました。」

紗夜「八幡さん、お怪我は大丈夫ですか？」

と、そこにR o s e l i aの奴らが入つてきた。

穂乃果「えーと、ハチ君この人たちは？氷川さんと白金さんは分かるけど…」

友希那「自己紹介が遅れたわ、私はこの5人で組んでいるバンドチーム、『R o s e l i a』のボーカルの湊友希那、中学3年よ。よろしく」

リサ「私はR o s e l i aのベースの今井リサ同じく中3だよ、よろしく！」

あこ「ふつふつふつ、我こそはつてあいたア!?何するんですか友希那さん！」

友希那「あこ、自己紹介位はしつかりなさい。」

相変わらずだな宇田川妹は…：

あこ「私はR o s e l i aのドラムの宇田川あこです！中1です！よろしくお願ひします！」

燐子「えっと、私はR o s e l i aのキーボードの白金燐子です。よろしくお願ひします」

紗夜「そして私がR o s e l i aのギター担当の氷川紗夜です。よろしくお願ひします。」

R o s e l i a の自己紹介はこれで終了

次は…：

いつの間にか来てたアフガロか

蘭「じやあ次は私たちの番です。私はバンドチーム『A f t e r g
r o w』のボーカル、ギター担当の美竹蘭です。よろしくお願ひしま
す」

モカ「私は、アフガロのギター担当の青葉モカです。よろしく
お願ひします。」

ひまり「私はアフガロのベースの上原ひまりです！よろしくお願ひ
します！」

つぐみ「私はアフガロのキーボード担当の羽沢つぐみです！よろし
くお願ひします！」

巴「次はあたしだな。あたしはアフガロのドラムの宇田川巴って言
います。そこのあこの姉です。よろしくお願ひします！」

と、アフガロの自己紹介も終わる。

穂乃果「じやあ次はわた「八幡！大丈夫？」あれえ…」

穂乃果…：

穂乃果のセリフを遮つて入つてきたのはハロハピのメンバーとパ
スパレのメンバーだつた。

こころ「八幡大丈夫なの？」

八幡「ああ、大丈夫だ。心配かけたな」

彩「本当だよ、八幡くんが救急車で運ばれたつて聞いてびっくり
したよ。」

穂乃果「あれ？この子達つて… もしかして!? P a s t e l * Pa
l e t t e s の」

彩「あつ、自己紹介がまだだつたね。パスパレのボーカルの丸山彩
でーす。よろしくね」

千聖「パスパレのベース担当の白鷺千聖です。」

日菜「ギター担当の冰川日菜だよ。」

イヴ「キーボード担当の若宮イヴです！よろしくお願ひします。」

麻弥「ドラム担当の大和麻弥です。」

穂乃果「うわあ、本物だー！本物だよー」とりちゃん、海未ちゃん
！」

海未「え、ええ。本物みたいですね…」

ことり「ハチ君つてすごい…」

ことり、俺はすごくないぞ？ただ、バンドハウスに行つたら仲良くなつてしまつただけなんだ…

美咲「じゃあうちらも自己紹介しとこうよこころ。」

こころ「ええ、そうね。私はハロー・ハッピーワールドの弦巻こころよ。よろしくね」

はぐみ「北沢はぐみです！よろしくお願ひします！」

薫「私は瀬田薫、よろしく子猫ちゃんたち。」

花音「え、えっと。ま、松原花音です！よ、よろしくお願ひします。」

美咲「奥沢美咲です。よろしくお願ひします。」

という感じでハローハピの自己紹介も終わる。

さてとあとは

沙綾「八幡先輩… 昨日は助けていただきありがとうございました！」

た！！

山吹は俺に頭を下げた。

八幡「いや、お礼なんていい。それよりも、まずは自己紹介。」

沙綾「あっ、はい。」

香澄「じゃあ私から！Poppin' Partyの戸山香澄です！」

！

たえ「同じく花園たえです。」

りみ「う、牛込みです。よろしくお願ひします。」

有咲「い、市ヶ谷有咲です！よ、よろしくお願ひします！」

沙綾「山吹沙綾です… よろしくお願ひします。」

ん？山吹の奴元気がねえな。やつぱ、昨日のことでも気にしてんのか…

八幡「山吹」

俺は山吹を呼び手招きする。
ナデナデ

沙綾 「…へつ？」／＼＼＼＼

八幡「昨日のことをお前がきに病むことは無い。あれは俺がやりたくてやつて勝手に傷ついただけだ。それにお前は俺が傷ついた時にいなかつたんだから。だからそこまで気に病むな。」

沙綾「先輩…すみません、すみませんでした。」ポロポロ

俺は山吹の頭を撫で続けた。泣き止むまでだぞ？

穂乃果「全く、ハチ君と沙綾ちゃんのイチャイチャは置いといて、私達も自己紹介しよう！じゃあまずは私！スクールアイドル？、Sのリーダー、高坂穂乃果です！」

海未「同じく？、Sの園田海未です。」

ことり「？、Sのことりです。」

真姫「西木野真姫、よろしく。」

凜「星空凜！中学2年です！」

花陽「こ、小泉花陽…です。」

絵里「絢瀬絵里高校1年よ。よろしくね。」

希「うちは東條希、絵里ちと同じ学校だから。」

にこ「んん、につこにつこにーあなたのハートににこにこにー一笑顔届ける矢澤にこにこ。にこにーつて覚えてラブにこー。」

…出ました、いつもの。

久しぶりに聞いたな…

穂乃果「では！今からはハチ君への質問ターム！」

ん？なんだつて？

俺への質問タイムだと…絶対こいつらとどこで知り合ったかしか聞かれないと気がする…

八幡「はあ、そんなんいらんだろう…」

穂乃果「？、S以外のみんなとはどうやって知り合ったの？」

八幡「バンドハウスにギターの練習をしに行つた時に声かけられた。」

友希那「？、Sの皆さんとはどう言つた関係なのかしら？」

八幡「中3の3人は幼馴染、ほかは中学で3人に紹介されて仲良くなつた。」

そんな感じでほぼ全員に質問攻めされた。と、その時病室のドアが開き2人中に入ってきた。

綾辻「えーと、八幡くん大丈夫?」

三上「怪我したって聞いたけど…」

八幡「ん?ああ、綾辻と三上、俺は大丈夫だ。心配かけたな。それで来てすぐで悪いが自己紹介してもらつてもいいか?こいつらに…」

綾辻「えつ?うん、いいけど。じゃあ… 風紀委員の副委員長の綾辻遙です。」

三上「同じく副委員長の三上歌歩です。」

絵里「…また女の子、八幡くん、この子達とはどこで?」

ヒツ!?目が笑つてない!怖いっす!

八幡「た、たまたまナンパに捕まつてるところを助けただけです。」

希「なるほどなあ、八幡くんはお人好しから…」

いや、俺はそこまでお人好しな気はしないんだが…

にこ「あんたは十分お人好しよ。」

あれ?俺の心読まれた?

綾辻「八幡くん顔に出てたよ…」

まじか、俺つてそんなにわかりやすいのか…

八幡「まあとにかくくだ、心配かけて悪かつた。俺はこの通り大丈夫だから心配ご無用だ。」

ガラガラ

雪ノ下「失礼するわ。」

由比ヶ浜「失礼しまーす。つて何でこんなに女の子が!?」
と、雪ノ下と由比ヶ浜も来たようだ。

八幡「その辺は説明するから先に自己紹介を頼む。」

雪ノ下「…はあ、わかつたわ。雪ノ下雪乃よ。よろしく!
由比ヶ浜「由比ヶ浜結衣です!よろしく!」

絵里「また女の子!はあ、どれだけ女の子が来るのよ…」

雪ノ下「それよりも私の方から聞きたいのだけれど、比企谷くん。
この方達とはどう言つたご関係なのかしら?」

なんか威圧感がすごいんだが…

八幡 「まあ、知り合いと幼馴染だな。」

そう言つて穂乃果たちは自己紹介をしていく。

雪ノ下「あなたに知り合いがいるとは信じ難いのだけれどこの目で見たからには信じるわ。比企谷くん。平塚先生にはこの件、言つておくわね。それともうひとつ、この件を言うとあなたの更生は必要なくなる。だから奉仕部部長としてお願ひします。奉仕部にはあなたが必要だわ。だから、これからも奉仕部にいてもらえないかしら。」それは俺からしたらびっくりだつた。あの雪ノ下からお願ひをされたんだ。まあびっくりするでしょ。」

八幡「…わかつた。お前にお願いされるなんてそうそうないしな。これからも奉仕部の部員として全力を尽くすわ。」

そうして俺の奉仕部への滞在が決まった。

それから俺らは色々な話をした。まずは香澄と沙綾の爆弾発言。香澄「そう言えば先輩！あの時私の事香澄って呼んでくれましたよね？」

沙綾「あ、私も…」

そんな事を言つてしまつたために全員をこれからは下の名前で呼ぶことになつてしまつた…何で雪乃と結衣までと、思つたが約束してしまつた以上しようがないか…そしてその後心配かけたからということでデートしろと言られた。

俺なんかとデートしても楽しくなさそうだが…

まあこんなに人数いるから2人ずつにしてもらつた。1人ずつやつたら流石に俺が壊れる…

という訳で俺は今度2人ずつとデートすることになりましたとさ。あつ、2人の組み合わせはなんかクジで決めるつて言つてたな。

ガラツ

ん？

恭子「お怪我は大丈夫ですか？」

そこには恭子さんがいた。

八幡 「（ご）心配をお掛けしました恭子さん。」

恭子さんはベットに腰をかけて俺に抱きついてきた。

八番 「あよつ、恭子さん？」

人情・社会

備が恭子さんを見ると恭子さんは泣いていた。

恭子「八幡くん もうこんな無茶はしないで 私は八幡くんかいな

キムニリコノアハジ・

「…………うう、僕はほんと弱い。辰巳……お口……」

ああ、俺はほんとに弱い。家族にこんなに心配をかけて、

ためにも。

俺は心の中でそう決意した。

乃と共に・・・

い
い
はい、 どーもー八幡でーす。 本日はデートに来てまーす。 はあ、 辛

という訳であの変なテンションは置いておき。ほんとに今日はデートだ。しかも2人と。今日は友希那と雪乃だつたな。つてか友希那と雪乃つて名前めっちゃ似てるわ。：

10時半、駅前に集合して確かワンにやんショードったか？そこへ行くこととなつてゐる。

とか思つてゐると友希那が走つてくる。

友希那
一はあはあ、ごめんなさい、遅れたわ。」

八幡 いんや 大丈夫だ。まだ1人来てねえしな。」

友希那一良が二だ

友希那は安心したようだが

雪乃「ごめんなさい、遅れたわ。」

あれ? ゼンゼンもこのセリフ聞いたような
まいにち。

八幅「大丈夫だ。時間はまだ余裕だしな。
その言つて直は云々を出一。

ん？ 後ろからついてきてねえな。

後ろを振り向くとなんか二人とも服を気にしてた。ああ、そう言え

八番 「2人とも、めつちや服以合つてゐぞ。」

そう言うと2人は顔を上げ

朝から思つてたけどこいつら結構息ぴつたりだな…

ワンにやんショーの会場へは20分もからずに着いた。

八帽
「さてどとの二リカリを見てまれ
『猫!』」
たよなあ

「どうぞお手に取らせて貰う」

友希那、雪乃 「「にやー。ふふふ、可愛い子ね」」

可愛いのは2人も同じだ馬鹿野郎!!って言いたい。だつてあのクールな2人が、猫の前で肉球をふにふにしながら「にゃー」とか言つてんだぞ!?めちゃくちゃ可愛いじやねえか!」

!?

あれ？ もしかして…

八幡一聲に出てた?】

人に二人、と全く

ハントでござりやうござんす。

支那の歴史と文化

えふか
? —

雪乃「そ、そ

いわ。むしろ……」

三

八幡 「良かつたあ、怒つてゐるかと思つたわ。」

友希那 「褒められて怒る人はいないでしょう？」

雪乃「ほんとよ。」

八幡「いや、もし嫌いな奴に褒められたら怒る奴もいるだろ?」

俺がそう言うと2人が俺に近づき

友希那、雪乃、私たちがあなたのこと嫌いなんて思つたこと一度も

な
い
れ
！

と言つてくれた。ああ、良かつた。俺の事嫌いじやないつて言つて

くれて。

八幡 「… ありがとう。」

俺は2人に聞こえないような声でお礼を言った。

それからワンにやんショードを後にし、お昼を食べに行き、ららぽで買い物をする。3人で本屋へと行き俺と雪乃是小説を、友希那は音楽雑誌を購入。それからは時間が余つたためカラオケへと言つた。

八幡「それにしても、友希那はR o s e l i aのボーカルをやつてるだけあつて上手いな。雪乃も友希那と同じくらい上手いし…」

雪乃「そうかしら、私なんてまだまだだと思うけれど…」

友希那「いいえ、雪乃の声は綺麗で私でも欲しいと思うわ。」

と、友希那にも褒められたため雪乃是嬉しくなつたのか上機嫌だ。

八幡「んじや、そろそろ帰るか。」

友希那「そうね、今日はありがとう。楽しかつたわ。」

雪乃「私もよ。ありがとう八幡くん。」

八幡「俺も楽しかつたぞ。ありがとな。」

そして俺は2人を家の近くまで送り届け帰路へついた。

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編） 薫、千聖と共に・・：

友希那と雪乃とワンにやんショーへ行つた次の日。俺は薰と千聖と演劇を見に来ていた。

八幡「演劇か、初めて来たな。」

薰「八幡は演劇を見たことは無いのかい？」

八幡「ああ、演劇に触れる機会がなかつたからな。」

薰「では、今日は楽しんでくれ。」

と、薰は言う。

そう言えば千聖が全然喋らないがどうかしたのだろうかと思いつ聖の方を見る。

千聖「はあ、なんで私が薰と・・・八幡が一緒だからまあいいけど。」
なんか言つてるな。けど声が小さくて聞こえない。

八幡「千聖、やつぱり俺と出かけるのは嫌だつたんじや・・・」

千聖「ふえ!?ち、違うの。えつと・・・そう!これから見る演劇が楽しみで待ちきれなかつたのよ!」

八幡「そ、そうか?それならいいが・・・」

なんか千聖は焦つてたな。やっぱ俺に聞かれたくないことでも呟いていたのか・・・

そんな会話をしながら歩いていると劇場に到着。

八幡「そう言えば今日はなんの演劇を見るんだ?」

薰「ああ、今日は無難に『ロミオとジユリエット』を見ようと思うんだ。」

ロミオとジユリエットか、確かに最終的にはバツドエンドの話だったか?内容はよく覚えてないが・・・

千聖「ロミオとジユリエット・・・久しぶりに見るわね。」

薰「千聖は何年ぶりだい?私は確か3年ぶりくらいだつたかな。」

千聖「そうね・・・私は薰と小学2年生位に見に行つたのが最後だつたかしら。」

へえ、この2人は昔からの知り合いだったのか。まあ千聖は子役もやつてたつて聞くし薫も昔から演劇をやつてたらしいからそのつで知り合ったのか。

そう思っていると

千聖「？： そう言えば八幡には言つてなかつたわね、私と薫は幼馴染よ？」

： なるほどなあ、この2人は幼馴染だつたのか。だから2人とも仲がいいのか。

千聖「仲はあまり良くないわ。」

： さつきから千聖さん、おれの心を読まないでくれませんかねえ・：

薫「八幡はもつとポーカーフェイスを鍛えた方がいいかもね。」
あつ、ちさとだけではなかつたみたいですね・：

そんな雑談をしていると劇が始まつた。

千聖「やはりこの話はいつ見ても悲しいわね。」

八幡「俺も初めて見たがこの話は悲しいな・：」

薫「悲しい、か。私はそうは思わないよ。この話はいつ見ても美しい。ロミオとジュリエットの2人の儚い恋心が、愛がとても美しい。そう思うよ。」

薫はこういう解釈をするのか。やはり人によつて解釈は違うらしいな。薫の解釈も間違つてないし。

それからは3人でカフェに入り演劇の感想を言いつつのんびりと過ごした。

八幡「よし、んじやあ帰るか。送つてくぞ？」

千聖「ありがとう八幡。じやあお言葉に甘えるわ」

薫「私も、お願ひするよ。」

そして俺らは帰路についた。

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）彩、結衣と共に…

千聖と薰と演劇を見た日から3日が経つた日の放課後、これから彩と結衣と放課後デート？ってやつをするらしい。

結衣「彩ちゃん遅いねヒツキー。」

八幡「まああいつはアイドルだし、しようがないだろ。」
と、そんなことを話してると彩が走ってきた。

彩「はあはあ、ごめんね遅れちゃった。」

八幡「いや、アイドルとかやつて忙しいんだからしようがないだろ。今日は仕事のことは忘れて楽しもうぜ。」

結衣「そうだよ！ 楽しもー！」

彩「うん！ よーし、じゃあ今日は遊び尽くすよ！」
という訳で最初に来たのはゲームセンター。

八幡「さてと、何やる？」

彩「あ、私はあれがやりたいな。」

そう言つてUFOキヤツチャーを指さした。

結衣「あ、あのぬいぐるみ可愛い！」

どうやら結衣もやる気らしい。

八幡「よし、じゃあ行くか。」

彩はUFOキヤツチャーに100円を入れスタート。
ぬいぐるみに狙いを済ませていざ！

結果、取れませんでした。

彩「うう、もう1回！」

そう言つて再チャレンジ。

隣では結衣も再チャレンジしている。

結果は…さつきよりもいいところまで行つたのだが取れなかつた。

結衣も同じだ。

結衣「難しい…でも絶対にとる!」

彩「私も!」

そう言つてどんどん100円を投入していく2人。

そして1000円くらい使つたがまだ取れない。

彩、結衣「ううう、なんで取れないのー!?!?」

俺はそこで動く。

八幡「かしてみな。」

そう言つて俺は100円を投入。ぬいぐるみのタグ目掛けてアームを下ろす。そして見事タグにアームを引っ掛けた。結衣のやつも同じくタグに引っ掛け取つた。

彩、結衣「す、すごい…」

俺はぬいぐるみを取り出すと2人に渡す。

八幡「ほれ、やるよ。」

彩「えつ? でも…」

結衣「それはヒツキーが…」

八幡「俺はこれは要らんから2人へのプレゼントだ。」

そう言うと2人はぬいぐるみを受け取り

彩、結衣「ありがとう!」「

と、お礼を言つてきた。

それからリズムゲームや、メダルゲームをした。

そしてその後はサイゼリアへと移動。

八幡「さてと、俺はいつも通りミラノ風ドリアとドリンクバーにするか」

彩「じゃあ私はペペロンチーノとドリンクバーにしよう」と。

結衣「私は…ミートソースナポリタンとドリンクバーにしよう

かな。」

八幡「おけ、じゃあ店員さんを呼ぶか。」

俺はボタンを押して店員さんを呼び注文を行う。

八幡「んじやあドリンク取つてくるけど何がいい?」

彩「えつと、じゃあオレンジジュース!」

結衣「私も！」

八幡「了解。」

そう言つて俺はドリンクバーへと向かつた。

八幡「はあ、美味かつた。やっぱサイゼ最高。」

彩「美味しかつた、それにあの値段の安さ！学生には嬉しい限りだよ～」

結衣「ほんとほんと。あつ、そろそろ帰らないとやばいかも…」時計を見ると7時をまわっていた。

八幡「あー、んじやあ今日はここでお開きにするか。」

彩「そうだね： 2人とも今日はありがとう！楽しかつたよ！」

結衣「私も！」

満足してもらえたようだ。良かつた。

八幡「んじやあ帰るか。家まで送るぞ。」

彩、結衣「ありがとう八幡くん（ヒッキー）!!」

こうして3組目の彩と結衣とのデート？が終わつた。

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）花陽、花音
と共に…

さてと、本日は花陽と花音と出かける。

という訳でいつもの駅前で集合だ。

花陽「あ、八幡先輩。ここにちは。」

花音「は、八幡くん。ここにちは。」

八幡「おう、悪いな待たせた。」

俺が集合場所に行くと2人はもう着いてた。

花音「い、いえ。花陽ちゃんと色々とお話出来たし、大丈夫です。」

花陽「私も、花音先輩とお話出来たので良かつたです。」

良かつた、2人とも仲が良くなつたらしい。

八幡「よし、んじやあ今日はどこに行く？」

花陽「えつと、じやあ花音先輩の行きたいところで」

花音「ええつ!?そ、それは花陽ちゃんに悪いよ。だから2人で行きたいところにしようよ。」

花陽「わかりました。じやあ八幡先輩、一旦お店に入つてそこで決めましょう！」

八幡「お、おう。」

なんだか今日の花陽はご機嫌つて言うか気合いが入つてるつて言
うか…：

そして俺たちは一旦サイゼに入つた。

俺たちはドリンクバーを頼み俺はドリンクバーを取りに行く。
人は話し合いをしていた。

それから30分。

八幡「そろそろ決まつたか？」

花音「はい、私たちは東京の花やしきに行きたいです！」

花やしきか…、またマニアックなところを選んだな…。

八幡「OK、じゃあ行くか。」

まあ俺はどこにでも行けるよう金は多めにもらつてきてるからいいんだが

という訳で着きました花やしき。

八幡「で？ 最初はどれに乗る？」

花音「え、えーとじゃあ… コーヒーカップで！」

おおう… なんか積極的になつたな。

八幡「じゃあコーヒーカップからでいいか？」

花陽「私は大丈夫です。」

そして俺らはコーヒーカップへと向かう。

つ、疲れた… まさか花音があんなにはしゃぐとは… 予想外だ。
花音「は、八幡くん大丈夫ですか？ わ、私はしやいじやつて…」
八幡「あー、大丈夫だ。気にすんな。よし、じゃあ次はどこに行く？」

花陽「メリーゴーランドはどうでしようか。」

うん、いいね。激しい感じのやつに乗つたあとはゆつたりとしたやつに乗る。流石だわ。

八幡「OK、メリーゴーランドに行くか。」

そう言つてメリーゴーランドへと向かつた。

花陽「久しぶりのメリーゴーランド楽しかつたです。」

花音「私も。」

2人ともしつかりと楽しめていたみたいでよかつたよかつた。

花陽「じゃあ次はあれ行きますか？」

そう言つて指さしたのはジェットコースター。

花音「うん、ジェットコースター行きたいな。」

ジェットコースターか… あんまり好きではないが、今日は2人について行くつて決めたしな、行くか。

八幡「OK、行くか。」

ジエットコースターに行つた。結果、やつぱり無理だ。ジエットコースターに乗ると吐きそうになるんだよな…」

花陽「は、八幡先輩、大丈夫ですか？」

花音「八幡くんがジエットコースター苦手だつたなんて…」

八幡「ああ、大丈夫大丈夫、ちょっと休めばなんとかなるさ。それよりも次に行くとこ決めておいてくれ。」

それからは色々なアトラクションに乗つた。2人とも楽しんでいたようで良かつた良かつた。

花陽「八幡先輩、花音先輩、今日はありがとうございました。」

そう言つて頭を下げる花陽。

花音「ええ!? あ、頭をあげて花陽ちゃん！ 私も今日は花陽ちゃんと八幡くんに感謝してるんだよ？ 久しぶりに楽しかつたし。」

八幡「楽しかつたなら良かつたわ。それに俺はなんもお礼を言われるようなことはしてないぞ？ だつてほぼついて行つただけだし…」

花陽「それでもありがとうございました。」

八幡「… おう。俺も2人には感謝してるぜ。久しぶりに遊園地に来れたからな。また来ようぜ、今度はみんなでな。」

2人は笑顔で頷いた。

そして今日は解散となり、2人を家まで送つて行つた。

魔法使いとチート八幡の日常⑨中学生編⑨イヴ、海未と共に…

今日は海未とイヴと出かける、はずだつたが急遽海未の家で遊ぶことになった。何故かは知らんが…：

という訳で今はイヴを迎えに行つている。

イヴ「八幡さん！おはようございます！」

イヴは俺を見つけると笑顔で駆け寄ってきて大きな声で挨拶をする。

八幡「おう、おはようさん。んじゃあ行くか。」

そう言つて2人で海未の家を目指してLet's go!

テンション高すぎたな…：待ち合わせ場所から海未の家はそこまで遠くないため10分程度でついた。

海未「おはようございます2人。では、中にどうぞ。」

そう言つて俺らが入るように促してくれた。

八幡「海未の家に来るのも久しぶりだな…：それで？今日は何をするんだ？」

海未「はい、今日はイヴに武道について教えたいくらい家に呼んだんです。」

ああ、確かイヴは武士道つて連呼してたつけ。

イヴ「えつ!? ブシドーですか!?」

海未「武士道かと言われると違う気もしますがまあ大体同じですよ。」

そう言つて海未は袴を持つてきた。

海未「では、初めは弓道から教えます。まずこの袴に着替えてください。」

そう言つて海未はイヴを連れて部屋を出ていった。

5分後…：

イヴ「八幡さん！どうでしようか？」

イヴは海未と同じように袴をしつかりと着て戻ってきた。

八幡「おお！似合つてるぞイヴ。」

イヴ「ありがとうございます！」

そう言つて喜んでいるイヴの横で海未がもじもじしていた。

八幡「？どうしたんだ、海未」

海未「わ、私はどうでしようか」

そう言つてその場でくるりと1回回った。

なるほど、そういう事ね。

俺はすぐに海未の近くまで行くと頭を撫でながら

八幡「海未も似合つてるぞ。」

と、言つた。

海未「あ、ああああああありがとうございます！」

そう言つてイヴと道場に向かつた。

それからは海未がイヴに弓道を教えていた。

イヴ「弓道楽しいです！」

そう言つて興奮氣味に言つてくるイヴ、それを横目で微笑みながら
見る海未。

どうやらしつかりと仲が良くなつたみたいで良かつた良かつた。

それからは海未が日舞をやつたり俺と海未の異種混合戦をやつた
りと、時間を潰した。

イヴ「海未さん、いえ、海未師匠！私にブシドーを教えてください
!!」

もう日が暮れ始めてもう帰ろうかと思い始めた時間帯、イヴは
突然言い出した。

海未「ブシドーについて教えて欲しいということでしょうか？」

イヴ「はい！今日色々見て私もやつてみたいと思いました。だから
私にブシドーを教えてください！」

そう言つて頭を下げた。

海未はすこし悩んでいた。が、

「分かりました。私が教える、と言つても私も教えられるほどではありませんが、できる限りブシドーについて教えましょう。」

というわけでイヴは海未の弟子？的な感じになつたようだ。

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）リサ、ことりと共に…

さて、今日はリサとことりと買い物をするためにららぽに来ている。なんでも2人はアクセサリーが好きということで意気投合し、仲良くなつたらしい。それと、お菓子作りも好きと言つてたか。

そんなこんなで今は小物屋に来ていた。

リサ「ことり、このアクセ可愛くない？」

ことり「ほんとだ、でもでも、こっちも可愛いよ！」

そう言いながら2人はアクセサリーを見せあつていた。俺はさすがにこの会話には混ざれない。えつ？何故か？いや、普通に考えてみろよ、俺が混ざつたとしていきなり「このアクセめっちゃ可愛いね？」とか言つてみろ、通報されて終わりだろ…

だから俺は後ろから眺めているだけだ。

リサ「ねえねえ、八幡、これどうかな？」

と、いきなりリサが振り返つてそう言つてきた。リサの髪にはさつき可愛いとか言つてたアクセサリーが着いていた。

八幡「…いいと思うぞ？似合つてる」

リサ「そ、そつか。あ、ありがとう…」／＼＼＼＼

そう言つて前に向き直つた。

ことり「むー…ハチ君！ことりのこれは似合う？」

と、ことりも振り返つて俺に感想を求めてきた。俺に感想を求めるのもなんもないと思うが…

八幡「おお、似合つてるぞ？」

ことり「えへへー、ありがと♪」

と、笑顔でそう言つてから前を向き違うアクセサリーを手に取つてリサと話していた。

それから昼になつたので昼飯を食べにマックに来た。

八幡「マックなんて久しぶりだな…何食おうか」

リサ「あたしはダブルチーズバーガーセットでいいかな」

ことり「私はテリヤキバー ガーセットにしようかな」

八幡「じゃあ俺はピックマックセットにするかな。」

そして俺らは注文に行き店で食べた。

食べてる途中で2人にあーんさせられたのにはびっくりしたがそれ以外には何も無かつた。

午後になつたためららぽを後にすることになつた。

なんでもお菓子作りをするらしい。

というわけで今はデパートで材料を買つていて。

ことり「えつと、クツキーだからこれとこれかな？」

リサ「あ、あとこれも必要かな」

そう言つてリサとことりは材料をどんどんカゴに入れていく。

八幡「こんなに必要なのか？」

ことり「うん♪いろんな味が楽しみたいから」

そう言つて俺らはレジに並んだ。

買い物終了、合計金額6950円。
めつちや買つてるやんけ…

買い物も終わつたのでことりの家へと出発!
ちよつとテンションがおかしくなつたな。

歩いている途中、2人はどんなクツキーを作るかとか色々話してい
た。

俺はその後ろで荷物を持ちながらついて行つてただけだがな。

ことり「ここが私の家でーす！」

ことりの家に着いた。結構距離があつたな。

ことり「ただいま！」

リサ、八幡「おじやまします。」

ことり「じゃあ私はエプロンを取つてくるからリビングで待つてて
?」

そう言つてことりは2階へと上がつて行つた。

俺は昔の記憶を頼りにリビングへと向かつた。確かこの突き当たりにあるのがトイレで、その隣がリビングだつたはず。

そしてトイレの隣のドアを開けると案の定リビングだつた。

リサ「ことりの家つて広いね。」

八幡「まあ、お母さんが学校の理事長やつてるからな。」

リサ「まじ!?」

と、そんな話をしていることりがリビングへと来た。緑色のエプロンを付けて。

リサ「おお！ ことり可愛いじゃん！」

ことり「ありがと♪ はいこれリサちゃんのエプロンだよ」

そう言つて青のエプロンを渡した。

リサ「ありがとうことり、じやあ使わせてもらうね。」

そう言つて青のエプロンを着てクッキー作りが始まった。

俺はソファーに座つてテレビを見てた。

20分後：：

ことり「ハーチ君、はいこれクッキー。私が作つたやつだよ。」
そう言つて俺に渡してくる。

リサ「八幡、こ、これ。あたしが作つたクッキー！ あげる。」

そう言つてリサもくれた。

八幡「サンキュー、んじやいただきます。んん、このクッキー美味しいな。市販のやつよりも美味しいと思うぞ？」

ことり「やつた！」

リサ「ほんとに!?」

そう言つて2人とも喜んでいた。

八幡「あ、そうだそうだ。これ2人にやるよ。」

そう言つて俺はカバンから2つの袋を取り出して白い袋をことりに、青い袋をリサに渡した。

リサ「これは？」

ことり「あっ！ これって私たちが見てたヘアアクセサリーだ！」

ちよつと高いから買うのやめたんだけど…」

リサ 「八幡が買つてくれたの？」

八幡 「まあ、今日は楽しかったから？お礼みたいなもんだ。」

リサ 「ありがとう八幡！」

こどり 「ハチ君！ありがとう！」

2人は喜んでくれたようだ。

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）遥、ひまりと共に…

キーンコーンカーンコーン…

今日も一日の授業が終わり放課後。今日は遙とひまりと遊ぶ約束をしていた。というわけで俺は遙の教室へと向かう。

遙「あ、八幡君。」

遙の教室の前に行くとちょうど遙が出てきた。

八幡「おう、タイミング良かつたな。」

そうして俺らは一緒に昇降口へと向かい、靴をはきかえて外へと出る。すると校門の方から誰かが走ってきた…ってかひまりだつた。ひまり「ハチ先ぱーい！」

八幡「おう、わざわざこっちまで来てくれたのか。サンキューな。」

ひまり「いえいえ、先輩方よりも終わるのが早かつたので」

八幡「そうか。んで？今日は何すんだ？」

遙「せつかくだからカラオケとかどうかな？」

ひまり「おお！いいですねカラオケ！」

2人はカラオケに行きたいようだ。というわけで、カラオケに来た。

ひまり「3人でフリータイムドリンクバー付きでお願いしまーす」

店員「はい、ではお部屋は205号室です。ごゆっくりどうぞ」

俺らはドリンクバーで飲み物を取り、205号室へと向かつた。

遙「カラオケ久しぶりだなあ…」

ひまり「私もです！」

八幡「んじやあ誰が先に歌う？」

ひまり「ジャンケンで負けた人から順番に歌つていくのはどうでしょう！」

俺らはその意見に賛成し、ジャンケンを行う。

3人「『じやんけん…ポン！』」

負けたのは…遙だつた。

遥「うう、私が最初かく、緊張するなあ」

そう言つて遙は今日を選曲していく。

遙「うーん、あつ、これにしよーつと」

そう言つて遙が入れたのは『ハナミズキ』だつた。

遙「＼＼＼＼＼＼＼」

：うん、普通にうまいわ。

得点は93点だつた。

ひまり「は、遙先輩。すゞい！よーし、私も負けないぞー！」

そう言つてひまりは選曲していた。曲は『アスノヨゾラ哨戒班』

ひまり「＼＼＼＼＼＼＼」

やつぱりカバーしただけあるな…上手いわ。

点数は92点だつた。

八幡「んじやあ次は俺か…これにするか」

そして俺が選んだのは『時を刻む唄』

八幡「＼＼＼＼＼＼」

ひまり「うそ…」

遙「八幡君上手すぎ…」

八幡「＼＼＼＼＼＼」

ひまり「先輩めっちゃ高い声出てるし…」

遙「いつもの声からは想像もつかないよね…」

いやあ、久しぶりに歌つたがやつぱりいい歌やなあ…

あ、点数は95点らしい。なんかめちゃくちゃ点数高かつたわ…

それから3時間ぶつ続けて歌つた。

遙「いやあ、久しぶりにこんなに歌つたなあ」

ひまり「私もです！楽しかつたです！」

八幡「今度はみんなで来るのもいいかもな…」

カラオケから出ると外はもう暗くなり始めていた。

遙「ねえねえ、この後ちよつと寄り道したいんだけどいいかな？」
俺とひまりは了承し遙について行く。

遥「着いたよ！」

そう言つて来たのはちょっとオシャレな喫茶店だった。

八幡「喫茶店？なんでした」

遙「いやあ、ここで新商品のケーキが出たつて聞いたから気になつちやつて」

ひまり「ケーキ⁈私も食べたいです！」

やはり女子はケーキが好きなのか。

というわけで喫茶店の中に入りその新商品と言われている『フルーツたっぷりミックスケーキ』とやらを2人は頼んだ。俺はホットコーヒーだけ頼んだけど‥‥

店員「お待たせしました。こちらホットコーヒーになります。」

そう言つてコーヒーを俺の前に置き戻つて行つた。

それから2分後くらいにまた店員さんが来てケーキを2つ置いていつた。

八幡「‥‥でかくね？」

遙「そうかな？」

ひまり「そうでもないと私は思いますけど‥‥」

うーん、女子の感性はよく分からん。明らかにでかいと思うんだがなあ‥‥

それから2人は黙々と食べていた。たまにめっちゃうまそーな顔でニヤけているがな。

遙「ねえねえ八幡君」

と、不意に呼ばれたので俺は遙の方を向いた。

八幡「なん‥‥むぐつ⁈」

遙「どう？美味しい？」

俺が遙の方をむくと俺の口の中にケーキを突っ込んできた、まあいわゆるあーんつてやつだな。

八幡「は、遙。何を‥‥」

遙「い、いやあ八幡君だけ食べてないのは可愛そーかなつて思つて。」

八幡「何もお前のスプーンで俺の口に突っ込むことないだろ？」

遙「あ、あう……」////////

うわあ、何この可愛い生き物……

ひまり「むぐぐ……八幡先輩！」

八幡「ん？ むぐつ！？」

o h……お前もかひまり。

2人が食べ終わってから俺はコーヒーを飲み干し、代金を払つて外へと出た。

遙「は、八幡君。お金……」

八幡「いいつて、俺の奢りだ。」

ひまり「いいんですか？」

八幡「おう」

ひまり「……なら、遠慮なく。」

遙「ありがとう八幡君。」

そして俺らは帰路へとついた。

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）蘭、希と共に

希「ハチ君、明日私たちと一緒に買い物に着いてきてくれへん？」

と、昨日希先輩に誘われたので来てみると、なんと蘭も一緒にきた。

八幡「これはまた珍しい組み合わせだな？」

蘭「くじ引きだったんで」

希「うちは蘭ちゃんの事が知れるから嬉しいんやけどね。」

なんか蘭は嫌そだが希先輩はめちゃくちゃ楽しそうだな…：

八幡「で、今日は何を買うんですか？」

希「服でも買いに行こうかなと思つててなあ。」

蘭「私も最近、服が足りなくなつてる気がしてたんでいいですよ。」

なんか上から目線な気がするけどいいか。

八幡「了解、んじやあやつぱり、ららぽですか？」

希「いや、今日は東京にでも行かへん？」

八幡「まあ、別にいいですが…： 蘭は大丈夫か？」

蘭「はい、大丈夫です。」

というわけで、原宿に来ている。

八幡「うげ、人多いな…：」

希「まあ、原宿やししようがないんやない？」

まあそなんんですけどね。

八幡「どこ行きます？」

希「そうやねえ、どこがいいかなあ。」

蘭「竹下通り…とかなら色々あるんじやないですか？」

竹下通りか…： 人が多いが今日は2人の付き添いだからな、行くか。

希「そうやね、じゃあ竹下通りに行こつか。」

そう言つて俺らは歩き始めた。

10分後

おう、俺は今竹下通りに来ているんだが……やばい！何がやばいかつて言うと人の数！めちゃくちゃ人いて行列みたいになつてんだけど…：もうなんか、うん。なんて言えばいいんだろう…：ああ、人がゴミのようだ。これが一番しつくりくるな。

蘭「う、この人の量はおかしすぎ…」

希「うちもさすがにこれは…」

うわあ、あの希先輩ですらこれだぜ？マジでやべえよ…

八幡「とりあえずあのA N A P？って言う服屋でも入りましょうよ。」

そう言つて俺らはA N A Pに入る。

八幡「ここで買つてさつさと帰りません？さすがにこれは死んじやう…」

蘭「そうですね、私も同意見です。」

希「…：これは仕方ないかなあ。そうやね、さつさと服を買つて帰りにららぽよればまた服を買えるからええかな。」

というわけでA N A Pにて買い物スタート。

希「なあ、蘭ちゃん蘭ちゃん、この服どうやろ」

そう言つて希先輩が手に取つていたのは薄紫色と、白のワンピース。

蘭「いいんじゃないですか？希さんのイメージにあつてると思います。」

希「じやあこれにしようかなあ。うーん、ちょっと迷うなあ。」

そう言つてまた服選びに戻つて行つた。

蘭「これ、いいかも…」

蘭は独り言だらうかそう言つて1着服を取つていた。

それは赤色のチェックの上着。蘭に似合いそうな服だつた。

蘭「あつ、でもこっちもいいかも」

そう言つて取つたのは黒のパーカーで、ところどころ赤色のラインが入つてゐる。

蘭「うーん…」

希「そんなに迷うんやつたらハチ君に聞いてみたら？どつちの方が好みですか？つて」

蘭「なつ！」／＼＼＼＼

何やら希先輩が蘭に耳打ちしていたがなんだろう…ん？蘭の顔赤いな。風邪か？

そう思つて俺は蘭に近づきおでこに手を当てた。

蘭「へつ？…なつ！？ちよつ！八幡先輩！」

八幡「熱はないみたいだな。ん？大丈夫か蘭？」

蘭「だ、大丈夫です…そ、それより！は、八幡先輩は、この服とこの服、どちらが好みですか！」

…ん？

八幡「えつとー、なんて？」

蘭「だ、だから！この服とこの服どつちが好みですか!!」

うん、聞き間違いやないらしい。

そうだなあ… 実際どつちを着ても蘭に似合うと思うがなあ。どつちかつて言うと俺は赤色のチエツクの方がいいかなあ。

八幡「…赤色のチエツクの方だな。」

蘭「そ、そうですか。ありがとうございます。じゃあそつちにします。」

八幡「いや、お前の好きな方にしろよ？俺はそこまでファッショントか詳しくないからな？」

蘭「大丈夫です。八幡先輩に決めてもらつたから似合わないはずがないです。」

八幡「そ、そうか…」

何その絶対的信頼。

希「なあハチ君ハチ君。こつちとこつちどつちがええやろ。」

今度は希先輩だ。希先輩が持ってきたのは先程の白に薄紫色の水玉が入っているワンピース。もう1つは白で袖に紫色のライン、左胸に花の刺繡が入ったパークーだった。

八幡「パークーの方ですかね。これから寒くなるからワンピースなんてほぼ着ないでしょ？」

希「そうやねえ、うん。じゃあパークーにしようかな。」
そう言つてレジに向かう。

そして5分後2人は購入し終わつたらしく俺のところへ戻つてきた。

八幡「2人とも大丈夫ですか？」

蘭「はい。」

希「大丈夫。」

八幡「んじやあ帰りますかね。」

そうして俺らの原宿での買い物は終わつた。
ああ、人がゴミのようだつたぜ……

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）歌歩、つぐみと共に…

さてと、俺は今歌歩と羽沢珈琲店でお茶をしながらつぐみを待つていた。

つぐみ「すみません、待つてもらつちゃつて。」ハアハア
つぐみは息を切らしながら俺らのところへと来た。

八幡「いや、店の手伝いだつたんだししようがないだろ。それにつぐみの珈琲も飲めたし良かつたわ。」

歌歩「うんうん、大丈夫だよつぐみちゃん。」

つぐみ「お二人共ありがとうございます！」

八幡「さてと、今日はどこに行く？」

歌歩「うーん、そうだね。どうしよう。」

つぐみ「あ、じゃあ映画とか行きませんか？」

ふむ、映画か。今なんかやつてたかな？

歌歩「映画かあ、そう言えば最近言つてないなあ。」

八幡「俺もだな。」

つぐみ「じゃあ、行きましょう！」

そうして俺らは映画館まで來た。

ふむ、色々と映画がやつてるなあ。ただ、俺が見たいのがアニメ映画しかない。どうしよう…

歌歩「うーん、映画に來たのはいいけど何見よつか」

つぐみ「これとかどうでしよう。」

そう言つてつぐみが指さしたのはなんと「中二病でも恋がしたい t a k e o n m e」だった。

八幡「なあつぐみ。お前、中二病でも恋がしたい知つてんのか？」
つぐみ「はい！テレビでちようどやつてるのを見て、面白かったので見てました。」

まじかあ。まさかつぐみがアニメを見てたなんて… 知らなかつた。

歌歩「うん、じゃあそれにしよう!」

ん? 歌歩も大丈夫なのか?

八幡「歌歩、お前も知ってるのか?」

歌歩「うん、前にちょうど見てたんだあ。」

なんということでしょう。アニメを見る人が2人も身近にいたなんて。

八幡「OK、じゃあこれにするか。」

そう言つて俺らは中二病でも恋がしたいを見た。

八幡「うん、面白かったな。」

つぐみ「はい、面白かったです。」

歌歩「面白かったねー」

俺ら3人は映画が終わると近くの喫茶店に来た。

つぐみ「今回の映画の主題歌良かったなあ。今度みんなに言つて力バーしようかな。」

八幡「ああ、JOURNEYか。まあ歌つてる人がいいからなあ。」
歌歩「ZAQさんだよね。つて言うか今回の挿入歌とかアニメの1期と2期のオープニングとか全部ZAQさんだよね。」

うわあ、なんかめちゃくちゃ感動だわ。アニメの話が身近な人とできるなんて。俺はほぼ恭子さんとしかアニメの話はしないからなあ。それから俺らは映画の内容について色々と話した。

そして俺はふと思つたので聞いてみることにした。

八幡「2人は他にアニメ見てんのか?」

つぐみ「あ、はい。私は一応アフグロでカバーした曲のアニメは見ました。」

となると?なんだ?

八幡「けいおん、ハガレン、進撃、リゼロ、デジモンあとなんだ?」
つぐみ「ハイキュー、銀魂ですね。それは全部見ましたよ。」
まじか、結構見てんだなあ

歌歩「私もたまに見るよ?えつと、物語シリーズとか、あとは僕街とか、あとCLANNAD!」

おお！まさかCLANNADを見ているとは
八幡「まじか！CLANNADはいいよなあ！めちゃくちや感動する！」

歌歩「うんうん、ほんとに。アフターストーリーの方の汐と朋也くんが仲直り？したシーン。あそこで超感動して泣いちやつたよ！」

八幡「だよなあ！」

つぐみ「CLANNADってそんなに感動するんですか？」

八幡、歌歩「ああ！（うん！）」

つぐみ「私も見てみます！」

そんな感じで俺らは夜までアニメトークをしていた。

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）日菜、にこ と共に…

さてと、今日はにこ先輩と日菜と遊ぶ約束だ。つてかこの二人の組み合わせって1番怖いんだが…

にこ「ごめん、またせたわね」

日菜「ごめんねーハチ君。」

八幡「いや、大丈夫。今日はどうするんです？」

にこ「そうねえ、私はどこでもいいんだけど。どーしてもつて言うならあ「日菜はどこか行きたいとこあるか?」ちょっと!最後まで言わせなさいよー!」

日菜「そうだなあ「無視!」私は楽しければどこでもいいかな!」
ふむ、どうするか。困ったなあ

にこ「…水族館はどう?」

八幡「なつ…にこ先輩が、真面目な事言つた…」

にこ「何よその反応!」

いやあ、ねえ?いつもアイドルショッピングだなんだとか言つてるから
今日もそういうのかと思うでしょ?

にこ「今日はちょっとね。」

なんかあんのかな?まあいいか。

というわけで俺らは水族館へと来た。なんかにこ先輩が割引券を持つてきてくれたらしく入場料が1000円からずに済んだ。

日菜「うわあ!クラゲ!」

日菜は水族館に入ると、子供のようにはしゃぎ始めた。

まあ水族館なんてめつたに来ないからなあ

でも、この水族館前に来たことある気がするんだが気のせいかな?

それから俺らは色々と見てまわった。まあ主に日菜がめっちゃ移動するからそれについて行つてるだけなんだが…

まあ、俺も楽しんでるんだけどな。

そして俺らは深海生物のコーナーへと来た。つてあれ!? 日菜がいねえ…。

俺は水槽を眺めるにこ先輩の後ろ姿に問いかけた、

八幡「にこ先輩! 日菜……は。」ドクン

が、俺の頭の中を何かが過った。

あれ? この光景どこかで…。

八幡「ぐつ!?

『深海生物の水槽の前

??? 「うう、お母さーん。どこいつちゃつたのお…」グス

八幡「ねえ、君どうしたの?」

??? 「お母さんとはぐれちやつたの…」グス

八幡「迷子なの?」

??? 「うん。」

八幡「そつか、じやあ一緒にお母さんを探してあげるよ!」

??? 「いいの?」

八幡「うん!俺の友達もだけどいいかな?」

にこ「うん!ありがとう!」

八幡「おーい○○○、○○!この子のお母さんとはぐれちやつたんだって!一緒にお母さんを探してあげよーぜ!」

○○○「うん!わかつた!」

○○「そうね、困った時は助け合いつて言うしね。」

八幡「というわけで自己紹介!俺は比企谷八幡。よろしく!」

○○○「私は結城明日奈だよ。よろしくね!」

○○「私は篠崎里香。よろしく!」

??? 「え、えつと。に、につこにつこにー、あなたのハートににこにこにー、笑顔届ける矢澤にこにこ。にこにーつて覚えてラブにこー。」

3人「[…]」

にこ「う、ううにこの挨拶、変だつたかな?」

3人「[「ううん、可愛かつたよ! いきなりでびっくりしただけ!」]」

にこ「あはは、みんな仲良しなんだね。」

明日奈「もうにこちゃんも仲良しだよ！」

里香「そうそう！」

にこ「あ、ありがとう！」

それからは4人でよく遊ぶようになつた。しかし、突然にこはいなくなつてしまつた。』

確かあの時は明日奈のお父さんとお母さんと一緒にだつたな。

それにあの挨拶この時からだつたな、だからあの時懐かしいって思つたのか。

八幡「すみませんにこ先輩。いや、にこ。今まで忘れてて。」

俺がそう言うと、にこはこつちを振り返つた。

にこ「遅いわよ、バカ」

そう言つたにこの目から涙が落ちていた。

八幡「そう言えば、なんで突然いなくなつたんだ？」

にこ「あの時、東京のおばあちゃんが病気にかかっちゃつて心配だからということで急に引っ越すことになつたのよ。何も言わないでいなくなつてごめんなさい。」

八幡「そういうことならしようがないな。謝ることじゃないさ。」

俺とにこは2人で水族館をまわつていた。

にこ「それでも、明日奈と里香は東京に引っ越してたなんてねえー。それに八幡が私を忘れてるとは。」

八幡「本当に申し訳ない。」

にこ「いいわよ、ちゃんと思い出してくれたんだし。それよりも、今は日菜を探すのが最優先ね。」

八幡「そうだな。」

そして俺らは二手に分かれて探した。

それから10分後、にこから連絡がありやつと見つけたとメールに書いてあつた。

八幡「おいら日菜。どこいつてやがつた。」

日菜「あはは、ごめんねハチ君？」

八幡「はあ、まつたく。まあいいけど。」

というわけで俺らは昼飯を食べまた水族館をまわり、お土産屋でお土産買い水族館を後にした。

日菜「はあ、楽しかつたよ。ありがとうハチ君、にこ先輩！今日は

楽しかつたよ。るんつてきた！」

るんつ？なんだそりや。まあ、いいか。楽しんでくれたみたいだ
し：

八幡「そりや良かつたよ。」

日菜「じやあ私、この後お仕事だから先に帰るね？ばいばーい。」
そう言つて日菜は走つていつた。

八幡「んじやあ俺らも帰るか。」

にこ「そうね。」

俺らも昔話をしながら2人で帰つた。
今日は楽しかつたな。

魔法使いとチート八幡の日常～中学生編～あこ、紗夜
と共に…

俺は今あこ、紗夜と待ち合わせをしている。10時に駅前に集合と言われたから10分前に来たがまだ2人とも来てないらしい。

「すみません、遅くなりました。」

と、紗夜が来た。

八幡 「いや、まだ時間じやないし大丈夫だ。」

た。 何いふ、道に 緑石を以て
緑石の石柱の上に、木の柱

紗夜「あ、えっと。この服は日菜が似合つてるぞ？」
「あ、あります」

と、そこにあこが到着した。

あこ——すすみません、遅れちゃいましたか?】ハアハア

八幡 「いや、まだ時間前だし大丈夫だ。」

あこ 「良かつたあ。」

八幡 それで？今田はどこに行くんだ？

俺は2人にそう聞く

紗夜「私は宇田川さ…あこさんが行きたいところでいいですよ

?

あこ
え？いいんですか？紗夜さん

あこはそう言つたが考えて、あ。

「うーん……あ？、じゃあ私の

あご一矢りん　あご　しゃあ和の家でケーブルでもしませんか？ノ
幡さんは多分ゲーセンとか飽きたんじやないですか？」

まあ確かにゲーセンは最近結構行つてたが……それで紗夜は納得するのか？

「いいですね。行きましょう。」

八幡 「まじで？ 紗夜は本当にいいのか？」

俺は紗夜に聞き返す。

紗夜「ええ、最近私もゲームをやり始めたんですよ。あこさん達と一緒に。」

： まじか。紗夜がゲームを始めたとは思いもしなかった。

八幡「： んじやあ行くか。」

そうして俺らはあこの家へ行くことになつた。

宇田川家

駅から歩いて15分程であこの家についた。

あこ「ではどうぞー。」

そう言つてあこはドアを開け家に入る。俺らはそれに続いた。

八幡、紗夜「お邪魔します。」

あこ「じやありビングに行きましょう！」

そう言つて俺らをリビングへと案内する。

あこ「じゃあくつろいでてください！私は飲みものを持ってきます。」

そう言つて行つてしまつた。

八幡「お、P S 4じやん。ここにあるつてことは今日はこれをやんのか。」

リビングのテレビにP S 4があつたため俺は近づき眺めていた。

紗夜「P S 4、これがそなうなんですか。」

そう言つて紗夜も近づいてきた。

あこ「八幡さん、紗夜さんお茶です！」

と、そこにあるこが戻つてきた。

八幡「サンキュー」

紗夜「ありがとうございます。」

俺らはあこの方へ行きお茶を受け取つた。

あこ「さてと、何りますか？P S 4とW i i Uがありますけど。」

八幡「どつちでもいいぜ。」

紗夜「私はP S 4をやつてみたいです。」

と、紗夜は言う。

あこ「分かりました！じゃあモンハンワールドでいいですかね。」
おお、モンハンワールドがあるならやりたいな。

八幡「モンハンか、懐かしいな。」

紗夜「？そのモンハンとはなんでしようか？」

あこ「モンスターハンターワールドって言つて、簡単に言うとモンスターを狩るゲームです。」

あこはそう説明しリモコンを紗夜と俺に渡す。

あこ「八幡さんは操作方法は大丈夫ですよね？紗夜さんは初めてですか？」

紗夜「ええ」

八幡「おう。」

それぞれがあこの問いかに答える。

あこ「じゃあ紗夜さんが操作に慣れるまで簡単なモンスターにしますか。うーん、イビルジョーでいいですかね？」

俺は絶句、紗夜はわからぬため首をかしげていた。

八幡「いやいや、イビルジョーは初心者には辛いだろ。」

あこ「私が狩猟笛使つて援護するので大丈夫ですよ。」

⋮ こいつはガチのゲーマーなのか。

八幡「はあ、もうお前に任せるわ。」

そうして俺らはイビルジョーを狩りに行く。
結果⋮ 勝つたわ⋮

あこ「紗夜さん！才能ありますよ！初めてなのにあんなに動けるなんて⋮」

そう、なんか紗夜がめちゃくちゃ動けてた。ほんとに初めてなのがつてくらい動けてたわ⋮

それから俺らは昼までいろんなモンスターを狩っていた。
そしてお昼。

八幡「昼飯どうする？」

あこ「なんか買つてきましょか？」

紗夜「そうですね、買って食べましょうか。」

というわけで俺らはコンビニに来て、パンやらおにぎりやらを買った。

八幡「結構買つたな。」

あこ「そうですね、あつ、あれはS A Oの広告だ。」

そう言つてあこは貼つてあるポスターを見た。

あこ「八幡さんはS A O予約しました？」

八幡「ん？ああ、したぞ？ついでに穂乃果も。」

あこ「ほんとですか！あこもしたんですよ、あつ、じゃあ一緒にやりませんか？穂乃果さんと八幡さんとあこの3人で」

ふむ、まあ俺は穂乃果とやるつもりだつたしあこが入つてもいいか。穂乃果も許してくれるだろう。

八幡「おう、いいぞ？一応後で穂乃果にも言つとくわ。」

あこ「やつた！」

紗夜「あの、盛り上がつてているところ悪いのですがS A Oとはなん

でしようか？」

隣にいた紗夜がそう聞いてくる。

八幡「ああ、すまん2人で盛り上がつて。S A OってのはV R M M O R P Gのゲームで、仮想空間でモンハンみたいにモンスターを倒すゲームだ。」

あこ「このゲームはほかのゲームと違つてナーヴギアを使って自分が仮想空間に入つてゲームをするのでモンスターとの戦いを自分で体験できるんですよ！」

紗夜「なるほど…そのゲーム、まだ予約は出来るでしようか。」

驚いたことに紗夜はそう言つてきた。

八幡「あ、ああ。多分ナーヴギアもS A Oも予約出来ると思うが。」

紗夜「そのゲーム、私も興味が湧きました。なので、私も混ぜてくれませんか？」

八幡「…OKだ。まさか紗夜がそんなことを言つてくるとは思わなかつたが。」

あこ「うんうん、まさか紗夜さんがそんなこと言うとは思いませんでしたよ。」

紗夜「ゲームは息抜きになると最近分かりましたので、色々とやつてみたいだけです。」

：：ゲームが息抜きか。紗夜もゲームにハマつてしまつたな。

俺はそんなことを言いながらあこの家に戻つた。

それからは飯を食べたあとWiiUのスマブラをやつた。やっぱりあこが強かつた。

魔法使いとチート八幡の日常⑨ 中学生編⑨ 穂乃果、モ力と共に・・・

あこの家でゲームをした次の日、今日は穂乃果とモ力と遊園地に行くらしい。

八幡「はあ、まあ明日は休みにしてもらつたし楽っちゃ楽か。」
そんなことを呟きながら駅前に到着。そこにはもう穂乃果とモ力がいた。

穂乃果「あ、ハチ君やつと来た〜。」

モ力「遅いですよハチ先ば〜い」

八幡「お前らが早いんだろーが。だつてまだ集合の30分前だぞ？」

そう、俺は集合の30分前に着くようにしたのだが、もう2人はいたのだ。

穂乃果「えへへー、なんか待ちきれなくて。」

モ力「私もでーす。」

八幡「はあ、まあいいや。早く行くぞ。」

そう言つて俺らは遊園地へと向かつた。

さてとやつてきたぞネズミーランド。そう、俺たちはネズミーランドに来ていた。俺は遊園地と聞いたからてつきりそこら辺の遊園地だと思つてたんだが、穂乃果がネズミーランドのチケットを当てたらしくネズミーランドに来たのだった。

八幡「はあ、人が多い・・・」

穂乃果「まあ、休日だからねえー。」

モ力「しようがないですよー。」

俺らは今、ネズミーランドの中を歩きすぐに乗れそうなのを探していた。

穂乃果「あ、スプラッシュマウンテンは20分待だつて。」

ふむ、それならほほ待たなくていいか。

八幡「んじやあ乗るか。」

モカ「先ぱーい、もしかして私の服が濡れて透けるのを期待してたりしますー？」

ん?なんか変なことを言つてる子がいるぞ?

俺はモカの頭にチヨップを食らわせた。

モカ「あ痛ア、痛いですよハチ先輩。バカになつたらどうするんですか。」

八幡「こんなんで馬鹿になられたら困るわ!」

そんなやり取りをしているとすぐに順番が来た。

八幡「初手から絶叫系は嫌だがしようがない、行くか。」

俺らはサツと乗り込み安全バーを付ける。

そしてアトラクションが始まる。

ひどい目にあつたぜ‥俺らは今びしょびしょだった。いや、言うほどびしょびしょでは無いか。

まあ、今日は暑いからすぐ乾くだろ。

ちなみにモカと穂乃果は今、飲み物を買いに行つてる。

そして戻つたら次のアトラクションへと向かうことになつていて。

そうして俺らはスペースマウンテン、ビッグサンダーマウンテン、ホーンテッドマンションなど、色々なアトラクションをまわつた。

そしてこのあとは夕食を食べつつパレードを見る予定になつている。

八幡「パレードを見るなら」こよりももつと見やすいところがいいな。」

モカ「あのへんとかどうですか?」

そう言つてモカが指さしたのはちょっと遠いが人は少なく、ほかの場所よりも高めのためパレードが見やすそうな場所だつた。

そして俺らがそこへ移動したらすぐにパレードが始まつた。

穂乃果「綺麗だつたねパレード。」

モカ「ほんとですねえ。」

俺らは今、帰り道だ。パレードが終わり、俺らはお土産を買うとす

ぐにネズミーランドを出た。

それからずつと歩いている。

八幡「あ、忘れてた。穂乃果、今日のこととは関係ないんだがSAOでること紗夜も一緒にやりたいらしいから一緒にやるけどいいよな？」

穂乃果「あこちゃんはわかるけど、紗夜ちゃんもやるって言うのに
はびつくりだなあ。」

八幡「それは俺も思つた。」

まあ、最近ゲームをやり始めたって言つてたから興味が湧いたつて
言つてたかな、それに本人が決めたことだし俺らは何も言えなか。

モ力「SAO？ ってなんですか～？」

と、今の話を聞いていたモ力が聞いてきた。

八幡「まあ簡単に言うと仮想空間の中に入つて、モンスターを剣で
倒すゲームだ。俺と穂乃果、あこと紗夜はそのゲームを予約してあるか
ら一緒にやることになつてんだよ。」

と言うとモ力はケータイで調べ始めた。

モ力「ふむふむ、なるほど。面白そうですね。これつて、ゲーム
の経験がほとんどない人でもできるんですかね。」

八幡「まあ、できるんじやないか？」

多分。色々と覚えることは多いだろうけど……

モ力「じゃあ、私もやりま～す。今ネットで予約しました～。」

八幡「…まじで？」

モ力「まじでーす。」

穂乃果「モ力ちゃんの行動力が高い…。」

それな！と、思つてしまつた。いや、まじで行動力が高すぎでしょ
？初めて知つて面白そうつてだけで予約するとか…

というわけでモ力も一緒にSAOをやることになつた。

魔法使いとチート八幡の日常（中学生編）25

今日は総武中学校の体育祭だ。体育祭の種目は男子がバスケ、バレーボール、テニス。女子がバレーボール、バスケ、卓球らしい。そして最後に紅組と白組に分かれて行われる棒倒しがある。

ちなみに俺はバスケだ。本当はテニスが良かつたのだが思いのほか人気でジャンケンになり負けた。戸塚と一緒にテニスが良かつた！まあ、負けたものはしようがないか。というわけで俺はバスケになってしまった。バスケのメンバーは俺、葉山、戸部、大岡、大和、少林寺、神木だ。そして神木と少林寺は確かバスケ部つて言つてたな。うちのクラスはちょうどバスケ部2人居るのか。

なら俺の出番はないな。ないよね？

そんなこんなで体育祭が始まる。

雪乃「あら、引きこもり谷君。今日は引きこもらずにしつかりと来たのね。」

八幡「いや、いつも部活行つてんのに今日はつておかしいだろ。」
体育館への移動中、雪乃と会つた。

雪乃「ふふ、冗談よ。そう言えば穂乃果さんと海未さんとことりさんがあなたに伝言で”全力でやってね。”と言つてたわ。」

八幡「まじか。」

雪乃「ええ、全力でやらなかつたら海未さんが正座させて説教すると言つてたわね。」

えええ…

八幡「まあ海未位からなら逃げられるからいいか。それに試合に出なければいいんだしな。」

そう言うと雪乃是笑つた。

雪乃「ふふ、そう。と言つてるわよ、彼は。」

そう言つて俺の後ろへ視線を向けた。

「そうですか。私からはすぐに逃げられるのですか…」

「ハチ君、試合に出るよう葉山君に頼んでおいたよ！」

「ハチ君の全力、久しぶりに見たいなあ」

⋮ やばい、逃げ「逃がしませんよ？」

死んだ。

海未「まったく、今日くらい全力出してもいいでしよう?」

穂乃果「私、ハチ君の全力見たいなあ」

ことり「ハチ君、おねがい！」ウワメ

⋮ これは、出さないと殺されそうなんで出すしかなさそうだ。いや、だがこれなら⋮：

八幡「わかった。だが、条件がある。うちのチームが相手に10点差付けられたら全力を出す。それでいいだろ?」

穂乃果「そういうことなら⋮」

海未「わかりました。」

ことり「私は最初から全力でやるのが見たかつたけど⋮：まあいいかな。」

というわけで俺が全力を出すかはチームメイトにかかっている。頼むぞみんな⋮：

というわけで試合の時間になつた。

葉山「みんな全力で行こう！」

俺以外「おう！」

⋮ ごめんなさい、俺全力出しません⋮：

葉山「ヒキタニ君も頑張ろう！」

⋮ こいつ。

八幡「おい葉山。お前なんで俺の名前わざと間違えんだ?ふざけてんのか?」

そう言うと葉山は一瞬驚いたような顔をしたがいつもの笑顔に戻り。

葉山「悪い、比企谷だったな。じゃあ、頑張ろうぜ！」

⋮ あいつは悪い奴ではなさそまだがな。

戸部「ヒキタニ君の名前つて比企谷つて読むん?ごめん!俺も間違つてたわく。これからはしつかり呼ぶわ!じゃあ俺らも頑張ろう

ゼ比企谷君！」

戸部は俺に近づきそう言つて離れていた。あいつは馬鹿だが悪くは無さそうだな。

そんなことがありつつ試合が始まる。スタメンは俺、葉山、戸部、神木、少林寺だ。

相手にもバスケ部が2人いるらしい。

第2Qが終わり点差は3点差で俺らが勝っている。この分なら俺らの勝ちだな。

俺の予想通り1試合目は難なく勝つた。

2試合目、第1Qでは負けていたが、第2、第3Qで巻き返し勝つた。ちなみに俺は出ていない。

次は準決勝。

準決勝、相手はバスケ部2人にバスケ経験者が3人という優勝候補のA組だ。そして穂乃果達がちょうど応援に来た。雪乃もいる。

葉山「この試合が1番辛いかもだけど、頑張ろう！」

神木「僕が綾崎をマンマークするから、少林寺は崎村をマンマークで止めてくれ。その他は各自マークする人を決めてマンマークな。」

神木がそう言うと全員、「おう！」と言つてコートに入つた。

そして試合が始まる。

最初、俺らは先制する、がしかし、相手に点数を取られそのままズルズルと点を取られて今は16対4と言うなんとも言えない試合になっていた。神木と少林寺はしつかりと相手のバスケ部の崎村？と綾崎？だつたかな、を止めているがその他の奴らも上手いためそいつらに点を取られていた。

ピー!!

そして第1Qが終わつた。… そろそろ出るか。

葉山「ハアハア、強いなやつぱり。」

神木「くそつ、あいつら全員バスケ経験者はせこいだろ‥」

少林寺「どうする、これ以上点差を広げられたら勝てないぞ。」

葉山「そうだな‥ 比企谷、それに大岡。次のクオーターから出でくれ。大和と戸部がチエンジで。」

葉山はそう言つた。言つてくれたのだ。

神木「葉山‥」

葉山「2人は1試合しか出でないしな。せつかくなんだ出でもらおう。」

少林寺「‥ そうだな。そうしよう。」

3人はもう諦めモードだつた。そのため俺は大岡?と交換する大和?に声をかける。

八幡「大和、だつたか? ボール持つたら俺にパスくれ。」

大和「?まあわかつた。」

そう言つて大和はポジションについた。
さてと、勝ちますかね。

243

ピー
第2Qが始まつた。ボールは今は自軍のコートで葉山が持つてい
る。

葉山「大和!」

そう言つて横にいる大和へパス。
と、同時に俺は大和の前へと走る。

八幡「はい。」

大和「比企谷!」

そう言つて大和は俺にパスを出す。

八幡「ナイスパス。」

そして俺は片手でボールをゴールに投げた。

相手モブ1「は? なんで投げたんだあいつ‥」

崎村「シユート? 入るわけねえだろw」

葉山「比企谷、何を‥」

雪乃「彼はなぜ投げたのかしら。普通あんなところからのシュートなんて入らないのは彼でも分かるはずよ？」

結衣「ヒツキーは試合、諦めちゃつたのかな？」

とか、言つてるが俺は知らん。あの3人だけはなぜ投げたのか知つてるしな。俺は穂乃果たちの方を見る。3人は笑つて雪乃達に話していた。

穂乃果「あはは。まあ普通は入らないと思うよねえ。」

海未「あれはほんとにおかしいですかね…」ハア

こどり「まあ、ハチ君だもん。」アハハ

雪乃「? 何を言つてるの? あれは流石に「入るよ。」穂乃果さん?」

穂乃果「あれ。入るよ。」

パサツ

トントントン。

八幡「俺のシュートは落ちん。… なんてな」

そう、決まつたのだ。

超ロングシユートが。

観客『うおおおおおおおお!!!!』

「なんだあいつ!」

「まぐれか? いや、でも、普通にゴールを狙つてたような気がするが…」

「あいつ誰だよ! 俺知らねえぞ! ?」

とか色々と聞こえてきた。

相手も、「まぐれだまぐれ。切り替えていこう。」と言つて切り替えていた。

葉山「君は、あれを狙つたのか?」

八幡「ん? ああ。」

神木「はは、まさかうちのチームにこんな奴がいたとは。」

少林寺「最初から本気出せよ…」

八幡「目立ちたくないからな。ま、この試合は俺にボールを回してくれ。決めとくから。」

この行動は俺らしくないが、10点差付けられたら全力出すつて約束だしな。しゃあないか。

そうして試合が再開。相手はボールを回しながら攻めてくるが、俺はそれをカツトしてそのまま投げた。

パサツ

八幡「ほい、頂きましたと」

⋮⋮⋮

観客『うおおおおおおおおお!!!!』

「まぐれじやねえ!?」

「また決めやがった!」

「ほんとに誰だよあいつ!」

これで相手は俺をマークするだろうな。

案の定、マークを1人付けてきた。だが、1人じゃ甘いな。

俺はまたボールをもらうとそのまま加速してドリブルで相手陣地に持っていく。マークの奴は置いてきた。

崎村「くっそ、止めるぞ!」

そう言つて相手は俺にプレスをかける。が、俺はそれをドリブル チエンジ、ロールターン、ビハインド・ザ・バツクで躲し、そのままフリースローラインから飛んだ。

そしてそのままダンクした。

またも静寂。

観客『はああああああああああ!?』

「うそだろ!? フリースローラインからダンクなんてどんだけ飛んでんだよ!」

「どつかのマンガじやねえんだぞ!?」

「やばい、あの人カツコイイ…」

「ねえ、あの人名前なんて言うのかな! 今度聞いてみようよ! と、観客もそんな感じだつた。

穂乃果「うそ…」

海未「まさかダンクできるようになつていたとは…」

ことり「私もわからなかつたよ‥」

雪乃「カツコイイ‥」

結衣「ヒツキー」//

あいつらもそんな感じだつたな。はあ、目立つのは嫌いなんだ
が‥

神木「よつしや！比企谷にボールを回すぞ！」

少林寺「全力で守りきるんだ！」

うちのチームも団結してきたな。

八幡「葉山、次の攻撃の時俺の後ろから走つてきてくれ。多分俺には3人くらいマークが着くと思うから」

葉山「OK、任せてくれ。」

葉山が疲れているにも関わらずそう返事をする。まああいつもサッカー部だし、根性あんただろ。

というわけで俺は相手のボールをさつさと奪う。そうすると案の定3人のマークがついた。そのうち2人はバスケ部。

崎村「これ以上点は取らせねえ！」

綾崎「このまま止めてやる。」

そう言つて取りに来るが

八幡「遅せえよ‥」

相手の手が俺のボールを触る前に俺はバックハンドパスで後ろから上がつてきてた葉山へとボールをパスする。そして葉山はスリーを決めた。

八幡「ナイツシユー」

葉山「ナイスパス比企谷！」

そうして俺らはペースを掴み、見事勝利した。

雪乃「すごい‥」

結衣「ヒツキーかつこよかつたなあ‥」

穂乃果「ハチ君、やつぱりカツコイイな。」

海未「流石はハチですね。」

ことり「やっぱりハチ君はスポーツを生き生きとしてた方がいいなあ。」

と、5人の少女は独り言のようになっていた。

そして決勝戦。F組ＶＳC組。

C組もバスケ部2人に経験者2人。運動部が3人いるらしい。

F組のスタメンは俺、葉山、戸部、少林寺、神木の5人だ。そして俺は最初から全力で行く。

ピー！ジャンプボールから始まつた。ジャンプボールはうちのクラスの少林寺が先に触り後ろの神木へ回す。そしてそのまま俺へとバスが来た。俺は一気に加速しドリブルで切り込む。そしてフリースローラインからダンクした。

八幡「まず1本。」

観客『うおおおおおおおお!!!』

：なんか観客が増えてる気が…

まあいいか。俺らはそのまま相手への攻撃を緩めず攻めまくる。

ピー!!

そうして第1Q終了。この時点で点差は30点差になつていた。

葉山「よし、これなら勝てるぞ！」

神木「ああ、これなら！」

少林寺「念願の優勝だあ！」

戸部「よつしや行くつしょ！」

そのまま勢いに乗り第2、第3Qも全力でやつた。結果は136対14と言う体育祭ではありえない結果になつた。まあほほ俺が決めたんだが…

そんなことがあり、俺は学校の有名人となつてしまつたのだつた。

魔法使いとチート八幡の日常～中学生編～26

さて、今日は体育祭2日目。棒倒しだ。俺は紅組。葉山が白組にいる。今日の棒倒しは昨日目立つたから何も隠すことは無いため本気で行く。

というわけで1年生の棒倒しから始まる。

赤崎「さあ、今から。1年男子の棒倒しが始まろうとしています！さあ紅組と白組、どちらが勝つかあ～!! 実況は私3年F組の赤崎楓が務めさせていただきます！そしてこちら解説の」「どうも～、同じく3年F組の海老名姫菜でーす。」

「三浦優美子同じく3年F組だし。」

赤崎「この2人に来ていただきましょ～！お2人共よろしくお願ひします！」

⋮ 何してんだ赤崎さんよ。

穂乃果「アハハ、楓ちゃんはスポーツの実況が好きらしくてその手のことになると暑くなっちゃうんだって。」

海未「穂乃果よりもやかましいですね。」

穂乃果「海未ちゃん!? それどういうこと!？」

で俺は赤崎とえ、海老名?とみ、三浦?の実況解説を聞いてようかねえ。

赤崎「あーと。そろそろ試合が始まります！さて、1年生はどのようないい戦いをさせてくれるのでしようか！解説の海老名さん。」

海老名「そうですね。皆さんほんとに全力でぶつかり合うと思います。ふふふ、男子のぶつかり合う姿、キマシタワー!!」ブシヤア

そう言つて鼻血を出した。大丈夫だろうか？：

そんなこんなで1年生の試合は終わり紅組が勝ったようだ。

さて、次の試合は2年生。まあここで白が勝てば面白くなるな。

はい、案の定白が勝ちましたね。というわけで今は紅組と白組は同点だ。

赤崎「さあ、3年生の戦いが始まります！白組にはあの人、爽やかイケメンこと葉山隼人君がいます！対する紅組には昨日のバスケでいきなり現れたダンクショーター。比企谷八幡君がいます！この戦いどっちが勝つか楽しみです。」

さてと、俺らの試合だ。俺のチームには材木座、戸塚がいる。

俺は材木座に声をかけた。

八幡「材木座、試合が始まつたらすぐにコートの真ん中に四つん這いになつてくれ。」

材木座「八幡よ。なぜだ？」

八幡「勝つためだ。そのためには力を貸してくれ。」

そう言えば材木座は必ず乗るはず。

材木座「…ふつ、我の親友の頼み。あいわかつた！何故かは知らぬが四つん這いになつていよう！」

八幡「サンキュー。」

そう言つて俺は定位置につく。

ピー!!

今、笛がなり試合スタート。

赤崎「さあ、試合が始まりましたア！！」

材木座「八幡よ！これで良いのか！」

赤崎「おおつと？材木座君が何故か真ん中に四つん這いになつたぞ？どうしたんだ？」

赤崎以外にも疑問を浮かべている人がいる。俺は四つん這いになつてている材木座に向かってはしつた。

八幡「背中借りるぜ！」

葉山「！彼を止めろ！何か始めるぞ！」

葉山は俺が動いたのを見て動き始めるが

八幡「遅い！」

俺はいち早く四つん這いになつてている材木座のところまで走り、そのまま材木座の背中を使って超跳躍した。それはもうアニメみたいに。まあ魔力をちょっとだけ足に込めたんだが…：

葉山「なつ!?」

赤崎「な、なななななんと！比企谷君が飛んだア―――!!!
俺はそのまま棒に向かつて飛んでいく。」

葉山「棒の下を固めろ！」

八幡「残念ながら物理法則的に俺の方が力は強い！」

そう言つて俺は棒の上の部分を掴み、そのまま流れるように棒を倒した。

観客『……は？』

赤崎「え、えーと。嘘でしょ？」

あれ？なんかみんなめちゃくちゃびっくりしてるんだけど……俺なんかしたかな？

こんな事があり、俺は総武中学校の中では有名になつてしまつた。そして俺のあだ名が『人間の皮をかぶつた化け物』になつてしまつた。いや、長いし普通に悪口だろ……

こんな事があつたが体育祭は無事終了した。

さあ、後3日だ。後3日で始まる。SAOが!!

この時は思いもしなかつた。SAOがデスゲームへと変わると
は……

魔法使いとチート八幡の日常よりいま設定的な？

比企谷八幡

S A O ではハチとしてプレイ。高坂穂乃果、園田海未、南ことり、結城明日奈、篠崎里香、矢澤にことは幼なじみ。

魔法使い。主属性は闇、雷。

精霊は『紅時雨』、『夜桜』、『星龍』の3つを所持。

成績は優秀で武術系統も色々と習っていたため強い。

第107魔獣討伐軍『ヴィルダム』の隊長。

高坂穂乃果

S A O ではホノカとしてプレイ。比企谷八幡が大好き。

比企谷八幡、園田海未、南ことりとは幼なじみ。

μ、s のリーダー。総武中学校生徒会長。

八幡にちよつとした護身術を習っている。

勉強は数学が苦手。

園田海未

比企谷八幡が大好き。

比企谷八幡、高坂穂乃果、南ことりとは幼なじみ。

総武中学校生徒会副会長。

μ、s の作詞担当。

弓道部。

家で日舞等を教わっている。八幡からも護身術を習っている。
南ことり

比企谷八幡が大好き。

比企谷八幡、高坂穂乃果、園田海未とは幼なじみ。
総武中学校生徒会副会長。

μ、s の衣裳担当。

八幡に護身術を習っている。

西木野真姫

比企谷八幡が好き。

μ、s の作曲担当。

ツンデレ。

総武中学校の次期生徒会長候補の1人。
八幡に護身術を習っている。

星空凜

比企谷八幡が好き。

小泉花陽とは幼なじみ。

元気ハツラツガール。

ラーメン好き。

八幡に空手を習っている。

小泉花陽

比企谷八幡が好き。

星空凜とは幼なじみ。

引っ込み思案の性格。

アイドル好き。

ご飯が大好き。

八幡に護身術を習っている。

絢瀬絵里

比企谷八幡が好き。

KKE。（賢い可愛いエリーエリーチカ）

総武中学校の元生徒会長。

バレエをやっていた。

八幡に護身術を習っている。

東條希

比企谷八幡が好き。

占い好き。

総武中学校の元生徒会副会長。

八幡に護身術を習っている。

矢澤にこ

比企谷八幡が大好き。比企谷八幡、結城明日奈、篠崎里香とは幼な
じみ。

アイドル研究会部長。

アイドル好き。

八幡に護身術を習っている。

雪ノ下雪乃

比企谷八幡は気になつて いる人。

奉仕部部長。

毒舌。

猫好き。

雪ノ下家の次女。

合氣道を習つていた。

由比ヶ浜結衣

比企谷八幡が好き。

奉仕部の部員。

料理が苦手。

人と合わせるのが得意。

戸山香澄

比企谷八幡が大好き。

北沢はぐみとは幼なじみ。

文化祭実行委員長。

総武中学校の生徒会長候補の1人。

ポピパのリーダーでギターボーカル。

キラキラドキドキするものを日々探し している。

市ヶ谷有咲

比企谷八幡は尊敬する先輩で気になつて はいる。頭がいい。

ポピパのキーボード担当。

香澄のお守役1人目。

山吹沙綾

比企谷八幡が大好き。

家は山吹ベーカリーというパン屋。

ポピパのドラム担当。

香澄のお守役2人目。

花園たえ

比企谷八幡は尊敬する先輩。
ボピパのギター担当。
天然。

牛込りみ

比企谷八幡は尊敬する先輩。
ボピパのベース担当。

チョココロネ好き

湊友希那

比企谷八幡は気ななる人。
今井リサとは幼なじみ。

R o s e l i a のリーダーでボーカル。
猫好き。

今井リサ

比企谷八幡は気になつてている。
湊友希那とは幼なじみ。

R o s e l i a のベース担当。

料理が得意。

氷川紗夜

S A O ではサヨとしてプレイ。
比企谷八幡は気になつてている人。

総武中学校の風紀委員長。
R o s e l i a のギター担当。

氷川日菜の姉。

宇田川あこ

S A O ではアコとしてプレイ。

比企谷八幡はゲーム仲間の先輩。
R o s e l i a のドラム担当。

宇田川巴の妹。

白金燐子

比企谷八幡とはあまり喋らないが嫌いじゃない。

R o s e l i a のキーボード兼衣裳担当。

宇田川あことはゲーム仲間。

美竹蘭

比企谷八幡は尊敬する先輩。

アフガロメンバーとは幼なじみ。

アフガロのギター兼ボーカル。

青葉モカ

S A O ではモカとしてプレイ。

アフガロのメンバーとは幼なじみ。

アフガロのギター担当。

好きな物には一直線。

山吹ベーカリーのパンが好き。

上原ひまり

比企谷八幡は気になる先輩。

アフガロのリーダー。

アフガロのメンバーとは幼なじみ

宇田川巴

比企谷八幡は尊敬する先輩。

アフガロメンバーとは幼なじみ。

アフガロのドラム担当。

羽沢つぐみ

比企谷八幡は尊敬する先輩。

アフガロメンバーとは幼なじみ。

アフガロのキーボード担当。

海浜中学校の生徒会長候補。

丸山彩

比企谷八幡のことは尊敬していく気になつていてる。

アイドル。

パスパレのリーダー。

パスパレのボーカル。

白鷺千聖

比企谷八幡が好き。

瀬田薫とは幼なじみ。

アイドル。

パスパレのベース担当。

氷川日菜

比企谷八幡のことを面白い人だと思っている。

アイドル。

パスパレのギター担当。

氷川紗夜の妹。

若宮イヴ

比企谷八幡は尊敬している。

パスパレのキーボード担当。

園田海未の弟子。

ブシドーが好き。

大和麻弥

比企谷八幡を尊敬している。

パスパレのドラム担当。

機会いじりが好き。

弦巻こころ

比企谷八幡の友達。

ハロハピのリーダーでボーカル。

世界を笑顔にするために動いている。

瀬田薫

比企谷八幡を友人だと思つていてる。

白鷺千聖とは幼なじみ。

ハロハピのギター担当。

演劇部。

北沢はぐみ

比企谷八幡は友達だと思つていてる。

戸山香澄とは幼なじみ。

ハロハピのベース担当。

家のコロツケが好き。

松原花音

比企谷八幡を尊敬している。

ハロハピのドラム担当。

ここによく連れ回されている。

奥沢美咲

比企谷八幡は尊敬していくかつ気になつていて先輩。

ハロハピのD J

ころのお守役。

綾辻遙

比企谷八幡が好き。

風紀委員。

八幡に頼んで護身術を教わっている。

三上歌歩

比企谷八幡が好き。

風紀委員。

八幡に頼んで護身術を教わっている。

暁恭子

比企谷八幡の姉的存在かつ比企谷八幡を家族として大好き。

暁慶真の妹。

大学生でかつ会社経営もしている。

武術を昔から習っていたため強さは八幡と互角程度。

魔法使い。

主属性は水、風。

精霊は『ダイヤモンドダスト』

第001魔獣討伐軍『アトミック』に所属。

アイリリウォルデゲート

比企谷八幡の保護者の存在。

魔法の研究が好き。

魔法使い。主属性は光、闇

精霊は『サジタリアス』、『黒雲』^{くらぐも}

第001魔獣討伐軍『アトミック』の副隊長。

アレス＝サラトガ

比企谷八幡をライバルだと思っている。

魔法使い。

主属性は炎、光

精靈は『イフリート』、『シャイニングセイバー』
魔獣討伐軍『エレストリア』の団長。

第001魔獣討伐軍『アトミック』の隊長。

マナ・スプラウト

比企谷八幡が好き、そしてライバルだとも思っている。

魔法使い。

主属性は風

精靈は『ヴァエリスター・ガーリア』

第107魔獣討伐軍『ヴィルダム』所属。

レイカ・アイネクライン

比企谷八幡が好き。

魔法使い。

主属性は宇宙

精靈は『パラクティア』

第107魔獣討伐軍『ヴィルダム』所属。

リリーナ・ウエリアム

比企谷八幡が好き。

魔法使い。

主属性は雷。

精靈は『デュアル・ソウル』

第107魔獣討伐軍『ヴィルダム』副隊長。

モカ・ヘリオス

比企谷八幡が好き。

魔法使い。

主属性は水

精靈は『グラシア・レイサー』

第107魔獸討伐軍『ヴィルダム』所属。

暁慶真

比企谷八幡の義父

昔は道場をやっていた。

科学者。茅場晶彦とは知り合い。

車で研究所からの帰り道に事故で他界。

暁咲姫

比企谷八幡の義母

科学者。茅場晶彦とは知り合い。

車で研究所からの帰り道に事故で他界。

S A O 編

魔法使いとチート八幡の日常～S A O 編～1

体育祭から3日後の土曜日、待ちに待つたS A Oのサービス開始日だ。穂乃果達とは始まりの街の武器屋で待ち合わせをしている。

八幡「よし、準備完了つと。じゃあ恭子さん、ちょっとゲームの世界に行つてきます。」

恭子「はい、楽しんできてください。」

八幡「リンクスタート。」

その言葉を合図に俺はS A Oの中へと足を踏み入れるのであつた。恭子「ふふ、次は私も貸してもらいましよう。ん?これは… 傷でしょうか。ナーヴギアに傷が着いてますね。でも、このくらいの傷なら何ともないでしょう。」

そう言つて恭子は八幡の寝室をあとにした。

その傷が八幡のプレイに影響するとも知らずに…

八幡「おおおー。これがゲームの中の世界だと? ありえねえ… ほぼ現実じやねえか。」

俺は目を開けるとそこには新しい世界が広がっていた。現実と言われても過言ではないゲームの世界。俺は遂にS A Oへと足を踏み入れたのだった。

八幡「さてと、武器屋はあれかな?」

俺は武器屋を見つけるとそこの前まで移動した。

穂乃果「ハーチくーん。」

そう言つて前方から俺の名前を呼びながら走つてくる女性がいた。

八幡「穂乃果か?」

穂乃果「うん! プレイヤーネームもホノカだよ!」

八幡「O K、俺はハチだ。」

ホノカ「わかつた!」

そうして俺らはこの世界の話などをしながら残りの3人を待つた。

しばらくしてから銀髪の女性が走ってきて「ハーチ先輩！」と言っているのが聞こえたので声をかけると案の定モカだった。プレイヤーネームもモカらしい。

モカ「先輩、ゲームの中では先輩って呼んじゃダメですかー？」
ハチ「いや、好きに呼べよ。呼び捨てでもいいし、さん付けでも君付けでも先輩呼びでも変わんねえだろ。」

モカ「うーん、じゃあこれからはハチって呼びますねー。」
どうやらモカは呼び捨てに決めたらしい。

ホノカ「モカちゃん！私のこともホノカって呼び捨てでいいからね！」

モカ「わかりましたー、ホノカ。よろしくー。」

ホノカ「うん、よろしくねモカ！」

おお！ホノカが呼び捨てにした…：

それから俺らはあと2人を待つた。

またしばらくすると2人の女性が走ってくる。

あこ「ハーチさん。」

そう呼んでいたのでこちらに呼んだ。

紗夜「すみません、遅れました。」

あこ「紗夜さんが道に迷つてたんで連れてきました！」

ハチ「OK、じゃあ全員自己紹介するか。俺はハチっていうプレイヤーネームにしたから。んで武器は曲刀にするつもりだ。これからよろしくな。」

ホノカ「じゃあ次は私だね！プレイヤーネームはホノカです！武器は細剣にしようかなつて思つてます！よろしくね！あ、あと私のことは呼び捨てで呼んでいいよ！」

モカ「じゃあ次は私がやりまーす。プレイヤーネームはモカです。モカって呼び捨てにしてもらつてかまいません。武器はまだ決めてませーん。よろしくー」

あこ「じゃあ次は私だね！私のプレイヤーネームはアです！武器は

槍にしようと思つてます！よろしくお願ひします！アコつて呼び捨てにしてくださつてかまいません!!」

紗夜「では、最後は私が。プレイヤーネームはサヨです。サヨと呼び捨てにしてもらつてかまいません。武器はまだ決めてません。よろしくお願ひします。」

これで全員の自己紹介は終わつたため全員で武器屋に入る。

それから10分後。

俺たちは街から出てソードスキルの練習に来た。

ちなみにモカは片手剣。サヨは俺と同じ曲刀にしたらしい。あと、それぞれの呼び方が決まつた。俺はいつも通り全員呼び捨て。ホノカは驚くことに俺以外を呼び捨てで呼んでいた。モカも全員呼び捨て。サヨは俺はハチ君と呼び、それ以外は呼び捨て。アコは全員さん付けだ。

ではソードスキルの練習をしよう！

そうして俺らはソードスキルの練習をした。だが、なかなか上手くいかない。

ホノカ「うおおお！はあ！」ザシユツ！パリーン！

横からそんな音が聞こえた。見るとホノカがモンスター、フレンジーボアを倒していた。

ホノカ「…やつた。やつたー！ハチ君ソードスキルが出来たよ！」

まじか…ホノカに先を越された。

その後アコがソードスキルでフレンジーボアを倒した。これで残り3人だ。俺も青い光は出るのだがシステムアシストが発動しないため、まだ微妙なズレがあるんだろう。

ハチ「くつそ、出来ねえ…。なんでだ。ん？」

俺は横を見るとちょっと遠目に綺麗なソードスキルを放つ男が見えた。

ハチ「あの人、 β テスターか？」

アコ「多分、そうですね。ソードスキルが綺麗ですし…」

サヨ「 β テスター?」

アコ「ああ、 β テスターって言うのはこのゲームのサービスが始まる前に事前にこのゲームのテストプレイヤーとしてゲームをプレイしていた人達です。私も応募したんですが当たりませんでした。」

そう言つてガツクリしていた。

ハチ「まあ、今ゲームできてるんだから気にすんなって。それよりも、あの人ソードスキルを教えてもらうか。」

俺はそう言つてその人に近づいた。

ハチ「あのー」

??? 「ひやいつ!?

ハチ「あ、すみません。驚かせてしまい。 β テスターの方ですか?」

??? 「そ、そうですけど…」

ハチ「もし良かつたらソードスキルを教えて貰えませんか?」

俺は男の人にそう頼む。

??? 「ソードスキルですか?いいですよ。わた…俺でよければ教えますよ。」

男の人はそう言つてくれた。

ハチ「あざます。じゃあ自己紹介しますね。」

そう言つて最初にやつたみたいに全員自己紹介をする。

??? 「えつと、わた、んんつ。俺はキリトです。武器は片手剣です。よろしく。」

そうしてキリトに俺らはソードスキルを教えてもらうこととなつた。

魔法使いとチート八幡の日常（SAO編）2

ハチ「うおおお！」

俺は今、ソードスキルを身につけるために猛特訓中だつた。だが、俺は未だにソードスキルを身につけられない。

あつちではキリトがモ力にソードスキルを教えていた。

そして俺の隣ではサヨがソードスキルを練習していた。

ハチ「やっぱり、後ちよつとで出来そうなんだがな…： どうしたもんかね。」

サヨ「私はまだまだです。どうすればいいんでしょう…」

サヨはそう言つて方を落とした。

ハチ「構えがしつかりしてればシステムアシストでソードスキルが発動してくれるらしいんだがな。」

サヨ「構え…ですか。」

ハチ「ああ、確かこんな構えなんだよ。」

そう言つて俺は構えをとる、そうすると曲刀が青い光を放つ：が、その青い光は霧散した。

ハチ「くつそ、何がいけないのかねえ…」

そう呟くとキリトが急いで近づいてくるのが見えた。

ハチ「どうしたキリト？」

キリト「ハチ、もう1回ソードスキルを放つてみて。」

と、キリトは真剣な顔で言う。

ハチ「でも、俺はまだ「いいから」… わかつた。」

そう言つて俺はソードスキルの構えをとる。そうすると曲刀がまたも青い光を放つ： がその光はすぐに霧散する。それを見たキリトは

キリト「やつぱり…」

と、呟いた。

ハチ「？どうしたんだ？」

キリト「ハチ、もしかしたらハチにはシステムアシストがついてないのかも。」

キリトはそう言った。

ハチ「システムアシストが…無い？いやいや、そんなこと有り得るのか？」

キリト「ナーヴギアに不具合があるのか、もしくは壊れてたりするのかも。」

まじか…俺はその話を聞いた時にそう思った。

ハチ「システムアシストがないってことは俺はソードスキルが使えないのか？」

キリト「そういう訳ではないと思う。多分構えから動きまで全て自分でやれば出来ると思うよ。でもそれは全ての動きを丸コピしないといけないから難しいかも…」

なるほど、丸コピか。難しいな…いや、でも出来なくもないのか。

ハチ「サヨ、ソードスキルを放つてみてくれないか？」

俺はサヨにそう言う。

サヨ「えっ？でも、私は。」

ハチ「さつきの俺と同じ構えをとれば多分撃てるぞ。」

サヨ「…わかりました。」

そう言つて俺と同じ構えをとる。そうすると

ズバツ！パリーン！

見事、ソードスキルを放ちモンスターを倒した。

サヨ「出来た！やりました！」

…なるほど、ああいう動きか。

俺はソードスキルの構えをとる。

キリト「ハチ？」

ハチ「確かこうやつて…」

俺は曲刀が青い光を放つとすぐにさつきのサヨと同じ動きをした。

ハチ「こうだ！」ズバツ！パリーン！

俺は見事ソードスキルでモンスターを倒した。

ハチ「よし、出来た。でも、これはいちいち曲刀のソードスキルを1回見ないと出来ないな…どうするか。あ、ならば面倒いからソー

ドスキルなしでも良くね？うん、そうしよう。」

俺はそう決めると全員に武器屋に行つてくる！と言つて武器屋に向かつた。そう言えばキリトが何か言いたそうだつたな。

俺は武器屋に着くと曲刀をもう一本買つた。

そしてみんなの元へと戻つた。

そこにはさつきまでの5人ともう1人違う男の人気がいた。

ハチ「あれは誰だ？」

ホノ力にそう聞く。

ホノ力「あ、ハチ君。えっと、確かクライインさん。だつたかな。ソードスキルを教えて貰いに来た人だよ。」

なるほど。

ホノ力「そう言えばハチ君は何を買いに行つてたの？」

ハチ「ん？ああ、これだよ。」

そう言つて俺はもう一本の曲刀を出した。

ホノ力「曲刀？耐久値無くなっちゃつたの？」

ハチ「いや、そうじやなくて俺はシステムアシストがないらしいからもうソードスキルはいんないんじやねえかなと思つたんだよ。だつたらリアルと同じ動きをしたいだろ？だからもう一本。」

モカ「ハチはリアルで何かやつてたのー？ギターやってるのは知つてるけど…」

モカがそう聞いてくるアコも興味があるらしい。その後ろの3人もこつちによつてくる。

ハチ「ん？ああ、うちは武術の道場だつたから親に剣術やら色々と叩き込まれてな。んで、俺はリアルで刀を2本使うのがなんだよ。だからもう一本買つただけだ。」

アコ「ハチさん、凄いです！」

ん？何が？

キリト「へー、ハチは剣術習つてたんだね。わた、じやなくて俺は剣道をやつてたよ。」

ほうほう、なるほど。

サヨ「だから、あんな動きができるんですね…」

あんな動きとは体育祭の事なのか？

クライン「すつげえあんた！めちゃくちゃかつこいいじやねえか！」

あなたは誰？俺はまだ話してないんだが…
俺がそんな顔をしていると

クライン「おお、すまん。自己紹介がまだだつたな。俺はクライン
だ！よろしくな！」

ハチ「お、おう。ハチだ。よろしく。」

それから俺らはモンスターを狩りまくつた。

キリト「よし、じゃあ今日はこの辺で終わらない？」

ハチ「そうだな。そろそろ5時になるし丁度いいか。」

そう言うとクラインが慌て始めた。

クライン「まじか！俺、5時にピザ予約してたんだよ。早くしねえ
と！」

用意がいいな…：

ハチ「んじゃあまた、いつか会つたらそんときはよろしくなキリト、
クライン。」

ホノカ「私たちもよろしくねキリト君、クラインさん。」

「

アコ「よろしくお願ひします！」

サヨ「よろしくお願ひします。」

モカ「よろしく」

クライン「おう！こっちからもよろしく頼むわ！」

キリト「うん、よろしく。」

そう言つて俺らはログアウトしようとした。…が、

ハチ「あれ？ログアウトボタンが無くな？」

ホノカ「ほんとだ、無いね。」

良かつた、俺一人じやなかつたようだ。

アコ「どう来たんでしょうか。」

クライン「バグか？」

キリト「GMコールしてみたら？」

クライン「今してる。」

サヨ「GMコール？」

アコ「ゲームマスターに連絡を取れるやつです。」
アコが簡単に説明を入れる。

モ力「じゃあ、今頃そのGMコールは鳴り響いてるだろうね？」
モ力がそう言うと突然俺らは青い光に包まれた。

キリト「これは、転移のひか？」

ハチ「ここは…始まりの街？」

ホノカ「ほんとだね…」

周りを見回すと大勢の人がいた。

キリト「なんで転移なんか…」

クライン「GMがログアウトの件の謝罪でもするんじやねーのか
？」

サヨ「それはあるかもしませんね。」

アコ「まあログアウト出来ないのはさすがにバグとしてはまずいで
すからね。」
アコがそう言うと突如赤いフードをかぶつた巨大な人が現れた。

『プレイヤーの諸君私の世界へようこそ。』

いきなりその男が喋り出す。

私の世界？どういう事だ？

『私は茅場晶彦だ。プレイヤーの諸君は既にメインメニューからログ
アウトボタンが消滅していることに気づいていると思う。しかし、こ
れはソードアート・オンライン本来の仕様である。』

クライン「本来の仕様だと？」

クラインがそう呟く。ホノカは俺の袖をつまんでいる。その手は
震えていた。

『諸君らは自発的にログアウトすることは出来ない。また、外部の人
間によるナーヴギアの停止または解除が行われた場合や諸君らのHP
が0になつた場合、諸君らの脳はナーヴギアによつて破壊される。』

男がそう言うと周りはざわつき始めた。

クライン「お、おい、嘘だろ？ そんなことねえよな？」

ハチ「いや、できることとは無い。確か電子レンジと同じ原理で…」

クライン「嘘…だろ？」

ホノカ達4人は座り込んでいた。

『諸君らが開放される条件はこのゲームをくりあすることだ。』

周りからは

「それって100層までクリアしろってことか!?」

「無理だ！ だつてβではそこまで登れなかつたつて聞いたぞ!?」

などという声が聞こえた。

その声を聞き4人は涙を流していた。

ホノカ「ホノカ達帰れない…」 ポロポロ

アコ「嘘…お姉ちゃん、みんな…」 ポロポロ

モカ「…やだよ。みんなに会えないなんて…やだよ。」 ポロポロ

サヨ「…こんなことになるなんて。白菜。」 ポロポロ

クソが、こいつらを泣かせやがつて… 茅場晶彦、絶対に許さねえ。その前にこいつらを泣き止ませねえとな。

ハチ「ほら、みんな泣くな。絶対帰れないなんてそんなはずがないだろ？ 何かしらあるはずだ、ログアウトできる方法が。その方法を多分茅場晶彦は言うはずだ。だからその方法を聞いたらその方法でログアウトして、元の世界に戻ろうぜ？」

そう言うと何とか立ち直ったのか涙は無くなっていた。

『それでは最後に諸君らにプレゼントを用意した。確認してくれたまえ。では、これでソードアート・オンラインのチュートリアルを終了する。』

その言葉を境に周りは騒がしくなった。

俺はまず、4人にプレゼントを見るように言い、俺もプレゼントを見た。キリトとクラインも見ていた。

ハチ「鏡？」

その鏡を見ると光り出す。

そして光が収まつてからまた鏡を見る。そこには

ハチ「俺の顔？」

ホノカ「ハチ君？」

サヨ「これは、私のリアルの顔？」

モカ「ほんとだ…」

アコ「なんでこんなことを…」

そうすると隣のクラインが騒ぎ始めた。

クライン「なんじやこりやあ!?お前はハチなのか!?

ハチ「おう。お前がクラインか。んで? キリトは?」

キリト「…ここに、居ます。」

ん?

その声が聞こえた方を向くとそこには女の子が1人。

ハチ「ま、まままさか? お前が、キリト?」

キリト「う、うん。ごめんね。黙つて。」

まじか… キリトがまさか女だつたなんて。またまに私つて言
いかけてるのには気づいてたけど普段の喋り方がどうなんだろって
思うだろ…

ハチ「はあ、まあいつか。そんなことより今後のことだ。どうする
?」

キリト「その事なんだけど私は次の街に行こうと思う。みんなも着
いてきてくれないかな?」

クライン「ちょ、ちょっと待つてくれ。俺、このゲームはダチと買つ
たんだ。だからそいつらを見捨てて次の街なんて行けねえよ。」

なるほどな。それはしやあないか。

ハチ「なら、俺らは先に行く。だから、さつさとダチつてやつを見
つけて追いついてこいよ。」

俺はそう言つた。

クライン「…わかつた! 後からぜつてえ追いつくかんな!」

ハチ「おう!」

モカ「待つてるよ〜」

サヨ「お気をつけて。」

アコ「あ、じゃあフレンド登録しちゃいましょうよ！」

キリト「じゃあ、追いついてきてね！」

クライン「… おうよ！」

そう言つてクラインは俺たちとフレンド登録をして走つて行つた。

ハチ「んじゃあ俺らも行くか。案内頼む。」

そう言つてキリト達と歩き始めるとホノカが

ホノカ「雪穂!?」

と叫んだ。

つて、雪穂!?

ハチ「ホノカ、なんて言つた？」

ホノカ「いま、雪穂と亜里沙ちゃんっぽい人が黒髪の女の子と一緒に街の外に出て行つたの」

まじかよ…：

キリト「その、ゆきほ? って子は知り合い? あと、ありさつて子も。」

ホノカ「雪穂は私の妹。亜里沙ちゃんはそのお友達。」

サヨ「妹さん…ですか。」

ハチ「なあ、雪穂はS A Oをやるつて言つてたのか?」

ホノカ「わかんない。でも私はやるつて言つてたから興味を持つてたのかも。前、お母さんと何か話してゐたし。亜里沙ちゃんもS A Oに興味を持つてるつて絵里ちゃんから聞いたから…」

それはまずいな。それだとほぼ確定で雪穂と亜里沙がここに居るだろう。そして街の外に出たつてことはモンスターにやられる危険もある。

ホノカ「どうしようハチ君。雪穂が、雪穂が死んじゃつたら！」

ハチ「… 追いかけよう。」

キリト「なつ… 無茶だよ!! この広いフィールドの中でフレンド登録していない人を探すなんて！ ねえ、どこかで会えるかもしれないしさ、先に次の街に行こ？」

ハチ「… それじゃダメなんだよ。俺にとつても大切なやつなんだ。昔つからホノカと俺らと一緒に過ごしてきた幼なじみだ。だか

ら放つてはおけない。俺は無茶だろうがなんだろうが探しに行くぞ。
それが兄貴分である俺の役目だから。」

ホノカ「私も行く。妹だもん！絶対に探し出すよ！」

キリト「なんで、そんな。死んじやうかもしれないんだよ！それに

ハチはシステムアシストだつて…」

キリトは俺の心配をしてくれている。それは十分わかっている。

だが、

ハチ「キリト、俺は必ず戻つてくる。絶対に。だからこの3人を頼む。この3人に戦闘を教えてやつてくれ。」

俺はキリトにそういった。

キリト「わかった。でも、絶対に来てね。待つてるから。」

ハチ「おう。」

そう言つて次はアコに向かう

ハチ「アコ」

アコ「は、はい。」

ハチ「お前はゲームマード。ゲームが得意なんだ。だからこの2人をお前も支えてやつてくれ。それとキリトのこともお前が守つてやってくれ。な？」

アコ「わ、わかりました！その代わり。私からもお願ひです。絶対に戻つてくださいね？」

ハチ「ああ、約束する。」

その次に俺はサヨとモカと向かい合う

ハチ「サヨ、モカ、2人はこんな所に来させちまつてほんとに申し訳ないと思つてる。恨んでるなら俺を殺してくれても構わん。ただ、死のうとだけは思わないでくれ。そして、生きようと思つてるのならキリトについて行つて、戦闘を学んでくれ。俺を殺したいなら後でしつかり時間を設けるからそれまで待つてくれ。」

俺がそう言うと2人に叩かれた。

サヨ「あなたは馬鹿ですか！私はあなたを恨んでなんかいません

！」

モカ「私もだよ。これは私たちが自分で考えてこのゲームをやろ

うと思つたんだから自業自得だよ！」

サヨ「そうです。それに私はこんな所で死のうなんて思ひません！
だつて妹が、日菜が待つていますから。」

モカ「モカちゃんもこんなところで死ねないな。だつて皆が待つ
てるし！」

：「こいつらは心配しなくとも大丈夫だつたな。心が強いからな。
ハチ「ああ、そうだつたな。待つて奴がいるから死ねない。そう
だな。悪い、変な事言つたわ。じやあ生きるために、キリトに戦闘を
学んでくれ。」

サヨ、モカ「わかりました（わかつた）」

ハチ「キリト、俺はホノカとさつき言つていた雪穂達を探しに行く。
だから3人を頼んだ。」

キリト「うん。」

ハチ「よし、行くぞホノカ！」

ホノカ「うん！」

こうして俺とホノカは雪穂と亜里沙を探すためキリト達とは別行
動となつたのだつた。

魔法使いとチート八幡の日常（SAO編）3

ハチ「…はあ」

ホノカ「ハチ君、大丈夫！あの時のハチ君かつこよかつたし！」

ハチ「はいはい、ありがとなー」

ホノカ「なんか返しが適當だ!?」

俺は今猛烈に叫びたい。え？なんでかつて？そりやあもう、ね？あんな黒歴史みたいなことしたあとですから…はあ、最悪だ。

ハチ「はあ、気にしてもしやあねえか。終わつたことだしな。」

俺はそう言うと頬を叩く。

ハチ「よし！今はそんなことより、雪穂と亜里沙を探すか！」

ホノカ「うん…」

やつぱりホノカは元氣がない。心配なんだろうな。

俺はホノカの頭に手を置き、撫でる。

ハチ「大丈夫だ。あいつは俺の妹分でホノカの妹だ。そう簡単に死にはしないさ。」

ホノカ「そう…かな。うん、そうだよね！雪穂は強い子だもんね！よーし！じやあ探しに行こう！」

そうして俺らは森へと入つていく。

ハチ「ふつ！」ズバツ！パリーン！

ホノカ「はあ！」ズバツ！パリーン！

森の中はやはりモンスターが多かつた。

その分レベルも上がるが…

ハチ「それについて、この森、広いな…」

ホノカ「そうだねえ…あれ？ハチ君、この音つて…」

ホノカがそう言つて耳をすませる。俺も耳をすませるとキイン！

キイン！と、どこから聞こえてきた。

ハチ「誰かが戦闘をしているな。」

ホノカ「うん、大丈夫かな？」

ハチ 「そうだな、雪穂達のことも聞きたいから行つてみるか。」

そうして俺らは音のする方へと向かつた。

キン！キン！

どんどんと音が近づいてくる。

「はあ、はあ、イッキ！これじやあ切りがないわ！」

「どうやら僕達は、モンスターの群れに遭遇してしまつたみたいだ。」

「はあ、はあ、この剣、やっぱり使い慣れてないから使いづらいし：・」

「これはちょっと、まずいかもね。」

そんな声がしてきたため俺とホノカは急ぐ。

そしてちよつと開けたところで黒髪の男と赤髪の女がモンスターに囲まれていた。

「はあ、はあ、：・はアアアア！」ズバツ！パリーン！

「ステラ！後ろ！くつ！ステラアアア!!」

「えつ!?きやああ!!」

赤い髪の女が1匹のモンスターを倒すのに合わせて後ろからモンスターが飛びかかる。赤髪の女はソードスキルを使つたため反応が遅れた。黒髪の男もモンスターに阻まれる。

もうダメか、そう思つた瞬間横からソードスキル『リニア』が放たれ、モンスターがポリゴンとなつて消えた。

「えつ？」

赤い髪の女が顔を上げると、そこには細剣を構えたホノカがいた。

ホノカ「大丈夫？」

ハチ「あらよつと！」ズバツ！パリーン！

その後ろからほかのモンスターを倒しながらハチが追いかけてきた。

ハチ「大丈夫か？危なそだつたから介入したんだが：・」

「ああ、助かつたよ。ありがとう。」

ホノカ「いいいえ、それよりも今は」

ハチ「前の敵に集中だな。」

そう言つて俺らはモンスターを見る。

「ありがとう。恩に着るよ。」

ハチ「こんな状況なんだ、困つたらお互い様だ。よし、じゃあ俺らは左をやるから右を頼めるか？」

「わかった。」

そう言つて俺とホノカは右を、黒髪のやつと赤髪のやつは左を殲滅することになった。

ハチ「よし、行くぜホノカ！」

俺はホノカよりも先に飛び出す。そして相手の攻撃を右手に持つている曲刀で弾く。そしてそのまま左手で持つている曲刀でモンスターを切った。

ハチ「ホノカ！」

ホノカ「うん！」

そしてそのモンスター目掛けて俺の後ろからホノカが飛び出しそのまま『リニア』を放つた。

パリーン!!

ハチ「よし、まず一体！」

そのまま他にいるモンスター達も倒していく。

パリーン！

ハチ「はあ、はあ、これで全部か？」

ホノカ「そう、みたいだね。」

俺らは最後の1匹を倒すとあたりを見回した。

ハチ「よつし、もうモンスターはいらないらしい。ふいー、疲れたあ。」

ホノカ「でも、レベルも結構上がったよね。」

そう、相手が群れだつたため、結構の量のモンスターがいた。それを倒しきつたため経験値も結構な量入ってきた。

「ありがとう。君たちのおかげで助かつたよ。」

そう言つて、黒髪の男が近づいてきた。後ろから赤髪の女も近づいてくる。

ハチ「いや、さつきも言つたように、困つた時はお互い様だ。」

「それでも、君たちは僕達の命の恩人だよ。ありがとう。」

「あ、ありがと。」

そう言つて2人とも頭を下げた。

ホノカ「あ、頭を上げてよ。えっと…」

ホノカがそう言うと頭をあげる。

「そう言えば自己紹介をしていなかつたね。僕はイツキ。武器は曲刀。よろしく。」

「わ、私はステラ。武器は片手剣よ。よろしく。」

ホノカ「イツキ君とステラちゃんだね！よろしく！えっと、私はホノカ。武器は細剣。よろしくね？」

そしてホノカは俺を見る。

俺の番か。

ハチ「俺はハチだ。武器は曲刀。よろしく。俺も自己紹介をした。

イツキ「そう言えば、ハチはなんで曲刀を右と左で持つているの？それだとソードスキルを使えないはずじやあ…」

ハチ「ああ、なんか不具合で俺はシステムアシストが発動しないんだよ。だからソードスキルが使えないんだ。」

そう言うと2人は驚く。

イツキ「そ、それじやあ、ハチはこれからずっとソードスキル無しで行くの！」

ステラ「それじやあ、すぐに死ぬわよ！？」

2人ともそう言つてくる

ハチ「いや、別に大丈夫だ。リアルでも剣は扱つてたしな。なんとかなるさ。」

そう言つて、俺は一旦話を切る。そして本題を聞くことにした。

ハチ「なあ、イツキとステラに聞きたいんだが、茶髪でこの位の身長の女の子と金髪のいかにも外人つて感じの女の子は見なかつたか？」

そう言つて俺は肩らへんの身長だと言うことをジェエスチャーする。

イツキ「うーん、見てないなあ。ステラは？」

ステラ「その子なら私たちが街を出る前に街の外に出ていったのを

見たわ。でも、黒髪の女の子も一緒だったはずよ。」

ハチ「そうか。ありがとう。俺らはその子達を探さなきやいけないからもう行くわ。」

そう言つて俺とホノカはイツキ達に別れを告げそこから移動しようとする。そこにイツキが声をかけた。

イツキ「ハチ！ 僕達も探すの手伝うよ。さつきの恩もあるしね。」

ステラ「ええ、借りはしつかりと返すわ。」

と、言つてくれた。

ハチ「ホノカ、どうする？」

ホノカ「2人じや確かに辛いかもね。ここはお言葉に甘えてもいいんじやないかな？」

まあ、確かに。

ハチ「わかつた、じやあ頼む。」

こうして俺らはイツキとステラの協力を得た。

ハチ「ここからは手分けして探そう。」

俺はそういった。

ホノカ「でも、もうそろそろ夜だし、危ないよ？」

ハチ「ああ、だから早急に探し出したいんだ。だから手分けして探そう。落合は始まりの街の武器屋。俺とイツキはソロ行動。ホノカとステラは2人で行動してくれ。」

俺はそう言つた。

ステラ「なぜイツキとハチがソロなの？」

ハチ「見た感じ、イツキは剣の扱いになれているがステラはその剣にまだ慣れていないから。それにイツキはリアルで剣を扱つてるだろ？」

そう言つとイツキは驚いた。

イツキ「なぜ、そう思うの？」

ハチ「お前の動きは剣術を習つているものの動きに似ていた。だからだな。」

イツキ「そうなのか。でも、それが分かるつてことは」

ハチ「ああ、俺も剣術は習っていたからな。」

イツキ「なるほど、道理で構えが綺麗なわけだ。」
イツキが納得した所で、俺は話を戻した。

ハチ「そういうわけだから俺とイツキはソロで行く。時間が無いからな日が沈んだらすぐに戻ること、それだけは頭に入れといてくれんじゃあ、行くぞ！」

こうして改めて雪穂、亜里沙の捜索が始まった。

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／4

デスゲームが始まつてから1週間が経つた。まだ、雪穂と亜里沙はみつかっていない。今日もホノカとイッキとステラと探しに行くつもりだが……

ホノカ「それにしても、結構探しているのに見つからないね、ほんとに……」

ハチ「大丈夫だよ。目撃証言は何回か聞いてるんだから、どつかにはいるだろ。」

そう、色々と聞き込みをしていると目撃証言だけは多くあつた。亜里沙が目立つからだろう。だから、死んではいなはずだ。

ハチ「よし、今日も3つに分かれて捜索しよう。」

イッキ「そうだね、今日こそは見つけよう！」

ステラ「ほら、いつまでも顔を下げてないのホノカ。目撃証言があるんだから、今日見つければいいのよ。」

ホノカ「……うん、ありがとうステラ！」

そう言えば、いつの間にかホノカはステラを呼び捨てにしてたな……まあ、仲良くなつたつてことだろう。

ハチ「よし、じゃあ今日の捜索範囲なんだが、俺が右の森を、中央がイッキ、そして左側がホノカとステラが捜索してくれ。集合はいつも通り7時くらいの日が落ち始める時間。場所はいつもの武器屋の前だ。んじやあ行こう！」

3人『了解！』

そう言つて俺らは分かれた。

さてと、俺も気合い入れて行きますかね。

ハチ「ふつ！」ズバツ！

俺は今、森でモンスターの群れと対峙していた。

ハチ「はあ、まさか群れに遭遇するとは……運がねえなあ。まあ、やるかね。」

そう言いながらも俺はモンスターをどんどん倒していく。

それから30分後

ハチ「ラスト！つと。終わつた！」

群れの最後の1匹を倒すとレベルが上がつたらしく、音が鳴る。

ハチ「おつ、レベルが上がつたのか。あ、スキルの熟練度も結構上がつてるな。」

そう言つて俺は自分のステータスを割り振つていた。俺は俊敏がちよつと高いバランスの良いステ振りをしている。そして俺のレベルは今25だ。えつ？1層で1週間しか経つてないのになんでそんなにレベルが上がってんのかつて？なんかこのゲームは、群れのモンスターを倒すと経験値が多く貰えるらしい。そして俺は、何故か知らないけど、めちゃくちゃ群れのモンスターと戦つていたのだよ。

だからレベルとスキルの熟練度がおかしいのさ。

そんなことを考えながら森の中を歩いていると、奥の方から剣の音が聞こえた。

ハチ「誰かモンスターと戦つてんのか？」

そう思い、俺は索敵スキルを使つた。

そこで索敵されたのは、今までのモンスターとは違う大きめのモンスターと、プレイヤー2人だつた。

ハチ「これはヤバそうだな…」

そう思い、俺はモンスターへの奇襲を行うためフードをかぶりそのモンスターがいる方へと走つた。

「グオオオオオオ！」

「ひつ、や、やめて。こつち来ないで！」

「くつ、この状況、どうしよう…あいつなら。」

俺がモンスターのいる所に着くとそこには俺の見知つた2人がいた。1人は栗色のロングヘアの女の子。もう1人は茶髪のショートカットの女の子。そして、俺が会いたかつた…幼なじみ。

モンスターはその2人に襲いかかろうとする。

2人は目を瞑つていた。

俺はスピードを上げ、モンスターと2人のあいだに入り両手に持つている2本の剣で攻撃を受け止め、弾く。

そしてそのまま、モンスターに追い打ちをかけた。

ハチ「ふつ！はあ！」

俺はスピードを使って敵の攻撃を避けつつ少しずつ敵にダメージを与えていた。

そして、あと少しという所で最後の意地なのか、モンスターの攻撃スピードが上がる。

そしてモンスターは俺の顔面目がけて攻撃を仕掛けてきた。俺はそれを間一髪避けるが、フードに当たってしまったらしく、フードは耐久値が無くなり消えてしまった。

「えつ!?」

「あれって…まさか…嘘。」

2人は俺のフードが取れたことにより俺だと気づいたらしい。

俺はラストスパートを掛け攻撃のスピードを上げた。

そして遂に

パリーン!!

モンスターはポリゴンとなつて消えた。

ハチ「ふう、終わつたか。」

そう言つて振り向こうとする後ろに衝撃が走る。

ハチ「うお!!」

「ハチ君!!」ダキツ

「ハチ!!」ダキツ

どうやら2人が俺の背中に抱きついてきたらしい。

ハチ「おい、2人とも、一旦離せ。」

2人『嫌だ!!』

はあ、子供かっ！つて思つたが、よく良く考えればさつきあんなことが起こつたんだ、しようがないか。

そう思い、俺はもう何も言わなかつた。

ハチ「さてと、まずは、久しぶりだな里香、明日奈。」

明日奈「うん、ハチ君、久しぶりだね。会いたかったよ。」

里香「私も、会いたかったよ、ハチ。」

まあ、俺もなんだが、そこは置いておいて。

ハチ「2人はなぜここに居る？」

里香「私と明日奈は別々の学校に転校したのはわかるでしょ？でも、別々ではあつたんだけど、隣の学校で、家も結構近かつたから、よく遊んでたんだ。」

明日奈「そして、里香がS A Oと一緒にやらないかつて言つてきて、面白そだからやることにしたの。」

なるほど、だからここに居るのか。

ハチ「なるほど、それでここで出会えた訳か。」

里香「そういうこと。」

明日奈「それにしても、ハチ君は強いね。さつきのモンスターにも負けなかつたし。」

ハチ「まあ、ちょっとレベルが高いからな。」

里香「そうなの？」

明日奈「どのくらい？」

そう聞いてきたので最初に注意をする。

ハチ「こら、明日奈。ほかの人にレベルとかスキルスロットに付けてるスキルとか、聞いちゃダメだぞ？俺は別にいいけどよ。」

明日菜「そうなの？」

ハチ「ああ、こういうゲームでは普通だよ。」

そう言うと明日奈はわかつた。と言つて頷いた。

ハチ「んで、俺のレベルの話だよな？俺のレベルは25じゃなくて今戦闘でレベルが上がつたらしいから26だ。」

そう言うと2人はびっくりしていた。

里香「26！？」

明日奈「す、すごい……私はまだ13だよ……」

ハチ「まあ、初日から色々とやつてたからなあ」

明日奈「色々？」

ハチ「ああ。」

そう言つて、初日から今日までのことを話た。ホノカの妹の雪穂と、その友達の亜里沙をずっと探してるとか、群れのモンスターと

いっぱい戦つたとか。その話をするとき明日奈と里香が話している。

俺はどうした？と聞くと

明日奈「その2人の女の子ならついさつきここから西の方に走つてたよ？もう1人の女の子もいたけど。」

という、話をしてきた。

ハチ「本当か！？」

俺は明日奈と里香に詰め寄る。

里香「う、うん。」

ハチ「そうか、ありがとな。」

俺はそう言つてそこを立ち去ろうとする、が、それを里香と明日奈が止め、

明日奈「ハチ君、私たちも手伝うよ！」

里香「さつきも助けられたしね！それに、幼なじみが困つてたら助けるのも幼なじみの役目でしょ！」

と、言つてくれた。

ハチ「2人とも… ありがとう。」

明日奈「うん！じゃあ改めて、私はアスナだよ！武器は細剣、よろしくねハチ君！」

里香「私はリズベットよ、武器は片手棍。よろしくハチ！」

ハチ「ああ。よろしく頼む。俺はハチ、武器は曲刀だ。」

そうして、俺は新たに2人の仲間が出来た。その2人は俺の大切な… 幼なじみ。俺を昔、1人ぼっちという粹から救つてくれた大切な人達だった。

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／5

ハチ「確かに西の方に走つていつたんだな？」

アスナ「う、うん。だよねリズ？」

リズ「うん、西であつてるよ。」

俺たちは3人でさつきいた場所から西へと走つている。

なぜ西に走つているかというと、2人が西の方へ走つていく雪穂と亞里沙を見たからだ。

そうして西に走つていると、森が開けて村が見えてきた。

ハチ「こんな所に村だと？」

アスナ「あ、人がいるよ？」

そう言つて家の方を見ると、そこにはNPCがいて、『武具店』と書いてあつた。

ハチ「こんな所にも武器屋があんのか… ちよつとよつてみるか。」
リズ「そうだね、それに武器屋なら、同じプレイヤーがいるかもだ
し。」

という訳で武器屋へと向かう。

中に入ると、色々な武器が置いてあつた。

しかも、それは全て1層にしてはステータスが高い武器だつた。

ハチ「まじか… このステータスなら3層位まではもつぞ？」

アスナ「でも、ちよつと高いね。」

まあ、こんなにステータスがいいからな、さすがに値段も高くなるわな。

だが、俺は買えないほどではない。つてか2本くらい買えるな。

ハチ「…よし、俺はこれを買うか。」

俺は考えた末、この曲刀を買った。名前は『ファンタム・ブレイド』。俺はファンタム・ブレイドを2本買う、その後スキルを取得した。俺は確認してみるとそこには『居合』と書いてあつた。

ハチ「…これは、エクストラスキルってやつか？」

アスナ「?どうしたの?」

リズ「ハチ、自分のステータス見て、何してんのよ…」

ハチ「いやいやいやいや、別にそういう訳ではねえよ。なんかスケルが増えたからどんなのか見てたんだよ。」

そう言うと2人とも納得したようで、また武器を見始めた。

さてと、俺はそちら辺でプレイヤーでも探してみるかね。

俺は2人にプレイヤーを探してみる、と言つて武器屋から出た。

そして村を探索していく。

そして村の北側へと行くと前から3人組のプレイヤーが歩いてきた。

ハチ「お、あの人たちはプレイヤーか。よし、行つてみるか。」

そして俺は3人に近づき、声をかけた。

ハチ「あの、すみません。ちょっとお聞きしたいんですけど。」

俺は真ん中の人に声をかける。

「どうしたんですか?」

ハチ「えっと、茶髪で俺の肩くらいの身長の女の子と金髪の女の子のプレイヤーって見てませんか?」

俺がそう聞くと、右の人が

「ああ、その2人ならさつき僕達の近くでモンスターと戦つてたよ?あともう1人、黒髪の子もいたけど。」

「ああ、あの子か。確かに、モンスターと戦つてたな。多分レベリングだと思うぞ?」

ハチ「わかりました!ありがとうございます!!」

俺はそう言つて3人に頭を下げて武器屋へと戻つた。

「あ、行つちまつた…」

「あの少年、強そうでしたね。」

「ああ、多分俺らよりも3くらいレベル高いんじやねえか?」

「また会いたいですね、隊長。」

「だから、ここでは隊長はやめろつて。」

「あ、すみません。」

そんな話をしながら3人も歩いていった。

俺は急いで武器屋に戻りアスナ達にさつきのことを話した。そうすると、

アスナ「わかった、じゃあ早く行こう！」

リズ「ええ、早く行かないとまた見失っちゃいそうだしね。」
そう言つて準備をし始めた。

ハチ「武器はいいのか？」

リズ「そんなのあとあと。今は2人を見つけるのが最優先よ。」

アスナ「そうそう。」

そう言つて2人は武器屋を出た。

ハチ「サンキューな。」

俺はそうつぶやき、武器屋を出る。

そして俺たちは、さつきの3人が来た方の森へと向かつた。

森に入つてから20分、まだ見つけることが出来ていなかつた。
ハチ「クソ、どのへんで見たかも聞いておけばよかつた…」

そう言つた直後、微かに剣で斬る音が聞こえた。

アスナ「いま、音が聞こえたようだ。」

アスナも聞こえたらしい。

ハチ「ああ、聞こえたな。よし、行くぞ！」

俺はその音のした方へと向かつた。

それから5分後森の中の開けた場所が見えた。そしてそこで戦闘をしている3人組の姿も見えた。

1人は昔から知っている、茶髪で青い目、俺が妹のように接している女の子。

もう1人は俺の先輩の妹で、金髪の女の子。

その2人を見た時、俺は安心した。そして、2人の連れの黒髪の子を見てみる。俺はその子を見た時、固まつた。黒髪のショートカットで、頭の上にアホ毛が生えている、昔、一緒に住んでいた俺の… 実の妹。

そう、そこには小町がいたのだ。

ハチ「こ、小町…なぜ」

俺は不意にそうつぶやいていた。

それが2人に聞こえたらしい、

アスナ「小町つて、ハチ君の妹さんの？」

リズ「あ、ほんとだ。なんかハチと似てるかも。」

俺らがそんな話をしていると雪穂が俺らに気づいたらしく、声をかけてきた。

雪穂「そこにいるのは誰ですか！」

俺は草陰から出て雪穂たちを見た。

雪穂「えつ？ あ、は、ハチ兄！」 ダツ

亜里沙「八幡さん!!」 ダツ

2人はそう言つて俺に飛びついてきた。

ハチ「2人とも、無事でよかつた。」

雪穂「うん、本当は2人を驚かそうと思つて始めたんだけど、あんなことになつちやつて、2人に心配を書けないようについて森の中レベルをあげながら頑張つて生きてた。」

亜里沙「私も、穂乃果さんと八幡さんには心配も迷惑もかけたくなかつたので…」

2人はそう言いつつ涙を流していた。

ハチ「2人とも、そんなことを考えててくれてたんだな。ありがとな。」

そう言つて2人の頭を撫でた。

そして、俺は未だに俺を見て驚いている小町を見た。

ハチ「久しぶりだな、元気にしてたか？ 小町。」

小町「お、お兄ちゃん。お兄ちゃん!!」

そう言つて小町も飛びついてきた。

小町「お兄ちゃん、会いたかったよう… 急にいなくなつちやつて、お別れも何もしてないのに。」

ハチ「悪かつた、俺はあるの時、精神的なダメージが大きかつたのかもしれない。家に帰るのが苦痛だつたんだ。だから、そのまま。」

小町「うん、分かつて。ほんとにごめんね。私が弱いから…」

ハチ「そうじやない。俺が弱かつたんだ。俺が強ければ、あんな奴には負けなかつた。」

そう言つて俺は小町の頭を撫でた。

ハチ「だから、お前は何も悪くないんだ。だから泣くなよ小町。」

小町「お兄ちゃん…：ありがとう。」

そうして俺は雪穂、亜里沙を見つけることが出来たとともに、小町との再開を果たした。

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／6

ハチ「さてと、無事に2人も見つかって、ホノカに連絡しとくか。」
雪穂改めスノウと亞里沙改めアリサを見つけた日の夜、俺らは途中で寄った村の宿で泊まることにした。

それを今、ホノカに伝えるところだった。

ハチ「確か、メッセージができるんだよな。」

俺はフレンドリストを開きホノカの名前を見つけると、メッセージを書いて送った。メッセージの内容は、スノウとアリサを見つけたこと、今日はこっちで泊まること、そして、新しく仲間が出来たことを伝えた。

そして翌日、昨日の夜、ホノカからメッセージが帰ってきて、今日にでもキリト達に合流したい、と話していたため。まずはホノカ達と合流したいので、俺達は始まりの街へと向かった。

ハチ「ホノカ、イツキ、ステラ！」

始まりの街へ着くと、入り口にホノカ、イツキ、ステラの3人がいたため、俺は3人を呼ぶ。

3人はその声で俺らに気づき近づいてきた。

ホノカ「雪穂!!」

スノウ「お、お姉ちゃん、ここでリアルネームはやめてよ。」

ホノカ「もう！心配したんだからね？」

スノウ「…ごめんなさい。」

よし、ホノカとスノウも無事再会出来たし、まずはほかのメンバーの自己紹介からだな。そう思い、俺らはその辺の飯屋へと向かった。ハチ「よし、じゃあまずは自己紹介からやるか。俺はみんな分かつてのはずだからといって、ホノカから始めるか。」

そう言うとホノカはわかつた。と言つて自己紹介を始める。それから、イツキ、ステラ、アスナ、リズ、スノウ、アリサ、マツチといふ順番で自己紹介を行い自己紹介は終わつた。

そして、俺は他の仲間… キリト達のことも話した。

そして、明日にはキリト達に合流しようという話になり、今日は解散した。

ホノカ達は話があるらしく俺とは別行動だ。

イツキとステラは武器をメンテナンスしていくと言つてたな。

俺は明日、合流できるとキリトに伝えるため、メッセージを送る。キリトからは始まりの街の隣の街で待つてるよ。と返ってきた。

俺はそれを確認してから、宿屋を探そうと歩き始める。

「あんたがハチだナ？」

不意に後ろから、そう声をかけられた。

俺は後ろを振り向くと、そこには顔に髭のペイントをした奴が立っていた。

ハチ「お前は？」

「オレっちは情報屋のアルゴだ。それにしても、キーチャンの言つてた通り、本当に剣を2本付けてるんだナ。」

ハチ「キーチャン？…ああ、キリトか。」

俺がそう言うとアルゴはびっくりしていた。

アルゴ「よく、このあだ名でわかつたナ。」

ハチ「まあ、俺のことを知つていて、キがつく名前のやつなんてシリトぐらいだからな。」

アルゴ「なるほどナ。」

ハチ「んで？なんか用か？」

アルゴ「ん？ああ、キーチャンからフレンド登録はしておいた方がいいって言われたからしに来たんだが、してもらえるか？」

俺とフレンド登録した所でなんもないけどな…まあ、情報屋らしいし、フレンド登録はしておいても損はないだろう。

そう思つて俺はそれを了承した。

アルゴと会つた日の翌日、俺たちは始まりの街の次の街へと向かっていた。

アスナ「そう言えば、ハチ君つてなんで剣を2本持つてるの？」
走りながらアスナが聞いてくる。

リズ「あ、それ私も思つてた。」

スノウや、アリサ、マツチも日々に言つてくる。

ハチ「ああ、そう言えば言つてなかつたつけ？俺、システムアシストがないからソードスキルが使えないんだわ。」

俺がそう言うとアスナ達が立ち止まる。

ハチ「?どうした？」

アスナ「そ、ソードスキルが使えないことは、ハチ君は通常攻撃だけでモンスターを倒すの？」

ハチ「? そなだが？」

リズ「なんであんたはそれで冷静なのよ!? あんたはソードスキルが使えない分、不利なのよ!? 死ぬ可能性だつてあるのに…」

ああ、そういうことか。

ハチ「心配してくれてありがとな。でも、大丈夫だ。俺はリアルで剣を使つてたから、別に不利つてわけじやない。」

スノウ「でも…」

スノウがまだ何か言おうとする。それをホノカが遮る。

ホノカ「大丈夫だよ。ハチ君がそう言つてるんだもん。私はハチ君を信じてるから。それに、ハチ君はほんとに強いもん。だから、大丈夫だよ。」

スノウ「お姉ちゃん…。 そうだよね、ハチ兄は強いもんね。うん、私もハチ兄を信じる。」

マツチ「お兄ちゃん、絶対死んじゃダメだよ？」

アリサ「お兄さん…。 死ぬのはダメですかね？ それに無茶もダメです。アリサと、約束ですよ？」

ここまで言われたら死ぬことは許されないな。

俺は、大切な人達を悲しませないためにも絶対に死なないし、仲間も死なせない、俺はそう決意した。

魔法使いとチート八幡の日常（SAO編）7

キリト「ハチ！」

俺の秘密がバレてから（秘密にしてた訳では無いんだが）30分が経過していた。俺たちは早くキリトたちと合流すべく走った。

そして、やつと隣街へと着いた。

そしてその入口でキリト、サヨ、モカ、アコの4人が待っていてくれた。

アコ「ハチさん！」

ハチ「おつと、おいアコ、いきなり飛びついてくるな。危ないから。」アコは俺を見つけると走ってきて飛びついてきた。俺はそれを受け止め、注意を施した。

アコ「うう、すみません。で、でも！2週間も連絡がなかつたんですけど!?もう、アコは心配で…」

ハチ「あー、それはすまなかつた。探し出すのを最優先にしてたら連絡できなかつたんだ。」

キリト「ほんとに心配したんだよ？」

サヨ「全く、ハチ君はほうれん草がなつていません！」

ほうれん草つて…確かに昔習つたけど…

モカ「モカちゃんも心配したんだよー？だから今度からはしつかり連絡をすること！」

俺は怒られてしまった。まあ今回の俺が悪いからしようがないか。

キリト「まあでも、しつかり帰ってきたからいつか。それよりも、後ろの人たちの紹介をしてもらつても？」

そう言つて俺の後ろの7人を見る。

ホノカ「はいはーい！私が紹介するよー。じゃあ右から紹介するね。右の赤髪の女の子がステラ。片手剣使い。その隣がイツキ君、曲刀使い。その隣の栗色の髪の子がアスナちゃん。細剣使いで、ハチ君の幼なじみみたい。その隣がリズベットちゃん。片手棍使い。こちらもハチ君の幼なじみ。その隣の黒髪の子がマツチちゃん、ハチ君の

リアル妹らしいよ？私は会つたことが無いから分からんだけどねw。その隣がアリサちゃん。そしてその隣が私の妹のスノウだよ！」

イツキ「えっと、今紹介された通り、曲刀使いのイツキです。よろしく。えっと…」

キリト「キリトだよ。よろしくね。」

サヨ「サヨです。」

アコ「アコです！」

モカ「モカです。」

と、3人も自己紹介をする。こうして自己紹介も終わつたため、俺はキリトと情報交換をする。

ハチ「今、攻略はどうなつてる？」

キリト「まだそんなに進んでないみたい。私達もレベルリングをしつつ迷宮に潜つてはいたけど…」

なるほど、まだボス部屋は見つからないらしいな。これは長く見積つても今日から3週間位はボス部屋は見つからなさそうだな。

ハチ「あ、そうだ。これからこのメンバーでチームを組みたいし仲間のレベルも知つておいた方がいいだろ？一応教えてもらいたいんだがいいか？」

俺がそう言うと皆うなづいてくれた。俺が用意にレベルを聞くなつてアスナに言つてたのに普通に聞いてんな俺…

それからは全員のレベルとスキルを聞いていた。

キリト：20、ホノカ：20、サヨ：19、アコ：18、モカ：19、マツチ：15、スノウ：15、アリサ：14、アスナ：14、リズ：13、イツキ：22、ステラ：20、俺：25らしい。全員のレベルを17以上にはしたいな。

という訳で、これからの方針が決まった。レベルリングしつつ迷宮に潜る。これが一番だと言うことで、これからは2手に分かれて情報を集めつつレベルングをしようという話になつた。

そうして俺らは次の日から実行した。

2週間後…

全員の自己紹介やら今後の方針やらを決めてから2週間あまりが経つた。俺らはまだレベリングの生活を送っていた。

そんな時、俺らにアルゴから情報が入る。

『今日、1時よりトールバーナにて、第1層ボス攻略会議を行う』メッセージにはそう書いてあつたのだつた。

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／8

トールバーナ⋮

ザワザワ

そこには40人くらいの人が集まっていた。

ハチ「結構いるんだな。」

キリト「そうだね、だいたい40人くらいいるね。」

俺らは周りを見渡してそんな感想を持つ。

まあ、まさかこんなに集まるとは思ってなかつたしな。

と、そんなことを思つていると、1人の男が前に出る。

「皆、集まつてくれてありがとうございます！俺はディアベル、気分的にナイトをやつている。」

と、そんな話をし始める1人の爽やかイケメン。

いや、ナイトってなんだよ⋮

そう思つていると周りが笑い始めた。

えっ？ 何か面白い要素あつたのか？ 俺だけ笑つてないのか？

そう思い周りを見ると、ホノカ達も笑つていなかつた。つて言うか苦笑いだな。

良かつた、俺だけじやなかつたみたいだ⋮

ディアベル「それじやあ本題に入りたい。昨日、僕達のパーティーがボス部屋を見つけた。中を覗いたところ、ボスの名前は『イルフアング・ザ・コボルドロード』だ。」

そんな感じでどんどんと会議は進む。

なんか、ガイドブックの情報だと、HPバーが1本になると武器が変わるとか言つてたな。アルゴが⋮

ディアベル「じゃあ、6人1組のパーティーを作つてくれ。」

ディアベルはそう言う。

6人1組か⋮ うん、作れねえな。どうすつかな、この人数だと1人余るんだよなあ。

ハチ「どうする？」

キリト「私とハチで2つのパーティーに分かれたいけど1人余つ

ちやうね‥」

ホノカ「うーん‥ どうしようつか。」

俺らが考えていると「おーい」と、俺たちに声をかける3人の男の人がいた。

つてかあの人たちは‥

「よう、また会つたな。しつかりと会えたみたいで良かつたぜ。」
そう言つて俺に話しかけてくる。

ハチ「いえ、あの時はありがとうござります。」

そう、この3人は、前、俺にスノウとアリサ、マッチの目撃情報をくれた人たちだつた。

「いやいや、あのぐらいどうつて事ないつて。それよりも困つてゐたいだな。」

ハチ「はい、1人余つちやうんですよね‥」

「じゃあ、誰か俺らと組まないか?」

そう言つて真ん中の人が尋ねる。

ハチ「いいんですか?」

「ああ、困つてる時はお互ひ様だろ?」

ハチ「‥じゃあ、お言葉に甘えさせていただきます。」

俺はそう言つてその誘いに乗つた。

ハチ「んじやあ、俺がこの人たち‥ えつと」

「ああ、名前を名乗るのを忘れてたか。俺の名前はヨウだ。武器は曲刀、よろしくな。」

「俺はタケ、武器は片手剣。よろしく。」
「俺はトミー。武器は槍。よろしく。」

そう言つて3人は自己紹介をしてくれた。

ハチ「俺はハチです。武器は曲刀です。よろしくお願ひします。」

ヨウ「敬語は使わなくていいぞ? ゲームなんだし。」

ハチ「‥ わかった。それでなんだが、俺がヨウ達のパーティに入れるから、イツキとキリトの2人でパーティを分けてくれ。」

そう言つて、キリトとイツキはわかつたと言つてパーティを分け始める、そして2分くらいで決まつたらしい。

イツキのパーテイーが、ステラ、スノウ、マッチ、アリサ、リズ。キリトのパーテイーが、ホノカ、サヨ、アコ、モカ、アスナ。とう事になつたらしい。

ディアベル「よし、決まつたな。じゃあそのあと、それぞれの分担だけ「ちよつと待つてんかナイトはん！」：君は？」

「ワイはキバオウつてもんや。この中に全員に詫びをいれんとアカンやつがいるんやないか？」

そう言つていきなりモヤツとボールみたいな頭のやつが出てきた。つてか、あの頭どうやつてセットしてんだろ‥」

ディアベル「その、詫びを入れる奴らつて言うのは元 β テスターの人たちかな？」

キバオウ「そうや！あいつらは自分らだけいい狩場を取つてレベリングをしとる。ニュービーの事なんてそつちのけでな！」

‥何言つてんだあいつは。バカバカしいな。

ハチ「はつ！バカかよ‥」

あつ、やべ、声に出しちつた。
隣を見るとキリト達がこつちを見てた。

キバオウ「なんやて？誰やお前、なんか文句あんのか！」

ハチ「はあ、俺はハチつてもんだ。まず1つ、 β テスターが狩場を独占してた？馬鹿なの？ここにあるガイドブックにしつかりとめぼしい狩場つてのが載つてただろ？そんなのも見えねえのかよ。それに、ニュービーをそつちのけでつて言つてるけど、このガイドブック作つたのは β テスターだぞ？しつかりと β テスターはニュービーのことを見てんじやねえか。ガイドブックを見てないのはお前が悪いからな？」

俺はそう言つて座る。キバオウ？つてやつも黙つた。

ディアベル「‥よし、話は終わつたな。じゃあ話を戻そーか。」

そうしてその後は、1層のボス攻略会議は滞りなく終わり明日のために解散となつた。

ハチ「よし、明日のために帰つて準備でもするか！」

トミー「そうだな、明日はついにボス攻略出しな。ですよね隊長‥」

じゃなくてヨウ。」

隊長？その言葉が気になつたがスルーしといた。

ヨウ「トミー、隊長つてのはやめよう。さすがにここまで隊長つて呼ばれたくないわ」

ヨウがそう言うとトミーはすみません、と言つて謝つていた。

ハチ「じゃあ帰りますか。」

そう言つて俺は宿に戻り、明日の準備を整え、寝た。

明日は運命の日…

魔法使いとチート八幡の日常（SAO編）9

ハチ「ふあ、ああ。朝か？」

今日は遂に第1層ボス攻略だ。12時にトールバーナに集合し、迷宮に入ることになっている。

ハチ「今何時だ…？」

『12・03』

：あれれー？おかしいぞー？俺には時計が12時3分つて書いてあるように見えるなあ。

ヤヴァイ…マジでヤヴァイ。殺され…ドンドンドンドン!!

そんなことを考えているとドアを叩く音がする。

ホノカ「ハチ君!!早く起きて！みんなもう集合してるよ！今、キリトちゃんにデイアベルさんに言つて待つてもらつてるから！」

Oh…

俺はさっさと支度をしてドアを開ける。

ハチ「すまん！急ぐぞ！」

俺はホノカと一緒に全速で走る。まあ俺の方が速いからホノカに合わせてるんだが…：

ホノカ「もう、ハチ君が寝坊するなんて思つてなかつたよ。」

ハチ「俺も思つてなかつたわ。マジですまん。」

走りながらそんな話をする。

そして俺は一応持ち物のチエツクもした。

大丈夫、荷物は忘れてないな。

そして10分位でトールバーナに着いた。

俺はディアベルの所へ向かう。

ハチ「すまん、遅れた。」

ディアベル「いや、大丈夫。次からはこんなことないようにしてくれよ。」

そう言つて笑う。なんかこいつって葉山に似てるよな？

キリト「はあ、まさかハチが遅刻するなんて…」

モカ「ハチは寝坊助さんだもんね！」

サヨ「全く、しつかりしてください。」

アコ「遅刻だけはダメですよって昨日自分で言つてたのに…」

うわあ、散々な言われようだア w

はあ：

俺達が迷宮に入つてから10分、危なげなく進んでいる。

ハチ「いい感じだな。」

ホノカ「そうだね、皆気合が入つてるよ、誰かさんとは違つて」
そう言つて俺をジト目で見てくる。

ハチ「いや、マジで悪かつたつて、反省してるから。」

ホノカ「次やつたら…」

次やつたら何!?怖いんだけど… つてかホノカつてそんなキャラ
じやねえだろ!?

そんな雑談をするくらいに余裕はあつた。

それから10分、ついにボス部屋の前に来た。

ディアベル「俺からは一言、勝とうぜ！」

皆『おお!!!』

そう言つてディアベルはドアを開ける。

中は暗い… 全員が入り終わると灯がつく。そしてそこに奴はいた、そう『イルファング・ザ・コボルドロード』だ。

ディアベル「全員！配置に着いてくれ！」

ディアベルが声を上げるとともに全員、自分の配置に着いた。

俺もヨウ達と配置につき、取り巻きの『ルイン・コボルド・センチネル』を相手していく。

ヨウ「ハチ、スイツチだ。」

ハチ「OK。」

そう言つて俺は曲刀で危なげなく倒す。ちなみに俺は今は二刀流
じゃない。

まあ、一刀でも倒せるだろうと思つたからな。

案の定、倒せているし何とかなんだろ。

それに、ヨウ達には俺がソードスキルを使えないことは言つてあるから俺に負担を掛けないようにしてくれてるんだよな。

タケ「ハチ、スイツチだ。」

ハチ「了解。」

俺達はそうやつて一体一体確実に倒していく。

そうするとボスのHPバーが残り1本になつたらしい。

ディアベル「よし、皆は下がつてくれ！俺が行く！」

は？何言つてんのアイツ、ここは全員でやる所でしようが…

そんなことを思つてると、キリトが「避けてー！」と、叫んでいるのが聞こえる。

つてかボスの持つてる武器がタルワールじやなくね？

そんなことを思つているとディアベルがソードスキルを食らつた。あ、やばくねえか？俺は咄嗟に足が動いていた。

ここからディアベルまでの距離はそこまで遠くない。だが、ただ走つたところで間に合わない。どうする？あ、そう言えばあのスキルは使えるかな？確かに、初速が速くなるはず…一か八かやつてみつか。

ハチ「ヨウ！ここよろしく！」

俺はそう言つてディアベルの方へ走る。

そして俺はエクストラスキル『居合い』を使った。

『居合い』は、使用者の走り出し、まあ初速を最高10倍まで上げることが出来る。熟練度がカンストすれば10倍だつたか？

まあそんなことを考えている暇はない。今の俺では熟練度的にも2倍がギリギリだな。

そんなことを思いながら走る。走る。走る。走る。

そしてディアベルに向かつて打たれているソードスキルに合わせて俺は腰にしまつていた曲刀を振り抜く。

ガキイイイインツ!!

ハチ「うお!?」

俺は相手のソードスキルを止めた。曲刀1本で…

だが、その反動で後ろへと飛ばされる。

相手も俺にソードスキルを止められたため動きが止まっている。
叩くなら今のうちか。

俺はすぐさま立ち上_がるとバスへと立ち向かう。その途中でディアベルが「助かった。」と言つてきたため俺は「言いたいことは色々あるが、また後でだ。今は大人しく回復してろ。」と言つてバスの元へと向かう。

ハチ「さてと、やりますか。」

ヨウ「俺らも行くぜ！」

キリト「私たちだつて！」

イツキ「僕達も行くよ。」

俺も横にはヨウ達が、そして後ろにはキリトとイツキ達がいた。

ハチ「…助かる。さてと、行くぜ！」

15人『おう（うん）!!』

そして俺達は《イルファング・ザ・コボルドロード》の殲滅を開始する。

ハチ「キリト達は右から、イツキ達は左から攻撃、ヨウ達は敵のソードスキルの対処だ。あと10分で終わらせるぞ！」

15人『了解！』

俺の指揮の元、15人全員が動き出す。

ハチ「攻撃をくらつたらしつかりと回復しろよ、回復してる奴の援護も忘れんな。」

今、敵のHPは半分くらいだ。この調子ならあと5分で終わるだろう。

ハチ「よつしや、全員！畳み掛けるぞ！」

15人『おう！』

そう言つて全員がソードスキルを放つ中、俺は曲刀を二刀流にして徐々にHPを削る。

その時だ、ボスは最後の力を振り絞ったのか、俺へと攻撃をかける。俺は2つの曲刀で受け止めるが吹き飛ばされた。

アスナ「キヤッ！」

そして吹き飛ばされた先にはアスナがいたため、一緒に吹き飛ばされる。

そしてそのままボスは、野太刀を俺らに向かつて投げた。

キリト「まずい！」

ホノカ「ハチ君！アスナ！」

やばい、どうする…ここは、アスナだけでも。そう思い俺はアスナに覆いかぶさり、俺が盾となろうとする。

ガキイイイン!!

だが、いつまで経つても俺への衝撃は来なかつた。

「よう、大丈夫か？」

そこには肌の黒い外人のような男の人が俺らの前に立ちはだかり、斧で野太刀を止めていた。

ハチ「お、おう。サンキュード！」

「へつ、いいってことよ！俺だつてボス攻略に来てんだ、ちつとは役に立たねえとな！」という訳で、俺にもなにか手伝わせてくれ！」

ハチ「おう、助かる！じゃあ俺らと同じようにソードスキルの対処を頼む。」

そう言うと、おう！と返事をして行つてしまつた。

あ、そうだ！

ハチ「アスナ！大丈夫か？」

アスナ「う、うん。」

ハチ「悪い、俺の不注意だつた。お前を危ない目に合わせて「違う

！ハチ君のせいじゃない！」」

アスナ「ハチ君のせいじゃないから、自分を責めないで？」

ハチ「…わかった。」

アスナ「よし！私は大丈夫だから、速くボスを倒しちゃおう！」

そう言つてアスナは走つて行く。

そうだな…俺もしつかりしなきやな。よし！行くか！

俺は曲刀を持ち直し走り出す。

それから7分くらいが経過。ボスの残りHPはもう少ない。

そこにキリト達がソードスキルを叩き込む。
だが、まだ死なない。

ハチ「ヨウ！そこに屈んでくれ！」

俺はそう言うと、居合いの構えを取る。そしてすぐに走り出した。

ヨウ「なんだかよく分からんが了解！」

ヨウもそう言つて屈む。

俺は屈んでいるヨウの背中を踏み台にして飛び上がる、そしてバスの目を斬り裂いた。

パリイン

『Congratulation!』

空中に浮かぶ文字、ポリゴンとなつて消えるバス。

俺達は…勝つたのだ。

全員『…うおおおおおお!!!!』

ハチ「ふう、なんとか勝てたか。ん？ラストアタックボーナス？なんだこりや…キリトにやるか。俺は似合わなさそうだし。」

俺はキリトにラストアタックボーナスのコートオブミッドナイトを渡した。

キリト「これは？」

ハチ「なんか、ラストアタックボーナスつてやつで貰つたけど、俺は要らんからお前にやるよ。」

キリト「えつ、でも…」

ハチ「いいから。俺じや似合わん。」

俺がそう言うと、渋々だが貰つてくれた。
と、その時だつた。

キバオウ「なんでや！なんでボスの武器が情報と違つたんや！」
なんか言つてやがるぞあいつ…

ヨウ「はあ、またあんたか。あんたはしつかりとガイドブックを見たのか？βテストの時と違う点がある可能性があるってここに書いてあんただろ？今回はβテストと違う点があつたつてことだろ？そんのもわからんねえのか？」

キバオウ「だつたらそこの女はボスの武器をなんで知つとつたんや

！知つてゐるつてことは β テストの時も同じだつたんとちやうか!?だから知つとつた。それなのにワいらには何も言わんかつた。言つておけば、ディアベルはんが危険な目に会うこともなかつたんや！」

キバオウ？がそう言うと周りの奴らも便乗し始めた。

キリト「ち、違う。ほんとに β テストとは違つたよ！野太刀は β テストの時にもつと上の階層で見たから知つてただけで…」

キバオウ「はつ！そんなん信じられるかい！お前には今もつてる武器とコル、全部置いていつて貰うかんな！」

キリト「そんな…」

まずいな。俺は β テスターじゃねえから野太刀がどこで出てきたのかとかわからんねえし、ほんとに1層の武器が野太刀じやなかつたなんてわからんねえ…だが、キリトは俺達の大事な仲間だ。助けねえと…どうする、どうすれば助けられる…

…待てよ？この方法なら…やつてみるか。

ハチ「…クツクツク、ハツハツハツハツ。いやあ、ほんとに無様だよなお前ら」

キバオウ「な、なんやて！？つて、お前は会議ん時の」

ハチ「お前らは騙されてんのに気づかねえのかよ。」

キバオウ「騙されてるつて…どういうことや！」

ハチ「ディアベル、お前は β テスターだろ？だから最後1人でボスに突撃した。ラストアタックボーナスを取るために。だが、 β テストで野太刀を見ていかつたお前はソードスキルを避けることが出来なかつた。違うか？」

俺がそういうとディアベルはこつちを見る。

キバオウ「…そんなはずはない！ディアベルはんが β テスターだなんて…そんなはず…」

ハチ「なあディアベル、 β テストの時の1層のボスはタルワールを持つていたんだろ？だから余裕だと思つて1人で突つ込んだんだろ？教えてくれよディアベル。」

俺はディアベルに問う。

ディアベル「…ああ、そうだ。」

よし、合つてたか。

キバオウ「う、嘘やろ… なあディアベルはん。嘘やろ? ディアベルはんが β テスターだなんて…」

ディアベル「すまないキバオウさん。それのみんな。俺は、 β テスターだ。さつきハチ君が言つた通り、ラストアタックボーナスを狙つていたんだ。騙していてすまない。」

キバオウ「ふざけるな。アンタのことを信じてついてきたんやぞ! それを今更、騙してましたって、ワイらをラストアタックボーナスを取るための駒としか思つてなかつたつてことやないか!」

ディアベル「…」

ディアベルは言い返せないだろうな。まあそれは自業自得だな。
だが…

キバオウ「あんた、今もつてる武器とコル、ワイらによこせや。騙してたお詫びに!」

そう言つてキバオウはディアベルに詰め寄る。

キリト「ハチ…」

キリトはそれを見て俺を見る

その目は助けて上げろつて事ですかね?

周りを見るとホノカ達も見ていた。… はあ、まあそうだな。しゃあねえか。

ディアベルは武器をキバオウに渡そとする。俺はそれを止めた。

ハチ「ちよつと待てよ。それはおかしいだろ?」

キバオウ「何がや。ワイらは騙された。そのお詫びに武器とコルを貰つて何がおかしいんや。」

ハチ「いや、だつてよ、お前らが勝手に騙されたんだろ? そして勝手に信用して着いてきた。ディアベルはお前にお願いでもしたのか? ついてきて下さいって、してねえんだろ? だったらお前らが勝手についてきただけの事だ、裏切られようが何があろうがついてきたお前らが悪いだろ。」

キバオウ「それは!…」

キバオウは黙り込む。まあ正論言われたらそうなるよな。俺もそ

うなるわ。

ハチ「…運が悪かつたな、自業自得だ。んじゃ、アクティベートしてくつかね。」

そう言つて俺は2層に歩き出す。その後ろを15人+エギル（黒人の斧使いの人）+ディアベルがついてくる。その後ろではまだキバオウ達は俯いていた。

まあ、しゃあないな。自業自得だもの。

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／10

第2層に入つて6日がたつた。今俺達は16人でほぼ毎日行動するようになった。まあ、レベリングとかクエストとかをするだけだがな。

今日は皆自由に過ごす日にしたため、俺は今アルゴに情報をもらいいに来た。

ハチ「よう。」

アルゴ「ハチ、なんの用ダ？」

ハチ「なんかしらエクストラスキルが取れるクエストとかを教えて欲しいんだが…」

俺はソードスキルは使えないが、エクストラスキルは使える。ナーヴギアの故障でソードスキルが使えないと仮定すると、ソードスキルのシステムアシストだけが発動しないだけで、他のシステムアシストは発動するのではないかと思いエクストラスキルを使ってみたが、案の定、システムアシストは発動したため、俺の仮定は正しいことになる。

ならばエクストラスキルを取り、戦つた方が安全だと思ったのだ。
アルゴ「ふむ、わかつた。なら、こういうエクストラスキルはどうダ？」

そう言つてアルゴは俺に近づき、耳元で話す。

ハチ「…わかつた、行つてみるわ。」

俺はアルゴにお礼を言つて今言われた場所へと向かつた。

俺は今、山の上にある小屋に来ている。え？何故かつて？情報屋のアルゴにここで体術スキルを取れるつて聞いたからな。
さてと、入るかね。

俺が中に入ると中には厳ついNPCがいた。そのNPCの頭の上にはクエストのマークが付いている。

俺がそのNPCに話しかけると、大岩を素手のみで割れ！つて言わ
れて顔に髪を書かれた…。

ハチ「クツソ！アルゴの奴、顔にペイントされたとか聞いてねえぞ！つてかあいつの顔のペイントはそういう事だつたのか…。」

俺は愚痴をこぼしながら大岩に向かつて拳を叩きつけている。

ハチ「…流石に1日じや終わんねえな。」

俺は大岩をずっと殴り続けるも、割ることが出来ず夜が開けて行つた。

次の日、俺は少し仮眠を取り岩を殴り始める。相変わらず岩は割れる気配がない。

ハチ「クツソ…なんかないのか？もっと簡単に悪方法は…あ、あれは使えるのか？いやでも、リアルじやないから威力とかは…まあやつてみるだけやつてみるか。」

俺はそう言うと俺は構える。そして右手で掌底を岩へと叩き込む。まだ割れないが、手応えはあった。

ハチ「ふむ、なら捻りを加えるか。」

そう言つて俺はまた構えると、今度は捻りを加えて掌底を叩き込んだ。

ピシッといい、ヒビが入る。

ハチ「よし、このヒビを重点的に狙つて叩き込むか。」

俺はそのまま掌底を同じ場所に何度も何度も叩き込む。そして、1時間後、やっと割ることが出来た。

NPC「よし、これで貴様も弟子卒業だ。」

ハチ「あざつす。」

そして俺はエクストラスキルの体術を取得し、街へ戻ろうとする。

NPC「ああ、ちょっと待て弟子よ。」

ハチ「はい？」

俺はNPCに呼び止められた。

NPC「貴様の使う武器はカタナか？」

俺はつい先日刀スキルを取得した。だが、刀を売っている武器屋が無く、まだ曲刀を使っていた。

ハチ「まあ、そうですけど…」

考え方としては曖昧な答え方になつてしまつた。が、まあこれでい

いだろ。

NPC「ならば、裏の山の洞窟にこんな言い伝えがある。『洞窟の主が倒されし時、曲刀は進化し新たなる刀が生まれる。』という言い伝えだ。行つてみるといい。」

そう言つて小屋へと戻つて行つた。

曲刀が進化する…か。

よく分からんが、行つてみる価値はありそうだ。

と、そこにアスナからメッセージが届く。

アスナ『第2層のボス部屋が見つかったよ。明日の午後1時から攻略会議だつて。』

マジか…まだ2層に来て1週間だぞ…まあ、それだけ攻略のペースも上がつてきてるってことか。

俺は『了解』とだけ返し、裏山へと向かつた。

魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 11

裏山へと来てから30分くらいが経過した。俺は今、洞窟の入口へと立っていた。

ハ升——ここかざつぎのNPCか言つてた洞窟か?】

中は暗く、よく見えない。まあ洞窟だから仕方が無いか。

俺はさっきのNFCが言っていた謡が気になっていたため、中に入ることにした。

やはり中は暗い。
俺は足元に注意しながら進む。

唸り声が聞こえる。やはり、ここにもモンスターはいるか。だが、

から出でくる 暗くてよく見えんな。

ハチ 「ふつ！」

ハリス

うれい興に迷まいとニシハクとの迷迷才一九一一年夏六月

このモンスターは決して強い訳では無い
か この狭い空間で君

ハチーはあ！

ハチ「はあ、はあ、クソ… やつぱり遭遇率が上がっているのか？」

そんなことを呟きながら歩いていると、別れ道があつた。

ハチ「この別れ道…：どっちに行くのが正解なんだ。」

俺はしつかりと考えた末、右に行くことにした。

理由はただ自分が右利きだからというだけだ。それにしても長いな……まだ最奥につかないのか。

と、その時ザアアという水が流れるような音が聞こえてきた。
そして前も薄らと明るくなつてきた。

ハチ「うお…高つけえ。」

そこは洞窟内の崖のようになつていて、下は水が流れていた。

今の位置から下まではたいだい100メートル無いくらいまあそれでも高いんだが……。

そして目の前には、今にも落ちそうな吊り橋があつた。

ハチ「…これを渡るのか。落ちねえよな? (フラグ)」

俺は慎重に進んでいく
「ああ、布……」

ハテ—ああ
心

ん？ 後ろ？

俺は今のはらり声がした方向をむく。そこにはモンスターが2匹ほどいた。

あれ? これはまずいな。・・

そう思い前に急ぎこうとすると、前にもモンスターがいました。

そのモニスター達は一氣に吊り橋を渡つてくる。
詰んだW

その重さで、吊り橋は切れた。

ハチ「… ですよねえー W」

その衝撃で俺は気を失つた…

卷之三

ハチ一うんん?ここは――

見た感じだと、小屋？

「目が覚めましたか？」

不意に声をかけられる。

「あ、すみません。自己紹介が遅れました。私はサクヤと言います。」
NPCだろうか…プレイヤーカーソルは付いていない。だが、N

PCもカーソルは付いていた気がするが…
まあ、そこはどうでもいい。

ハチ「サクヤさん、ここはどこなんでしょう。」

俺は1番気になる質問をした。

サクヤ「ここは洞窟内にある小屋です。私がそこにある川沿いを歩いていたらあなたを見つけたため、この小屋に連れてきました。」

なるほど、いくつか疑問はあるがまあそれは後で聞くとして、

ハチ「助けて頂いてありがとうございます。」

サクヤ「いえ、当然のことをした迄ですから。それよりもあなたは何故ここに？」

ハチ「この洞窟の主を倒せば刀が手に入るという情報を聞いたんです。それで洞窟を探索していたら吊り橋でモンスターに襲われて川に落ちてしまつたんです。」

サクヤ「なるほど、ではあなたはこの洞窟の最奥を目指しているんですね。」

ハチ「まあ、そうですね。」

サクヤ「なら、私も最奥に用があるので一緒にさせてもらつてもいいですか？」

そう言つて俺を見る。

俺は拒む理由もなかつたためOKを出した。

そして俺らは再奥を目指し川沿いを歩き始める

それから30分くらいが経過した。
未だに最奥にはつかない。

ハチ「どんだけ長いんだよこの洞窟…」

サクヤ「ホントですね。」

と、その時後ろから誰かが走つてくる音がした。
「きやあああ！」

俺は反射的に声の方へと向かう。

そこでは女の子が1人、モンスターに囲まれてた。
プレイヤーカーソルがあるからプレイヤーらしい。

俺はすぐに武器を持つとモンスターに後ろから襲いかかる。

そしてそのまま女の子を取り囲んでいたモンスターを全部排除した。

サクヤ「流石ですね…」

ハチ「はは、ありがとうございます。それで？大丈夫か？」

俺はモンスターに囲まれてた女の子に声をかける。

「う、うん。助けてくれてありがとうございます。私はユナ。」

ハチ「俺はハチだ。そしてこちらが」

サクヤ「サクヤです。」

ハチ「ユナはなんでこんな所に？」

ユナ「えっと、たまたま洞窟を見つけて、そこを探索してたら結構奥まで来ちゃって帰れなくなっちゃったから奥に行くことにしたの。そしたらさつきのモンスターに囲まれちゃって：」

なるほど、たまたまか。

ハチ「そう言う洞窟は危ないから1人で入らない方がいいぞ？死にたく無かつたらな。」

ユナ「うん、これからは肝に銘じておく。」

ユナ「そう言えばハチとサクヤさんは何故ここに？」

ユナは、俺らを見てそう聞いてくる。

ハチ「俺らはこの洞窟の最奥に用があつてな。」

ユナ「なんだ？ 私もついて行つていいかな？」

俺はここで帰すのも危なさそうだと思い、その申し出を承諾した。

そして俺らはまた歩き出す。

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／12

洞窟内を歩き続けて結構時間が経つた。

だが、まだ最奥は見えてこない。

ハチ「やばいな：ボス攻略に間に合わないかもしれん。」

そう、今日は攻略会議の日。だが、最奥が見えてこないと明日のボス攻略に間に合わないかもしれないのだ。

ユナ「ハチは攻略組なの？」

ハチ「まあ、一応な。この洞窟にも攻略のための武器調達に来たんだが：まさかこんなに奥が深いとは思わなかつた。」

いや、ほんとに。こんなに奥が深いならまた今度来ようと思つてたわ。

ユナ「あはは、そうだね。私も軽い気持ちで入つたけど、こんなに過酷だとは思わなかつたよ。」

そんな雑談をしつつ奥を目指す。

しばらくすると、後ろから歌が聞こえた。

振り向くと、ユナが歌つていた。

その歌声は綺麗で美しい。思わず聴き入つてしまふくらいの歌声だつた。

ユナ「あ、ごめん。うるさかつたかな？」

ハチ「いや、大丈夫だ。ただ、綺麗な歌声だな…と思つてな。」

ユナ「そ、そうかな？ありがと…」

あー、やつてしまつたな。普通に、自然と、口から褒め言葉が出てたわ。いや、マジで何やつてんだ俺。いきなり綺麗な歌声だ、とか言われても困るだろうに…

ハチ「す、すまん。」

ユナ「ううん、褒めてくれて嬉しかつたよ。ありがと。」

…良かつた。怒られなかつたわ。

そんなこともありつつ、最奥を目指す。つてかサクヤさん、無口にも程があるだろ…

ハチ「はあ、まだ着かんのか…どんだけ深い洞窟なんだよ。」

マジでやばい…、リアルで攻略に間に合わないかもしれん。現時刻は22:00まだ先はありそうで攻略に間に合うかはほんとに微妙なところだろうな。

ユナ「どうする？もうちょっとスピード上げても大丈夫だけど…」

ユナはそう言っているが俺のせいで女子に無理をさせるのも悪い。

ハチ「いや、このまま進もう。」

サクヤ「…休まなくともいいのですか？」

ハチ「ええ、早く攻略組に追いつかないといけないんで。」

サクヤ「分かりました。では、進みましょう。」

そう言つて俺らはどんどん進む、しかし、奥はまだ見えてこない。そうやつて歩き続けて結構時間が経つた。途中で立ち止まり休憩したりしながら歩いていたがまだ先は長いらしい。

ユナ「ほんとに、なんなの…こんなに大きい洞窟なんて聞いたことないんだけど…まあ、2層に来たばかりだから仕方ないけど…」

言いたいことは分かる。ほんとに長すぎる。

それでも俺はここから抜け出さなければ。時間は刻々と迫つている。

それからも、ちよくちよく休みつつ奥を目指しているが途中で川があつたり地底湖があつたりしたが奥にはまだ着かない。

ユナ「ううう…なんで地底湖とか川はあるのに奥は見えてこないの

!?

サクヤ「確かに…この長さはおかしいですね。」

2人ともそう言いながら歩く。

時間はあと3時間後か…まずいな。

本格的にやばくなってきた。

と、その時奥からザアアアという水の音が聞こえた。

ユナ「また川かな？」

ハチ「かもな、あの川は奥に繋がつてたみたいだし。」

そして俺らは道にそつて歩いていく。

そこには川の起源であろうか、滝があつた。

ユナ「滝？」

サクヤ「お2人共！道がもうありません！」

突然サクヤさんがそう言う。

俺とユナも周りを見渡すが確かになかつた。

ユナ「じゃ、じゃあ、ここが最奥？」

ハチ「…いや、それだつたらこの洞窟の主はどこなんだ？普通だつたらしいはずだが…」

だが、周りを見渡しても何も出てくる気配はない。

ユナ「ねえ、あそこの滝の裏、道みたいなのがない？」

と、ユナが言う。確かに道らしきものが見える。

サクヤ「もしかしたらそこから奥へと行けるのでしょうか。」

ハチ「行つてみましょう。」

そう言つて俺らは滝の裏へとまわる。

そこには巨大なドアがあつた。

ハチ「はは、なるほどな、ここが最奥つて訳だ。」

ユナ「ここをクリアすれば…」

サクヤ「終わりですね。」

俺は頷く。

ハチ「さてと、準備はいいな。行くぞ！」

そう言つて俺はドアを開けた。そして俺らのダンジョン攻略も最終ラウンドへ。

魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 13

俺達は扉を開けた。

「ここが最奥か…」

「何もないね。」

そう、俺とユナは呟く。

そう、何もない。あたりを見回してもボスらしきものは見当たらなかつた。

「ここは最奥ではないのでしょうか…」

いや、そんなはずはない。

だつてこれ以上道は繋がつていなかつた。

ならば、ここが最…ッ!!

「全力で後ろに下がれ!!」

俺は2人に声をかけ。自分も後ろへと下がる。

すると俺達がいた場所に巨大な何かが降つてきた。

「な、何!？」

そこには銀色の巨大なヘビがいた。

『バイオレンス・ザ・ハードスネーク』…狂暴で堅い蛇か。こいつがこの洞窟の主で間違いなさそうだな。』

その蛇は俺を見ると突撃してきた。

「ちようどいい、どれだけ堅いか見せてもらうか。」

俺は両手に曲刀を持つと攻撃を受ける体制を取つた。

そして：

ガアン!!!

「グッ!!」

俺は勢いに押され、壁まで吹つ飛ばされた。

「ハチ（さん）!!」

いつつ、残りHPは…半分よりちょっとあるくらいか。これをユナとかサクヤさんとがが喰らつたらちよつと危ないか。

俺はそう思い、直ぐに回復をして

「ユナ！サクヤさん！俺がアソツのタゲをとる！だから2人は隙を見

て攻撃をしてくれ！」

俺はそう言つて投擲スキルを使い蛇のタゲをとる。

「ハチー…全くもう！・氣をつけてね！」

ユナはそう言い、俺から離れる。

蛇は俺に攻撃を仕掛けようと攻撃体勢に入つた。が、そこにユナとサクヤさんがすぐさま攻撃を仕掛ける。

そして下がる。

それの繰り返しだつた。

だが、一つだけ分かつことがある。それは敵の弱点。

敵は通常状態だと、防御力が高くこつちの武器の耐久値が減る一方だが、攻撃体勢に入ると防御力が減るらしい。

そのため、2人には敵が攻撃体勢に入つた時に攻撃を仕掛けてもらつていた。

「おつと、危ねえ…」

そろそろ敵のHPゲージも残り1本か。

敵の弱点をついて攻撃をしていくうちに残りゲージも1本近くになつていた。

「敵のHPゲージが残り1本になつたら氣をつけてくれ。敵が強くなる可能性があるから。」

そう、第1層のボス戦では残りゲージ1本になるとボスの使う武器が変わつた。そういう変化がこのボスにもあるかもしれないのだ。

それに、相手の弱点も変わる可能性があるため、そこにも気をつけなければならない。

俺はタゲを取りながらそんなことを考えていた。

そしてついに相手のHPバーが1本になつた。

「よし、氣をつける！・何か来るかもしれない！」

俺は2人にそう言う。

2人は防御を取れる体制になり、相手を警戒している。

だが、それは一瞬だつた。

俺に向かつて敵が一気に突進してきたのだ。

「あつぶねえ！」

と、俺は避ける。だがそこから急に方向転換し、次はユナを狙い突破して行つた。

俺は咄嗟に動き出しユナの方へと走つた。

そして俺はユナの前に立ち構える。そして、来る！

そう思つた時だつた。サクヤさんが俺の前に立ち、的に手をかざすと敵が吹つ飛んで行つた。

俺とユナはそれを見て固まつてゐるとサクヤさんが俺の手をとる。「ハチさん。あなたは私の試練をクリアしました。よつて私のマスターに任命させていただきますね。」

「…はい？ マスター？ どういうことですか？」

「お二人には黙つていたのですが、私の本当の名前は『電腦戦姫 N.O.O. 朔夜』と言います。そしてハチさん。あなたは私のマスターに選ばれました。」

「…ということはサクヤさんはA.I.つて事ですか？」

「はい、そういうことです。今まで黙つていてすみません。」

「いえ、そこはいいんですけど…」

と、その時、さつきサクヤさんが吹き飛ばした敵が起きてきた。

「ハチさん、その話は後で。今はあの敵に集中しましょう。」

「そツスネ、わかりました。ユナもまだ行けるか？」

「うん！ 大丈夫だよ！」

よし、あと一本をどうやつて削るか…

「ハチさん、私のマスターになつて下さいませんか？ それならあの敵くらい余裕で倒せます。」

…マスターか。この俺が。茅場の作ったA.I.を使うのはなんか嫌だが、みんなを守るための力を手に入れることができるならば俺は躊躇はない。

「わかりました。マスター、引受させていただきます。」

「ありがとうございます！ では、10数秒お時間を頂きます。」

…10数秒？ そんなにかかるたら敵が…

「大丈夫！ 私がどうにか稼ぐよ！」

そう言つてユナが俺の前に出る。

「いや、待て！敵は残り1本だからさつきよりも手強くなつてるかも
しないんだ。1人じや無茶だ！」

「大丈夫、私だつて10数秒くらい稼ぐこと出来る！」

そう言つて走りだした。

「くそっ！サクヤさん、なるべく早くお願ひします！」

「分かりました！」

そう言つて目を閉じた。

頼むから無茶はしないでくれよ、ユナ。

魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 14

(くつ、やっぱり強い…こんなに強い敵の攻撃をハチはすっと受け流していたってことか。やっぱりハチは強いんだなあ。つと、余計なことを考えるとほんとにやばいかな。)

「サクヤさん、まだですか!?」

「すみません、もう少しです。」

くつ、ユナのHPは徐々に減りつつある。それもそのはず。俺の方に来させないよう相手の攻撃を受け止めながら戦っているのだから:

「グ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　!!」

と、その時ボスが吠えた、と同時に物凄いスピードでユナへと突進していく。

「ユナ！避ける！」

と、その声も届かずユナは突進をくらってしまった。

「キヤッ!!」

その攻撃により壁際まで吹き飛ばされたユナ、そのHPのゲージは赤になりつつあつた。

「グ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　オ　!!」

「この吠え方、まさか、2連続で同じ技か！」

ボスはユナへさつきと同じで突進していく。

「まずい！ユナ！」

「よし、ハチさん終わりました。マスター登録終了です。」

そう言うと、サクヤさんは一振の刀へと変わった。

「これからは私の力を存分にお使いください、M Y M a s t e r。」

俺はそれを聞くと同時にユナの方へと走る。

そして、

ガキイイ！

と、ボスの突進を受け止めた。

「ユナ！今のうちに回復！」

「う、うん。ありがと、ハチ。」

俺はユナが回復をし始めるのを見つボスを力で押し返す。

掩其口以示也

「フツ！」

と、俺はボスへと、どんどん攻撃を食らわせる。

減っていく。

掛ける。

そして…

と、ボスがエフェクトとなり碎け散った。

「はあ、はあ、勝つた、の？」

一
あ
あ

六、二十世喜子

お、
おい！ ユナ！？

「やつた、やつたよハチ！ 2人でボスを倒したんだよ！」

（一）はこの問題で最も重要な問題である。

といふのは、やめることにした。

しばらくするとユナは俺から離れた。

「うう、どうせやれ。いざないがんばって」

俺は、それよりも、と言葉をつなげて

「サクヤさん、そろそろ説明して貰えますか？」

「はい わかりました」

と、刀が光り出す。そして…サクヤさんは刀から人の形へと戻つ

た。

その光景を見て俺とユナは啞然とする。

「ふう、では説明させていただきますね？つて、どうしたのですか？」

「いや、もういいです。これが、天才の力だと思い知ったので…」

「？まあ、大丈夫ならお話をさせていただきます。先程も言つた通り私はA-Iです。私はこの世界でマスターを探しそのマスターの力になるように、との任務を与えられていました。そのマスターになる条件というのは私の場合は、人を思う心。ハチさんにはその心があつたため、私のマスターとして任命させて頂きました。」

「なるほど、茅場はこんなA-Iも用意していたのか…ん？待つてください、いま、条件の話をした時私の場合はつて言いました？」

「はい、言いましたけど…」

「つてことは、A-Iはあなただけではないということですか？」

「はい、私以外にもA-Iは作られています。確か…私含めて5体ほどだつたはず。」

まじか、つてことは他のやつもA-Iを見つけることはあるつてことか。

「あ、私からも質問いいですか？」

と、ユナが今度は質問をする。

「さつき、サクヤさんと契約したあとハチの動きがつていうかスピードが上がつていた気がするんですけど…」

「ああ、その事ですか。それは、私のスキル『比例』ですね。」

「比例？」

「はい、比例とはマスターのステータスに合わせて私の能力も上がつてく、ということです。なのでマスターは俊敏が高いので私の場合は重さがどんどんと減つていくということですね。逆にマスターの筋力、攻撃力が高かつたら私はどんどんと重くなつていく、ということです。」

「は？何そのスキル。めちゃくちゃ強いやん…」

「デメリットとしてはマスターのスキルセット欄の1つをその比例で埋めてしまうということですかね。」

いや、それは全然デメリットじゃない気がする。

「あ、あともう1つ。マスター、私はあなたの従者ということになつておりますので、私の事はサクヤ、と、呼び捨てで呼んでくださいね。」「…はあ、分かつたよサクヤ。とりあえず色々とやばすぎて頭が整理出来てないがそれはサクヤを武器として使つていけば分かるか。」「ははは…ハチつてもう、チートじゃない?」

「失敬な…って言いたいところだが、否定出来ん。つて!やべえ!ボス攻略!」

…
と、俺は焦つて時間を見る…まだ間に合うか?いや、ギリギリだな

「今から走れば…ん?メール来てるな。アスナから…『ハチ君、ボス攻略、来れない?』あー、この文の区切り方、確実に怒つてる…まあ、しようがないか。今から走つて戻れば…「ハチ!あそこに扉が…」

と、俺が考えているとユナが声を上げる。

扉?ほんとだ…、もしかしたらあそこから外に出れるかもしれん…

「行つてみるか。」

と、俺たち3人は扉に近づく。

そして俺はその扉を開けた。

そこには上へと続く階段があつた。

「もしかしたら、ここから外に…」

「行つてみる価値はありそうだな。どの道、戻つたりしたら時間がかかりすぎるからな。行つてみるか。」

そうして俺たち3人は階段を駆け上がる

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／15

「はあはあ、まだ地上につかないのか・・・」

ダンジョンの最奥にいたバスを倒してから、一時間が経過したがまだ地上の光は見えてこない。

バス攻略の時間も刻々と迫っている。

他のメンバーからのメッセージも着々と増えていく。

『ハチ君、今どこにいるの?』

『ハチ、今どこ？みんな心配してるよ～？』

『ハチ君、まだですか？』

『ハチさん、どこにいるんですか？』

『ハチ、何をしてるのかは、わからないうけどなるべく早く来てね？』

『ハチ君、あと30分で攻略に出発しちゃうよ～？』

『ハチ、早く来なさいよ』

上から、ホノカ、モカ、サヨ、アコ、キリト、アスナ、リズである。俺も、メッセージを送りたいが、なぜか、この洞窟の中ではメッセージを送ることができないのである。

だからめっちゃ急いでいるのだ。

『ハチ、バス攻略間に合うの？』

と、後ろからユナも心配そうに聞いてくる。

「わからん、この洞窟があとどれくらい続いているかによるな。

サクヤ、この洞窟があとどれくらい続いているのかわからなか?

「すみませんマスター、私は、この洞窟から外に出たことがないのでわからないです。」

なるほど、サクヤは茅場につくられてからずつとこの洞窟にいたのか。

じゃあわからなくて当然か・・・

それから30分走り続けると、ようやく外の光が見えてきた。まだ遠くにだが・・・

「やつと外の光が見えたか。」

「そうだね、やつとだね」

だが、攻略はもう始まっているはず、俺は心の中であいつらが死なないことを祈りながら光に向かって走る。

そして、10分ようやく外に出ることができた。

「ここは、洞窟の近くの森か？」

「うん、そうみたいだね。」

なら、迷宮まではそう遠くないはずだ。

「俺は、攻略組と合流するけどユナはどうする？」

「私は…私もいつしょに行つてもいいかな？私もこの世界から抜けるために何かしたいと思つてたから」

まあ、ダンジョンに潜つたおかげでユナのレベルも25まで上がつたらしいし、こいつの実力なら攻略組に混ざつて攻略したとしても大丈夫だろ、と思いその申し出を俺は了承し、迷宮区へと急いだ。

そしてまたまた10分、ボス部屋の前についた。

「よし、準備はいいか？」

「うん、大丈夫。」

とは言つてるものの、ユナはまだふるえていた。

「大丈夫だ、心配しなくとも危ないときは、俺が助けてやるから。」

そういう頭をなでる

「むー、そういうのずるいと思う…

もつと好きにな

なつちやうじやん

なんかユナがボソツと言つていたがなんて言つたんだ？まあいいか。

「よし、いく「あれ、何でここにいるんだハチ。」アルゴ？」

後ろを向くとアルゴともう一人男がいた

「そいつは？」

「いろいろあつて攻略に連れてきた…つてそれよりもお前、何でまだ中にいないんだ。もう攻略はつて、そんな話をしている場合じやない、早く中に入るぞ！」

と俺の腕をつかみ引っ張る

「お、 おいどうしたんだよそんなに慌てて」

「ボスの情報がβテストのときと変わつてたんだ。このままだとみんなが危ない！」

「マジかよ！ わかつた行くぞ」

そうして俺らもボス部屋の中に入つた
頼む、みんな生きててくれよ・・・

魔法使いとチート八幡の日常（SAO編）16

俺とユナ、アルゴと知らん奴の4人でバス部屋に入る。

中に入ると、誰一人として立つていなかつた。

どうやら麻痺状態になつてゐるらしい。

「間に合わなかつたか！」

バス部屋の奥には王冠を被つたモンスターが佇んでいた。

あいつがこの状況を作り出した張本人らしい。

俺は、すぐに行動を始めた。

とりあえず、麻痺を治す薬は無いから今麻痺状態のやつはどうにもならない、だから、麻痺が解けるまで俺がタゲを取り、ユナとアルゴ、知らん奴の3人で麻痺状態のやつらを安全な所に移動させる。

その旨を3人に伝えすぐにバスに向かつて走り出す。

「ハチ君！」

「おお、ホノ力か。すまんな、メッセージを返せなくて。あと、遅れて。」

「もう、ほんとに心配したんだからね！」

「悪かつたつて」

「それでハチ君、もしかしてだけどバスに1人で挑む気なの？」

「いや、お前たちが麻痺状態から回復するまでの間のタゲ取りをするだけだ。」

「そつか、ごめんね、私たちのせいでハチ君を危ない目に合わせちゃつて……」

「いや、大丈夫だ。それに、俺は、お前たちをもとの世界に戻すために死なせないつて心に誓つたからな。」

「……ありがとハチ君。それであのバスのことだけど……」

それからホノ力にあのバスの攻撃方法について聞き、バスのもとへと急いだ。

「さてと、行きますかね。サクヤ!!」

「はい、マスター！」

そういうつてサクヤは俺の手を取る。

『ステータスコネクト・・・完了

電脳戦姫 N.O. 0 朔夜 コネクト』

そして、サクヤは前と同じ刀へと変わった。

後ろでなんか騒いでるが気にしない。

俺はボスへと向かって走る。

「いくぜ、あいさつ代わりだ。」

ボスは、走つてくる俺を見ると攻撃を仕掛けてくる。

俺はそれを避け、そのままボスの腕をつかみ鉄棒の逆上がりの要領で半回転しボスの腕に乗る。

「暁流 型付 弐ノ型 『風車』」

俺は、ボスの顔の前に飛び連続回転斬りを放つ。

そして、まずはボスの視力を奪つた。

そしてそのまま

「暁流 型付 肆ノ型 『両断』」

相手の体の真ん中を縦に斬りつけた。

（やっぱ、このデカさじや真っ二つには出来ねえか…だが、視力は奪つたな。

あとは…）

「暁流 型付 参ノ型 『流れ水』」

八幡は地面に着地するや否やボスの後ろへと回り込み両脚の腱を斬る、その動きはまるで流れる水の様だった。

（さてと、ボスはこれで聴覚、嗅覚、腕くらいしか働かせる部分が無くなつたわけだ、多分全員復帰する頃だろうから俺の仕事はそろそろ終わりだな。とりあえずもうちょいHPを削つておくか）

俺はほとんど動くことの出来ないボスに、前まで使つていた曲刀をぶつ刺す。

そしてその曲刀を放置し、ボスの弱点である額をひたすら刀で斬り続けた。

そして…パリイーン

…あれ？ あいつら待つてからボスを殺るはずだったのに倒しちゃつたんだが…

(そりやそうです。マスターの攻撃力は私のスキルで、微量ながらupしているんですから。)

あ、そつか…

その後はみんなの麻痺が解け、質問攻めだ。

まずはサクヤの事、それからダンジョンのこと、なんで連絡しなかつたのかなどなど、色々と聞かれて大変だったハア

その後は3層へと進み、宿を探す。

そして、ヨウの提案により、ギルドを作ることにした。

メンバーは俺、ホノカ、モカ、サヨ、アコ、スノウ、アリサ、マツチ、イツキ、ステラ、ヨウ、トミー、タケ、キリト、アスナ、リズベット、そして1層と2層のボス攻略の時にお世話になつたエギルも俺達のギルドへと入ることになつた。

「んで、ギルドの団長はどうする。俺は言い出しつペのヨウでいいと思つんだが…」

「いや、このメンバーをまとめるのは俺には荷が重い…」

「私はハチくんがいいと思う！」

「ちょっとホノカさん？」

「そうですね、ハチさんがいいと思います！」

「いやいや、アコまで…」

「うん、ハチでいいんじゃない？」

おい、キリト…

それからは早かつた。

皆がホノカの提案に乗り、結局俺が団長、そして俺を推薦したホノ力を無理やり俺が副団長にした。

「はあ、なつてしまつたものはしようがない。

で、ギルド名は？」

「団長、決めてくれ。」

おい、ヨウ…

「うん、団長が決めるのがいいんじゃないかな？」

あ、これさつきと同じやつやん。

はい、同じでしたね、俺が決めるらしいです…

「はあ、ギルド名ね…マツ缶」

俺はそう呟く。

「ふざけてんの？」

あ、隣のリズには聞こえてしまったらしく、鬼の形相で俺を見てる
…怖いよリズ、その顔。

「うーむ…じゃあ『OPEN UP THE FUTURE』、略して
OTF。どうだ？」

「なるほど、未来を切り開く…か。僕はいいと思うよ。」

「うん、私もいいと思うわ。」

「アコもカツコイイと思います!!」

「なかなかイカした名前付けたじゃねえかハチ。」

と、皆が了承してくれた。

というわけで、これから俺達、OTFのSAO生活が始まろうとしていた。

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／17

俺達は3層にてギルドを作り、全員で攻略を続けた。

途中で2層のボス攻略の後に別れたユナと再開し、ギルドを作ったことを言うと、ユナも入りたいとのことなので、それを俺は了承し、ユナもギルドの一員となつた。

また、アルゴと2層のボス攻略の時にいたネズハについても同じで、アルゴはうちのギルドの専属の情報収集員、ネズハはギルド専属の鍛冶、裁縫屋としてギルドに入つてもらつた。

あとは、クライインと再開もした。

なんでも、クライインもギルドを作つたみたいで、俺たちと協力の関係を築いてもらつた。

そうしてなんだかんだ言つて今は25層まで到達した。

まさか1年もかからずに25層まで到達できるとは思つてもいなかつたからビックリだな。

「さてと、とりあえず今日はギルドの拠点を新しく置きたいからそれの下見に22、23層にでも行くかな。」

そう、今まで拠点として4層にあつたカフエを使って集まつていたがそろそろギルドの拠点が欲しいとの話になつたので、それの下見にいつか行こうと言う話になつっていたのである。

「あ、私もついて行つていい？」

「アコも行きたいです！」

「アスナとアコか。別にいいぞ。」

というわけで3人で今日は拠点探しに出かける。

最初は23層に訪れた。

「23層は比較的に広いのは覚えてるんだが、しつかりと見て回つたことは無かつたな。」

「そうだね、私達は攻略のことで頭がいっぱいだつたしね。」

「そうですね、でもでも、今日はゆっくりとできる日ですし、しつかりと見て回りましょう！」

というわけで俺達は23層の東側から見て回ることにした。

それからは3人で話しながら23層を回った。

アスナもアコも最初の頃よりはだいぶ仲が良くなつたと思う。俺としても安心だな。

アコはもう妹みたいなものだからな、心配になる。
あとはスノウとアリサもだな。マツチは…まあ、あの感じからすると大丈夫そうだ。

「あ、ここつて最初に来たところじゃない？」

と、アスナが言う。

もう23層を一周したのか…案外早かつたな。

「アコちゃんは23層で良さそうな家つてあつた？」

「うーん…あんまり無かつたです。アスナさんはどうでしたか？」

「私もかなう。ということで、22層に行こつか。」

あれ？俺抜きで話が進んでるぞ？

…はあ、いいか、俺もあんまり好みの家がなかつたから。

と、言う訳で22層に来た。

「さてと、じやあこつちも23層と同じように見て回るか」

「そうだね」

「じゃあ、行きましょー！」

まずは東側から見て回る。

そこからどんどんと西へと進んでいくが22層もあまり良さそうなどころはない。

「はあ、あんまり良さそうなところはないな…」

「うん、やっぱりゲームだからなのかな？」

「うーん、ゲームの中にもマイホームが凄いやつとかもあるんですけどねー。このゲームは無いのかな？」

アコの言う通りかもしれないな…

と、そんなことを話していると湖が見えてきた。

「わあ！こんな所に湖がありますよ！」

「ここはいい場所だな。なんて言うか、ゲームだけど空気が美味しい感じがする。」

「あ、それは私も感じるよ。」

と、湖の周りを歩いていると…ピコンッ
と、音が鳴る。

「これは…」

「ホームの購入画面ですよハチさん！」

「ここはいい場所だし、ここに決めてもいいんじゃないハチくん。」

「ああ、俺もそう思つてた。アコとアスナはここでいいのか？」

と、俺は聞く。

「「もちろん！」」

「よし、わかつた。」

という訳で俺はこのホームを購入。

そのあとギルドのホームになるように設定した。

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／18

「うわあ、ひろーい！」

俺とアスナとアコはホームをみつけ、購入した後、ギルドメンバーを集めた。

そして今はホームの中にはいる。

とりあえず、メンバー全員分の部屋と他に、風呂、キッチン、リビング、修練場付きという最高の物件だということを中心に入つてみて感じた。

いや、ホントに…

まずもつて、外から見れば3階建ての普通の家だと思つてたんだよ

⋮

中に入つてみたらなんか地下の入口があつたんだよな。そして、地下に行くともう…やばかった。語彙力崩壊するくらい広かつた…。

という最高物件をゲットできた俺ら。

今はホームでくつろいでいる。

と、そんな時、俺に一通のメッセージが届く。

「…は？」

そのメッセージを読んだ俺はすぐさま外出の準備をする。

「どうしたのハチくん？」

俺が急いで外出の準備をしているのを不審に思つたホノカ達が俺にそう聞いてくる。

「とりあえず、急ぐから手短に話す。

キバオウたちのギルド、AINクラッド解放軍が壊滅した。」

『え…』

それを聞いた皆は驚いている。

まあ、そりやな、俺も聞いた時はこんな顔していたんだろうしな。

「とりあえず俺はキバオウのギルドに言つて詳しい事情を聞いてくる。お前らはここで待機を、今後の方針が決まつたら伝えるから。」

そう言つて俺はAINクラッド解放軍のホームへと向かつた。

「キバオウいるか？」

「ああ、ハチはんか。すまん…今回の件はワイの責任や。」
と、キバオウは悔しそうにしていた。

とりあえず事情を聞かないとな。

「何があつたんだ？」

「今回の件はAINクラツド解放軍のワイト とは別の派閥が起こしたことなんや。

「元々、AINクラツド解放軍にはワイの派閥ともう1人、ワイトと言うやつの派閥で別れてたんや。」

「なるほどな、今回の件はワイトの派閥が起こしたということか。」「そうや、ワイは止めたんや。けど、止めきれんかった…すまん」

「いや、キバオウは悪くないさ。」

「そう言つて貰えると救われるわ。」

さてと、とりあえずもうひとつ聞いたとかないとな。

「これから攻略はどうする。」

「一旦手をひこうと思う。勝手やけど、今的人数だと足を引っ張るのがオチや。」

やつぱりか…だが、ここでキバオウ達を無くすのは惜しいな。

何か手は…ある。

「なあキバオウ、良ければの話だ。お前さえ良ければ、俺たちのギルドと合併しないか？」

いや、俺たちのギルドに吸收されないか？」
と、俺は一つの案を出す。

「吸收か…」

「ああ、今お前たちの力をなくすのは惜しい、それにお前だつてまだ攻略はしたいだろ？」

まあ、今のは一つの案として出した案だ。
お前が嫌なら断つてくれても構わない。」

「…わかつた。」

ハチはん、いや、団長。

これからよろしくお願ひしますわ。」

と、キバオウは答えてくれた。

「こちらこそだ、俺達も戦力の強化は目標だつたからな、礼を言うぜキバオウ。」

こうして壊滅状態のアインクラツド解放軍は俺たちのギルドに吸収された。

魔法使いとチート八幡の日常～SAO編～19

俺たちのギルドとキバオウたちのギルドが合併してから1週間が経つた。

俺たちはこの一週間、リンドたちのギルドと話をしたり、全員のレベルアップなどをして、25層攻略のための下準備をしていた。

そして、今日はその25層攻略の攻略会議の日である。

「あー、みんな集まつたか？」 よし、とりあえず攻略会議を始めるか。

「まず、はじめに、」

「と、俺の号令によつて始まつた。」

そして、

「よし、じゃあパーティーを組んで「済まない、ちよつといいだらうか。」「ん？」

「えつと、誰だ？」

「私はヒースクリフ。攻略会議の場所はここであつていいだらうか」

「ああ、合つているが……」

「そうか、まず初めに、遅れてすまない。私のギルド『血盟騎士団』のメンバー30名もボス攻略へと参加させて頂きたい。」

と、ヒースクリフと名乗る男の後ろから同じような色合いの制服を着た奴らが後ろから出てきた。

「ふざけるな！遅れてきてお前たちも攻略に参加させろだと？」

「と、リンドたち。」

「落ち着けリンド。ヒースクリフとか言つたか？ボス攻略は遊びじゃない。命懸けだ。それをわかつてここに来たんだろうな？」

「ああ、もちろん。」

「そうか、じゃあ聞かせてくれ。お前らレベルはいくつだ？俺たち攻略組は30後半がほとんどだ。それよりも低かつたらただの足でまといにしかならない。」

「フツ、私たちのレベルか。私のギルド『血盟騎士団』の平均レベルは

38だ。」

は？

ザワザワザワザワ

嘘だろ？ 38が平均だと？

「そんな馬鹿な！ お前らは前回の攻略にいなかつたはずだ、なのに一気にそんなにレベルが上がるはずがない！」

「ならば、私と手合わせするかい？」

と、ヒースクリフ。

「私の実力が君たちと同等かそれ以上なら信用してもらえるだろうか。」

実際、ヒースクリフも前回までの攻略にはいなかつた。

なら、ヒースクリフが俺たちと同等かそれ以上の実力だったら、信じるしかないだろう。

「分かつた、俺が相手をする。」

と、俺は前へ出る。

「ハチくん！」

と、うちのギルドの奴らは驚いているが、ここでレベル最高の俺が出来れば大体の実力は分かるはずだ。

「よろしくお願ひしよう。OTFのリーダー。」

「ああ。」

こうして俺とヒースクリフの決闘が始まる。

「いくぜ朔夜。」

「了解です、マスター。」

そう言つて刀へと変化するサクヤ。

「ほう、そんなものがあるのか。」

「驚かないんだな。」

「いや、内心は驚いているさ。」

「こいつはどこか怪しい。」

俺は警戒しつつ、構える。

ヒースクリフも盾を構えた。

そして、決闘スタートの合図がなる。
俺はそれと同時に走り出した。

「速い！」

と、観客は叫ぶが、ヒースクリフは動じていないよう見える。
「はああ！」

と、俺は刀を振るが、盾にとめられる。

それからは同じような攻防が続く。

俺が速さでヒースクリフの後ろをとるが、ヒースクリフはそれに反応し、縦で防ぐ。

その繰り返しだつた。

「ハアハア」

「これで信じて貰えたかねハチ君。」

信じるしかないようだ。こいつの実力は本物だ。

だが、このデュエルは負けるわけには行かない！

「これで決めてやる、ヒースクリフ。　　暁流　　型付　　拾ノ型

『天舞　　朧夜』

と、俺は今出せる全力のスピードでヒースクリフとの間合いを詰める。

そしてそのまま横風に刀を振る。が、盾に防がれる

「その攻撃は見飽きたよハチ君。」

と、ヒースクリフは言う。

が、俺の攻撃はまだ終わりじゃない。

盾に防がれた時の反動を活かし、そのままヒースクリフの後ろへと回る。

「何!?」

そしてガラ空きの背中に一太刀を加え……!?

るはずだった。が、俺の刀は止められ、逆に俺は攻撃を食らつていった。

「は？」

おかしい、今のは俺の勝ちだったはずだ。

あそこからの方向変換で、俺の刀を止めるなんて人の動きでは無理

だ。

： ヒースクリフ、こいつは怪しい。
何かを、重大な何かを隠してやがる。

と、俺は決闘に負け、ヒースクリフの怪しさを悟つたのであつた。

魔法使いとチート八幡の日常～SAO編～20

ヒースクリフとの決闘の次の日、25層の攻略が始まる。

昨日のヒースクリフとの決闘のことはとりあえずは頭の片隅に置いておき、今は25層を攻略する。

「よし、今回は今までとは違った敵も強大な力を持っている。皆、気をつけてかかるぞ！」

と、リンドが声をかけ扉を開ける。

そして俺たちはボスと対峙した。

ファフニール、今回のボスの名だ。

「アスナ、スイッチ！」

「了解！」

と、それぞれがスイッチを繰り返し攻撃を掛けていく。

俺はと言うと1人でやつてる。

何故かって？

理由としては、俺のスピードを活かすためと言うのが1番だと思う。

今現在の攻略組で俺のスピードについてこれるやつはまず居ない。だからこのスピードを活かして戦えるよう誰とも組まずに戦つている訳だ。

誰に説明してんだ俺は…

「おつと、あぶね」

そんなことを考えていると攻撃が俺に向かって飛んでくる。

それをしつかりとかわし、攻撃に移る。

そんなこんなで20分、今回はキバオウのギルドの損害はあつたものの、それ以外に損害が出づにボスを攻略できた。

多分、連携が上手くいったのと、アルゴの情報のおかげだろう。と、言うわけでアクティベートは他の奴らに任せ俺らはギルドホールへと帰つてくる。

そして俺は昨日のヒースクリフとの戦いを思い出していた。

あそこで攻撃が入らなかつた意味がわからない：

俺はやつの後ろを取り攻撃を入れたはずだ、反応して、あまつさえカウンターを食らわせるなんてまず人の動きではない…

とりあえずアルゴにヒースクリフについて調べさせることしかないか

⋮

俺はアルゴにヒースクリフについて調べさせることにした。

アルゴにヒースクリフを調べさせ初めてから時間がたち、俺たちは今38層にいる、そして今日でSAOに囚われてから1年が過ぎようとしていた。

今は順調に攻略が進み死者も出ていない。

キバオウたちも前線へと復帰を果たし、頑張ってくれている。

だが、一つだけ良くない噂がたっていた、PKギルドができたと言う噂である。

PK、プレイヤーキルの略称だ。どのゲームにもそのような事はある、だが、このゲーム内では違う…このゲーム内でのPKとは人殺しだ。

そんな噂があるということで今日は臨時のギルド会議が開かれる。

参加者は、俺、リンド、ヒースクリフ、キバオウの4人だ。

「とりあえず、この噂についてだが、真相を調べた方がいいだろう。」

と、リンド

「俺も同感だ、このゲーム内のPKは人殺し、そんなことをする奴らは見過ごせねえよ…」

「せやな、とりあえずワイらは下層の方にギルドホームがあるから、下層の方を調べておくわ」

「ならば私たちは25層から30層辺りを見回ることにしよう、何かあつたらハチくんに知らせる。」

「そうだな、ハチに俺達も知らせることにする。頼むぞハチ」

「わかつた、とりあえずこちらでも調べておく」

と、言う感じで解散となつた。

PKギルドの出現か、俺のギルドのヤツらは殺させない、何としても俺が守り抜く、たとえPKギルドを壊滅させてでも…

魔法使いとチート八幡の日常（SAO編）21

いま、俺たちの攻略はどんどん進んでいる、そして、やつと昨日、49層にたどり着いた。

その間もPKギルドについて調査は進んでおり、とりあえずPKギルドの名前、特徴、そして主要メンバーがわかつてていた。

そして俺たちは今アルゴの頼みである階層のある場所で見張りをしていた。;

ちなみに俺たちとは俺とキリトとアスナの3人だ。

他のメンバーはとりあえずPKギルド、ラフコフの調査へと赴いている。俺としてはあまりPKギルドの件にはメンバーを巻き込みたくないんだが：;

つと、そんなことを誰かに説明しているあいだにこちらの方も動きがあつたか、

「嘘、ピナ、ピナ！」

その声の方を向くと1人の少女がドラゴンを抱えて泣いている、周囲には複数のモンスターがいた。

なるほど、彼女がアルゴの依頼にあつたビーストティマーか、とりあえずアルゴにはこの少女を助けろという指示を受けたため3人で周りのモンスターを蹴散らす。

「大丈夫か？」

「は、はい……でも、ピナが……」

「ごめんね、私たちがもつと早く来ていれば、貴方の使い魔も助けられたかもしけないのに……」

と、アスナが声をかける

「……あ、そう言えば、使い魔つてプネウマの花で生き返らせれるんじゃないかった？」

と、キリトが言う。

ああ、そう言えばそだつたな

「ホントですか!? プネウマの花……それってどこに行けば」

「あー、確か47層だつたか？」

「うん、確かね」

「47層…私じゃ行けない…」

「…なんなら俺達が着いていくぞ?」

「ええっ!? そんな、悪いです。私がレベルを上げて今度取りに行きます!」

「あー、プネウマの花で生き返らせるのは死んじやつてから3日間のみなんだ…」

と、キリトが言うと少女は諦めの表情をうかべ

「すみませんが、よろしくお願ひします」

と、俺たちに言つたのであつた。

さて、場所は変わり宿、今は47層についてシリカに説明しているところだ。

ん?名前?ああ、さつきみんな自己紹介したんだよ。

「まあ、47層の敵は植物系が多い、気をつけろ。」

「それと、花の近くはあまりモンスターはいないかな、その道中はすぐ多いから死なない程度に頑張ろう!」

「とりあえず、毒とかにも気をつけてね、植物系モンスターは毒を使つてくるモンスターが多いから」

「なるほど、わかりました!」

とまあ、こんな感じで47層について教えているわけだ。

…ん?

「…」

「どうしたのハチくん」

俺はドアに近づき…開ける

すると、誰かが走つていくのが見えた

「聞かれてたか…」

「多分、ロザリアさんのパーティーメンバーだと思います、あつ、ロザリアさんって言うのは私の元パーティーメンバーの方で……」

ロザリア…アルゴの言つてたやつか…

オレンジギルド、タイタンズハントのリーダー・明日は気をつけた
方が良さそうだな。

そして、次の日を迎えた…

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／22

翌日、俺たちは47層に来ていた。

理由は言わずもがなプネウマの花を取りに来た。

「皆さん、すみません。付き合わせてしまって…」

と、改まつて申し訳なさそうにするシリカ。

俺はシリカの頭に手を乗せ

「大丈夫だつて言つてるだろ？」

それに、シリカは妹みたいだからな、ほつとけないんだよ。」

と、撫でながら言つた：「ん？ 撫でながら？」

シリカを見ると顔を赤くして俯いていた。

横では2人がジト目でこちらを見ている。

「す、すまんシリカ。

昔、妹にやつていた時の癖でつい…」

「い、いえ。嫌じやなかつたので大丈夫です。むしろ…」 //

「ん？」

「い、いえ！ なんでもないです。」

と、シリカは言つて黙つてしまつた。

やつぱり怒らせたかな…後でもう一度謝つておこう。

そんなことがありながらも俺たちはどんどん進んでいく。

「そう言えばさ、ハチくんはヒースクリフさんのことはどう考へてるの？」

進んでいく途中、アスナがいきなりそんなことを聞いてくる。

キリトも興味があるようでうなづいている。

シリカは首を傾げていた。

「そうだな…单刀直入に言うと、ヒースクリフは多分茅場晶彦本人だと踏んでいる。」

「その根拠は？」

と、キリトが質問してくる。

「まず1つめはレベルだな、あまりにもはやく上がりすぎだ。今は多

分俺とそう変わりはないと思う。」

多分、ヒースクリフは血盟騎士団を効率がいい狩場でレベリングさせてるんだろうな。俺らの知らない、効率がいい場所で。

「でもさ、なんでヒースクリフは血盟騎士団のレベリングをしてるの？自分からしたらそれは敵に塩を送ってる行為じやない？」

まあ、キリトの意見は最もだ。

「ヒースクリフにとつては警察に捕まるとか、その辺は関係ないんだろうな。あいつは自分のつくりあげたゲームをただ、純粹に楽しめたんじゃないかと思う。ひとりのプレイヤーとして。

そして2つ目、今まで見てきたがあいつはボス攻略でHPが黄色以下になつた事がない。あいつのユニークスキルの影響もあるかもしねないが、それにしてもおかしいと俺は思つていて。

そして3つ目が俺との決闘の時のあの反応速度、おかしすぎる。「なるほど、それを聞くとヒースクリフが茅場晶彦説はあるかもしけないね。」

と、そんな話をしているうちに目的地に着いた。

「まあ、この話は置いておいて、今は目的を果たそうぜ。

ほら、シリカ。」

そういうい普ネウマの花を指さす。

シリカはその花に近づき取る

「これが、普ネウマの花」

「ああ、とりあえずそのまま持つて帰つて生き返らせてやりな、ここで生き返らせても帰りに死んだら元も子もないからな。」

「はい、わかりました。」

そうして、俺らは歩きだそうとするが前に5、6人くらいの人人が出てくる。

「ロザリアさん…」

「あらあら、シリカじゃない。奇遇ね」

そうしらばつくれるロザリア

「…狙いはなんですか」

「それよそれ、あんたの持つてるやつ。それをあたしに頂戴？ そうす

れば命だけは見逃してやるわよ?」

と、シリカに問いかける

そこにキリトが話しかけた

「それは出来ない相談だね。それはシリカちゃんが取つたもの。大切な存在を生き返らせるために…」

「ええ、そうよ。だからお引き取りしてもらつていいかしら」と、キリトとアスナがシリカの前に立ち塞がる。

「あ、そう。じやあいいわ。お前ら…やりな。」

ロザリアが指示を出すとほかの奴らが動き出す、つてかこいつらオレンジかだつたら攻撃しても問題ないんだつたな。

「アスナ、キリト、シリカを頼む。」

そう言つて俺は刀を抜く、今日は朔夜では無い。理由はまあ、置いておくとして

俺は最大限出せるスピードで敵を気絶させる。

「…え?」

敵も驚きこのザマだ。

「はあ、アルゴー。見てんだろう?これでいいだろ?」

俺はその辺にいるだろうアルゴに呼びかける。

「にやはは、さつすがハチだナ。十分サ」

そう言つてその辺にころがっているオレンジのヤツらを黒鉄宮へと送つていくアルゴ。

俺はその間にロザリアへと近づいた。

「ひつ!?

「ロザリア、お前は人を殺して楽しかったか?」

「な、何よいきなり!ええ、楽しかったわ!怯える雑魚たちを殺すのは!」

「そうか…だつたら、お前も死ね。」

自分でびっくりする程恐ろしく低くそしてさつきの籠つた声がでた。

そして刀をロザリアの首にあたるギリギリで止める。

「…と、思つたがここで殺したらお前らと一緒だからな。お前は黒鉄

宮で頭冷やしちきな。」

そう言つて、黒鉄宮への門を開く

「はは、そんな甘い考へで生きていけると思わない事ね…ラフィンコ
フィンの奴らは私なんかよりも殺しを快楽とおもつてゐるヤツらば
かり、あいつらは変態よ！あんたらもあいつらに殺させるといいわ
!!」

そう言つて消えていった。

ラフィンコフイン…

これはそろそろ被害を抑えるためにも、討伐を考えるべきだな…

多分、黒鉄宮送りは全員は出来ないだろう

俺は、あいつらを守れるなら人殺しだつてなんだつてしてやる…本
物を守れるなら

「ふ、まさかこんな心構えのやつがこの時代におるとは…」

?????? 「ああ、こいつなら私たちの力を自分のために悪用はしないと思
うがどうだね？」

??? 「ああ、こいつなら…」

魔法使いとチート八幡の日常～SAO編～23

ロザリア達を黒鉄宮へと送った次の日、俺は早急にギルド会議を開いた。

理由はラフインコフインについてだ。

「今日集まつてもらったのは他でもない、ラフインコフインについてだ。

单刀直入に言う、俺はラフインコフインの討伐をすぐにでも行うべきだと思う。」

そう、今現在ラフインコフインの影響により攻略が進めることが出来なくなっている。

だから、今後のためにもラフインコフインの討伐は最優先事項だと俺は思っている。

「ああ、私も賛成だ。ラフインコフインは流石に危険すぎる。すぐにでも討伐すべきだ。」

と、ヒースクリフ。

こいつもラフコフについては予想外だったのだろう。

「そうだな、ならすぐにでも奴らのアジトを暴き、攻め込む用意をした方がいいか。」

と、リンドが言う。

「それやつたら問題あらへんで、うちのメンバーと情報屋の協力のおかげで、ラフコフのアジトはあらかた目星がついとる、せやろハチはん？」

「ああ、アルゴに聞いたところ33層当たりがラフコフのアジトだと思われる。」

「そうか、ならば話は早い。早速それぞれのギルドに通達し討伐隊を結成。そして討伐を結構すべきだろ。」

「ああ、俺も賛成だ。という訳でそれぞれ、ギルドメンバーに通達し、また明日この場所で会議を行う。その時に討伐について話をすることにしよう。」

ということで今回の会議は終わった。

「つうわけで、ラフコフの討伐という任務が入った。けど、この作戦、俺だけ参加する。だからみんなは待つてくれ。」

「そんなこと言われてわかつた、なんて言うはずないでしょ。」

と、キリト。

「私達も行くよ！ ラフコフは許せないもん！」

と、ホノカ。

他のみんなも、2人の意見に賛同していく。

まあ、そうなるとは思ってたからしゃあないか：

「はあ、まあそうなるよな。わかつたよ。ただ、絶対に死ぬなよ。全員生きてここに帰つてくる。それが絶対だぞ。」

「「「おおお!!」」」

というわけで、今回のラフコフ討伐に参加するのは、俺、ホノカ、アスナ、キリト、モカ、サヨ、ヨウ、タケ、トミーだ。ほかのメンバーは今回の討伐には参加させるのは止めた。

まあ、今回は相手を殺すことになりかねんからな。

だから皆には来て欲しくなかつた…だが、しようがない。できるだけ、俺が：

そしてついに討伐の日になる。俺たち攻略組は33層のラフコフアジトの前まで足を進めていた。

「よし、では皆気をつけていこう。」

そしてヒースクリフが突撃の合図を出そうとしたその時だつた。俺の索敵スキルに多数の敵反応ができる。

「!? まづい！ ヒースクリフ、囮まれてるぞ!!」

俺はすぐにヒースクリフに言うがもう遅かつた。ラフコフは攻撃を開始してきた。

「くつー！ 読まれていたか。怯むな！ 敵を追い返すのだ！ 攻撃開始！」

そうして俺たちと、ラフコフの戦いが始まった。

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／24

クソ、ラフコフは俺たちの襲撃を予想してたって言うのか？

ラフコフ襲撃に来た俺たちは逆にラフコフの奇襲に遭っていた。

「これはちょっとまずいんちやうかハチはん！」

「ちょっとどどろじゃない、かなりまずい！ とりあえず、殺すな！ 全員黒鉄宮に送るんだ！」

俺がそう指示をだすと、全員が「了解！」という返事を返す。それくらいの余裕はまだあるらしいな。

俺は俺で、周りの敵の攻撃を受け流しつつ、体術での確に相手を無力化し、黒鉄宮に送っていく。

とりあえずこの調子なら、1人も殺さずに行けるか…

「へへ、まさかこちらから奇襲しておいて、こっちが押される羽目になるとはなあ！」

と、後ろから声が聞こえるため、俺は瞬時に振り向き、サクヤで受け止めた。

「おおつと、まさかこの奇襲まで止めるか、ハチ。」

「P.O.H!!」

「へへ、イツツ・ア・ショータイム！」

うして俺とP.O.Hの戦いが始まつた。

「ア！」

「あと、危ねえ危ねえ。」

俺とP.O.Hの戦いは一進一退の攻防となつていた。

だが、こいつの避け方、攻撃の仕方はだいたい見切つた。

「グツ!? なんでだ、俺の行動が先読みされやがる…」

「これが、お前と俺のレベル、経験の差だよP.O.H。お前じや、俺には勝てない。」

俺がそういうとP.O.Hは俺から距離をとる。

「まあ、そんなところどうとは思つてたぜえ、俺達がお前らに勝てないのもなあ。だが、1人、2人くらいあの世に送ることくらいはできる。」

ザザア！」

P O H は そ う い う と 同 時 に 僕 の 方 と は 違 う 方 に 走 る。
と 同 時 に 赤 目 の ザ ザ も 走 り 出 し た。

な!? そ の 方 向 は !

そ う 、 2 人 は 他 の ラ フ コ フ メ ン バ ー と 戦 つ て いる ホ ノ カ と ア ス ナ の
方 向 に 走 り 出 し た の だ。

「くそつ！」

俺 は す ぐ さ ま 走 り 出 す。 が、 この ま ま だ と 追 い つけ ねえ：
ど う す る、 俺 は 守 れ な い の か … 大 切 な 人 た ち を …

『力 が 欲 し い か ?』

ドクンッ!

『八 幡 よ、 力 が 欲 し い か ?』

『大 切 な 者 達 を 守 る 力 が 。』

そ ん な の 決 ま つ て る …

『欲 し い に 決 ま つ て る ろ ! ! !』

『よ く 言 つ た ! そ れ で こ そ 我 の オ レ 認 め る 雜 種 よ !』

そ う 声 が 韶 く と 同 時 に、 俺 の 目 の 前 が 白 く 染 つ た。

『こ こ は … 心 象 世 界 ?』

『あ あ、 こ こ は 君 の 心 象 世 界 だ、 八 幡 よ。』

と、 う し ろ か ら 聞 き 覚 え の 有 る 声 が 聞 こ え る。

『師 匠 ?』

『久 し ぶ り だ な 八 幡 。』

そ う、 そ こ に 居 た の は 俺 に 模 倣 魔 術 を 教 え て く れ た 师 匠 だ つ た。
そ し て も う 1 人、 金 ピ カ の 人 が いた。

『誰 ?』

『ふ は は は は、 我 《オ レ》 に 対 し て 誰 ? と は、 愉 快 な 疑 問 だ 八 幡 よ !』

『こ こ は さ つ き 聞 こ え た 声 の 人 …

『ま あ 良 い。 我 は 英 雄 王 ギ ル ガ メ ツ シ ュ そ の 人 よ。』

英 雄 王 カ … 英 雄 王 ?!

『え ? な ん で 英 雄 王 が 俺 の 心 象 世 界 に ! ?』

『な あ に、 貴 様 が 欲 し た の で あ ろう ? 力 を、 だ か ら 私 に 来 て や つ た 迄

よ。ありがたく思うがいい！』

『英雄王直々に俺に力を与えに来てくださったのですか!?』

『そうだ。なあに、そこの弓兵が面白い小僧がいると言うから来てみれば、本当に見てて飽きない人間だつたぞ、八幡よ。我達の力を与えるにはふさわしい逸材である！』

『は、はあ…ん？俺たち？』

『そこは私が説明しよう…八幡よ。私たちは英靈と呼ばれる存在だ。』

『英靈？』

『そうだ、英靈とは所謂靈基を持つた英雄たちのことだ。だが、その英靈達が今この世から消滅しようとしている。』

『えつ、なぜ…』

『聖杯の消失によるものよ。』

と、ギルガメツシユ王が答える。

『聖杯の、消失？』

『ああ、私たちは聖杯によつて生かされていると言つても過言ではない。その聖杯がなくなりつつある。それにより、私たちの存在が消滅しようとしている。そのため、今、私たちの力を受け継いでくれる人間を探していたのだ。』

『それが、俺…』

『そうだ。』

『その力があれば、皆を…大切な人たちを助けられますか？』

『ふはははは、何を言うかと思えば。我的力があるのだ、そんなこと容易い！それに、他の英靈達の力もあるのだ、貴様が世界最強と言つても過言ではなかろう。』

『そう、ですか。なら受け取らせてください。』

『よく言つた！それでこそ我が認めた人間よ！』

そういうとギルガメツシユ王はどこかからか金色の鍵のようなものを取り出した。

『これが、全英靈の力の鍵である。これを八幡、お前の中に組み込む。その際、貴様の脳にはすごい量の負荷がかかる。命に関わるかも知れん。だが、それに耐え切れば、貴様の中に全英靈が入ることになる

だろう。耐え着る自信はあるか?』

『あります!』

『よし!では、受け取るが良い!これが我達、英靈の力よ!』

そう言つてギルガメツシユ王は俺の胸にその鍵を差し込む、と同時にものすごい頭痛が来る。

『グツ!ガアアアア!!』

痛い、ものすごい痛みだ:だが!これに耐えられなければ、俺も、2人も死ぬ!

だつたら、耐え切るのみ!!

『ものすごい理性だな…』

『ふはははは、流石は我が見込んだだけのことはある!それにしてもアーチャーよ、よく見つけたなこの逸材を。』

『私の弟子だからな…』

『さて、八幡よ、私が成しえなかつた正義の味方とやらに、君なられるかも知れんな…』

『か?、八幡よ、その力、使い時を間違えるでないぞ!』

『いう言葉を最後に俺の意識は遠のいていった。』

「死ねえ」

声??:スナが戦つていたラフコフメンバーを黒鉄宮に送つた直後、その声??:うしろから響く

「なつ、P o H!? (まづい、間に合わない!こんなところで、死ぬの?)

私は?:ハチくんごめん)」

「死ね…」

ホノカもアスナと同様にラフコフメンバーを黒鉄宮に送つた直後うしろから声が聞こえてきた。

「なつ、赤目のザザ!? (これは…間に合わないかな…ごめんねハチくん?)」

「??:せねえよ:『天の鎖 《エルキドウ》』」

そういうと、何も無い空間から鎖が現れ、P.O.Hとザザを拘束する。

「な、なんだこの鎖はア!?」

「う、動けん…」

「ハチくん?」

「すまん、ホノカ、アスナ、俺が不甲斐ないばかりに、2人を危険な目に合わせてしまつた…」

フウ、間に合つた。流石はギルガメッシュュ王の力だ…

『ふはははは! 我の力なら、こんな事造作もないことよ!』

『えええ、喋れんのか…まあ心の中だけだからいか…』

「さてと、P.O.H、ザザ、お前らは俺の仲間を殺そうとした…覚悟は出来てんだろうな!」

「は、ハチくん?」

「大丈夫、殺しあはしねえよホノカ。」

「良かつたあ…」

「黒鉄宮で罪を償え」

「クソがア!!」

そう最後の遺言を残し、ラフコフの最後のメンバー、P.O.H、ザザは黒鉄宮へと送られた。

こうして、俺たちとラフコフとの戦いは誰も死ぬことなく終わつたのであつた。

そして、俺のスキル欄にはエクストラスキル、『英靈王』が追加された。

魔法使いとチート八幡の日常／S A O 編／25

ラフコフ討伐が終わって数日がたつた。

あの後は色々と大変だった。

まず、質問攻めが多かった…まあ、みんなの前でみんなの見せたら
そうなるか…

その後、色々と試したんだが、あの能力はこの世界では1日5回が
限界らしい。

それ以上やると俺がぶつ倒れる。

まあ、だからあまり使い勝手は良くはない。

いや、強いんだけどね？

という感じで数日がたち、攻略組も攻略に戻り始めていた。

うちのギルドでも攻略に勤しんでいる。

今はとりあえず、キバオウ、俺、イツキ、キリトがそれぞれリーダー
として、攻略している。

キバオウが元解放軍のヤツらを、イツキが、ステラ、ヨウ、サヨ、ス
ノウ、アリサの5人、キリトが、アコ、トミー、マツチ、リズ、タケ
の5人を、そして俺が、アスナ、ホノカ、モカ、シリカ、ユナの5人
を連れている。

エギルについては前から店を始めたらしく、そちらの経営に勤しん
でいる。

というわけで、俺たちはそれぞれ別れ、攻略に当たっていた。

ただ、俺の頭には今はヒースクリフのことが浮かんでいた。

あいつは何者なのか、あの決闘の時のあの動き、反射のようなスキ
ルもあるのだろうか…など、考えてしまっていた。

「ハチ、大丈夫？」

と、うしろからユナが話しかけてくれる。

「ああ、ちょっとと考え事をしてた。大丈夫だ。」

ま、今は攻略中だ。そのことについては後で考えよう。

攻略を初めてから約2時間が経過した。

ここまで攻略してもまだボス部屋は見つからない。他のみんなも連絡が来ないということは見つけていないのだろう…

「とりあえず、一旦帰るか…」

「そうだね、みんなに連絡しておくよ。」

「任せるわホノカ。」

とりあえず俺たちはギルドハウスへと戻ることにしたのであつた。

「まだボス部屋は見つからないか…」

あの後、ギルドハウスへと全員が戻り、攻略について話していた。「結構広めに見てきたんだけど見つからなかつたよ…」

「僕の方も同じく。」

「ワイもや…」

「まあ、まだ焦るときではないし、慎重に探していこうかね。」

と、言う訳で、今日の攻略は終わり、各々がやりたいことをやって過ごしていた。

次の日の朝、アルゴからのある連絡により、俺はみんなを集めた。そう、ヒースクリフ達血盟騎士団がボス部屋を見つけたという連絡だつた。

だつた。

「というわけで、今日の午後に攻略会議が開かれることになつた。」

「それと、今回の攻略で、ヒースクリフの招待を暴くぞ…」

「つてことは…」

「ああ、この階層でこのゲームを終わらせる。」

俺はまだヒースクリフが茅場晶彦だということに確証を持つていな

い。

だが、それでもあいつは茅場晶彦であるような気がする…

今回の攻略でその決定的な証拠をつかみ、このゲームを終わらせ
てやる…

「とりあえず、攻略会議までは好きにすごしてくれ」

そうして午後、攻略会議の時間になる。

広場には全ギルドメンバーが集まっていた。

その数、約60人

「昨日の夜、我々血盟騎士団がボス部屋を見つけた。

そして、ボス部屋の中を確認しようとしたメンバー4人からの消息が絶たれた…」

その一言により、周りがざわつく

「連絡が取れない、転移もできない…そういうことだな?」

「そうだとみていいだろう。」

なるほど、今回は50階層、100層のハーフエリアでもある。だから敵が強いのかもしれないな…

「とりあえず、いつも通りパーティを組んで、どんな時にでも対応できるように対策を組んでいこう。」

俺がそう言うと全員が頷き、攻略会議は進んで行つた。

そして攻略は次の日の午後と決まった。

さてと、明日がこのゲームの最終日となる日だぜ、ヒースクリフ…

魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 26

50層、100層あるうちの半分地点である。

そのため、ボスはかなりの強さになつていて踏んでいる。

ここが1番の踏ん張りどころであり、また俺たちプレイヤーにとっては最大の分岐点になるだろう。

俺はそう思つていてる。

「さて、皆準備はいいな。これから行われるのはボス戦だ。しかも今までのボス戦よりも明らかに苦戦を強いられるだろう。

だが、私たち攻略組は負けない！

誰も死なせない！

さあ行くぞ！」

と、ヒースクリフが喝を入れ、ボス部屋を開く。

それに続き全員が「おおおおお！！」という雄叫びと共に中へと入つていいく。

「さて、俺らも行くぞ」

俺たちのパーティもそれについて行くように中に入った。

「ボスの姿がない？」

中に入るとボスの姿がどこにも見えなかつた。

「いや、上だ!!」

俺は何かを感じ、上を向くと攻撃態勢に入つたドラゴンがいた。

そしてこちらに向かつてブレスを吐く

これはまずいな。

この能力は1日5回しか使えないから最後にとつておきたかつたが仕方がない！！

俺はスキル欄を開きあるスキルを発動する。

その名も『英靈王』英靈の能力を使用できるようになる俺のユニークスキルだ。

I am the bone of my sword

燐天

覆う七つの円環《ロー・アイアス》!!

俺はブレスに向け手をかざすと7枚のシールドが生まれる。

「ヒースクリフ! 今のうちに隊列を組み直せ!! キリト、イツキ、ステラ、ホノカ! お前らもあれの準備を!!」

「了解!!」

俺が指示を出すとすぐに全員が行動へと移る。

「くっそ、止まれよ!!」

ブレスはまだ続く。

シールドは既に4枚割られていた。

5枚目が割れる。

「クソがアアアア!!!」

6枚目が割れるギリギリでブレスが止んだ。

そしてドラゴンが下に降りてきた。

「はあはあ、危ねえ…」

ここでとりあえず説明をしよう。

俺のユニークスキル《英靈王》とはなにか。前のラフコフ討伐の際に俺が使えるようになつた英靈の力を自由に使えるようになるユニークスキルだ。だが、ゲームの中だと脳内の処理が追いつかないため、1分間しか使えず、また、1日に5回しか使えないという制限があるのである。

「とりあえず1回目か…」

「よし、ハチ君交代だ。」

と言つてヒースクリフが率いるタンク隊が前に出てくる。

「了解、頼んだ。」

「ああ、ここからは私たちタンク隊の出番だ!! 行くぞ!! 両翼展開!!」

そういうと左右に位置していたタンク隊が横に広がり始める。

なるほど、とりあえずどのパーティに攻撃が行つても守れるよう

に展開したか。

ならば：

「ドラゴンが下にいる今がチャンスだ!! 全パーティ攻撃開始!!」

こうして俺たちの戦いの火蓋が開かれた。

「はアア！」

「アスナ、スイツチ！」

そう言つて俺はアスナとスイツチしてドラゴンに攻撃をする。

「やつと半分削れたか…」

ボス戦に入つてから約1時間。やつとボスの体力が半分を切つた。

「気をつけろ！なにか攻撃が変わるかもしれん！」

と、リンドが声を上げるとドラゴンは物凄い雄叫びを上げた。

「やはりか…気をつけろ!!」

雄叫びを上げた直後、ドラゴンは飛び上がりブレスを放つ

「私が止める！『神聖剣』！」

と、ヒースクリフが前に出る。

「はああああ！」

と、その間に俺たちのパーテイーは投擲スキルで少しでもドラゴンのHPを削つていく

そして、ドラゴンのブレスが止まつた。

「今だ！ホノカ、ステラ！」

「了解!!」

そう言つて2人は前に出る

『レーヴァテイン』!!

『ダーアインスレイブ』!!

これは2人のユニークスキルだ。

レーヴァテインはステラのもの。ダーアインスレイブがホノカのものである。

この2つは北欧神話に出てくる魔剣と同じ名前で性能も神話で聞いた通りの力を持つてているようだ。

「行くよステラ！」

「ええ、ホノカ！」

彼女等のユニークスキルには身体能力の強化も着いているらしく、今の2人は俺のステータスを超えているっぽい。

ジャンプ力なんてえげつないしな…飛んでるドラゴンと同じくらい飛ぶし：

「「はああああ!!」

と、2人の声とともにドラゴンは下に撃ち落とされる。

「よし、今だ!!」

それを合図に全員が突撃する。

そして：

ボス戦が始まつてから約2時間：

俺たちの目の前にはCongratulationの文字が浮かび上がつたのであった。

魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 27

俺たちの上にCongratulationの文字が浮かび上がった。

『う、うおおおおおお!!』

その文字を見ると皆、雄叫びをあげる。

まあ、あれだけの強さを誇るボスにHPはほぼ赤から黄色まで削られはしたが、死者を1人も出さずに勝てたのだ。これだけの喜びはあるだろう。

だが、俺にはまだやるべきことがある。

俺はすぐにヒースクリフを見る。

やつぱりか…あれだけのボス相手にタンクとして前で攻撃を受け続けてたにも関わらずHPが緑から減っていない…

「ハチ君…」

と、俺の近くにギルドメンバーがよってくる。

「ああ…黒だな。作戦を始めるぞ。」

そう言つて俺はサクヤを抜き、ヒースクリフに攻撃を仕掛ける。

ガキイイ!!

その音に他の攻略組のメンバーは驚く

「何をしているハチ!!」

と、リンドは叫ぶ。

「すまんなリンド、だが俺には疑問があつた。ヒースクリフはボス戦の際前線でタンクとして働いている。しかし毎回HPが緑以下になつたところを見たことがない。いくらユニークスキルの神聖剣が防御に特化してるととはいえ、これだけの防御力はゲームバランスを壊しかねない…」

だから、何かしらの仕掛けがあると思つていた。

そして今、確信した。

「…ふう、そうか…気づいてしまつたか。」

そのヒースクリフの一言に俺のギルドメンバー以外の全員が驚く

「なつ…ヒースクリフが茅場晶彦だと?!」

「団長…嘘ですよね!?」

と、各々が反応する。

「100層の手前で正体をバラして100層のボスとして出てこようと思つたのだがね…」

ここでお別れだ。と、言いたいところだが、私の正体を見破つたという事で、ハチ君、君が私と決闘して、勝つたらこのゲームを終わらせてもいい。」

ふつ…やはりそう来るよな、茅場晶彦なら。

「その言葉を待つていたぜ、茅場晶彦！」

「では、やろうかハチ君。」

そう言うと茅場晶彦は画面を操作して俺以外に麻痺属性を付与する。

「んじゃ、決着つけるか…行つてくる。」

俺はギルメンにそう言つて茅場晶彦に近づく。

「では、始めようか。」

「ああ。」

デュエルスタート！

その文字が浮かぶと同時に俺は間合いを詰める。

「おらあ！」

そして切り上げの攻撃。

だが、予想通り防がれ、カウンターを仕掛けてくる。俺はそれを避け後退する。

「しゃあないか…トレース・オン」

俺は師匠の愛用武器、干将莫耶をトレースする。

「ふむ、やはりそんなユニークスキルを作つた覚えはないのだがね…まあいい」

「ま、俺は最初からバグだらけだつたからな。これもバグかなんかだろうよ！」

ガキイ！

やつぱ硬えし反応速度が異常だな…

それから20分程の攻防が続く。

くつそ…これじやジリ貧だ…

「トレース・オン！」

言うと同時に気づく……」これで6回目のユニークスキルの使用だと、うござい……

「ナニ?...?」

頭に痛みが走り俺はその場に崩れる

ああ、これがやつにならすまん貰、死んでつ

「サヨナラだハチ君。」

﴿رَبِّنِيْنِيْنِيْنِيْنِيْنِيْنِيْنِيْنِ﴾

「は？」

一何也！

俺が目を開けるとそこには俺の代わりに切られているティアベルがいた。

元イアベル：お前
な世！」

「ハチ君…君には色々と助けられたからね…恩返しさ。それに、ここで君がやられてしまつたら、このゲームをクリアできる人がいなくなつてしまふだろう…これは俺の1種の罪滅ぼしと考えてくれよ。みんなをこのゲームから解放してやつてくれ…」

そう言つてディアベルは消えていつた…

一
ああ
わが二たよ元アヘル

ガキイイ!

卷之三

「ぬつ!?なぜ動けるキリト君…」

「これが私のユニークスキル。『时限刀』あらゆる状態異常を無効化で

クスキル。
—

「なるほど…それを君が持っていたとは。」

「ふう、ありがとなキリト。もう大丈夫だ。行くぞ茅場晶彦!」

俺はサクヤを構える。

「暁流 居合 奥義 拾の型 『雷天一閃』

鞘からサクヤを抜きコンマ0・1秒。茅場晶彦とのすれ違いざまに5回の斬撃を与える。

この技は極限の集中状態じやないと使えない暁流最強の居合技。

「…見事だハチ君。君の勝ちだ。流石は慶真さんと咲姫さんの息子だ。」

「えつ…それってどういう…」

それを言う前に消えてしまつた…

この日、SAOのゲーム内にゲームクリアのお知らせが鳴り響いたのであつた…

魔法使いとチート八幡の日常 S A O 編 27

俺たちの上にCongratulationの文字が浮かび上がった。

『う、うおおおおおお!!』

その文字を見ると皆、雄叫びをあげる。

まあ、あれだけの強さを誇るボスにHPはほぼ赤から黄色まで削られはしたが、死者を1人も出さずに勝てたのだ。これだけの喜びはあるだろう。

だが、俺にはまだやるべきことがある。

俺はすぐにヒースクリフを見る。

やつぱりか…あれだけのボス相手にタンクとして前で攻撃を受け続けてたにも関わらずHPが緑から減っていない…

「ハチ君…」

と、俺の近くにギルドメンバーがよってくる。

「ああ…黒だな。作戦を始めるぞ。」

そう言つて俺はサクヤを抜き、ヒースクリフに攻撃を仕掛ける。

ガキイイ!!

その音に他の攻略組のメンバーは驚く

「何をしているハチ!!」

と、リンドは叫ぶ。

「すまんなリンド、だが俺には疑問があつた。ヒースクリフはボス戦の際前線でタンクとして働いている。しかし毎回HPが緑以下になつたところを見たことがない。いくらユニークスキルの神聖剣が防御に特化してるととはいえ、これだけの防御力はゲームバランスを壊しかねない…」

だから、何かしらの仕掛けがあると思つていた。

そして今、確信した。

「…ふう、そうか…気づいてしまつたか。」

そのヒースクリフの一言に俺のギルドメンバー以外の全員が驚く

「なつ…ヒースクリフが茅場晶彦だと?!」

「団長…嘘ですよね!?」

と、各々が反応する。

「100層の手前で正体をバラして100層のボスとして出てこようと思つたのだがね…」

ここでお別れだ。と、言いたいところだが、私の正体を見破つたという事で、ハチ君、君が私と決闘して、勝つたらこのゲームを終わらせてもいい。」

ふつ…やはりそう来るよな、茅場晶彦なら。

「その言葉を待つていたぜ、茅場晶彦！」

「では、やろうかハチ君。」

そう言うと茅場晶彦は画面を操作して俺以外に麻痺属性を付与する。

「んじゃ、決着つけるか…行つてくる。」

俺はギルメンにそう言つて茅場晶彦に近づく。

「では、始めようか。」

「ああ。」

デュエルスタート！

その文字が浮かぶと同時に俺は間合いを詰める。

「おらあ！」

そして切り上げの攻撃。

だが、予想通り防がれ、カウンターを仕掛けてくる。俺はそれを避け後退する。

「しゃあないか…トレース・オン」

俺は師匠の愛用武器、干将莫耶をトレースする。

「ふむ、やはりそんなユニークスキルを作つた覚えはないのだがね…まあいい」

「ま、俺は最初からバグだらけだつたからな。これもバグかなんかだろうよ！」

ガキイ！

やつぱ硬えし反応速度が異常だな…

それから20分程の攻防が続く。

くつそ…これじやジリ貧だ…

「トレース・オン！」

言うと同時に気づく……」これで6回目のユニークスキルの使用だと、うござい……

「…ベ、う！」

頭に痛みが走り俺はその場に崩れる

文庫本
新編

「サヨナラだハチ君。」

『الكتاب العظيم』

「は？」

一何つ!?

俺が目を開けるとそこには俺の仕事場に残っている六一アハノ

「デイアベル：お前、なぜ!?」

「ハチ君…君には色々と助けられたからね…恩返しさ。それに、ここで君がやられてしまつたら、このゲームをクリアできる人がいなくなつてしまふだろう…これは俺の1種の罪滅ぼしと考えてくれよ。みんなをこのゲームから解放してやつてくれ…」

そう言つてディアベルは消えていつた…

ガキイイ!!

「やせなーー！」

めでたせ動けるギリト君

「これが私のユニークスキル『时限万』あらゆる状態異常を無効化できる。また、スキルによつては攻撃すらも無効化できてしまうユニー

「なるほど……それを君が持つていたとは。」

「ふう、ありがとなキリト。もう大丈夫だ。行くぞ茅場晶彦!」

俺はサクヤを構える。

「暁流 居合 奥義 拾の型 『雷天一閃』

鞘からサクヤを抜きコンマ0・1秒。茅場晶彦とのすれ違いざまに5回の斬撃を与える。

この技は極限の集中状態じやないと使えない暁流最強の居合技。

「…見事だハチ君。君の勝ちだ。流石は慶真さんと咲姫さんの息子だ。」

「えつ…それってどういう…」

それを言う前に消えてしまつた…

この日、SAOのゲーム内にゲームクリアのお知らせが鳴り響いたのであつた…